

初級を教える人のための

日本語文法 ハンドブック

松岡 弘 ● 監修
庵 功雄・高梨信乃・中西久実子・山田敏弘 ● 著

スリーエーネットワーク

初級を教える人のための

日本語文法 ハンドブック

松岡 弘 ● 監修

庵 功雄・高梨信乃・中西久実子・山田敏弘 ● 著

スリーエーネットワーク

このページは空白です。

このページは空白です。



初級を教える人のための

日本語文法 ハンドブック

松岡 弘◎監修
庵 功雄・高梨信乃・中西久実子・山田敏弘◎著

スリーエーネットワーク

© 2000 by IORI Isao, TAKANASHI Shino, NAKANISHI Kumiko, and YAMADA Toshihiro

All rights reserved. No part of this publication may be reproduced, stored in a retrieval system, or transmitted in any form or by any means, electronic, mechanical, photocopying, recording, or otherwise, without the prior written permission of the Publisher.

Published by 3A Corporation.

Trusty Kojimachi Bldg., 2F, 4, Kojimachi 3-Chome, Chiyoda-ku, Tokyo 102-0083, Japan

まえがき

日本語教育の大先達であり、現代日本語文法研究に新たな地平を拓いた故寺村秀夫先生に、文法随筆という文章があります。その中で寺村先生は、初級の日本語授業での助詞「が」に対する説明の矛盾を外国人留学生に指摘され、改めてその意味用法に思いをこらすようになった経緯を、指摘をしてくれた学生への感謝とともに懐かしく回想しておられます。*

そこで挙げられている例ですが、初級の日本語授業では、「何々がありますか」、「いいえ、何々はありません」といったやりとりの中の「は」と「が」の使い分けの説明として、否定文では「が」でなく、「は」が用いられる、といった解説がなされることがあります。しかしながら、学習者がそうした説明を受けた後で「あっ、時間がありません」という表現に接したとすれば、その場合の「が」を間違っていると判断するか、あるいは、教師の説明には矛盾があると感じることになるでしょう。

ところでこれに類したことは、寺村先生ならずとも、多くの日本語教師が経験することではないでしょうか。教科書にそってきちんと導入し説明した後で、その説明ではカバーしきれないような例を突きつけられ説明を求められる、何とかその場しのぎの理屈をひねり出して相手を納得させたものの、後で考えるとつじつまが合わない、といったことは、現場の教師がもつ共通の苦い思い出でしょう。

言うまでもないことですが、現実の日本語に初級と中・上級との区別が存在しているわけではなく、初級の文法というのは、いわば指導上の便宜的な設定です。しかしここで忘れてならないのは、実は、初級段階の文法事項こそが日本語理解の要であり、その後続く日本語学習の土台をなすということです。ですから教師としては、初心者クラスであっても、初級から中級へ、そしてまた上級へと向かっていく教授過程全体を視野に入れ、個々の文法事項や文型についても、より根底的なものに根ざした包括的な理解をもつてのぞむことが必要ではないかと思うのです。

そこで本書では、まず第一に、初級レベルで取り扱われる文法事項を広く取り上げて分類し、それぞれに簡潔で平易な解説を施す一方、上に述べたような観点に立ち、最新の日本語研究の成果を踏まえながら、それらを日本語文法全体の視野の中で記述することに努めました。と同時に、それぞれの興味に応じてさらに深く文法に親しんでいただくための工夫や、本書に続いて刊行予定の中・上級編へと有機的・統一的につながるような構成を試みました。

本書は教育経験の豊富な、庵功雄、高梨信乃、中西久実子、山田敏弘、四氏の若々しい創意と意欲あふれる行動の中に産声をあげ、その緊密な共同作業を経て完成しました。四人はいずれも、故寺村秀夫先生の門に連なる新進気鋭の日本語研究者です。寺村先生は海外技術者研修協会における草創期の日本語教育に全面的に協力され、同協会の日本語教科書編纂にも大きく貢献されましたが、私は海外技術者研修協会との縁により、また、若き日の寺村先生の講筵に列した者として本書の監修にあたった次第です。

本書が初級日本語を教える方々（非日本語母語話者を含む）はもとより、日本語教師養成講座で学んでいる方、日本語学に興味をおもちの方、さらには、上級の学習者でもう一度自分の文法知識を整理したいと思っている方々に広く利用されることを願ってやみません。

*寺村秀夫（1988）「文法随筆 時間ガアリマセン」寺村秀夫（1993）『寺村秀夫論文集 言語学・日本語教育編』くろしお出版に再録。本書§27 参照

2000年4月

松岡 弘

本書の使い方

1. 全体の構成

本書は2部に分かれています。第Ⅰ部は個々の文法項目について、第Ⅱ部は品詞や活用など全体にかかわる基礎的なことが記してあります。品詞や活用に関する基本的なことや学校文法と日本語教育で使われている文法との違いなどを知りたい方は、第Ⅱ部を先にお読みになるとよりスムーズに第Ⅰ部を読むことができます。

なお、本書では「初級」の範囲を日本語能力試験3、4級レベルとし、『日本語能力試験出題基準』（凡人社1994）に挙げられている同試験3、4級レベルの文法項目を網羅しました。なお、一部同試験2級レベルの項目も含まれています。

2. 各セクションの構成

各セクションはリード（導入）部分と **これだけは** **もう少し** **もう一歩進んでみると** の3つの段階に分けて記述されています。

リード部分は各セクションの冒頭にあり、ここを読めば、鳥瞰図的にその分野を眺めることができます。

日常の教室活動に必要な文法上の情報は **これだけは** と **もう少し** の部分に書かれています。**これだけは** にはその項目を教えるにあたって最低限知っておくべき情報を挙げてあります。**もう少し** には学習者の習得レベルや興味に応じて提示すると有益な情報が書かれています（項目によってはこの **もう少し** の部分がないこともあります）。類似形式との言い換えの可否なども主にこの部分で取り上げています。なお、セクションによっては最後にまとめとして、そのセクションで取り上げた形式を全体の中でもう一度位置づけています。

もう一歩進んでみると には、そのセクションで取り上げた文法項目が理論的にはどのように体系づけられるのかについての情報が書かれています。こ

の部分は **これだけは** **もう少し** とは独立した内容になっています。そのセクションで取り上げた文法現象が「なぜ」そのようになっているのかを知りたいときや、それについての日本語学での研究水準を知りたいときに読んでいただきたいと思います。

もう一歩進んでみると では研究上重要な参考文献を簡単な解説を付けた上で紹介しています。その際、入手のしやすさを重視し、大学などの紀要などに書かれたものは省いてあります。

3. 記号

- 例文が文法的に正しい場合には普通何も付けずに示しますが、特に例文の一部を文法的に正しくない形と比較する形で示すときには○を付けて文法的に正しい形を示します。
- × その例文（または例文の一部）が文法的に正しくないことを表します。
- ？ その例文（または例文の一部）が、まったく文法的に正しくないわけではないが、不自然であるとする日本語話者もいる場合に使います。
- # その例文（または例文の一部）が文法的には正しくても意図した表現の意味とは異なる場合に用います。また敬語などの誤った使い方によって失礼な感じを与えたりする場合にもこの記号で表します。
- { / } 例文の一部について、比較する形を示す場合に使います
- φ ゼロ、すなわちそこには形式がないことを意味します。例えば「彼 φ、来た？」は、「彼、来た？」を表します。
- cf. 参照する語形または文を挙げるときに用います。
- 参照するセクション (§) を示します。
- 下線 そのセクションで取り上げている形式を示すときに使います。ただし、{ / } で交替形が示されている場合には省略します。
- 波線、破線 そのセクションで中心的に扱っている形式の他に強調したい形式がある場合に用います。他に網掛けや枠を使う場合もあります。

＜接続＞には、動詞や形容詞などにその形が後続する場合に、前の動詞や形容詞がどのような形になるかが書いてあります。

辞 辞書形

否 否定形

V_{マス} 動詞のマス形語幹（「書きます」の「書き」、「食べます」の「食べ」の部分）

テ 動詞・イ形容詞・ナ形容詞のテ形

タ 動詞・イ形容詞・ナ形容詞のタ形

*ここでいうタ形は普通形の肯定の形（「書いた、青かった、元気だった」）のみを示し、否定の形（「書かなかった、青くなかった、元気ではなかった」）や丁寧な形（「書きました、青かったです、元気でした」）は含みません。

V_{ナイ} 動詞の否定形語幹（「書かない」の「書か」、「食べない」の「食べ」の部分）

普 普通形 (plain form)：辞書形、タ形、ナイ形、過去否定形

丁 丁寧形（いわゆるデス・マス形）

Na ナ形容詞

Na_な 「～な」で終わるナ形容詞

A イ形容詞

A／Na語幹 イ形容詞あるいはナ形容詞の語幹部分
イ形容詞「美しい」の場合は「美し」
ナ形容詞「元気な」の場合は「元気」

N 名詞

N_の 名詞に「の」が後続した形

目 次

まえがき	iii
本書の使い方	v

第 I 部

§1 指示詞・疑問詞（コソアド）	2
1. 現場指示	
2. コソアドの形	
3. 「この／その／あの」「これ／それ／あれ」「何」「だれ」「どちら」	
4. 「こんな／そんな／あんな／どんな」と「この／その／あの／どの」	
5. 「ここ／そこ／あそこ／どこ」「こちら／そちら／あちら／どちら」	
6. 「どれ」「どいつ」「どちら／どっち」「どの」「どちらの／どっちの」	
7. 「なぜ」「なんで」「どうして」	
8. 「いつ(ごろ)」「いくつ(ぐらい)」	
9. 疑問詞＋か、疑問詞＋も	
§2 格助詞	16
1. 文型で用いられる格	
2. 意味に重点が置かれる格	
3. 格助詞の使い分け	
コラム 生産性	27
§3 名詞と名詞を結ぶ助詞ー並列助詞と「の」ー	28
1. 並列助詞「と、や、か」	
2. 名詞と名詞を結び付ける「の」	
3. 名詞の代わりをする「の」（準体助詞）	

§4 存在・所有を表す表現	34
1. 存在に関する表現（存在文）	
2. 所有を表す表現（所有文）	
§5 時間を表す表現(1)ーテンス・完了ー	40
1. ル形とタ形	
2. 基本的なテンス	
3. タ形の二つの意味	
4. ～てしまう	
5. ～たことがある、～たことがない	
6. ～ことがある	
7. 相対テンス	
§6 時間を表す表現(2)ーアスペクトー	54
1. ～ている	
2. ～ているところだ、～つつある	
3. ～続ける（～続く）	
4. ～始める、～だす、～終わる（～終わる）、～やむ	
5. ～ところだ	
6. ～てある	
7. 「～てある」と「～ておく」	
8. ～てみる	
§7 変化を表す表現	72
1. 「なる」と「する」	
2. 「ようになる」と「ようにする」	
3. 「ことになる」と「ことにする」	
4. 変化動詞と「なる」	
§8 可能を表す表現	80
1. 可能形の作り方	

2. 可能表現の意味
3. 可能表現で用いられる格
4. ～ことができる
5. 見える・聞こえる（自発）

コラム 「－(ら)れる」の意味……………88

§9 引用……………90

1. と
2. ように

§10 自動詞と他動詞……………96

1. 自他の対応
2. 自動詞と受身文
3. 他動詞と使役文

§11 授受の表現－あげる・くれる・もらう－……………106

1. 動詞としての使い方
2. 待遇形式
3. 補助動詞としての「～てあげる・～てくれる」
4. 補助動詞としての「～てもらう」

§12 ～ていく・～てくる……………116

1. 「(～て)いく・(～て)くる」の空間的用法1：主体の移動
2. 「～てくる」の空間的用法2：対象の移動
3. 「～ていく・～てくる」の時間的用法

§13 話し手の気持ちを表す表現(1)－判断－……………122

1. 断定を表す表現
2. だろう、と思う
3. かもしれない

4. はずだ、にちがいない
5. そうだ①
6. ようだ、みたいだ、(らしい)
7. そうだ②、(らしい)
8. 区別が問題になる表現

§14 話し手の気持ちを表す表現(2)－意志・願望－ 136

1. 意向形「～(よ)う」
2. つもりだ
3. ことにする
4. ほしい、～たい

コラム ことばのゆれ..... 144

§15 話し手の気持ちを表す表現(3)－命令・依頼・勧誘－ 146

1. ～なさい、命令形(しろ)／～な
2. ～てください、～てくださいませんかetc.、～てくれ、～て
3. ～ましょう、～ましょうか、～ませんか、～(よ)う、～(よ)うか、
～ないか

コラム 文の種類..... 154

§16 話し手の気持ちを表す表現(4)－義務・勧め・許可・禁止など－... 156

1. ～なければいけない、～なければならないetc.
2. ～ほうがいい
3. ～でもいい、～なくてもいい
4. ～てはいけない

§17 話し手の気持ちを表す表現(5)－終助詞－ 164

1. ね
2. よ、よね

§18 比較	170
1. 二つの物事を比較する表現	
2. 三つ以上の物事を比較する表現	
コラム モダリティ	175
§19 埋め込み表現	176
1. ～こと、～の	
2. ～か、～かどうか	
§20 名詞修飾	182
1. 名詞修飾の種類と基本的な特徴	
2. 内の関係の名詞修飾	
3. 外の関係の名詞修飾	
§21 複文と接続詞(1)―「～て」・付帯状況・並列などの表現―	190
1. ～て、中止形	
2. ～ないで、～なくて、～ずに、(～ず、～なく)	
3. ～ながら	
4. ～たまま	
5. ～たり～たり	
6. ～し	
7. それに	
§22 複文と接続詞(2)―時間―	200
1. ～とき、～ときに、～とき(に)は	
2. ～て、～てから、～あとで、～あと、～まえに、～まえ	
3. ～までに、～まで、～あいだに、～あいだ、～うちに	
4. そして、それから	

§23 複文と接続詞(3)－理由・目的－	210
1. ～から	
2. ～ので	
3. ～ために	
4. ～（し）に、～のに	
5. ～ように	
6. だから、それで、そのために	
§24 複文と接続詞(4)－条件－	220
1. ～と	
2. ～ば	
3. ～たら	
4. ～なら	
5. 4 形式の使い分け	
6. すると、それなら、それでは、では	
§25 複文と接続詞(5)－逆接－	230
1. ～ても	
2. ～のに	
3. ～けれども（～けれど、～けど、～が）	
4. それなのに、けれども、しかし、ところがetc.	
コラム 複文	239
§26 とりたて助詞	240
1. とりたて助詞とは	
2. とりたて助詞の基本的性質	
3. 「も」－並立を表すとりたて助詞	
4. 「だけ」と「しか～ない」－限定を表すとりたて助詞	
5. ばかり－「多い」という気持ちを表すとりたて助詞	

コラム 主語	252
§27 「は」と「が」	254
1. 「は」の基本的性質(1) (主題を表す)	
2. 「は」の基本的性質(2) (対比を表す)	
3. 「が」の基本的性質(1) (中立叙述を表す)	
4. 「が」の基本的性質(2) (総記を表す)	
5. 「は」と「が」の基本的な違い	
6. 「は」と「が」の使い分けの規則	
コラム 格の階層性	269
§28 関連づけ	270
1. 関連づけの「のだ」(1)	
2. 関連づけの「のだ」(2)	
3. 関連づけの「のだ」(3)	
4. 関連づけの「のだ」(4)	
コラム 相補分布	279
§29 疑問文の種類と文末形式	280
1. 疑問文の種類とその答え方	
2. 疑問文に使われる「のだ」	
3. 「か」のバリエーション	
§30 立場を表す表現ーヴォイス (受身・使役・使役受身)ー	292
1. 受身形・使役形・使役受身形の作り方	
2. 受身文の種類	
3. 受身の形を持つ動詞と持たない動詞	
4. 直接受身文の動作主を表す格	
5. 受身文の働きーなぜ受身文を使うのか	

- 6. 使役文の種類
- 7. 使役を使ったその他の表現

§31 その他の構文 304

- 1. ハーガ構文
- 2. 強調構文
- 3. ～のは…からだ
- 4. ～やすい、～にくい、～すぎる

§32 敬語 314

- 1. 素材敬語と対者敬語
- 2. 尊敬語
- 3. 謙譲語・丁重語
- 4. 丁寧語・美化語
- 5. どんな時に敬語を使うか

コラム 「丁寧に話す」とは? 323

§33 文体 324

- 1. デス・マス体とダ体・デアル体
- 2. 書きことばと話しことば
- 3. 男女差

§34 語順・省略 330

- 1. 語順
- 2. 基本語順が変更されるとき
- 3. 省略

第Ⅱ部

§35 品詞	340
1. 動詞	
2. 名詞	
3. 形容詞	
4. 副詞	
5. 接続詞	
6. 助詞	
7. その他の品詞	
§36 活用	349
1. 語幹と活用	
2. 活用形の名称	
3. 丁寧形と普通形 (plain form)	
4. 不規則な活用をする形容詞	
§37 名詞(文)	356
1. 名詞の文法的性質	
2. 名詞とナ形容詞	
3. 名詞の下位分類	
4. 代名詞	
5. 名詞文 (指定文と措定文)	
§38 動詞	364
1. 動詞の必要とする名詞句 (=項) と他動性	
2. 動詞の方向性	
3. 動詞の状態性	
4. 動詞の意志性	

§39 形容詞	371
1. 形容詞の基本的な働き	
2. 属性形容詞と感情形容詞	
3. 形容詞の語順と前項の形式	
4. 形容詞が必要とする名詞句とその格	
§40 副詞	378
1. 副詞の種類	
2. 誘導副詞（陳述副詞）	
3. 程度副詞	
4. 様態副詞	
5. 副詞とその周辺	
§41 数量詞	386
1. 数量詞	
2. 助数詞	
3. 時間を表す表現	
4. 概数表現	
§42 接辞	396
1. ～らしい	
2. ～っぽい	
3. ～中（ちゅう・じゅう）	
4. ～方（かた）	
5. （形容詞の語幹）＋さ	
6. ～まる・～める	
あとがき	403
主要初級教科書との対応表	404

このページは空白です。

このページは空白です。

第I部

§1. 指示詞・疑問詞（コソアド）

話の現場にあるものを指すときなどに、その名前の代わりに使われるのが**指示詞**です。指示詞にはコソアで始まる規則的な体系があります。一方、指すものがわからないときには**疑問詞**を使います。疑問詞は基本的にはドで始まります。これらは意味的にも形式的にも一つの体系を作っているのです、品詞と無関係に**コソアド**として一括して扱うのが一般的です。

1. 現場指示

- | | |
|--|----------------|
| (1) A： <u>それは</u> 何ですか。
B： <u>これは</u> 辞書です。
(2) <u>あそこ</u> にポストがありますね。 | (対立型)
(融合型) |
|--|----------------|

これだけは

◆指示詞には二つの使い方が 있습니다。一つは指すものが話の現場にある場合（**現場指示**）で、今一つは指すものが話の中に出てくる場合（**文脈指示**）です。ここでは現場指示だけを扱い、文脈指示は中上級編で扱います。

◆2で詳しく見るように、日本語の指示詞は「{ コソア } + 文中での機能を表す要素」という形をしています。例えば、「これ／それ／あれ」は「こ／そ／あ + { ものを指す形 }」という形になっています。このうち現場指示や文脈指示で指示詞の使い分けに主に関係するのは「こ／そ／あ」の部分です。以下では「この／その／あの」「これ／それ／あれ」などすべての指示詞に

共通する「こ／そ／あ」の部分のコ・ソ・アで表します。

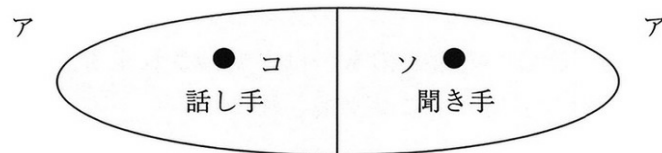
◆現場指示の指示詞には対立型・融合型という二つの用法があります。

<対立型>

◆現場で話し手と聞き手が離れた位置にあるときには**対立型**と呼ばれる原理によって指示詞が使い分けられます。対立型における原理は次の通りです。

話し手の近くはコ、聞き手の近くはソ、それ以外はアで指す。

これを図示すると次のようになります。

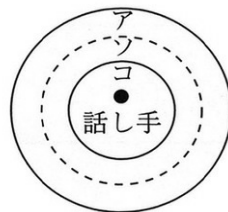


<融合型>

◆現場で話し手と聞き手が同じ位置にいる場合や聞き手がない場合は、**融合型**という原理で指示詞が使い分けられます。その原理は次の通りです。

近くのものコ、遠くのものア、どちらも無いものはソで指す。

これを図示すると次のようになります。



もう少し

◆対立型では同じものを指すのに使われる指示詞が話し手と聞き手で異なります。例えば、次の(3)の「本」は聞き手 ((3)のB) の近くにある同じものですが、話し手 ((3)のA) はその本が聞き手の近くにあるので「それ」で指し、聞き手は自分の近くにあるので「これ」で指します。

(3) A：それは本ですか。

B：はい、これは本です。

指示詞が持つこうした性質を**直示性**と言います。直示性を持つものには指示詞の他に代名詞があります。例えば、(4)Aの「あなた」と(4)Bの「私」は同じ人（「田中」）を指しています（なお、これは説明のための例であり、このように「あなた」を使うのは通常避ける必要があります（→§37））。

(4) A：あなたは田中さんですか。

B：はい、私は田中です。

◆対立型では普通、話し手の近く of のものはコで指されますが、自分の手が届かない背中などは次の(5)のようにソで指されます。

(5) (子供に背中をかいてもらっているとき) そこ、気持ちいいわ。

◆融合型のソは次のような場合を除いてあまり使われません。

(6) (タクシーの運転手に向かって) そこで止めてください。

2. コソアドの形

(1) これは私の本です。

(2) 田中さんの本はどれですか。

これだけは

◆コソアドには文中での使われ方に応じた次のような形があります（なお、表中の疑問詞は対応する指示詞が存在するものだけを挙げています）。

1.

指示詞・疑問詞（コソアド）

		指示詞			疑問詞
		コ(系統)	ソ(系統)	ア(系統)	
名詞修飾		この	その	あの	どの
属性*		こんな	そんな	あんな	どんな
代名詞	もの	これ(ら)	それ(ら)	あれ(ら)	どれ、なに(なん)
	人	こいつ	そいつ	あいつ	どいつ、だれ、どなた
	場所	ここ	そこ	あそこ	どこ
方向		こちら こっち	そちら そっち	あちら あっち	どちら どっち
副詞		こう	そう	ああ	どう

*属性のその他の形については後述。

◆次の(3)bのような疑問詞を含む疑問文を**疑問語疑問文（WH疑問文）**と言います。(3)bは(3)aに対応する疑問文です。

(3) a. 事務室は ここ です。

?

b. 事務室は どこ ですか。

このように、指示詞（コソア）は指しているものが特定できるときに、疑問詞（ド）は指しているものが特定できないときに使われます。

一方、(4)のように疑問詞を含まない疑問文を**真偽疑問文（Yes－No疑問文）**と言います。

(4) 事務室は ここ ですか。

もう少し

◆疑問詞の後には「は」は使われません。従って、次の(5)aは正しい文ですが、(5)bは正しい文ではありません。

(5) a. ○ { どなた／だれ } が当番ですか。

b. × { どなた／だれ } は当番ですか。

これは疑問詞は文の中で常に新情報を表すためです（→§27）。なお、(5)c

は正しい文です。

(5) c. 当番は{どなた／だれ}ですか。

3. 「この／その／あの」「これ／それ／あれ」「何」「だれ」「どちら」

(1) これは本です。

(2) あの方は山田さんです。

これだけは

◆「この／その／あの」は名詞の前に置いて名詞を限定するのに使います。
限定される名詞は人でもものでもかまいません。

(3) この人、その本

◆一方、「これ／それ／あれ」はものを指すときに使います。

(4) これは中国語の本です。

◆指すものの種類がわかるときは「これ／それ／あれ」も「この／その／あの」も使えます。

(5) {これ／この野菜}はトマトではありません。

しかし、そうではないときには「これ／それ／あれ」しか使えません。

(6) これは何ですか。

◆「これ／それ／あれ」はものに使うため、人を指すのに使うと失礼になります。

(7) ×これは山田さんです。

人を指すときは、(8)aのように「この／その／あの＋人」を使うか、(8)bのように「この／その／あの＋方」や「こちら／そちら／あちら」を使います。後者のほうが丁寧な言い方です。

- (8) a. この人は山田さんです。
b. { この方／こちら }は山田さんです。

なお、親しい人どうしでは(8)cのような「こっち／そっち／あっち」が、男性の友人間では(8)dのような「こいつ／そいつ／あいつ」が使われます。

- (8) c. こっちは山田さん (だ／です)。(親しい人どうし)
d. こいつは山田 (だ)。(＜男の＞友人どうし)

◆特定できないのがもののときは(9)のように「何」が、人のときは(10)のように「だれ／どなた」が使われます。

- (9) これは時計です。
?
これは 何 ですか。
(10) あの方は 山田さん です。
?
あの方は だれ／どなた ですか。

もう少し

◆指すものが複数のときは「これら／それら／あれら」を使うこともありますが、多くの場合は「これ／それ／あれ」が使えます。例えば、「人形」が2体以上ある場合でも(11)aを使えますし、(11)cのように「人形」が複数であることが明らかな場合でも「これ／それ／あれ」が使えます。

- (11) a. これは私の人形です。
b. これらは私の人形です。
c. これは全部私の人形です。

これは英語（を初めとする大部分のヨーロッパ言語）などと日本語の大きな違いです。

- (12) a. ○ This is my doll.
b. × This is my dolls.
c. ○ These are all my dolls.

つまり、英語などでは、指すもの（doll）が複数の場合は主語も複数にしなければならないため、(12)bは非文法的で、(12)cのように言わなければならないのです。

◆「この／その／あの」以外の名詞修飾成分があるとき、(13)のように「Nの」のときは「この／その／あの」と「Nの」の前後関係は特に決まっていますが、(14)のように形容詞のときは「この／その／あの」は形容詞よりも前に置かれるのが普通です。

- (13) a. この山田さんの本
b. 山田さんのこの本
(14) a. この赤い手袋
b. ? 赤いこの手袋

4. 「こんな／そんな／あんな／どんな」と「この／その／あの／どの」

- (1) (女性誌の写真を見せて) こんな帽子がほしいんですが。
(2) (書名を書いた新聞広告を店員に見せて) この本はありますか。

これだけは

◆「こんな／そんな／あんな」は修飾する名詞が持つ属性を表します。例えば、(1)の「こんな」は「女性誌の写真と同じような」という（帽子の）属性を表します。一方、「この／その／あの」は修飾する名詞を限定します。例

えば、(2)の「この本」は新聞広告にあるのと同じ書名の本という形で名詞を限定しています。

◆「どんな」は「こんな／そんな／あんな」に対応する疑問詞で、属性を尋ねるために使われます。

(3) 丸い 帽子を探しています。

？

どんな 帽子を探しているんですか。

もう少し

◆「こんな／そんな／あんな／どんな」は「このような／そのような／あのような／どのような」の短縮形で主に話しことばで使われます。属性を表すものには次のようなものがありますが、基本的に書きことばで使われます。

コ(系統)	ソ(系統)	ア(系統)	疑問詞
このような	そのような	あのような	どのような
こういう	そういう	ああいう	どういう
こうした	そうした	ああした	_____
こういった	そういった	ああいった	どういった

5. 「ここ／そこ／あそこ／どこ」「こちら／そちら／あちら／どちら」

(1) ここは図書館です。

(2) 図書館はそちらです。

これだけは

◆「ここ／そこ／あそこ／どこ」は場所を表すときに使います。

◆「こちら／そちら／あちら／どちら」は基本的に方向を表します。この場合くだけた文体では「こっち／そっち／あっち／どっち」が使われます。

(2)' A: 図書館はどっち?

B: 図書館はそっちだよ。

◆「こちら／そちら／あちら／どちら」は「ここ／そこ／あそこ／どこ」の丁寧な形としても使われます。

(3) 教科書はこちらにあります。

(4) 教科書はここにあります。

◆「こちら／こっち」は電話や手紙などで、話し手がいる場所を、「そちら／そっち」は聞き手がいる場所を指すのに使われることがあります。

(5) (手紙) こちらは皆、元気にしています。そちらはいかがですか。

(6) (留守番電話) こちらは〇〇です。ただいま留守にしております。

(7) (電話) こっちはみんな元気。そっちはどう?

もう少し

◆「どちら様」は「だれ」の丁寧な形です。

(8) A: 私のことを覚えていませんか。

B: 失礼ですが、どちら様でしょうか。

6. 「どれ」「どいつ」「どちら／どっち」「どの」「どちらの／どっちの」

(1) (ここにある何冊かの中で) どれが山田さんの本ですか。

(2) (ここにある2冊のうち) { どちら／どっち } が山田さんの本ですか。

これだけは

◆「どれ」は三つ以上のものから一つを選択するときに使います。

(3) **これ** が山田さんの本です。

?

どれ が山田さんの本ですか。

◆「どの+N」は三つ以上のものから一つを選択するとき、または、3人以上から1人を選択するときに使います。

(4) **この** 本が山田さんのです。

?

どの 本が山田さんのですか。

後者の場合、「だれ」（丁寧な文体では「どなた」、くだけた文体では「どいつ」）が使われます。

(5) (ここにいらっしゃる方のうち) { どなた / だれ } が林さんですか。

(6) (ここにいる人の中で) どいつ が林だ。

◆「どちら／どっち」は、二つのものから一つを選択するときか、2人の中から1人を選択するときに使われます（「どっち」のほうが話しことば的です）。

(7) **こちら／こっち** が山田さんの本です。

?

どちら／どっち が山田さんの本ですか。

2人の中から1人を選択するときは「どちら」の他に「どちらの方」も使えます。

(8) (お2人のうち) どちら(の方) が山田さんですか。

◆「どちら／どっち」に対応する名詞を修飾する形は「どちらの／どっちの」です。

(9) **こちらの／こっちの** 本が山田さんのです。

?

どちらの／どっちの 本が山田さんのですか。

7. 「なぜ」「なんで」「どうして」

- (1) A : 山田さんは {なぜ／どうして} ここに来たのですか。
B : 田中さんに会いたかったからです。
- (2) A : 山田さんは なんで ここに来たのですか。
B 1 : ○田中さんに会いたかったからです。(理由)
B 2 : ○自転車で来ました。(手段)

これだけは

◆ 3～6 では対応する形の指示詞を持つ疑問詞を扱いました。7 と 8 ではそれ以外の疑問詞を扱います。

◆ (1) の「なぜ／どうして」は理由を表します。「どうして」のほうが話しことば的です。

- (3) 雨が降っていたから 出かけなかったのです。

?

なぜ／どうして 出かけなかったのですか。

一方、話しことばでだけ使われる(2)の「なんで」は理由の他に手段も表します。これは「で」に理由を表す用法と手段を表す用法があるためです。

◆ 「なぜ／どうして／なんで」を含む文では「のだ」が使われます (→§29)。

8. 「いつ (ごろ)」「いくつ (ぐらい)」

- (1) 田中さんは いつ (ごろ) 出発するのですか。
- (2) 田中さんのお子さんは (お)いくつ ですか。
- (3) 吉田さんはケーキを いくつ (ぐらい) 食べたのですか。

これだけは

◆「いつ」は時間に関する疑問詞です。時間をより限定して言いたいときには次の(4)のように「何+分^{なん}／時^じ／日^{にち}／月^{がつ}／年^{ねん}」が使われます。幅のある限定をしたいときには「ごろ」をつけます（→§41）。

(4) 田中さんは何時／何日／何月（ごろ） 出発するのですか。

◆「いくつ」は(2)のように年齢を尋ねるために使われます。「お」をつけて尊敬語とすることも可能です。次の(5)のように「いくつ」の代わりに「何歳」を使うことも可能ですが、この場合は尊敬語の形はありません。

(5) 田中さんのお子さんは何歳ですか。

◆「いくつ」には(3)のように個数を尋ねるためにも使われます。「いくつ」で尋ねられるのは「個」で数えられるものに限られます。この場合「何個」も使えます。なお、概数的に述べるときには「ぐらい」をつけます（→§41）。

(6) 吉田さんはケーキを 3 個 食べました。
?

吉田さんはケーキを いくつ／何個 食べたのですか。

◆「個」以外の助数詞を使うものの場合は「何+助数詞^{なん}」を使います（→§41）。

(7) 本を何冊買ったんですか。

(8) 田中さんは自転車を何台持っているのですか。

もう少し

◆「いつ（ごろ）」には「に」はつきませんが、「何時（ごろ）」などには「に」がつきます。

(9) ×田中さんはいつ（ごろ）に出発するのですか。

(10) ○田中さんは何分／何時／何日／何月（ごろ）に出発するのですか。

同様な現象は時名詞についても見られます（→§37）。

9. 疑問詞＋か、疑問詞＋も

- (1) 机の上に何かが置いてあります。
(2) 私は今朝から何も食べていません。

これだけは

- ◆疑問詞には助詞といっしょに使って特別の意味を表す用法があります。
- ◆「疑問詞＋か」は不定（→§4）の対象を指すために使われます。例えば、(1)は「もの」であること以外特定できない対象が机の上にあることを表します。また、次の(3)は行きたい場所が特に決まっていないときに使われます。

(3) どこかに遊びに行きたい。

- ◆「疑問詞＋も」は「～ない」と呼応（→§40）して、「全く～ない」という全面的な否定を表します。例えば、(2)は今朝から食べたものが全くないということを表します。

もう少し

- ◆「疑問詞＋か」の後の格助詞はしばしば省略されます。

- (1)' 机の上に何か置いてあります。

- ◆次のような違いに注意が必要です。

- (4) (私の留守中に) だれか (が) 来たのですか。 (真偽疑問文)
(5) (私の留守中に) だれが来たのですか。 (疑問語疑問文)

つまり、(4)のような「「疑問詞＋か」～か」の文は真偽疑問文で「はい／いいえ」で答えられる（→§29）のに対し、(5)のような「疑問詞～か」の文は疑問語疑問文で「はい／いいえ」では答えられない（→§29）のです。

- ◆疑問詞が「が」「を」以外の格助詞を伴うときはその格助詞の後にそのまま「も」を後接させます。

(6) 昨日は雨だったので、どこへも行けなかった。

もう一步進んでみると

◆指示詞と疑問詞を「コソアド」として一括して扱うことは佐久間鼎（1951）から始まりました。その研究を受け、三上章は対立型、融合型などの概念を導入しこの分野の研究を発展させました（三上章（1955, 1970））。なお、指示詞関連の重要論文は金水敏・田窪行則編（1992）に集められています。日本語教育の観点からのものには金水敏・木村英樹・田窪行則（1989）があります。

まとめ

＜対立型＞話し手と聞き手が離れた位置にあるとき。話し手の近くはコ、聞き手の近くはソ、それ以外はアで指す。

＜融合型＞話し手と聞き手が接近した位置にあるか、聞き手がないとき。近くはコ、遠くはア、中間はソで指す。

＜疑問詞の形＞

3人以上の中からの選択（人）：どの＋名詞、だれ、どなた、どいつ

三つ以上の中からの選択（もの）：どの＋名詞、何、どれ、どいつ

2人の中からの選択（人）：どちらの方、どちらの人、どちら／どっち

二つの中からの選択（もの）：どちらの／どっちの＋名詞、どちら／どっち

理由：なぜ、どうして、なんで

時間：いつ（×いつに）、何分／時／日／月／年（○何分／時／日／月／年に）

年齢：（お）いくつ、何歳

個数：いくつ、何個、何本、何冊 ……

○参考文献

金水 敏・田窪行則編（1992）『日本語研究資料集 1 指示詞』ひつじ書房

金水 敏・木村英樹・田窪行則（1989）『セルフマスターシリーズ 3 指示詞』くろしお出版

佐久間鼎（1951）『現代日本語の表現と語法（改訂版）』くろしお出版から復刊（1983）

三上 章（1955）『現代語法新説』くろしお出版から復刊（1972）

———（1970）『文法小論集』くろしお出版

§2. 格助詞

文は動詞や形容詞などの述語と呼ばれる部分にいくつかの名詞句が結び付いてできています。例えば「猿が木から落ちた」は「落ちる」という動詞に「猿」と「木」という名詞が結び付いています。この名詞に付く「が」や「から」は**格助詞**と呼ばれ、述語の意味によって様々な役割で使われたり、それ自身がいろいろな意味を持ったりしながら、それぞれの名詞句を動詞などの述語と結び付ける働きをしています。

日本語には「が、を、に、へ、と、から、より、まで、で」という九つの格助詞があります。このうち「が」と「を」（および「に」と「と」の一部）は述語の意味によって様々な役割で使われます。例えば「子供が泣いている」の「が」は「泣く」動作をする主体に付きますし、「山がきれいだ」の「が」は「きれいだ」という状態を持っている主体に付いています。

一方、その他の格助詞は、動詞によって意味が変わるというよりも、前に来る名詞によって意味が変わるという性質を持っています。「～で人形を作った」と言っても「～」に「教室」が来るのと「紙」が来るのと「一人」が来るのとでは「で」の意味は違っています。

日本語教育では、「が」と「を」（および「に」と「と」）は動詞と組み合わせて文型の中で扱い、その他は意味を中心に考えます。

なお、ここでは名詞と述語とを結び付ける助詞だけを扱います。名詞どうしを結び付ける働きをする「の」や「と」などは§3で扱います。

1. 文型で用いられる格

- (1) 父は結婚記念日にレストランで母に指輪を贈りました。
 (2) 今日は空が青いですね。ほら、遠くの山がきれいですよ。
 (3) このクラスでは田中さんが連絡係です。

これだけは

◆文は、(1)のように動詞で終わるもの、(2)のようにイ形容詞やナ形容詞で終わるもの、(3)のように「名詞＋だ」で終わるものがあり、それぞれ、動詞文・形容詞文・名詞文と呼ばれます。動詞文・形容詞文・名詞文には、それぞれいくつかの名詞句と格助詞の組み合わせ（格）が含まれています。

◆格にはガ格・ヲ格・ニ格・ヘ格・ト格・カラ格・ヨリ格・マデ格・デ格があります。

◆動詞文には様々な格が含まれます。このような格の中には必ず必要であるものと出来事に対し状況的な説明を補足的に加えるものとがあります。

必ず必要な格とは(1)の「父が」「母に」「指輪を」のようなものです。(1)で「父は」を言わないで「母に指輪を贈りました。」と言ったのでは、だれが贈ったのかそれだけではわかりません。同様に「母に」や「指輪を」も出来事を成り立たせるために必ず必要です。このような(1)のガ格・ヲ格・ニ格は**項**や**必須成分**などと呼ばれます。

一方、「結婚記念日に」や「レストランで」は、時間や場所を詳しく述べているだけで、「何が起こったか」という本質的な部分には関係しません。

このような二つのレベルを分けて考えておくことが大切です。

なお、形容詞文や名詞文は普通、ガ格だけが項として含まれますが、一部の形容詞文ではニ格やト格も項になることがあります（→§39）。

◆動詞文では次のような必ず必要な格の組み合わせがあります。このような組み合わせを**文型**と言います。

- ① XがV V=走る…
- ②A XがYをV V=殺す、愛する、作る…
 B XがYにV V=触る、話しかける；着く、変わる…
 C XがYとV V=結婚する、離婚する、戦う…
 D XがYからV V=出る…
 E XにYがV V=できる、わかる、見える；いる／ある…
- ③A XがYにZをV V=あげる、入れる、変える；もらう…
 B XがYをZからV V=出す…

◆文が成り立つためには必ず「何かをする」主体（動作主）、「ある／いる」主体（存在主体）、「なる」主体（変化主体）のいずれかが必要です。このような主体は普通、ガ格で表されます。

②Eのような「できる、わかる」や「見える」など能力や知覚の主体は二格で表されます（§8も参照して下さい）。

- (4) 私には彼の言っていることがよくわからない。
- (5) 目を閉じると、私にはふるさとの風景が見える。

◆②や③の各文型には主体の他に、**対象・相手・着点・存在場所・出どころ**が含まれます。この中で最も重要なのは動作の対象です。

動作の対象は、「殺す」など対象に変化を与え影響が強く及ぶ場合と「愛する」など一部の感情動詞の場合ヲ格で表されます。

「触る」など影響の及び方が弱い動詞や「話しかける」など一つの方向性が強調される動詞の表す動作の対象は二格で表されます。ただし、動作の影響の及ぶ強さによる格の選択には例外も多く、結局、どの動詞にどの格が結び付くかは動詞ごとに覚える必要があります。（→§38）

能力を表す「わかる、できる」や知覚を表す「見える、聞こえる」は対象をガ格で表します（例文(4)(5)）。動詞の他、感情を表す「好きだ、嫌だ、嫌いだ」などのナ形容詞（→§39）も対象をガ格で表しますし、可能形（→§8）・「～やすい、～にくい」（→§31）・「～たい」（→§14）も対象をガ格で表すことがあります。

「結婚する、離婚する、戦う」など、必ず動作を共同で行う相手を必要とする場合、その相手はト格で表されます。このような相手を表す「と」を

「といっしょに」で言い換えることはできません。

- (6) 山田さんは林さん{○と／×といっしょに}結婚した。

◆二格は対象の他に、「あげる」などの移動する対象の受け手、「着く」や「入れる」などの到達点、「変わる」などの変化の結果を表します。

- (7) 先日母に花をあげました。(対象の受け手)
 (8) 東京には何時に着きますか。(到達点)
 (9) 信号が赤に変わった。(変化の結果)

この他、「友だちに写真を見せる」など他に対象のある場合、動作の向かう相手は二格で表されます。これらは着点という意味が強く出ています。

少し異なるのは「もらう、借りる、教わる」などの二格です。この場合「から」と同じ意味を持ち、出どころを表します。

- (10) 先生に本をもらった。(＝先生から本をもらった。)

もう少し

◆どのような基準で「必ず必要である」とするかは議論の分かれるところです。英文法でなじみのある主語や直接目的語、間接目的語にほぼ相当する日本語のガ格、ヲ格、ニ格が（動詞によりますが）必須のものである点は異論がないでしょう。しかし、「～に入る」の二格や「～から出る」のカラ格は到着点や出どころを表しているという点で次の2で述べる「意味に重点が置かれる格」に近い性質を持っており、「必ず必要である」という意味は主語や目的語（ここでいう対象）を表すガ・ヲ・ニなどの格とは必ずしも同じではありません。さらに「買う」は「～が～を買う」ですが、動詞が意味的に必要とするのであれば買うためには必ず値段が必要ですから「(値段)で」も「必ず必要な」格であると主張する立場もあります。

ここでは日本語教育で文型として取り上げられるものに限って「必ず必要である」格として取り上げました。

◆出来事として同じであっても受身や使役（→§30）などで格が変わります。

2. 意味に重点が置かれる格

- | | |
|--------------------------------|---------|
| (1) ともやくんは学校 <u>で</u> 人形を作った。 | (場所) |
| (2) ともやくんは紙 <u>で</u> 人形を作った。 | (材料) |
| (3) ともやくんは彫刻刀 <u>で</u> 人形を作った。 | (手段・道具) |
| (4) ともやくんは1日 <u>で</u> 人形を作った。 | (範囲) |
| (5) ともやくんは一人 <u>で</u> 人形を作った。 | (まとまり) |
| (6) ともやくんは宿題 <u>で</u> 人形を作った。 | (内容) |

これだけは

◆(1)~(6)はすべて「ともやくんが人形を作った」という出来事についてデ格を使って状況を詳しく表現した例です。

「で」のような格助詞は、様々な意味を持つ名詞の後に付き、その名詞の意味に応じて「何が起こったか」という出来事には必ずしも必要とされない多様な周辺の状況を詳しく述べるために用いられます。

ヲ格やニ格にも一部このような出来事に必ずしも必要とされない用法があります。ここでは主体と対象以外の用法をいっしょに表の形でまとめておきます。ニ格の着点の用法については他の意味との連続性から挙げておきます。

(注意したい似た意味の表現のところで、「=に②」は「に」の②の用法と意味が同じで置き換えも可能なことを、「△から②」は「から」の②の用法と一部置き換え可能なことを、「×に①」は「に」の①の用法と似ているが置き換え不可能なことを表します。また「*」は中上級編の項目を示します。)

2.

格助詞

格	意味	前に来る名詞	例	注意したい似た意味の表現
を	①通過する場所 ②経過する時間* ③離れる対象 ④動作の方向*	場所 期間 場所・乗り物 方向・～の方	橋を渡る・公園を走る 夏休みをハワイで過ごす 港を離れる・バスを降りる 下を向く・彼の方を見る	△で① △から①
に	①存在場所 ②到着点 ③受け手 ④変化結果 ⑤移動の方向 ⑥出どころ ⑦時間 ⑧割合の分母*	場所 場所・～のところ 人 状態 場所・～の方 人 時間 期間・量	図書館に新聞がある イタリアに行く 私のところに来てください 妹に本をあげる 信号が赤に変わる 大阪に向かう・私の方に来る 父に本をもらう・先生に聞く 5時に起きる 3日に1度・50人に1人	×で①→§4 △まで △から①
へ	①到着点 ②方向	場所 場所・～の方	京都へ5時に着く 大阪へ向かう・私の方へ来る	=に②
で	①場所 ②材料 ③手段・道具 ④原因・理由 ⑤範囲 ⑥まとめり ⑦内容*	場所 材料 道具 出来事 期間 量 内容(～のこと)	図書館で勉強する 紙で人形を作る パソコンで書類を作る 大雪で電車が止まる 1日で仕事を終える 一人で夕食を食べる 進学のこと先生に相談する	×に① △から②
と	①共同動作の相手 ②異同の対象	人 人・物	田中さんと映画を見に行った 本物と似ている・実物と異なる	
から	①起点 ②材料 ③変化前状態 ④判断の根拠* ⑤遠因*	場所・時間・人 材料 状態 判断材料 出来事	家から駅まで歩く・家から出る 朝から晩まで働く その話は田中さんから聞いた ワインはぶどうから作られる 信号が赤から青に変わる 調査結果から考えると… 火の不始末から火事になる	△を③ △に⑥ △で② △で④
より	比較の対象		大阪は名古屋より大きい	→§18
まで	着点	場所・時間	家から学校まで歩く 朝から晩まで働く	△に②

◆通過する場所を表すヲ格は「渡る、通る」などの通過を表す動詞や「飛ぶ、走る、歩く」など移動の様式を表す動詞と共に使います。

◆動作の方向を表すヲ格では、前後・左右・上下や東西南北など、それ自身

が方向を表す名詞の場合には「～の方」を間に入れなくてもよいですが、それ以外の名詞の場合には「～の方」を入れなければなりません。また、到着点や移動の方向を表す二格でも、方向を表す名詞とそれ以外とが区別されます。

◆「より」は比較の対象を表す用法以外に「から」の①～⑤のすべての用法を持ちますが、文体的に古い表現で、話しことばでは「から」が用いられます。比較の対象を表す「より」は「案ずるより産むが易し」や「高いより安いに越したことはない」など名詞以外にも付くことがあります。

もう少し

◆「から」には、この他に「窓から海が見える」のように知覚の場所を表す用法や「そこから白い腕がのぞいている」のように存在場所を表す用法があります。上の表に挙げた用法と併せてすべてに共通しているのは「起点」というとらえ方であり、それをどのようにことばで言い表すかによって用法が細分化されます。様々な文法書や学説でも「から」にはいろいろな用法の名前が付いていますが、結局はとらえ方の問題でしかありません。

◆「から」と「まで」には、ここに挙げた用法の他に、順序を表す用法があります。

(7) 答案を全部書き終わった人から出ていってもかまいません。

(8) ではヤンさん、3行目から12行目まで読んで下さい。

(9) 1位の人から3位の人まで賞品をあげます。

(7)では「人が出ていく」というガ格の代わりに「から」が使われています。この場合、「から」は「出ていく」という動作を行う主体である「人」に付いていますが、「主体であること」を表しているのではなく「順番として一番最初であること」を表したものと言えます。同様に、(8)ではヲ格の、(9)では二格の代わりを「から」と「まで」がしています。

このような用法の「から」と「まで」は、「からを」や「までに」と言えることから厳密には格助詞とは言えません。この用法について詳しくは中上級編で扱います。

3. 格助詞の使い分け

- (1) 疲れていたので、タクシー {○に／×を} 乗って帰りました。
- (2) 彼女は、35歳のとき、大学 {○を／×から} 出た。
- (3) 風邪のときはお風呂 {○に／×へ} 入らないほうがいいですよ。
- (4) 部屋の中 {○に／×で} いすがたくさんあります。
- (5) 先日駅で偶然田中先生 {○に／?と} お会いしました。
- (6) 飛行機が西の空 {○を／×で} 飛んでいます。
- (7) 駅 {○まで／?へ} 自転車で行って、そこから電車で空港へ行った。
- (8) 山田くんは林さん {○と／×といっしょに} 結婚した。

これだけは

◆多様な意味や役割を持つ格助詞の中にはお互いに似た意味を持つ場合があります。ここでは使い分けが問題になるいくつかの形式を取り上げます。

◆「に」 vs. 「を」

対象としての「に」と「を」は特に他の言語との比較において問題になります。英語では kiss や marry は他動詞 (→§10) ですが、日本語では「～にキスをする」や「～と結婚する」のように対象を二格やト格で表します。また、韓国語では「会う、似る、気づく、乗る」などの動詞がヲ格に相当する格助詞を取りますので誤用も多く見られます。一般に対象に動作が強く及ぶ動詞はヲ格を取りますが、どこまでが「動作が強く及ぶ動詞」なのか、そのとらえ方は言語によって様々で明確な基準はありません。

また、「山に登る」と「山を登る」も問題にされることがあります。これは、二格が着点として「山」をとらえているのに対し、ヲ格は通過する場所としてとらえていると説明されます。

- (9) 山 {?を／○に} 登ったあと、足が痛くなりました。
- (10) 山 {○を／?に} 登っているとき、突然雨が降ってきました。

◆「を」 vs. 「から」

離れる対象を表す「を」と「から」は、次の場合、どちらも使える点で似ています。

- (11) その船は2日前神戸港{を／から}出発した。

しかし、(2)の「大学を出る」のように物理的に離れるのではない場合にはカラ格は使えませんし、(12)のように無生物主語の場合にはヲ格は使えません。

- (12) 煙が窓{×を／○から}出ています。

◆「に」 vs. 「へ」

「に」と「へ」は移動の到達点や方向を表す場合、置き換え可能です。

- (13) 恋人に呼び出されて駅{に／へ}行きました。

置き換えられないのは、ものともとのが密接にくっつく場合や「おふろに入る、バスに乗る」など慣用的に決まっている場合です。

- (14) 壁{○に／?へ}子供の描いてくれた絵をはりました。

- (15) おふろ{○に／×へ}入っているとき、電話が鳴りました。

- (16) バス{○に／×へ}乗って駅まで行きました。

◆「に」 vs. 「で」

日本語では存在場所と動作の場所が区別されます。存在場所はニ格で、動作の場所はデ格で表されます。

- (17) 田中さんはあの部屋{○に／×で}います。

- (18) 田中さんはあの部屋{×に／○で}仕事をしています。

「庭に木を植える」と「庭で木を植える」のように一見ニ格とデ格のどちらも可能に見える場合もありますが、ニ格を使った場合には植えられた木が庭になければならないのに対して、デ格を使った場合には庭で「木を植える」動作をすればよく、極端な場合、植木鉢に木を植えて他の場所へ持っていくことも可能です。

また、「東京に遊びに行く」というときに「東京で遊ぶ」からの類推で「×東京で遊びに行く」としてしまうことがあります。この場合、「東京に行く」ことに主眼が置かれますから、必ず二格（またはへ格）を使わなければなりません。

◆「に」vs.「と」

「会う、話す」などの相互的な動作の相手は、ト格の他、二格でも表せる場合があります。

(19) 昨日駅で田中くん{に／と}会いました。

(20) 来年の留学のことを父{に／と}話しました。

この場合、ト格は相互的な動作を、二格は一方的な動作を表します。相互的な意味のない「会う約束がなかったのに偶然会った」や「留学を決意したことを話す」は二格が自然です。

◆「で」vs.「を」

通過する場所を表すヲ格は、動作全体がその場所で行われる場合、デ格で置き換え可能です。

(21) 健康のため毎朝近くの公園{を／で}ジョギングしています。

(6)の「飛行機が飛ぶ」や「渡る」など動作全体がその場で行われるわけではない場合にはデ格で置き換えられません。

◆「まで」vs.「に・へ」

着点を「に・へ」で表すのは「行く、来る、着く」などの移動動詞類です。このような動詞類は着点を「まで」で表すこともあります。

(22) 時間がなかったので、駅{まで／に／へ}自転車で行った。

ただし、「まで」は着点が最終目的地でなく途中であることが暗示されます。次のように途中で乗り換えた地点を示すときは「まで」が自然です。

(23) 東京駅{○まで／？に／？へ}電車で行って地下鉄に乗り換えた。

「歩く、走る、泳ぐ」など動作動詞は「に・へ」を取りません。

(24) 時間がなかったので、駅{○まで／×に／×へ}走った。

◆「と」vs.「といっしょに」

「といっしょに」は格助詞ではありませんが、「と」との使い分けが問題になります。「と」は、「結婚する」や「けんかをする」のような相互的な動作の相手を表す場合と、「映画を見に行く」など動作をいっしょに行う相手を表す場合とがあります。「といっしょに」は前者のように相互的な動作の相手には使えず、動作をいっしょに行う相手に使います。

もう一步進んでみると

◆格助詞は文の中核を成す動詞に対する名詞句の関係を表すために用いられるものです。そのため、動詞との関係が比較的明確な場合の「が」と「を」は話しことばでは「雨降った」や「ごはん食べた？」のように省略されることがあります。一方、意味に重点が置かれる格助詞は、「今日学校行く？」のような移動動詞と共に用いられる二格など一部を除いて、省略されると動詞との関係がわかりにくくなりますので、普通は省略されません。

◆「触る」など、対象をヲ格と二格のどちらでも表せる動詞もあります。「触る」の場合、「髪に触る」は部分的で短時間であるのに対し、「髪を触る」は全体的で長時間という印象を与えます。ただし、「暴行する、怒る、落ちる、失敗する、頼る、喜ぶ、悩む」など動詞全般についてヲ格と二格の意味の差を明確に言うことはできません。動作の対象への及び方（他動性→§38）と対象の格形式については、様々な言語との比較からその傾向を明らかにした角田太作（1991）が参考になります。

◆「といっしょに」をはじめ「に対して」や「にとって」など、格助詞に似た働きをする複合形式もあります。このような形式は**複合格助詞**と呼ばれます。これは中上級編でまとめて扱います。

◆動詞が必要とする名詞句（「項」または「必須成分」）の他の成分を**副次成分**などと呼ぶことがあります。この2種類の成分の違いについてはコラム「格の階層性」を見てください。

◆言語学研究会編（1983）は多様な格と動詞との組み合わせを詳細に記述・考察しています。

○参考文献

言語学研究会編（1983）『日本語文法・連語論（資料編）』むぎ書房
角田太作（1991）『世界の言語と日本語』くろしお出版

コラム 生産性

語は、単独で用いる他に接辞などの要素を付加することによって意味を付け加えたり品詞を変えたりして用いることがあります。このように他の要素を付加する際に、同じ品詞の語であれば広く付加できるものと、制限が強く限られた語にしか付かないものがあります。前者のように制限が少ないものを「生産性が高い」とか「生産的である」とか言います。

生産性の高い接辞としては「～さ」（→§ 42）や敬語の「お～」（→§ 32）などが挙げられます。これらはすべての形容詞や動詞に付くわけではありませんが、かなり広く規則的に用いられます。

逆に生産性の低い接辞としては、「春めく」などの「～めく」など、ごく限られた語にしか付かないものがあります。また、「～さ」と同じく形容詞に付く接辞でも「～み」は、「厚み」とは言っても「薄み」とは言えないなど、限られた形容詞と共に用いられる生産性の低い接辞です。

英語の複数を表す接辞として -s は生産的ですが、-en は ox など一部の限られた名詞にしか付かず非生産的です。

§3. 名詞と名詞を結ぶ助詞 ー 並列助詞と「の」 ー

§2 では述語と結び付く助詞を扱いましたが、ここでは名詞どうしを結び付ける助詞を扱います。

名詞どうしを結び付ける助詞には、名詞と名詞を並べて示す働きを持つ「と、や、か」などの**並列助詞**と二つの名詞の間の多様な関係を表す「の」があります。

「の」には「青い服は兄ので、白いのが私のだ。」のように「服」などの名詞の代わりをする使い方もあります。これもここで見ておきます。

1. 並列助詞の「と、や、か」

- (1) 昨夜はパスタとピザを食べた。
 - (2) 昨夜はみんなでパスタやピザを食べた。
 - (3) 彼は昨夜パスタかピザを食べたはずだ。

これだけは

◆「と、や、か」は同じような意味を持つ名詞を並べて示すときに使います。例えば(1)~(3)は、いずれも「パスタ」と「ピザ」という「料理」の種類を並べて挙げています。異なるのは並べて示されている名詞のとらえ方です。

「と」は該当するものとして述べたい要素すべてを列挙するときに使います。例えば(1)では「昨夜食べた」のが「パスタ」と「ピザ」だけであって、他には同類のものを食べなかったことを表しています。

「や」は挙げられているものの他に該当するものが存在する、つまり一部の例だけを挙げるときに使います。(2)では「パスタ」と「ピザ」が「昨夜食べた」もののうち主要なものであるが、それですべてではなく他にも何か食べたものがあることを暗示しています。

「か」は挙げられているものの中から該当するものを選択する場合に使います。(3)では「パスタ」と「ピザ」のどちらか一つが「昨夜彼が食べた」ものに該当することを述べています。

◆「など」は挙げられている要素の他に同類のものが存在することをより明示的に示すために最後の名詞に添えられます。「など」を添えても基本的な意味は変わりません。

(4) 昨夜はみんなでパスタやピザなどを食べた。 cf. (2)

「と」や「か」は、列挙する要素をすべて明示するので、明示していない要素を暗示する「など」といっしょに用いることはできません。

(5) 大学1年生のとき、中国語{×と／○や／×か}ドイツ語などを勉強しました。

◆「と」や「や」は名詞以外の語や文を結び付けることはできません。英語のandなどは名詞以外を結び付けることもできますので注意が必要です。

(6) 焼き肉を{×食べますと／○食べて}ビールを飲みます。

(7) {×暖かいと／○暖かく(て)}心地よい部屋で過ごす。

(8) a. ×パーティーで歌を歌うや踊りを踊るなどしました。

b. ○パーティーで歌を歌ったり踊りを踊ったりしました。

cf. I sang some songs and danced at the party.

特に、名詞文(→§2, §37)では注意が必要です。

(9) 私の母は{×アメリカ人と／○アメリカ人で}学校の先生です。

もう少し

◆「と」と「か」は、並べて示される最後の要素の後ろにも付くことがあります

ますが、話しことばでは省略されるのが普通です。

(10) 今晚もパスタとピザ(と)を食べよう。

(11) メインディッシュは肉か魚(か)を選べます。

「や」は常に名詞と名詞の間に置かれます。

(12) ×パーティーでビールやワインやを飲んだ。

◆「か」は名詞以外の語や文を結び付けることもできます。

(13) 明日までに準備できるかできないかを彼に聞いてみましょう。

「と、や、か」は格助詞を伴った名詞に付くこともあります。

(14) 札幌からと仙台からの飛行機は雪のため遅れております。

◆他の並列助詞には「とか、やら」などがあります。これらは中上級編で扱います。

2. 名詞と名詞を結び付ける「の」

- | | |
|----------------------------------|--------|
| (1) これは先生 <u>の</u> かばんです。 | (所有) |
| (2) 歴史 <u>の</u> 本を買いました。 | (内容説明) |
| (3) 銀行 <u>の</u> 隣に花屋があります。 | (位置基準) |
| (4) 先日の展覧会で、ゴッホ <u>の</u> 絵を見ました。 | (作成者) |
| (5) 私が局長 <u>の</u> 上岡です。 | (同格) |

これだけは

◆「の」は(1)～(5)に挙げたように前の名詞が後の名詞に様々な意味を加えます。また、(4)の「ゴッホの絵を見ました」は「絵を見た」ことは言い表しても「ゴッホを見た」わけではありません。このように「の」で結ばれた二つの名詞は後の名詞が重要です（これに対して並列助詞は、「本とCDを買い

ました」と言えば「本を買った」ことと「CDを買った」ことを表すように、二つの名詞は動詞に対して対等に結び付いています)。

◆「の」の意味は名詞と名詞の関係によって多岐にわたります。

(1)のように所有を表す「の」には、「学校の建物」のような所属関係、「田中さんのお兄さん」のような人物関係、「冷蔵庫のドア」など、全体と部分の関係を表す用法もあります。

(2)のような内容説明の「の」と近いものに「野菜のスープ」など前の名詞が後の名詞の材料であるものがあります。

(3)の位置基準を表す「の」は「前後、左右、上下、東西南北、隣」などの方向を表す名詞が後に来て前の名詞との位置関係を表します。

(4)のように、後の名詞が「絵、論文、作品」など何かしらの生産物の場合、前の名詞が後の名詞の作成者を表すこともあります。なお、「田中さんの絵」は、普通、「田中さんが描いた絵」という作成者の解釈と「田中さんが持っている絵」という所有などいくつかの解釈が可能です。

(5)は「上岡が局長である」という関係にあります。このような関係を**同格**と言います。類例としては「イギリスの首都のロンドン」や「賞品の時計」などがあります。この同格の「の」は「局長である上岡」や「首都であるロンドン」など「である」で置き換えることができます。

◆§2で述べたように「が、を、に、から」などの格助詞は動詞といっしょに使われます。格助詞は名詞の前に置かれて名詞の意味を詳しく言い表す(修飾する)ときは、そのままの形で用いることはできません。

① 「が」と「を」

「の」で置き換えます。「×がの」「×をの」とは言いません。

(6) 田中さんが学会で発表する。→ 田中さん{×がの／○の}発表

(7) 部屋を掃除する。→ 部屋{×をの／○の}掃除

② 「に」

「にの」とは言わず「への」にします。

(8) 大阪に旅行する。→ 大阪{×にの／○への}旅行

③ その他の格助詞

「の」を後ろに続けて表します。

(9) 両親から手紙をもらった。→ 両親からの手紙

(10) 図書館で勉強する。→ 図書館での勉強

英語などでは前置詞を伴った名詞が動詞にも名詞にも付きますので、「×両親から手紙」や「×図書館で勉強」という誤用がよく見られます。

3. 名詞の代わりをする「の」（準体助詞）

- (1) この本はアンナさんののです。
- (2) セーターがほしいんだけど、この青いのは地味だわ。もっと派手なのがほしいわ。
- (3) 魚は生が一番だ。一度冷凍したのはおいしくない。

これだけは

◆前に出てきた名詞をそのまま繰り返さずに「の」で置き換えることがあります。このような「の」を**準体助詞**と言います。

準体助詞の「の」は、(1)のように名詞の後ろに置かれた場合、ちょうど後の「本」という名詞を省略したのと同じ形をしています。(2)や(3)のようにイ形容詞・ナ形容詞・動詞の後ろに置かれたときには、それぞれ「セーター」や「魚」という名詞を「の」で置き換えたのと同じ形をしています。

◆準体助詞の「の」が用いられるのは典型的な「物」としての名詞です。人を示すのに準体助詞の「の」を用いると「物」扱いしている感じがします。また、位置を表す名詞や抽象的な意味の名詞など「物」でないものには使いにくくなります。

- (4) ? こちらはジョンさんの奥さんで、あちらはマリオさんののです。
 (5) ×銀行の隣は花屋です。花屋のは駐車場です。
 (6) ×クレオパトラの美しさはカエサルを狂わし、楊貴妃のは玄宗皇帝を狂わした。

もう一步進んでみると

- ◆「の」は主語と述語からなる節を**名詞化**するのにも用いられます。このような用法は埋め込み表現として§19で詳しく見ます。
- ◆「田中さんの持っている本」のような名詞修飾節内の主語は「の」で表されることがあります。このような名詞修飾節内の「の」は、名詞を修飾する点で「田中さんの本」と類似した性質を持つために「の」が使われるものと考えられます。(→§20)
- ◆並列助詞についてまとまっているのは寺村秀夫(1991)です。小説や映画のタイトルには「赤と黒」のように、なぜ「と」が用いられて「や」が使われないかなど、並列助詞の本質をわかりやすく解説しています。

○参考文献

寺村秀夫(1991)『日本語のシンタクスと意味Ⅲ』くろしお出版

S4. 存在・所有を表す表現

ここでは存在と所有に関する表現を見ます。これらの表現にはその他の動詞文にはない構文上の特徴があります。

1. 存在に関する表現（存在文）

- (1) 公園に男の子がいました。
- (2) 机の上には本があります。
- (3) 男の子は公園にいました。
- (4) 本は机の上にあります。
- (5) この部屋にはテレビが2台あります。
- (6) 2台のテレビは隣の部屋にあります。

これだけは

◆存在を表す表現を**存在文**と言います。存在文では、ガ格の名詞が有情名詞なら「いる」が、無情名詞なら「ある」が使われます（→§37）。

◆主語が話に初めて出てきたものである場合は通常、(1)のような「＜場所＞に(は)＜人＝主語＞がいる」または、(2)のような「＜場所＞に(は)＜もの＝主語＞がある」という語順になります。動詞文ではガ格以外の必須成分は基本語順ではガ格より後に来ますが、存在文のこの場合に限り、基本語順が「二格－ガ格」になります（→§34）。

◆一方、主語が話に既に出てきたものである場合は、(3)のような「＜人＝主

語>は<場所>にいる」、あるいは、(4)のような「<もの=主語>は<場所>にある」という語順になります。

◆存在する人やものの数量を限定するとき、人やものが話に初めて出てきたものの場合は、(5)のような「～に<主語>が《数量詞》いる／ある」という語順になり、人やものが話に既に出てきたものの場合は、(6)のような「(《数量詞》の)<主語>は～にいる／ある」という語順になります。

もう少し

◆「話に初めて出てきた」ということと**新情報**、「話に既に出てきた」と**旧情報**はほぼ同義です。一方、これとよく似た概念に**定・不定**がありますが、これらと旧情報・新情報とは異なります。話し手が指しているものが何であるかを聞き手が了解できる（と話し手が想定する）ものが**定**、聞き手がそれを了解できない（と話し手が想定する）ものが**不定**であり、英語（のような冠詞を持つ言語）では、定は定冠詞／所有代名詞＋名詞や代名詞などで、不定は不定冠詞＋名詞などで表されます（なお、固有名詞は常に定です）。

例えば、次の(7)の「一人の男」は不定で、新情報です。一方、「その男」は談話内に再び現れたことで定になり、旧情報でもあります。これに対し、「田中」は固有名詞なので定ですが、この談話には初出なので新情報です。

(7) 一人の男が訪ねてきた。その男は田中だった。

不定		定	定
新		旧	新

以上のような「定－不定」と「旧情報－新情報」の関係をまとめると、次のようになります。つまり、不定のものは常に新情報ですが、定のものは旧情報の場合も新情報の場合もあるということです。



◆主語が旧情報のときに「<人=主語>は<場所>にいる」「<もの=主語>は<場所>にある」という語順になるのは、「は」は文の主題を表す一

方、話の中に既に出ているものは旧情報なので主題になりやすいからです。

一方、主語が新情報のときに「＜場所＞に（は）＜人＝主語＞がいる」「＜場所＞に（は）＜物＝主語＞がある」という語順になるのは次のような理由によります。まず、場所を表す名詞は状況設定にかかわるもので文頭に置かれやすく（→§34）、主題になりやすいのです。一方、新情報である主語は主題ではないため、主題になりやすい文頭ではなく、その次に置かれるのです。

2. 所有を表す表現（所有文）

- (1) 私には妻がいます。
- (2) 山田さんには兄弟が2人います。
- (3) 彼には才能があります。
- (4) 私は熱が37.5度あります。
- (5) 彼は身長が185cmあります。
- (6) 彼女はきれいな目をしています。
- (7) 彼女は外車を持っています。

これだけは

◆所有の表し方にはいろいろなものがあります。

◆まず、「所有」するのが「人」の場合は(1)や(2)のような「＜人＝主語＞には＜人＞が（《数量詞》）いる」が使われます。「持っている」は使えません。

- (8) ×私は妻を持っています。

◆一方「～」が「才能、情熱」などの人間の抽象的属性の場合は(3)のような「＜人＝主語＞には～がある」が使われます。「持っている」も使えます。

- (9) ○彼は才能を持っています。

◆「～」が「熱、身長（胸囲、座高）」などの数量化が可能な属性の場合は、

(4)や(5)のような「<人=主語>は～が《数量詞》ある」が使われます（「<人=主語>には」ではなく「<人=主語>は」であることに注意）。「持っている」は使えません。

(10) ×彼は165cmの身長を持っています。

なお、「熱」の場合は基準値を越えている／いないかが問題となることが多いため、次の(4)'のように《数量詞》は省略可能です。

(4)' 私は熱があります。

◆一方、「～」が「目、耳、口、髪」などのときは、(6)のような「<人=主語>は～をしている」が使われます。ただしこの場合、名詞に修飾語が付いていることが必要です。従って、次の(6)'は正しい文ではありません。

(6)' ×彼女は目をしています。

◆「～」がそれ以外の場合は、(7)のような「<人=主語>は～を持っている」が使われます。「持つ」は通常「持っている」という形で使われます。

◆以上をまとめると次のようになります。

	<人>には ～がいる	<人>には ～がある	<人>は ～がある	<人>は～を している	<人>は～を 持っている
人	◎	△	△	×	×
「才能」など	×	◎	○	×	○
「熱」など	×	×	◎	×	×
「目」など	×	△	×	◎	○
それ以外	×	○	×	×	◎

◎：最も典型的に使われる

○：使える

△：誤りではないが、あまり使われない

×：使えない

もう少し

◆「〈人＝主語〉には〈人〉が（《数量詞》）ある」という表現は少し古い表現で、現在はあまり使われません。例えば、(11)bは(11)aの古い表現です。

- (11) a. 田中さんには兄弟が3人います。
b. 田中さんには兄弟が3人あります。

もう一步進んでみると

◆存在文の語順がその他の動詞文と異なることは久野 暉^{すすむ}（1973）などで指摘されています（§34も参照してください）。

◆また、所有に関しては角田太作（1990）に興味深い指摘があります。

日本語の尊敬語の中には(1)のように形式上はその人の所有物が敬意の対象になっているものがあります（尊敬語については§32も参照してください）。

- (1) 社長の髪が白くなられた。

角田はこうした「所有者敬語」の許容度が所有されるものの種類によって異なることを調べ、次のような階層（「所有傾斜」）の存在を指摘しました。

身体部分＞属性＞衣服＞（親族）＞愛玩動物＞作品＞その他の所有物

例えば、所有物が「身体部分」や「属性」の場合は所有者敬語の許容度が高いですが、「衣服」ではやや低く、「愛玩動物」以下のものでは所有者敬語は不可能になります。

- (2) 社長の髪はきれいでいらっしゃる。 (身体部分)
(3) 社長の体調は一進一退でいらっしゃる。 (属性)
(4) ?社長のスーツはかっこよくていらっしゃる。 (衣服)
(5) ×社長の犬はかわいくていらっしゃる。 (愛玩動物)

角田は、この所有傾斜が、日本語をはじめ、世界の様々な言語の様々な文法現象の説明に役立つとしています（cf. 角田太作（1990））。

まとめ

<存在文の語順>

主語が新情報であるとき、

<場所>に(は)<人=主語>がいる

<場所>に(は)<もの=主語>がある

主語が旧情報であるとき、

<人=主語>は<場所>にいる

<もの=主語>は<場所>にある

○参考文献

久野 暁（1973）『日本文法研究』大修館書店

角田太作（1990）『世界の言語と日本語』くろしお出版

§5. 時間を表す表現(1) ーテンス・完了ー

文の中で時間を表す表現は重要な位置を占めます。時間を表す表現には大きく分けて二つの種類があります。一つは発話時との時間的前後関係を問題とするものであり、今一つは出来事の時間的性質に関わるものです。前者はテンス、後者はアスペクトと呼ばれますが、ここでは前者について考えます。また、アスペクトの中でもテンス的性格の強い、完了についても取り上げます。

1. ル形とタ形

これだけは

◆テンスについて考えるには述語のル形とタ形を区別する必要があります。

<タ形>

タ形は文末で使われる述語のうち「～た(です)」で終わるものを言います。丁寧形も普通形もそれらの否定の形も含まれます。

<ル形>

ル形は文末で使われる述語のうちタ形以外のものを言います。丁寧形も普通形もそれらの否定の形も含まれますが、「～ている(～ています) / ～でいる(～でいます)」「～ていない(～ていません)」「～でいない(～でいません)」で終わるもの(テイル形)は含まれません。

以上のことをまとめて品詞ごとに図示すると次のようになります。

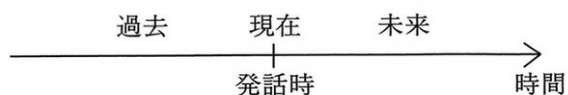
	ル形	タ形
動詞	～ます、辞書形 ～ません、否定形	～ました、～た ～ませんでした、～なかった
イ形容詞	～い(です) ～くない(です) ～くありません	～かった(です) ～くなかった(です) ～くありませんでした
ナ形容詞 名詞+だ	～です ～だ ～である ～ではありません ～ではない	～でした、～だったです ～だった ～であった ～ではありませんでした ～ではなかった

2. 基本的なテンス

- (1) 山田さんはレストランで夕食を食べました。
 (2) かごの中にうさぎがいました。
 (3) このチーズはおいしかった。
 (4) (去年) 田中さんは学生だった。
 (1)' 山田さんはレストランで夕食を食べます。
 (2)' かごの中にうさぎがいます。
 (3)' このチーズはおいしい。
 (4)' 田中さんは学生だ。

これだけは

◆テンスは、その文が言われた時（**発話時**）と、その文で描かれた出来事の時間的前後関係のことを言います。出来事が、発話時より以前のことがら**過去**、発話時と同時のことがら**現在**、発話時以後のことがら**未来**となります。



◆テンスはすべての述語に存在します。なお、単文及び主節と従属節ではテンスの現れ方が異なりますが、ここではまず単文及び主節の場合を考えます。(1)～(4)からわかるように、タ形は常に過去を表しますが、ル形のテンスは述語によって異なります。

(1)'からわかるように(1)のような動作動詞のル形は未来を表します。また、(5)からわかるように、出来事を表す動詞のル形も未来を表します。

(5) (明日は) 雨が降る。

従って、(1)'が発話されたときには山田さんはまだ夕食を食べていません。また、次の(6)は「6時」以前に発話されたものでなければなりません。

(6) 山田さんは6時にレストランで夕食を食べます。

なお、これらの動詞の現在を表すためにはテイル形を使います (→§6)。

(1)' 山田さんは (今) レストランで夕食を食べています。

(5)' (今) 雨が降っている。

一方、(2)のような存在・所有を表す動詞などの状態動詞のル形は現在を表します。ただし、次の(7)のように未来を表すことも可能です。

(7) 今度山田さんが来るときにはこのかごの中にうさぎがいます。

◆このように、「食べる」のような動作動詞や、「降る」のような出来事を表す動詞のル形は未来を表します。こうした述語を**動的述語**と呼びます。一方、状態動詞及び動詞以外の述語のル形は現在を表します。このことから、状態動詞・形容詞・「名詞＋だ」を併せて**静的述語**と呼びます。

もう少し

◆このように動的述語と静的述語ではル形のテンスが異なりますが、(8)(9)のような、習慣や恒常的属性を表す用法 (「いつも、毎～、よく」などと共によく使われる) では述語の種類の違いはなくなります。なお、形容詞や「名詞＋だ」のル形はこの恒常的属性を表すのが基本であると言えます。

(8) 山田さんはいつもレストランで夕食を食べます。 cf. (1)

(9) 梅雨の間はよく雨が降る。 cf. (5)

以上をまとめると次のようになります。

ル形のテンス



3. タ形の二つの意味

- (1) A : (午後6時ごろに) 昼ごはんを食べましたか。
 B 1 : ○はい、食べました。 / ×はい、もう食べました。
 B 2 : ○いいえ、食べませんでした。
 B 3 : ×いいえ、まだ食べていません。
- (2) A : (午後1時ごろに) 昼ごはんを食べましたか。
 B 1 : ○はい、食べました。 / ○はい、もう食べました。
 B 2 : ×いいえ、食べませんでした。
 B 3 : ○いいえ、まだ食べていません。

これだけは

◆タ形には大きく二つの意味があります。(1)Aと(2)Aは表面的には同じですがそれに対する答え方が異なります。これはタ形の意味が異なるためです。

◆上述のようにタ形は通常過去を表します。(1)Aのタ形は過去を表しています(午後6時には昼食を食べるチャンスはないので、「昼ごはんを食べる」行為は過去に行われたとしか解釈できません)。

一方、(2)Aのタ形は過去ではなく**完了**を表しています。完了は基準となる時点(**基準時**)以前に動作や出来事が完結したことを表します。これを次の

図で考えてみましょう。



過去は図で○で表されている出来事（「昼ごはんを食べる」）が起こった時点が発話時以前（＝過去）であるということを表します。

一方、完了は動作や出来事が基準となる時点（基準時）以前に終わっているということを表します。(2)Aでは基準時が発話時と一致しているので、過去との違いがわかりにくいですが、完了の意味の場合は、(2)B 1や次の(4)のように、副詞「もう」といっしょに使うことができます。

(4) 昼ごはんをもう食べましたか。(完了)

なお、完了は基準時以前に出来事が終了しているか否かを問題とするものであるため、次の(5)の「昨日」のような過去を表す語を使うと、完了ではなく過去を表すことになります。

(5) 昨日昼ごはんを食べましたか。(過去)

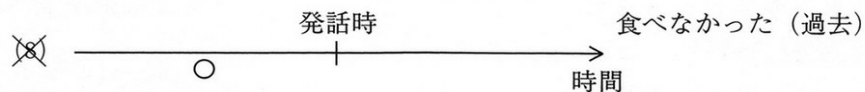
◆過去と完了の違いは肯定の場合にはあまりはっきりしません。一方、否定の場合には両者の違いがはっきりします。

(6) 昨日は昼ごはんを食べませんでした。(過去)

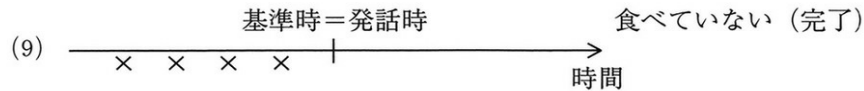
(7) 昼ごはんをまだ食べていません。(完了)

両者の違いは次のように図示できます（○＝昼ごはんを食べる、×＝昼ごはんを食べない）。

まず、(6)のような過去の場合ですが、これは(8)で表されている関係（「昼ごはんを食べた」）が成り立たなかった、ということを表します。図ではこのことを(8)に×を付けることで表しています。



次に、(7)のような完了の場合ですが、これは、(9)で表されているように、発話時以前のどの時点においても「(昼ごはんを) 食べない」ということが事実である、ということを述べています。図ではこのことを発話時以前のすべての時点に×を付けて表しています。

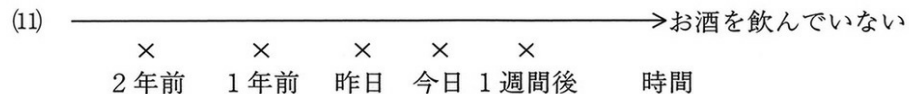


もう少し

◆(7)のような完了の否定の場合に「～ていない」が使われる理由を考えるために、次の例を考えてみましょう。

(10) 私はこの3年、お酒を飲んでいない。

(10)の「～ていない」は習慣を表しています(→§6)。この場合に、「～ていない」が使われるのは、最近3年間(及び、少なくとも近い未来)のどの時点においても、「酒を飲まない」ということ(11)では×で表しています)が真であるということの結果、全体が継続的にとらえられるためです。一般に、テイル形は動作や状態の継続を表します(→§6)。



(7)で「～ていない」が使われるのも同様に考えられます。

(7) 昼ごはんをまだ食べていません。

つまり、この場合、上の(9)で図示されているように、「(昼ごはんを) 食べない」(図の×)ということが基準時以前のどの時点でも成り立つということから、全体として「(昼ごはんを) 食べない」ことが継続的にとらえられているのです。

◆なお、(2)B 3のような完了の否定は、古くは「～ない」で表されていました。例えば、次の(12)Aには(12)Bのように答えるのが一般的でした。

(12) A : もう昼ごはん食べたかい。

B : いや、まだ食べない。(現在の言い方としては不自然)

現在では、こうした場合に「～ない」が使えるのは、「(時間が) 経つ」「着く」「来る」などの、到達点の存在を含意し、かつ、時間的経過や移動を伴う空間的経過を含む動詞に限られます。例えば、(13)B 1 は現在の言い方としても文法的です(ただし、(13)B 2 のほうがより一般的に使われます)。

(13) A : 田中くんはもう来たかい。

B 1 : いや、まだ来ない。

B 2 : いや、まだ来ていない。

◆完了は動作や出来事が「基準時」以前に終わっていることを表すものです。基準時は発話時以外であってもかまいません。例えば、次の(14)では、基準時が「昨日の12時ごろ」(過去)です。

(14) 昨日の12時ごろ、彼はもう昼ごはんを食べていた。(完了)



この場合、完了の意味を表すときには「もう～ていた」が使われます。なお、「もう」が付かないと通常、過去における継続と解釈されます。

(16) 昨日の12時ごろ、彼は昼ごはんを食べていた。(過去における継続)

一方、否定の場合は次のように「まだ～ていなかった」になります。

(17) 昨日の12時ごろ、彼はまだ昼ごはんを食べていなかった。

また、基準時が未来の場合は、次のように、肯定なら「既に～ているだろう」、否定なら「まだ～ていないだろう」になります。

(18) 明日の12時ごろ、彼は既に昼ごはんを食べているだろう。

(19) 明日の12時ごろ、彼はまだ昼ごはんを食べていないだろう。

◆タ形にはこれ以外にも(20)のような**想起**の「た」と呼ばれる用法や、(21)のような後悔を表す用法がありますが、これらは中上級編で扱います。

(20) お名前は何とおっしゃいましたか。

(21) (テストの点が悪かったとき) もっと勉強するべきだった。

4. ～てしまう

(1) この宿題は簡単だったから、1時間でやってしまった。

(2) すぐ片づけちゃうから、ちょっと待ってて。

(3) 父の花瓶を落として割ってしまった。

これだけは

<接続> V[テ] + しまう/しまった

◆完了を表す今一つの形式は「～てしまう」です。「～てしまう」は話しことばでは「～ちゃう・～じゃう」(タ形は「～ちゃった・～じゃった」)になることがあります。

もう少し

◆「～てしまう」には(1)(2)のように完了を表す以外に、(3)のように「話し手の後悔」を表す用法もあります。どういう場合にどちらの用法になるかには様々な要因があり、一概には言えませんが、次のことは言えます。

①「無意志動詞+てしまう」のときは後悔の意味になりやすい

②「～てしまおう」のときは完了の意味になる

「～てしまう」が表す完了は、動作主が意志的に行ったものであるのが基本であるので、①のような無意志動詞の場合は完了を表しにくく、その結果後悔の意味になりやすいと言えます。一方、意向形を取れる(「～てしまおう」の形になる)ということは意志動詞であることの特徴であるので、②のよう

な場合は完了の意味を表すと言えます。

◆「～てしまう」の表す完了は動作の終了を特に強めて表現したもので、3で扱った「基準となる時点以前に動作や出来事が完結している」ことを表す完了とは異なるものです。こうしたことから、この形式の意味として完了ということ強調するのはよくありません。

5. ～たことがある、～たことがない

(1) 彼はアメリカに行ったことがある。

(2) 私は風邪を引いたことがない。

これだけは

<接続> V [タ] + ことがある／ことがない

◆「～たことがある／～たことがない」は経験の有無や経歴を述べる表現です。

「～たことがある」は、発話時（「～ことがあった」の場合は基準時）以前に「～」で表される行為をした経験があるということを表します。

ただし、この場合、「～」の部分には次のような制約があります。

①そのことが当たり前のことではないこと

②そのことが行われた時期が基準時とある程度以上隔たっていること

この二つの制約はある出来事を経験として述べ立てるということにかかわるものです。つまり、当たり前のことや起こってからあまり時間が経っていないことは経験として述べるのにはふさわしくないのです。例えば、次の(3)は①の制約に抵触する場合があります。

(3) ? 私は風邪を引いたことがある。 cf. 私は風邪を引いた。

一方、次の(4)は②の制約に抵触する場合があります。

(4) ? 私は先週アメリカに行ったことがある。

cf. 私は1年前にアメリカに行ったことがある。

一方、「～ことがない」は「～」で表される経験を持たないことを表します。この場合、①の制約はなく、(2)は正しい文です ((3)と比べてください)。これは、「(だれでも引く) 風邪を引く」という経験を持たないということは、その人の経歴として述べる価値がある内容であるからです。

もう少し

◆ある出来事があったということを表す場合は「…が～ことがある」という無題文 (→§27) を使います。

(5) 3年前、大雨が降ったことがある。

◆2で少し見たように、次の(6)のようにテイル形が経験を表す場合がありますが、こうした現象については中上級編で扱います。

(6) 彼は1年前にアメリカに行っている。

6. ～ことがある

- (1) 田中さんは友人とお酒を飲みに行くことがある。

(2) この店は日曜日が休みのことがある。

これだけは

<接続> 辞 (ただし、Naな・である、Nの・である) + ことがある

◆「～ことがある」は「～」で表される動作や出来事が行われる／起こる場合があるということを表します。例えば(1)は田中さんが友人とお酒を飲みに行くということが正しい場合が時々あるということを表します。

7. 相対テンス

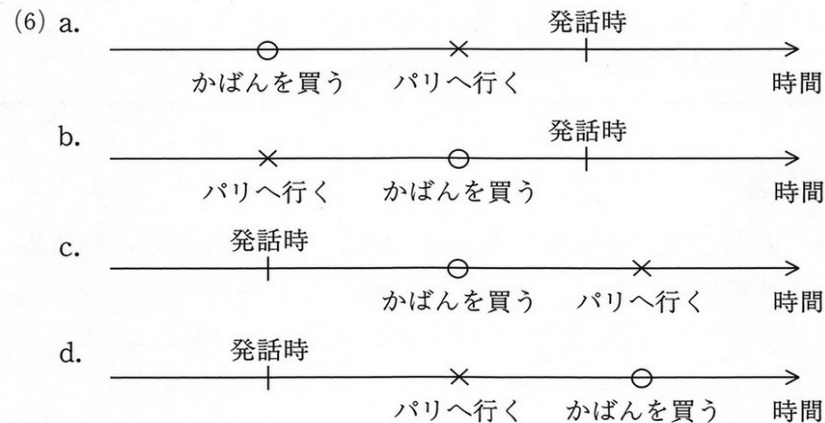
- (1) このかばんは、パリへ行くとき、成田空港で買いました。
- (2) このかばんは、パリへ行ったとき、ド・ゴール空港で買いました。
- (3) 初めて納豆を食べるとき、ちょっと気味が悪かったです。
- (4) 初めて納豆を食べたとき、とてもおいしいと思いました。

これだけは

◆ここでは従属節のテンスについて考えます。従属節のテンスは、主節のテンスとは異なり、主節で表される出来事との時間的前後関係を表します。

◆従属節のル形は主節で表される時点以後の時点を、従属節のタ形は主節で表される時点以前の時点を、それぞれ表します。一方、主節のル形とタ形は発話時との時間的前後関係を表しますから、従属節と主節の時間の組み合わせは(5)のようになり、各々を図示すると(6)のようになります。

- (5) a. パリへ行くとき、かばんを買いました。
- b. パリへ行ったとき、かばんを買いました。
- c. パリへ行くとき、かばんを買います。
- d. パリへ行ったとき、かばんを買います。



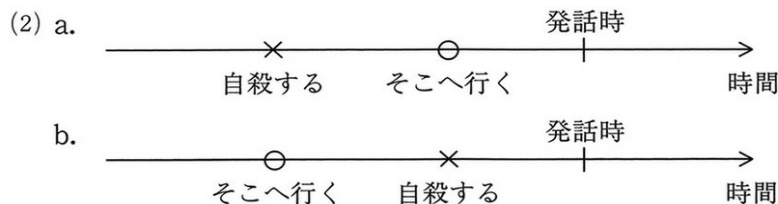
例えば、(5)bの従属節のタ形は「パリへ行く」ことが「かばんを買う」ことより前に行われたことを表し、主節のタ形は「かばんを買う」ことが「発話時」より前に行われたことを表しています。従って、両者と発話時の時間的前後関係は(6)bのようになります。このように、従属節のテンスは主節のテンスに従って相対的に決まるので**相対テンス**と呼ばれます。従属節のル形とタ形は発話時との時間的前後関係を表しているわけではありません。例えば、(5)aの「行く」(ル形)は発話時以前の出来事を、(5)dの「行った」(タ形)は発話時以後の出来事を表しています。一方、主節のテンスは発話時との関係で決まるので**絶対テンス**と呼ばれます。

もう一步進んでみると

◆テンスの問題は基本的にはタ形の意味をどう考えるかという問題に還元できます。これについては、タ形の意味を、①テンス（過去）だけと見る立場、②アスペクト（完了）だけと見る立場、③テンスとアスペクトの双方を表すと見る立場があります。このうち、日本語学における現在主流の考え方は③ですが、これは寺村秀夫（1971）に由来します。テンスに関する寺村の考え方は寺村秀夫（1984）にまとめられています。なお、テンス関係の文献にはこの他に、鈴木重幸（1979）、砂川有里子（1986）などもあります。

◆主節のテンスに比べ、従属節のテンスは難しい問題を含んでいます。3で見たように、基本的には従属節のテンスは相対テンスであると言えますが、次のような例を見ると従属節の一種である名詞修飾節のテンスは必ずしも相対テンスとは言えないことがわかります。

(1) [越前海岸で自殺した] 女性はタクシーでそこへ行った。



つまり、もし(1)の名詞修飾節内のタ形が相対テンスを表すのなら、(1)が表す時間的關係は(2)aのようになるはずですが、事実(2)bでしかあり得ませ

ん。三原健一はこうした現象をもとに、次のような「視点の原理」を立てています（三原健一（1992））。

視点の原理

- a. 主節と従属節（名詞修飾節を含む）が同じ時制形式（ル形ール形、タ形ータ形）である時、従属節のテンスは発話時との時間的前後関係で決まる（＝従属節のテンスも絶対テンスになる）。
- b. 主節と従属節（名詞修飾節を含む）が異なる時制形式（ル形ータ形、タ形ール形）である時、従属節のテンスは主節時との時間的前後関係で決まる（＝従属節のテンスは相対テンスである）。

例えば、(1)は主節も従属節もタ形であるため、aより名詞修飾節内のタ形は発話時より前であるというだけですから、主節時より以前であっても以後であってもよいことになり、(2)bのような時間関係を表すことが可能であることが説明できます。三原のこの説は有力なものですが、この説でも次の(3)bのような例は説明できません。この例は寺村秀夫（1984）で指摘されたものですが、こうした例を説明するためには、形式的な側面だけではなく、意味的な側面も考慮することが必要です（→§39）。

(3) a. ○ [激しかった] 雨が止んだ。

b. × [激しかった] 雨が降った。

◆ テンスとアスペクトは密接な関係がありますが、これについては§6や工藤真由美（1995）などを参照してください。

◆ 2で取り上げた完了の否定の言い方については、日高水穂（1995）が詳しく論じています。

○参考文献

工藤真由美（1995）『アスペクト・テンス体系とテキストー現代日本語の時間の表現ー』ひつじ書房

鈴木重幸（1979）「現代日本語の動詞のテンスー終止的な述語につかわれた完成相の叙述法断定のばあいー」松本泰丈編『言語の研究』むぎ書房

- 砂川有里子 (1986) 『セルフマスターシリーズ2 する・した・している』 くろしお出版
- 寺村秀夫 (1971) 「‘タ’ の意味と機能―アスペクト・テンス・ムードの構文的位置づけ―」 寺村秀夫 (1984) に再録
- ―― (1984) 『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』 くろしお出版
- 日高水穂 (1995) 「「マダ～シナイ」と「マダ～シテイナイ」―未実現相の否定表現―」 宮島達夫・仁田義雄編『日本語類義表現の文法 (上)』 くろしお出版
- 三原健一 (1992) 『日英語対照研究シリーズ1 時制解釈と統語現象』 くろしお出版

§6. 時間を表す表現(2) ーアスペクトー

ここでも時間を表す表現を見ていきますが、時間を表す表現には、§5で扱ったテンスとは別に、その出来事の時間的性質を表すものがあります。こうした出来事の性質を**アスペクト**と言います。アスペクトを持つのは動詞に限られ「継続」「開始」「終了」などの種類があります。1～3では継続を、4と5では開始と終了を扱います。なお、「～てみる」「～ておく」は厳密にはアスペクトを表すものではありませんが、意味的に関連があるのでここで併せて扱います。

1. ～ている

- (1) 田中さんはレストランで夕食を食べています。
(2) 教室の窓ガラスが割れています。

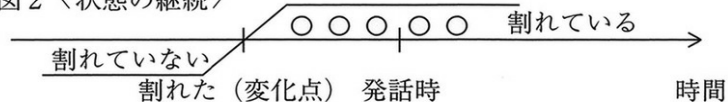
これだけは

◆継続を表す最も典型的な形は「～ている」の形（**テイル形**）です。テイル形には、(1)のように動作や出来事が継続していることを表す場合と、(2)のようにある状態が継続していることを表す場合があります。

図1 <動作・出来事の継続>



図2 <状態の継続>



◆図1のような<動作・出来事の継続>のテイル形は、発話時を含む一定の時間（○で表す）、「食べる」という動作が継続することを表します。一方、図2のような<状態の継続>のテイル形は発話時以前のある時点に起こった出来事（この場合は「(窓ガラスが) 割れる」）による「変化」の結果、その時点以後のどの時点（○で表す）においても、窓ガラスは割れた状態にあるということを表しています。

◆一方、「～ていた」の場合は、基準となる時間が図の「発話時」以前の時点（基準時）に移ります。基準時は、次の(3)の「昨日」のような副詞や(4)の「私が(教室に) 入ったとき」のような節などで表されます。

(3) 昨日、田中さんはレストランで夕食を食べていました。

(4) 私が入ったとき、教室の窓ガラスは割れていました。

図3 <動作・出来事の継続>

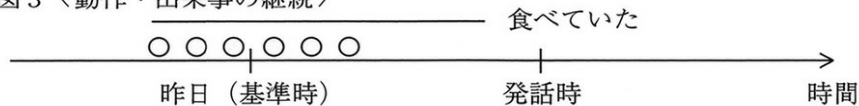


図4 <状態の継続>



◆このようにテイル形には二つの意味がありますが、どちらの意味になるかは動詞の種類から決まっています。つまり、「死ぬ、割れる、溶ける」のような変化を表す動詞（**変化動詞**）のテイル形は状態の継続を、「走る、降る」のような動作や出来事を表す動詞のテイル形は動作や出来事の継続を表しま

す。なお、「ある・いる」のような存在を表す動詞や可能形のような状態を表す動詞（**状態動詞**）にはテイル形がありません。これは状態動詞がアスペクトの対立を持たないことを意味しています。

◆動きや出来事を表す動詞は現在を表すときにテイル形を使わなければなりません。もしル形を使うと未来を表します（→§5）。

(1) 田中さんはレストランで夕食を食べています。（現在）

(5) 田中さんはレストランで夕食を食べます。（未来）

一方、テイル形を持たない状態動詞はル形で現在を表します（→§5）。

(6) 机の上に辞書があります。（現在）

もう少し

◆「行く、来る、帰る」のような移動動詞のテイル形は少し違う意味を表します。

(7) 山田さんは中国に行っています。

(8) 弟は私の家に来ています。

こうした動詞のテイル形は、その文の主語が「～に／へ」で表される場所に移動し、その結果基準時においてその場所にいることを表します（これは、変化動詞のテイル形が変化の結果の状態の継続を表すのと同じです。「行く」などの動詞は主語がいる位置の「変化」を表すものなのです）。つまり、(7)(8)は次のような意味を表します。

(7)' 山田さんは中国に行きました。+山田さんは今、中国にいます。

(8)' 弟は私の家に来ました。+弟は今、私の家にいます。

◆テイル形を「毎日、よく、時々、～ごとに」のような頻度を表すことばといっしょに使うと「習慣」を表します。

- (9) 私は毎日公園を散歩している。
 (10) 彼女は週末ごとに大阪へ行っている。
 (11) 私は若いころ、よくあの喫茶店で友達と話していた。(過去の習慣)

これは、「散歩をする」「朝6時に起きる」といった出来事は一回的なものであっても、それが繰り返されることによって、継続的な性質を持ったものと考えることができます。これを図示すると次のようになります。



◆テイル形にはこの他にも、(12)(13)のような経験・経歴を表す用法があります。また、文章の中でのテイル形の使い方にも注意が必要ですが、これらについては中上級編で扱います。

- (12) 犯人は3日前にここで食事をしている。
 (13) この本は10年前に絶版になっています。

2. ～ているところだ、～つつある

- (1) 池の氷が{溶けているところだ／溶けつつある}。
 (2) 私は本を{○読んでいるところだ／?読みつつある}。
 (3) 事件の真相が明らかに{×なっているところだ／○なりつつある}。

これだけは

◆テイル形以外の「継続」を表す形式に「～ているところだ」と「～つつある」があります。

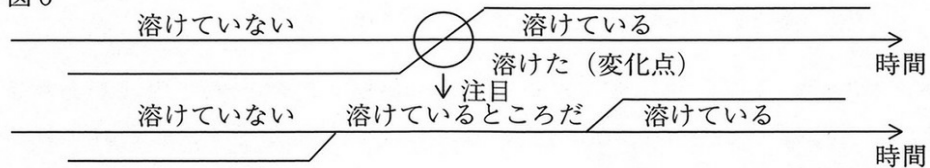
◆「～ているところだ」は、(2)のような動作動詞の場合は、テイル形と同じく「動作の継続」を表しますが、テイル形とは違い、次の(4)のような出来事を表す無意志動詞といっしょには使えません。

(4) ×雨が降っているところだ。

また、(1)のような変化動詞といっしょに使うと、その変化が起こっている最中であることを表します。これは変化の過程に注目するものです（図6参照）。一方、テイル形は変化が起こった後の状態を表すため、(1)と(1)'が表す意味は異なります。

(1)' 池の水が溶けている。

図6



なお、変化動詞でも、次の(5)の「死ぬ」のように、変化が瞬間的で、時間的な幅がない動詞の場合には「～ているところだ」は使えません。

(5) ×ゴキブリが死んでいるところだ。

もう少し

◆「変化の最中」を表すときには「～つつある」のほうがよく使われます。

＜接続＞ V_{マス}＋つつある

特に、(3)のような抽象的な変化の場合には「～つつある」が使われます。ただし、「～つつある」は(2)のような動作動詞といっしょには使いにくく、また、話しことばでもあまり使われません。

3. ～続ける（～続く）

- (1) 明日は一日中雨が降り続けるでしょう。

(2) 彼らは政治の話をし続けた。

これだけは**<接続> V_{マス} + 続ける／続く**

◆「～続ける」も「継続」を表す形式です。

「～続ける」とテイル形の違いは、「～続ける」がある動作や出来事が終わっていない（終結段階にない）ということを表すのに対し、テイル形は動作や出来事がある時点で行われている／起こっていることを表すという点にあります。例えば、(1)は明日一日という時間的範囲内において、「雨が降る」という出来事が終結する（つまり、「雨がやむ」）ということはない、ということを表します。これに対し、テイル形はある時点における出来事の継続を表すので、次の(3)aの「明日の今ごろ」のように時間を限定する表現とはいっしょに使いやすいですが、(3)bの「一日中」のように時間を限定しない表現とっしょに使うことは（やや）困難になります。

(3) a. 明日の今ごろは雨が降っているでしょう。

b. (?) 明日は一日中雨が降っているでしょう。

また、(2)と次の(4)を比べると、(4)はある特定の時点において話が行われていたということを表すのに対し、(2)は話が終わることなく行われたということを表します。従って、(5)のように時点限定する表現が文中にあるときにはテイル形のみが使えます。

(4) 彼らは政治の話をしていた。

(5) 私がここに来たとき、彼らは政治の話を{○していた／×し続けた}。

もう少し

◆「～続く」は通常「降る」という動詞に後接するときのみ使われます。

◆「～続ける」は一般の動的述語（→§5）と同じく出来事をひとまとまりのものとしてとらえるため、そのル形は未来を表します（→§5）。従って、現在のことを表すためには、次の(6)のようにテイル形（「～続けている／～続いている」）を使わなければなりません。

(6) 彼らは政治の話をし続けています。

4. ～始める、～だす、～終わる(～終える)、～やむ

- (1) 急に雨が{ 降り始めた／降りだした }。
- (2) 田中さんは6時ごろから料理を{ 作り始めた／作りだした }。
- (3) 6時ごろから料理を{ 作り始めよう／(?) 作りだそう }。
- (4) 昨日、その小説を{ ○読み終わった／○読み終えた／×読みやんだ }。
- (5) 学校のチャイムが{ ○鳴り終わった／×鳴り終えた／○鳴りやんだ }。
- (6) 雨が{ ×降り終わった／×降り終えた／○降りやんだ }。

これだけは

◆ここでは開始と終了を表す代表的な形式を扱います。

<接続> V_{マス} + 始める／だす／終わる／終える／やむ

◆「～始める」は開始を表す最も典型的な形式で、動作や出来事の開始を表します。なお、「いる、できる」などの状態動詞には後接しません。

(7) ×さっきから部屋の中に男の人がい始めた。

cf. さっきから部屋の中に男の人がいる。

◆「～だす」も開始を表します。「～始める」とほぼ同じように使えますが、(3)のような意志表現と共にあまり使われません。

◆「～終わる／終える」は終了を表す最も典型的な形式ですが、「走る、遊ぶ」のような明確な終結点を持たない動作や出来事を表す動詞や、「いる」のような状態動詞の場合は使えません。

(8) ×一人で公園を走り終えた。 cf. 一人で公園を走った。

また、「割れる」のような変化動詞や「行く、来る」のような移動動詞(=位置の変化を表す動詞)は過程を持たず、終結点もないので、やはり「～終わる」は使えません。

(9) ×私は学校へ行き終わった。 cf. 私は学校へ行った。

(10) ×ゴキブリが死に終わった。 cf. ゴキブリが死んだ。

◆「～終える」は「～終わる」とほぼ同義ですが、(4)の「読む」のような意志動詞としか使えません。また、「～終わる」よりも書きことば的です。

◆「～やむ」も終了を表す形式ですが、この形式は(5)(6)のような無意志的な出来事を表す動詞にのみ後接します。

もう少し

◆「行く」などの移動動詞に「～始める」が後接すると、繰り返し行われる行為を始めるという意味になります。例えば、(11)は習慣的に繰り返される「学校へ行く」という行為が昨日から始まったという意味を表しますが、個別の行為としての「学校へ行く」ということの開始時点（家を出る、など）は表しません。

(11) 弟は昨日から学校へ行き始めた。

これに対し、(12)の「作る」のような動作動詞や出来事を表す動詞の場合は「～始める」は個別的な動作や出来事の開始時点を表します。

(12) 田中さんは6時ごろから夕食を作り始めた。

◆変化動詞の場合も、変化の過程に注目する場合には開始の形式が使えます。これは「～つつある」の場合と類似の現象です。

(13) 池の水が溶け始めた。 cf. 池の水が溶けつつある。

なお、「死ぬ」のように過程を持たない変化動詞の場合は、「～つつある」の場合と同様）開始も終了も使えません。

(14) a. ×ゴキブリが死に始めた。

b. ×ゴキブリが死に終わった。

◆「走る」などの動詞は明確な終結点を持たないため、通常「～終わる／終える」を後接できませんが、「10キロコースを走る」のように全体量が決まると終結点が生まれ、「～終わる／終える」が後接できるようになります。

(15) 一人で10キロコースを走り終えた。 cf. (8)

◆開始や終了を表す形式にはこの他に「～かける、～切る、～尽くす」などがありますが、これらは中上級編で扱います。

5. ～ところだ

＜～ところだ＞

- (1) これから夕食を作るところです。
- (2) 電話が鳴ったとき、私は家に帰るところだった。

＜～たところだ＞

- (3) 食事が終わったところです。(＝食事が終わったばかりです。)
- (4) 事故のことを今聞いたところなので、詳しいことはわかりません。

これだけは

＜接続＞ V[辞] + ところだ V[タ] + ところだ

◆「ところだ」は辞書形やタ形といっしょにも使います。「辞書形＋ところだ」は(1)のように動作を始める直前であることを表します。動作が過去の場合は(2)のように「ところだった」という形を使います。

◆「～たところだ」は動作や出来事が終わった直後であることを表します。この場合は無意志動詞も使えます。また「～たところだ」と「～たばかりだ」はほぼ同じ意味になります。なお、「無意志動詞の辞書形＋ところだった」は(5)のように、実際はその出来事が起こらなかったということを表します。

- (5) もう少しで大きな事故になるところだった。

6. ～てある

- (1) (空気をきれいにするために、) 窓が開けてあります。
 (2) 窓が開いています。
 (3) 教室にはかざがかけてあります。
 (4) 教室にはかざがかかっています。

これだけは

<接続> V[テ] + ある

◆テイル形以外の「状態の継続」を表す形式に「～てある」があります。「～てある」は常に他動詞といっしょに使います。

◆自他の対応がある(→§10)とき、「他動詞＋てある」と「自動詞＋ている」はよく似た意味を表します。両者の違いは、「～てある」には行為をした人(動作主)の存在が含意されるのに対し、テイル形にはそうした含意はなく、出来事は自然に起こったように表現されている、という点にあります。従って、(1)の「空気をきれいにするために」や次の(5)の「寒いので」のような明確な目的や理由を表す節がある場合には「～てある」しか使えません。

- (5) 寒いので、窓が{○閉めてあります／×閉まっています}。

もう少し

◆対応する自動詞を持つ他動詞や場所を表す「～に／～へ」と共に使われる他動詞では「～てある」と「～られている」がほとんど同じ意味で使われます。

- (6) 教室にはかざが{かけられています／かけてあります}。
 (7) 机の上に花が{飾られている／飾ってある}。

◆「～てある」には動作主の存在の含意がありますが、受身文とは違って、動作主を「～に／～によって」などで表すことはできません。

- (8) ○その金庫にはかぎがかけてあります。
 (9) ×その金庫にはだれかによってかぎがかけてあります。
 (10) ○その金庫にはだれかによってかぎがかけられています。

◆自他の対応を持たない他動詞の「～てある」は、主に、「ある目的のために、ある行為を行い、その効果が今も残っている」(効果の継続)という意味を表します。

- (11) たくさん勉強をしてあるから、今度のテストは大丈夫だろう。
 (12) パーティーのために、いろいろな料理を作ってあります。

例えば、(11)は「テストに備えて既にたくさん勉強をしたので、その効果でテストは大丈夫だろう」という意味を表します。なお、この場合、「～てある」の前の格助詞は「を」を使うのが普通です。

◆「～られてある」は少し古い表現で、現代ではほとんど使われません。

- (13) 机の上に花が{○飾られています／?飾られてあります}。

7. 「～てある」と「～ておく」

- (1) 試験のために、勉強をしておきました。単語も覚えてあります。
 (2) 来週までにこの本を{○読んでおきます／×読んであります}。

これだけは

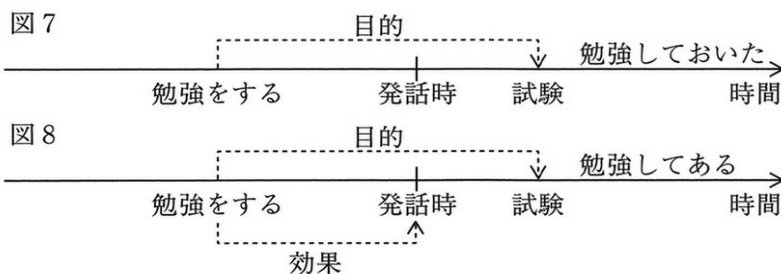
<接続> V_テ + ある／おく

◆上で、「～てある」には「ある目的のためにある行為を行い、その効果が今も残っている」という意味があることを見ました。これとよく似た意味を表すのが「～ておく」です。「～ておく」の意味は「ある目的のためにあらかじめある行為を行う」ということです。次の(3)と(4)を比べてみましょう(なお、「～ておく」は自動詞とは使えますが、無意志動詞とは使えません)。

(3) 試験のために、たくさん勉強をしておきました。

(4) 試験のために、たくさん勉強をしてあります。

(3)の意味は「試験」のために「たくさん勉強をした」ということです。一方、(4)の意味は「試験」のために「たくさん勉強をし」、その効果が今（発話時）に残っているということです。各々を図示すると次のようになります。



◆図7と図8を比べるとわかるように、(この用法の)「～てある」と「～ておく」の意味は大変よく似ています。ただし、「～ておく」はある動作（この場合は「勉強をする」）を「する」ことに焦点がありますから、「～ておく」「～ておいた」かは、その動作をしたのが発話時より後か前かによって決まります。一方、「～てある」はある動作（「勉強をする」）をしたことの「効果」が「発話時（基準時）」にも「継続している」ことに焦点がありますから、「～てあった」ではなく「～てある」という形になります。

もう少し

◆「～ておく」「～てある」には次のような基準時より以前に動作を行うという用法もあります。これは、上の規定の中の「目的」という部分が希薄化したものと考えることができます。ただし、「～てある」はその動作が未実現である場合にしか用いられない表現（意志、命令など）とは使えません。

(5) 面接の前に、資料を{○暗記しておいた／○暗記してあった}ので、
落ち着いていられた。 (基準時：面接)

(6) 来週までにこの本を{○読んでおきなさい／×読んでありなさい}。
(基準時：来週)

6.

時間を表す表現(2) — アスペクト —

8. ～てみる

- (1) 行き方がわからなかったなので、道を歩いていた人に聞いてみた。
(2) このケーキを少し食べてみてください。
(3) 一度パリに行ってみたい。

これだけは

<接続> V^テ + みる

◆うまくいくかどうか、正しいかどうかなどはわからないが、「ある行為を試みに行う」という意味を表すのが「～てみる」です。例えば、(2)はケーキを試食してくれるように頼むときの表現であり、「～てみる」の部分には「おいしいかどうかはわかりませんが」といった気持ちが含まれています。なお、「～てみる」は「試しに」何かをするということですから、(4)のような表現は不自然です ((5)と比べてください)。

- (4) このケーキを{○少し／×たくさん} 食べてみてください。
(5) このケーキを{○少し／○たくさん} 食べてください。

◆「～てみる」の中の「みる」は、抽象的な用法になっていますから、ひらがなで書くのが一般的です。

◆「～てみる」には、(3)のように、「試みに～を行う」というニュアンスがあまり感じられないものもありますが、こうした表現でも、(3)'のような「てみる」を含まないものよりも控えめな表現になります。

- (3)' 一度パリに行きたい。

もう一步進んでみると

◆ここでは「アスペクト」について見ました。「アスペクト」は§5で見た「テンス」とよく似ていますが、両者は別の概念です。つまり、「テンス」が、出来事を「発話時」との関連で位置づける（発話時以前なら「過去」、同時

なら「現在」、以後なら「未来」)であるのに対し、「アスペクト」は、出来事をひとまとまりの完結したものと見るか、広がりのある継続したものと見るかといった、出来事の性質に関わる概念です。

次の(1)と(2)を比べてみると、単独の文としては両者は共に正しい文です。

- (1) 昨日雨が降った。
- (2) 昨日雨が降っていた。

しかし、次のような文脈に入れてみると、(2)は正しいが(1)は使えないことがわかります。これは、「相変わらず」ということばが表しているように、この文脈では出来事が継続的(未完結的)にとらえられているためです。

- (3) 昨日学校に着いたときは雨だった。授業が終わって帰ろうとしたときも相変わらず、雨が{×降った／○降っていた}。

この場合、(1)と(2)の違いは雨が降った時間の長さではないことに注意してください。こうした違いがさらにはっきりするのが次の例です。

- (4) a. 先日私は旅館に{○泊まった／×泊まっていた}。b. 翌日、山に登った。
- (5) a. 先日私は旅館に{○泊まった／○泊まっていた}。b. 夜、地震があった。

(4)(5)はよく似ていますが、b文が文脈の違いを作っています。そして、(4)のa文ではテイタ形(「～ていた」)が使えないのに、(5)のa文では使えるという違いがあります。これは、タ形が出来事をひとまとまりにとらえるのに対し、テイタ形が出来事を継続的にとらえるという違いによります。つまり、タ形は出来事を点的にとらえるということを表すのに対し、テイタ形はそれを線的にとらえるということを表すのです。このことは次のように図示できます。



図10 先日私は旅館に泊まった。夜、地震があった。

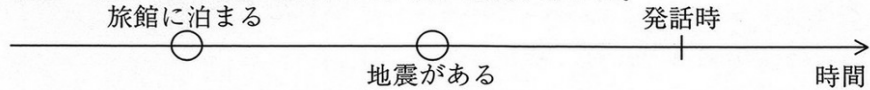
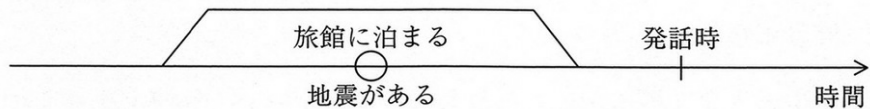


図11 先日私は旅館に泊まっていた。夜、地震があった。



つまり、図9に対応する場合は「旅館に泊まる」「山に登る」という事態が連続して起こったということが述べられているのです（図10に対応する場合も同様です）。

一方、図11に対応する場合では、テイタ形が広がりのある事態を表すので、「旅館に泊まる」という事態が継続している間に地震が起こったという関係を表せるのです。

◆以上のようなことから、(1)と(2)は次のように、テンスとアスペクトを表していることがわかります。

- | | | | | | |
|-----|----|---|---------|---|-----|
| (1) | 降っ | — | φ | — | た |
| | | | アスペクト | | テンス |
| | | | 完結 | | 過去 |
| (2) | 降っ | — | てい | — | た |
| | | | アスペクト | | テンス |
| | | | 継続（未完結） | | 過去 |

つまり、「ている」「ていた」の「る」「た」の部分は「テンス」（発話時との時間的前後関係）を表し、「てい」の部分は「アスペクト」（継続）を表すのです。一方、(1)のような「てい」がないものは「完結」（ひとまとまり）という「アスペクト」を表します。

◆以上見てきたのは、出来事を丸ごととらえるか継続的にとらえるかという意味での「アスペクト」（出来事の性質）でしたが、「出来事の性質」には、この他に、出来事が開始段階にあるか終結段階にあるといった問題もあります。「～始める」「～だす」「～続ける」「～終わる」「～終わる」などはこう

した意味のアスペクト表現です。

◆なお、「～ておく」「～てみる」は厳密にはアスペクト表現ではありませんが、アスペクト表現と似た使い方をしますので、ここで扱いました。

◆「アスペクト」は日本語学の中で最も研究が進んでいる分野です。アスペクトの研究は金田一春彦(1950)から始まったと言えます。金田一が打ち出した「継続動詞、瞬間動詞、状態動詞、第四種の動詞」という区別はアスペクトの観点から動詞を分類しようとする最初の試みであり、研究史上重要な意味を持っています(なお、ここで言う「第四種の動詞」というのは、「そびえる、優れる」のように常に文末では「～ている」の形で使われるものを言います)。金田一以降の重要な論文の一部は金田一春彦編(1976)に収められています。金田一から続く研究を批判的に発展させ、一つの到達点を示したのが奥田靖雄(1979)です。この研究は高橋太郎(1985)や工藤真由美(1995)にも受け継がれています。一方、日本語学の立場からのアスペクト研究としては寺村秀夫(1984)が最も重要です((4)(5)は寺村の例です)。さらに、森山卓郎(1984)にも重要な指摘があります。なお、「～てある」については益岡隆志(1987)を参照してください。また、日本語教育の立場から書かれたものとしては砂川有里子(1986)があります。

まとめ

「継続」を表す形式：～ている(テイル形)、～てある、～ているところだ、

～つつある、～続ける

～ているところだ……動作の継続が中心(出来事・状態の継続は表せない)

～つつある……変化の過程の継続(動作・出来事・状態の継続は表せない)

～続ける……動作や出来事が終結段階にないことを表す

テイル形……動作や出来事がある時点で行われている／起こっていることや、
変化の結果生じた状態が存続していることなどを表す

テイル形の意味と動詞の種類

動作・出来事を表す動詞……動作・出来事の継続

変化動詞……(変化の結果としての)状態の継続

状態動詞……テイル形がない

「開始」を表す形式：～始める、～だす

～始める……一般的な形式。生理現象を表す動詞以外には後接可能

～だす……主に無意志的な出来事を表す動詞に後接

「終了」を表す形式：～終わる、～終える、～やむ

～終わる……一般的な形式

～終える……意志的な動詞にのみ後接。書きことば的

～やむ……無意志的な動詞にのみ後接

～てある：①の用法では常に他動詞といっしょに使う

①状態の継続……動作主の存在が含意されるのがテイル形との違い

②効果の継続……基準時までの「継続」という点が「～ておく」との違い

その他の形式（「～てみる、～ておく」はアスペクトを表す形式ではない）

～（辞書形）ところだ：動作・出来事が始まる直前を表す

～たところだ：動作・出来事が終わった直後を表す

～ておく：ある目的のためにあらかじめある行為を行う

～てみる：試みにある行為を行う

テンスとアスペクトの関係

状態動詞以外の動詞（動的述語）

		アスペクト	
		完結	未完結
テ ン ス	発話時以降（未来）	ル形	～ている（だろう）
	発話時同時（現在）		テイル形
	発話時以前（過去）	タ形	～ていた

状態動詞（アスペクトの対立を持たない）

テ	発話時以降（未来）	ル形
ン	発話時同時（現在）	ル形
ス	発話時以前（過去）	タ形

*形容詞・「名詞＋だ」もアスペクトの対立を持たない

○参考文献

奥田靖雄（1979）「アスペクトの研究をめぐって－金田一段階－」松本泰丈編『言語の研究』むぎ書房

- 金田一春彦 (1950) 「国語動詞の一分類」 金田一春彦編 (1976) に再録
——編 (1976) 『日本語のアスペクト』 むぎ書房
- 工藤真由美 (1995) 『アスペクト・テンス体系とテキストー現代日本語の時間の表現ー』 ひつじ書房
- 砂川有里子 (1986) 『セルフマスターシリーズ2 する・した・している』 くろしお出版
- 高橋太郎 (1985) 『日本語のテンスとアスペクト』 秀英出版
- 寺村秀夫 (1984) 『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』 くろしお出版
- 益岡隆志 (1987) 『命題の文法』 くろしお出版
- 森山卓郎 (1984) 「アスペクトの意味の決まり方について」 『日本語学』 3-12

6.

時間を表す表現 (2)
ーアスペクトー

§7. 変化を表す表現

出来事にはいくつかの類型がありますが、その一つに状態の変化があります。変化を表す最も典型的な動詞は「なる」と「する」です。

1. 「なる」と「する」

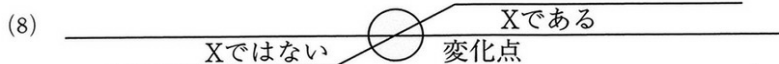
- | | |
|-----------------------------------|--------|
| (1) 息子は4月から小学生 <u>になった</u> 。 | (名詞) |
| (2) 広志くんは背が高 <u>くなった</u> ね。 | (イ形容詞) |
| (3) 洋子さんはきれい <u>になった</u> 。 | (ナ形容詞) |
| (4) この子はあまり泣か <u>なくな</u> った。 | (否定) |
| (5) 田中さんは息子さんを医者 <u>にした</u> 。 | (名詞) |
| (6) この大学は去年から入学試験を難 <u>しくした</u> 。 | (イ形容詞) |
| (7) 部屋をきれいに <u>してく</u> ださい。 | (ナ形容詞) |

これだけは

<接続> A</Naに/Nに + なる・する

◆変化を表す典型的な動詞は「なる」と「する」です。

◆「YがXなる」という表現は、Yの属性が、Xでない状態からXという状態に自然に（無意識裏に）変化したということを表します。例えば(1)は「息子」の属性（＝身分）が（4月を境に）小学生ではない状態から「小学生」に変わったということを表します。これを図示すると次のようになります。



◆一方、「ZがYをXする」という表現は、Zが意志的な働きかけによって、Yの属性をXでない状態からXという状態へ変化させたことを表します。例えば、(6)は「大学」が「入学試験」の属性(＝問題の内容)を「難しくない」ものから「難しい」ものへ変えたということを表します。

もう少し

◆「ない」の場合は二つのパターンがあります。

◆まず、形容詞の「ない」には、「なくなる」はありますが、「なくする」は使われず、「なくす」が使われます。これは文末の場合も名詞修飾の場合も同様です。

- (9) a. ○傘がなくなる。
b. 彼はよく傘を{×なくする／○なくす}。
- (10) a. ○傘がなくなること(は困ったことです)。
b. 傘を{×なくする／○なくす}こと(は困ったことです)。

◆一方、否定形の「ない」の場合は、品詞の違いに関わらず「～なくする」が使われ、「～なくす」は使われません。なお、名詞修飾の場合は「～なくす」も使えますが、「～なくする」よりも硬い表現になります。

- (11) a. ○本の内容がつまらなくなる。(イ形容詞)
b. 彼の発言は本の内容を{○つまらなくする／×つまらなくす}。
c. 本の内容を{○つまらなくする／○つまらなくす}要因
- (12) a. ○雨でぬれて、本が読めなくなる。(動詞)
b. 雨でぬらして、本を{○読めなくする／×読めなくす}。
c. 本を{○読めなくする／○読めなくす}要因

◆「なる」と「する」の関係は次のように図示できます。

YがXなる
ZがYをXする

7.

変化を表す表現

この「なる」と「する」の関係は基本的に、自他の対応がある場合の自動詞と他動詞の関係に相当します (→§10)。

XがVi (自動詞)

YがXをVt (他動詞)

もう少し

◆「なる」「する」を含むよく使われる表現に、「世話になる」「世話をする」があります。次の(13)a(13)bからわかるように、「世話になる」と「世話をする」の関係は、(14)a(14)bのような能動文と受身文の関係に相当します。

- (13) a. 山本さんはヤンさんのお世話をした。
- b. ヤンさんは山本さんにお世話になった。
- (14) a. 山本さんはヤンさんを殴った。
- b. ヤンさんは山本さんに殴られた。

なお、(13)bの代わりに(15)は使えますが、(13)aの代わりに(16)は使えません。これは一つの文には二つ以上の「を」を使えないためです。

- (15) ヤンさんは山本さんのお世話になった。
- (16) ×山本さんはヤンさんをお世話をした。
- cf. ○山本さんはヤンさんをお世話した。

◆商店や銀行などの金銭を扱う場所では、次のように、特に変化を表さない場合にも「なる」が使われることがあります。これは丁寧さを表そうとする心理に基づくものです。

- (17) お釣りは500円になります。
- (18) こちらのシャツは2,000円になります。

2. 「ようになる」と「ようにする」

- (1) 油をさしたら、ドアがスムーズに開くようになった。
 (2) 私は毎朝朝食を食べるようになった。
 (3) 油をさして、ドアがスムーズに開くようにした。(働きかけ)
 (4) 私は毎朝朝食を食べるようにした。(習慣的行動)

これだけは

<接続> V[辞] + ようになる／ようにする

◆動詞（の肯定形）で表される状態の変化は「ようになる」で表します（否定の場合は「なくなる」で表します。1 参照）。

◆「ようになる」はそれまで存在しなかった状態が現在は存在するということを表します。例えば、(1)はそれまで「スムーズに開く」状態になかったドアが現在は「スムーズに開く」状態にある、ということを表します。(2)の「食べる」のような意志動詞が使われていても、「食べるようになる」全体は意志的な動作を表さず、自然にそうした状態に至ったことを表します。

◆一方、「ようにする」には二つの用法があります。

一つは、ある出来事が起こるように働きかけるという用法であり、この場合、「ようにする」の前に来る出来事は無意志的なものです。例えば、(3)は「スムーズに開く」という状態になかったドアを「スムーズに開く」という状態に変えるために働きかけ（「油をさす」）をしたことを表します。

もう一つは、習慣的にある行動をすることを表す用法です。この場合、「ようにする」の前に来る出来事は意志的に行われるものです。例えば、(4)はいつも朝食を食べたということを表します。この後者の用法の場合、「ようにする」は「ことにする」と置き換えてもあまり意味が変わりませんが、前者の用法の場合は「ようにする」は「ことにする」に置き換えられません。

もう少し

◆「ようにした」は、(3)のような用法では一回的な出来事を表すのに対し、(4)のような用法では習慣的な出来事を表します。このため、(4)のような用法では「した」を（過去の習慣を表す）「していた」に置き換えられます。従って、(4)'は(4)とほぼ同じ意味で置き換えられます。

(4) 私は毎朝朝食を食べるようにした。

≡(4)' 私は毎朝朝食を食べるようにしていた。

一方、(3)'は(3)とは置き換えられません。ただし、(3)'は(4)'と同様の過去の習慣を表す用法では使えます。

(3) 油をさして、ドアがスムーズに開くようにした。

≠(3)' 油をさして、ドアがスムーズに開くようにしていた。

◆「Vようにする」には、次の(5)のような、Vで表される出来事が実現するように努力するという意味もあります。

(5) 今度会議にはできるだけ出るようにするよ。

3. 「ことになる」と「ことにする」

(1) 会議は6階の会議室で行うことになりました。

(2) 来月パリに行くことになりました。

(3) 会議は6階の会議室で行うことにしました。

(4) 来月パリに行くことにしました。

これだけは

<接続> V [辞] +ことになる／ことにする

◆ある出来事が決定したことを表す表現が「ことになる」です。この場合も「なる」は自動詞に相当するため、話し手が主体的に「決める」のではなく、外的要因によって「決まる」ということを表します。

◆ある出来事を話し手が主体的に決めたことを表す表現は「ことにする」です。例えば、(3)は「会議を6階の会議室で行う」ことを話し手が主体的に決めたことを表します。従って、(5)aのように、「こと」の前の出来事が自分の意志で選択できないものの場合は「ことにする」は使えません。

(5) a. ?来月出張でパリに行くことにしました。

一方、(5)bからわかるように、「ことになる」はこの場合でも使えます。

(5) b. ○来月出張でパリに行くことになりました。

◆「ことになる／ことにする」は多くの場合、「ことに決まる／ことに決める」と置き換えられます。

もう少し

◆「ことになる／する」の場合、「に」を「と」に置き換えることができます。この場合、「と」を使うと「に」よりも硬い表現になります。

(6) 来月国に帰ること{に／と}になりました。

なお、「ようになる／する」の場合は「と」は使えません。

(7) 今日は早く帰るよう{○に／×と}します。

◆実際は自分が意志的に決めたことであっても、次のように「ことになる」で表現することがあります。

(8) 今度、洋子さんと結婚することになりました。

これは、自動詞的な表現である「なる」を使うことによって、話し手の意志を表現することを避けようとする心理に基づくものです。このように、他動詞的な表現が使えるときに、自動詞的表現が使われる例としては、電車のアナウンスで使われる次のような表現を挙げることができます (→§10)。

(9) ドアが閉まります。ご注意ください。 cf. ドアを閉めます。

なお、言うまでもなく、こうした場合、次の(8)'からもわかるように、「ことにする」は常に使うことができます。

(8)' 今度、洋子さんと結婚することにしました。

4. 変化動詞と「なる」

- (1) この病気は〇〇という薬で治るようになった。
(2) 〇〇という薬を飲んだら、この病気はすぐに治った。

これだけは

◆上述のように、「なる」は変化を表しますが、動詞の中にはその意味の中に状態の変化を含むものがあります。これを**変化動詞**と言います。例えば、「治る」は、病気である状態から病気ではない状態への変化を表します。

◆変化動詞と「変化動詞＋なる」との違いは、前者では変化が一時的であるのに対し、後者ではそれが継続的・恒常的である点にあります。例えば、(2)は、〇〇という薬を飲んだとき、「この病気」がよくなったという一度の出来事について述べているのに対し、(1)は、「〇〇という薬 (を飲むこと)」と「この病気が治る」ということが恒常的に因果関係を持つ、言い換えれば、「〇〇という薬」は「この病気」に対する特効薬であるということを述べています。

もう一步進んでみると

◆「変化」を表す代表的な動詞は「する」と「なる」ですが、この二つは言語の（表現上の）類型にも関係があるという説があります。池上嘉彦（1981）は「する」と「なる」を中心に日本語と英語などを比較したもので、その後の研究に大きな影響を与えています。それによると、日本語は「「なる」型言語」で、動作主を表に出さない表現を好む傾向があるのに対し、英語などは「「する」型言語」で、動作主を中心に出来事を描くのを好む傾向があるとされています。これは具体的には、英語では(1)のようなものを主語とする他動詞表現が普通に使われるのに対し、日本語ではそうした場合に(2)aのような自動詞表現が使われる傾向が高いといった点に現れるとされています。なお、こうした問題については寺村秀夫（1976）も参照してください。

(1) The sun burned the skin.

(2) a. 肌が日に焼けた。 ((1)に対応する自然な表現)

b. 太陽(の光)が肌を焼いた。 ((1)の直訳だが不自然)

○参考文献

池上嘉彦（1981）『「する」と「なる」の言語学－言語と文化のタイポロジーへの試案－』大修館書店

寺村秀夫（1976）「「ナル」表現と「スル」表現－日英態表現の比較－」寺村秀夫（1993）『寺村秀夫論文集Ⅱ 言語学・日本語教育編』くろしお出版に再録

§8. 可能を表す表現

ある人物（またはそれに類するもの）がある動作や状態を実現する能力を持つ（または持たない）ことを表す表現を**可能表現**と言います。

可能表現には、動詞の**可能形**や「～ことができる」の他、「～える／うる」や不可能の意味の「～かねる」などがあります。初級では動詞の可能形と「～ことができる」を扱います。

1. 可能形の作り方

- (1) 来日したときはひらがなも書けなかったが、今は漢字も書ける。
 - (2) 食べられない料理がある人は食べられるものだけ食べてください。
 - (3) 勉強したいのだが、忙しくて勉強できない。

これだけは

◆ I 類動詞の可能形は語幹（→§36）に-eru を付けて作ります。

書く 語幹 kak- + -eru → kakeru（書ける）
読む 語幹 yom- + -eru → yomeru（読める）

◆ II 類動詞の可能形は語幹に-rareru をつけます。

見る 語幹 mi- + -rareru → mirareru（見られる）
出る 語幹 de- + -rareru → derareru（出られる）

Ⅲ類の「来る」もⅡ類と基本的に同じですが、語幹の母音が変化します。

来る 語幹 ku- + -rareru → **ko**rareru (来られる)

◆「する」は「できる」を使います。「勉強する」などのサ変動詞の可能形も「勉強できる」などになります。「愛する」など一部のサ変動詞はⅠ類動詞の「愛す」の可能形である「愛せる」を使います（→コラム「相補分布」）。

もう少し

◆Ⅱ類動詞および「来る」の可能形として「見れる、出れる、来れる」のような形も最近よく耳にするようになりました。このような形をラ抜きことばと言いますが、このラ抜きことばは下線を引いてある -ra- が落ちてできる形を指します。

2. 可能表現の意味

- (1) 田中さんは100メートルを12秒で走れる。

(2) この木の実は食べられます。

これだけは

◆可能表現には少なくとも次の二つの意味があります。

(1)は動作主である「田中さん」の「走る」という動作をする能力を表しています。

(2)の場合、「この木の実」は「だれかがこの木の実を食べる」のように「食べる」という動作の対象です。このような動作の対象を主語にして、その対象が受ける動作の可能性を表すこともできます。また、(4)のように道具を主語にして、その道具を使ってする動作の可能性を表すこともあります。

- (3) このきのこが食べられることは図鑑にも載っている。
- (4) このボールペンがもう書けませんので、他のを使って下さい。

3. 可能表現で用いられる格

- (1) このクラスではマリアさんがまだかたかなを書けない。
(2) 山村さんがイタリア語が話せることはみんなが知っている。
(3) 僕には物理学の専門書など読めない。

これだけは

◆可能構文には次の3通りの格のパターンがあります。

- ① [人] が [もの／こと] を～可能形

(4) マリアさんがまだ漢字を書けないことをみな知っています。

- ② [人] が [もの／こと] が～可能形

(5) マリアさんがまだ漢字が書けないことをみな知っています。

- ③ [人] に(は) [もの／こと] が～可能形

(6) マリアさんに(は)まだ漢字が書けないことをみな知っています。

◆格のパターンの使い分けについて明確な決まりはありませんが、次のような傾向が見られます。

目的語と動詞の間に他の要素が入る場合「～が～を」型が普通です。

(7) ワープロ { ○を／？が }、今度の新入生から、1年生の間に打てるように、カリキュラムを組み直すことになりました。

また、「する」の可能形「できる」の目的語はガ格のほうが自然です。

(8) どいてどいて。掃除 { ？を／○が } できないじゃないの。

もう少し

◆「～に(は)～が」型には意味的な制限があります。

心情的・能力的に不可能である場合には比較的使いやすいです。

(9) 彼女をだますなんて、僕{には／は}できない。

(10) 君{には／は}そんな難しい問題は解けないよ。

逆に、(11)のように状況が許さないから不可能であるという場合や、(12)のように能力的に可能であることを言う場合には、やや使いにくくなります。

(11) 忙しいから、僕{ ?には／〇は}その仕事ができない。

(12) 僕{ ?には／〇は}300の漢字が書けます。

◆次の(13)のように出どころを表すヲ格はガ格に置き換えることはできません。

(13) 忙しくて研究室{〇を／×が}出られない。

◆目的語をガ格で表すのは、「わかる」など他に働きかける性質の低い動詞や希望を表す「～たい」の一部が持つのと共通の性質です (→§2)。

4. ～ことができる

(1) 田中さんは3か国語を{話せる／話すことができる}。

(2) 帰国して5年。イタリア語もすっかり{話せなくなった／話すことができなくなった}。

これだけは

◆可能形と「～ことができる」は、微細な違いを除けば、ほとんど相互に言い換え可能であり意味もほとんど変わりません。

もう少し

◆動詞の受身形は可能形にすることができませんが、「～ことができる」を付けることはできます。

- (3) ささいなすれ違いから意地を張ってしまって、素直に { ×愛されられなかった / ○愛されることができなかった }。

5. 見える・聞こえる（自発）

- (1) ここから富士山が見える。
(2) 隣の部屋から音楽が聞こえる。

これだけは

◆自発構文は「([人] には) [もの／こと] が～自発形」で表されます。

- (3) 目を閉じると、ぼくには懐かしい故郷の風景が見える。

◆**自発**は「自然とそうなる」という意味を持ち、目の前に現れた出来事をそのまま伝える場合などに使います。この場合可能形は使えません。

- (4) あ、富士山が { ○見える / ×見られる }。
(5) おや、虫の声が { ○聞こえる / ×聞ける }。もう秋だなあ。

テレビ番組や試合・演奏などに意識的に注意を向ける場合には、可能形を用い、自発形は使えません。

- (6) 電車に間に合えば、9時のドラマが { ×見える / ○見られる }。
(7) やっとコンサートのチケットを手に入れた。これであの歌手の歌が { ×聞こえる / ○聞ける }。
(8) このボタンで選べば、好きな曲が { ×聞こえます / ○聞けます }。

次のような場合、意識的に注意を向ける意味の他、「そのような状況になれば、そこでは自然と～」という意味にも取れますので、基本的には両方使うことができます。

(9) 東京タワーに登れば、富士山が{○見える／○見られる}。

もう少し

◆自発形を持つ動詞には他に「思う(思われる)、待つ(待たれる)、案じる(案じられる)」などがありますが、すべての動詞に自発形があるわけではありません。

◆「売れる」や「(問題がすらすら) 解ける」などを自発とする考え方もありますが、これらは「売る」や「解く」という他動詞に対応する自動詞とする考え方のほうが一般的です。

もう一步進んでみると

◆学校文法では、五段動詞(ここでいうⅠ類動詞)の可能の形(「書ける」など)は、語幹と融合しているとして、全体で可能動詞と呼び、一段動詞(Ⅱ類)は語幹に助動詞のラレルが付いた形であるとしています。一方、日本語教育ではすべて動詞の可能形と言います。

	Ⅰ類(五段)書ける	Ⅱ類(一段)食べられる	する(サ変)できる
日本語教育	動詞の可能形		
学校文法	可能動詞	語幹+助動詞	特殊形

◆可能については、文法的特徴から四つに分けて考えることができます。

① 人などの現在実現している能力を表す場合

(1) 一晩かかってレポートがやっと書けた。

この場合、継続を表すテイルを付けることもできます。

(2) あのころは順調に論文が書けていた。

② 人などの潜在的な能力を表す場合

(3) 僕にはそんな難しい問題は解けない。

8.

可能を表す表現

③ 目的語の潜在的な被動作の可能性を表す場合

動作主の存在は薄れ、ガ格で表されるものや人が一般的に動作を受ける可能性があるかどうかを表します。

(4) あのかえるは食べられます。

英語の -able/-ible で終わる形容詞を含む文はこれに該当します。

④ 目的語の潜在的な被動作の可能性を表しながら同時に話し手が属性の判断をする場合

原則的に発話時に拘束され過去は言いにくくなります。

(5) この酒は飲める。(=「おいしい」という評価)

2で挙げた用法はこのうちの②と③の用法です。

これらをまとめると次のようになります。

		構 文	テイル	過去
①	現実的	A が ^ガ (B を/が ^ガ) V	○	○
②	一時的	A に/が ^ガ (B が/を) V	×	○
③	恒常的	A に/が ^ガ B が ^ガ V	×	○
④	恒常的+評価	B が ^ガ V	×	?

* Aは動作主、Bは動作の対象。Vはこの場合、動詞の可能形を表します。

①および②で自動詞の場合Bはありません。また③でAに網掛けがしてあるのは、存在はするが表面には現れないことを表します。

このような可能については久野^{すすむ}暲(1983)第9章や渋谷勝己(1995)などが参考になります。また可能形と「～することができる」の違いについては渋谷勝己(1995)に細部に渡って違いが述べられています。

◆規範的な立場から否定的な意見の多いラ抜きことばを可能形の未来の姿として肯定的にとらえる立場もあります。可能・受身・尊敬はもともと動作主をばかすという機能から生まれ「～れる・～られる」という同じ形をしていました。Ⅰ類の「書かれる」とⅡ類の「食べられる」は受身でもあり尊敬でもありなおかつ可能でもあったのです。しかし、それではあまりに一つの形式の負担が大きいということと方言の可能形にいろいろな形があったことも

あって、まずⅠ類が「書ける」という形に変わり、それからかなり遅れて今「食べれる」という形が優勢になりつつあるのです。

Ⅰ 類動詞		Ⅱ 類動詞	
	お書きになる		お食べになる（召し上がる）
尊敬	書かれる		食べられる
受身	書かれる		食べられる
可能	書かれる		食べられる
	書ける		食べれる

国立国語研究所の1974年の調査では、東京の10代で8割近くの人が「食べれる」という形を使っています。一方で、可能の意味での「書かれる」「行かれる」の形なども世代や地方によっては残っており、これらをまったく排除して、Ⅰ類動詞では「書ける」だけが、Ⅱ類動詞では「食べられる」だけが正しい形であるとは言いにくいようです。可能形の変遷については小松英雄（1999）が簡便にまとまっています。

◆可能は、動作主の持っている能力として「～できる」**能力可能**と状況が許すから「～できる」という**状況可能**という分け方もあります。

(6) 私はまったく泳げません。（能力可能）

(7) 今プールが改修中なので泳げません。（状況可能）

これらは共通語では形式が使い分けられていませんが、関西などの方言では状況可能に「ヨー泳ガ（へ）ン」の形を使いにくく、また、イタリア語などのロマンス語では能力可能の場合は「知っている」の意味の動詞を使います。

また英語などでは可能を表す形式（英語ではcan）が「～ことがある」「～かもしれない」という可能性を表すこともあります。日本語では「～ことがある」や「～かもしれない」を動詞の可能形で表すことはできません。

◆可能に類する意味の「～える／うる」「～かねる」は中上級編で扱います。

○参考文献

久野 暁（1983）『新日本文法研究』大修館書店

小松英雄（1999）『日本語はなぜ変化するか』笠間書院

渋谷勝己（1995）「可能動詞とスルコトガデキル - 可能の表現」『日本語類義表現の文法（上）』くろしお出版

コラム

「－（ら）れる」の意味

§8の可能、§30の受身、§32の敬語の三つのセクションで「－（ら）れる」が出てきます。一つの形式が複数の意味に対応しているので、初級段階では意味の特定が難しいことがあります。ここでは「－（ら）れる」の意味の特定のしかたについて考えてみましょう。

まず、活用の種類と可能・受身・尊敬の形の対応を確認しておきます。

	I 類（ラ行以外）	I 類（ラ行）	Ⅱ 類	来る	する
可能	－eru （「－れる」以外）	－れる	－れる（ラ抜き） －られる	来れる（ラ抜き） 来られる	できる
受身				来られる	される
尊敬	－れる	－られる		いらっしゃる （来られる）	される なさる

以下では、ラ行以外の I 類動詞の可能の場合は対象としません。

A) 「－（ら）れ」が含まれている形の動詞から「－（ら）れ」を除く（＝動詞が「－てい」を含まないときはル形／タ形に変える、「－てい」を含むときはテイル形／テイタ形に変える）と格関係がもとの文と変わってしまうなら「受身」

最初の基準は「受身」とそれ以外を区別するものです。受身文では能動文と格関係が変わるので、動詞の形を上のように変える（＝能動文にする）と格関係が変わってしまいます。

- (1) 「－てい」を含まないとき
 - a. 男性が殺された。
 - b. 男性が殺した。
 - （bは格関係がもとの文 a と変わってしまうので、a は受身）
- 「－てい」を含むとき
 - c. 男性が殺されていた。
 - d. 男性が殺していた。
 - （dは格関係がもとの文 c と変わってしまうので、c は受身）

(2) a. 先生が新しい本を書かれた。

→ b. 先生が新しい本を書いた。

(aとbの格関係が変わらないから、aは受身ではない)

この基準から(1)aと(1)cは「受身」であり、(2)aは「受身以外」であることがわかります。

B) 主語が敬意の対象にならないときは「可能」、そうでなければ「尊敬」

次は「可能」と「尊敬」を区別する基準です。「尊敬」の主体は主語(→コラム「主語」)なので、主語が敬意の対象でなければ「可能」となります。

(3) a. 先生はボールを遠くに投げられた。(Ⅱ類・尊敬)

b. 息子はボールを遠くに投げられた。(Ⅱ類・可能)

この基準から(3)aは「尊敬」であり、(3)bは「可能」であることがわかります。なお、Ⅰ類の場合は「尊敬」と「可能」は次の(4)a、(4)bからわかるように形が違うので、よりはっきりわかります。

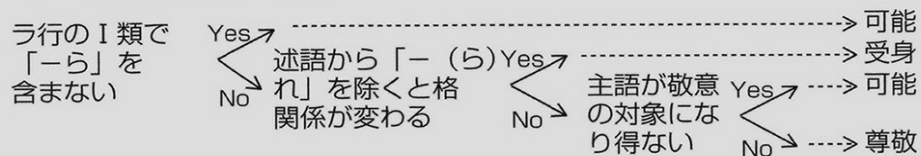
(4) a. 先生は100mを12秒で走られた。(Ⅰ類・尊敬)

b. 息子は100mを12秒で走れた。(Ⅰ類・可能)

この場合()の表現は敬語の運用上の問題から不適切になります(→§32)。

以上を図示すると次のようになります(ラ行以外のⅠ類動詞の可能の場合とラ抜きことばを除く)。

「－(ら)れる」の意味



このように「－(ら)れる」の意味の判別はなかなか困難です。可能形やラ抜きことばはこうした困難を避けるために生まれたものです(→§8)。

§9. 引用

文の中には発言や文などがその一部になっているものがあります。このように、発言や文を文の成分とすることを「引用する」と言い、引用された要素を引用節と言います。ここではそうした引用について考えます。

1. と

<引用を表す場合>

- (1) 山田さんは「彼は来ないかもしれませんね」と言った。
- (2) 明日は雨だろうと思った。
- (3) 田中くんは私にボールペンを貸してくれと頼んだ。

これだけは

◆引用で最もよく使われるのは格助詞「と」です。「と」の節にどのような形の述語が来られるかは「と」の後の動詞によって異なります。

◆まず、「言う」の場合は、普通形だけではなく、デス・マス体や「だろう」などのモダリティ表現、意向形や命令形、「ね」などの終助詞など、どのような要素でも来ることができます。

- (4) 彼はパーティーに行かないと言った。
- (5) 彼は私にいっしょに映画に行こうと言った。
- (6) 父は私にもっと勉強しろと言った。

◆一方、「思う、考える」などの思考関係の動詞では普通形の他にモダリティ表現・意向形も可能ですが、命令形は使いにくく、デス・マス体や終助詞は使えません。なお「と思う」はモダリティ表現として扱われます（→§13）。

- (7) a. ○山田さんはパーティーに来ると思う。
 b. ×山田さんはパーティーに来ますと思う。
 c. ×山田さんはパーティーに来るよと思う。

「と思う、と考える」の主語は一人称に限られるため、「私は」は(7)a～(7)cのように省略するのが普通です。従って、例えば、(7)aの「山田さん」は「思う」の主語ではなく、「と」の節の主語になることに注意してください。つまり、(7)aの構造は(8)bではなく、(8)aなのです。

- (8) a. ○私は「山田さんはパーティーに来る」と思う。
 b. ×山田さんは「 ϕ (は) パーティーに来る」と思う。

◆これに対し、「頼む、命令する」のような依頼・命令関係の動詞の場合、動詞の形は通常、依頼（「～てくれ」）か命令（命令形）に限られます。

◆英語などでは引用符（“”）の有無で直接話法（引用）と間接話法（引用）を区別できますが、日本語では必ず引用符を使わなければならないわけではないため、この基準は日本語には当てはまらず（(1)も(2)も直接話法（引用）です）、日本語における両者の区別はあまり明確ではありません。

もう少し

◆「見る、聞く」などは目的語として「を」を取る場合は知覚を表しますが、「と」を取ると認識を表します。

- (9) 彼の病気はすぐによくなると見ています。
 (10) 王さんは来週来日すると聞いています。

◆「と」は次のように発言・思考の動詞以外と共に使われることもあります。

- (11) 駅で友達にさよならと手を振った。
 (12) 田中さんはおはようと部屋に入ってきた。

これは次のように「言う」に当たる動詞が省略された表現と考えられます。

(11)' 駅で友達にさよならと（言いながら）手を振った。

(12)' 田中さんはおはようと（言いながら）部屋に入ってきた。

◆引用節の主語は主節の主語と同じであるときには省略されますが、主節の主語と異なるときには、その人を表す固有名詞または代名詞が使われます。例えば、「パーティーに行く」のは(13)aでは「山田さん」ですが、(13)bでは「山田さん」以外の人です。

(13) a. 山田さんはあ(は) パーティーに行くと言った。

b. 山田さんは{博くんは／彼は}パーティーに行くと言った。

◆引用文中の文末のモダリティ表現が実際の発言と異なる場合があります。例えば、吉田先生が田中さんに言った実際の発言が(14)であったとしても、田中さんがそれを引用して述べるときには、(15)のように丁寧さを取り除いた命令形を使うことがあります。この場合は**間接引用**になります。一方、(16)のように言うことも可能で、この場合は**直接引用**（実際の発話そのままの引用）になります。

(14) 3時に私の研究室に来てください。

(15) 先生は私に3時に研究室に来いとおっしゃった。

(16) 先生は私に3時に研究室に来てくださいとおっしゃった。

その他の場合のモダリティ表現の変換のしかたは次の通りです。

実際の発話

引用文

丁寧形	→	普通形（例：行きますと言った→行くとった）
～ましょう	→	意向形（例：行きましょうと→行こうと）
～てください	→	～てくれ

このように、引用文と実際の発話では微妙なずれがあることがあります。これは新聞などに引用される発言の場合も同様なので注意が必要です。

(17) (実際の発話) 田中：優勝できて、本当にうれしいです。

(18) (新聞の記事)

優勝した田中選手の話 優勝できて本当にうれしい。

◆上述のように、「と思う、と考える」の主語は一人称に限られ、三人称の思考内容を表すには「と思っている(ようだ)、と考えている(ようだ)」を使います(「ようだ」は必須ではありませんが、使われることが多いです)。

(19) 山田さんは彼が犯人だと{ 思っている／考えている }(ようだ)。

ただし小説などでは「と思う、と考える」の主語が三人称のときもあります。

(20) 重太郎は、佐山憲一とお時とが、どうしてこのようなところを死に場所を選んだのであろうか、と思った。(松本清張「点と線」)

<定義を表す場合>

- (1) “Good bye.” を日本語で「さよなら」と言います。
- (2) 「夫婦」という字は「ふうふ」と読みます。
- (3) 彼は「生き字引」と呼ばれている。

これだけは

◆「と」には定義を表す用法もあります。定義を表す文型は次の通りです。

A を B と { 言う／読む／呼ぶ／名付ける… }

B は A と { 呼ばれる／名付けられる… }

この場合、A と B の間には意味的に「A = B」の関係が成り立ちます。

◆B が不明なときに使われる疑問文は次の二つですが、意味は同じです。

A は／を何と { 言う／読む／呼ぶ／名付ける… } のですか。

A は／をどう { 言う／読む／呼ぶ／名付ける… } のですか。

9.

引用

2. ように

- (1) 先生は田中さんに放課後研究室に来るように言った。
(2) 私はパーティーに来てくれるように頼んだ。
(3) だれかが玄関に来たように思った。

これだけは

＜接続＞ V [辞] + ように (「言う、頼む、命じる…」)

[普] (ただし、Na な・である、N の・である) +

ように (「言う、思う、考える…」)

◆引用に関する今一つの形は「ように」です。

◆「ように」には二つの用法があります。一つは(1)や(2)のように命令や依頼を表す場合です。命令や依頼は未来に関することなので、この用法ではタ形は使われません。今一つは(3)のように思考や発言の内容を表す場合です。この用法ではタ形も使われます。

◆「言う」には上の二つの用法があります。(1)は「先生」が「田中さん」に命令をしたことを表します。一方、(4)は「田中さん」の発言内容がほぼ「家族で旅行に行く」ということであったということを表しています。

(4) 田中さんは家族で旅行に行くように言っていた。

◆「ように」が依頼・命令を表す場合は「ようにと」という表現が可能です。

(5) 先生は私たちに静かにするようにと言われた。

もう少し

◆この用法の「ように」はモダリティ表現「ようだ」の活用形です。「ようだ」には(6)のような状況からの判断を表す用法と(7)のような比喩を表す用法がありますが、共に「似ているが同じではない」といった意味を表します。

(6) 部屋の中にだれかいるようだ。

(7) このパンは石のような硬さだ。

一方、思考や発言の内容を表す「ように」はそれを「婉曲的に」引用します。これに対し、「と」はそれを「そのまま」引用します。例えば、(8)と(9)を比べると、前者では「彼」の発言が「あのレストランで食事をする」だったことを示すのに対し、後者では「彼」の発言内容は「食事をする」そのものではない、「食事をするつもりだ／かもしれない」などでもかまいません。

(8) 彼はあのレストランで食事をすると言っていた。

(9) 彼はあのレストランで食事をするように言っていた。

こうした違いが見られるのは、「ように」が「ようだ」と同じく、「似ているが同じではない」という意味を持っているためです。

これに対し、依頼・命令を表す場合は思考・発話の場合ほど顕著な差は見られませんが、(11)よりも(10)の方がやややわらかい感じがします。これも、思考や発言の場合と同じく、「ように」が、「ようだ」が持つ「似ているが同じではない」という意味を持っているためです。

(10) 私は彼に金を貸してくれるように頼んだ。

(11) 私は彼に金を貸してくれと頼んだ。

もう一步進んでみると

◆日本語における引用は英語などほど明確に形式の上で区別されていません。そのため、引用や話法に関する研究はあまり盛んではありませんが、藤田保幸の一連の研究（藤田保幸（1988）など）は重要です。また、「と」と「ように」の違いについては前田直子（1995）を参照してください。

○参考文献

藤田保幸（1988）「引用論の視界」『日本語学』7-9

前田直子（1995）「トとヨウニー思考・発話の内容を導く表現－」宮島達夫・仁田義雄編『日本語類義表現の文法（下）』くろしお出版

§10. 自動詞と他動詞

動詞はそれが取る補語の種類によって、自動詞と他動詞に大別されます。

自動詞は、「泣く、生まれる」のように、ヲ格の目的語を取らず、直接受身（→§30）にならないものです。一方、**他動詞**は、「食べる、聞く」のように、ヲ格の目的語を取り、直接受身にもなります。

自動詞は、「走る、泳ぐ」のような**意志的自動詞**と「割れる、落ちる」のような**非意志的自動詞**に分かれますが、後者には形態的・意味的に類似した他動詞を持つものがあります。これを「**自他の対応がある**」と言います。この場合、自動詞はある出来事が自然に起こったように表す一方、他動詞はそれが人間などの意志的な動作によって引き起こされたように表現します。

自他の対応を持つ動詞はあまり多くありませんが、対応のしかたが複雑であるため、学習者にとって習得が難しい項目の一つとなっています。

1. 自他の対応

- | |
|-----------------------|
| (1) ドアが閉まった。 (自動詞) |
| (2) 山田さんがドアを閉めた。(他動詞) |

これだけは

◆自他の対応があるとき、典型例での両者の特徴は次のようにまとめられます。

<文型> 自動詞 XがVi
 他動詞 YがXをVt

	Y	X
名詞の特徴	人間（などの意志を持つもの）	もの
意味的特徴	影響を与えるもの	影響を受けるもの

◆自動詞と他動詞の違いは、自動詞の場合は、自然力の影響などで出来事が起こったのであって、そこには人間などの意志（意図）は含まれていない、ととらえられているのに対し、他動詞の場合は、人間などが意志（意図）的にその出来事を引き起こした、ととらえられているというところにあります。

一方、そうした違いにも関わらず、X（(1)(2)の「ドア」）が両者に共通しているのは、このXがどちらの場合でも影響の受け手としてとらえられているためです。ただし、Xは自動詞では「が」で表されるのに対し、他動詞では「を」で表されることには注意する必要があります。

◆自動詞と他動詞の形態上の対応は複雑ですが、次の点は一般的に言えます。

- ①－a r uで終わるものは全て自動詞であり、－a r uを－e r uに変え
ると他動詞になる。
- ②－r e r uで終わるものは全て自動詞である。
- ③－s uで終わるものは全て他動詞である。

①～③に注意して、主な自動詞と他動詞のペアを分類すると次のようになります。なお、*が付いているのは自動詞も他動詞も日本語能力試験2級以上のレベルの語彙であることを、それが付いていないものは少なくともどちらか一方が同試験3級以下のレベルの語彙であることを示します。

A. －a r u：X型（以下すべて、左が自動詞、右が他動詞とする）

A1. －a r u：－e r u型

上がる	上げる	高まる	高める
*暖まる	暖める	*たまる	ためる
*当たる	当てる	捕まる	捕まえる
集まる	集める	伝わる	伝える

10.

自動詞と他動詞

A1. -aru:-eru型

*当てはまる	当てはめる
*改まる	改める
*いたまる	いためる
*薄まる	薄める
*埋まる	埋める
植わる	植える
終わる	終える
変わる	変える
かかる	かける
*重なる	重ねる
*固まる	固める
決まる	決める
下がる	下げる
*定まる	定める
*仕上がる	仕上げる
*静まる	静める
閉まる	閉める
締まる	締める
*染まる	染める
*もうかる	もうける
*弱まる	弱める
*助かる	助ける

*つながる	つなげる／つなぐ
*詰まる	詰める
*遠ざかる	遠ざける＋
止まる	止める
始まる	始める
*はまる	はめる
*早まる	早める
*引っかかる	引っかける
*広がる	広げる
*広まる	広める
*深まる	深める
*ぶつかる	ぶつける
*ぶらさがる	ぶらさげる
曲がる	曲げる
*混ざる／混じる	混ぜる
*まとまる	まとめる
*丸まる	丸める
見つかる	見つける

A2. -aru:-u型

*刺さる	刺す
*はさまる	はさむ
*ふさがる	ふさぐ

☆このタイプは最も規則性が高く、自動詞を覚えていれば、他動詞の形もわかります。

なお、「に」を取るものの場合、次のような対応になります。

(3) a. コートがくぎに引っかかった。

b. 山田さんがくぎにコートを引っかけた。

＋を付けたものは「～から」を取るなので、次のようになります。

(4) a. 人々がその建物から遠ざかった。

b. 警察が人々をその建物から遠ざけた。

なお、「終わる」は他動詞としても使われます。

(5) a. 授業が6時に終わった。

b. 田中先生は授業を6時に終わった。(「終えた」も可能だが、書きことば的)

B. -reru: X型

B1. -reru: -su型

*隠れる	隠す
*崩れる	崩す
*こぼれる	こぼす
壊れる	壊す
倒れる	倒す
*つぶれる	つぶす
*流れる	流す
*外れる	外す
*乱れる	乱す
汚れる	汚す

B2. -reru: -ru型

売れる	売る
折れる	折る
切れる	切る
釣れる	釣る
撮れる	撮る
*ねじれる	ねじる
*破れる	破る
割れる	割る

B3. -areru: -u型

生まれる	生む
------	----

☆-eruで終わるものの中でも-reruで終わるものはすべて自動詞です。

例外 入る-入れる

(6) a. 太郎が部屋に入った。(自動詞)

b. 私は太郎を部屋に入れた。(他動詞)

C. X: -su型

C1. -ru: -su型

写る	写す	出る	出す+
*裏返る	裏返す	直る	直す
返る	返す	治る	治す
帰る	帰す	残る	残す
*転がる	転がす	*ひっくり返る	ひっくり返す
*散らかる	散らかす	回る	回す
*覆る	覆す	戻る	戻す

10.

自動詞と他動詞

☆「出る」は「～から」の他に「～を」を取りますが自動詞です。

なお、「出る」が「～を」を取るとき、対応する「出す」は「～から」を取ります。これは一つの文の中に二つの「を」が使われるのを避けるためです。

(7) a. その子が部屋を出た。

b. 田中さんがその子を部屋{○から／×を}出した。

C2-1. -eru : -asu型

*荒れる	荒らす
遅れる	遅らす
*枯れる	枯らす
*焦げる	焦がす
*冷める	冷ます
*溶ける	溶かす／溶く
*慣れる	慣らす
逃げる	逃がす
ぬれる	ぬらす
*生える	生やす
*はげる	はがす
冷える	冷やす
増える	増やす
*燃える	燃やす
*漏れる	漏らす
揺れる	揺らす
消える	消す (例外)

C2-2. -u (≠-ru) : -asu型

動く	動かす
乾く	乾かす
飛ぶ	飛ばす
泣く	泣かす
*ふくらむ	ふくらます
沸く	沸かす
*減る	減らす (例外)
*及ぶ	及ぼす (例外)

C3. -iru : -osu型

起きる	起こす
落ちる	落とす
降りる	降ろす+
下りる	下ろす+
*滅びる	滅ぼす

☆「降りる」「下りる」の場合にも「出る」の場合と同様の注意が必要です。

D. その他

-u (≠-ru) : -eru型

開く	開ける
空く	空ける
*浮かぶ	浮かべる

-eru : -u (≠-ru)型

聞こえる	聞く
*欠ける	欠く
*碎ける	砕く

-u (≠-ru) : -eru 型

片づく	片づける
*かなう	かなえる
*傷つく	傷つける
*くつつく	くつつける
*沈む	沈める
*進む	進める
育つ	育てる
*そろう	そろえる
立つ	立てる
建つ	建てる
*近づく	近づける
*縮む	縮める
付く	付ける
続く	続ける
届く	届ける
*整う	整える
*向く	向ける
*結びつく	結びつける
*緩む	緩める

-eru : -u (≠-ru) 型

*裂ける	裂く
*解ける	解く
*抜ける	抜く
*ほどける	ほどく
*むける	むく
焼ける	焼く
*煮える	煮る
見える	見る
それ以外	
寝る	寝かせる
乗る	乗せる
*載る	載せる
*ふるえる	ふるわせる

☆「煮える」「見える」のように -ieru で終わる場合は -ru になります。

☆以上を見てわかるように、-eru で終わるもの (-reru を除く) と、-ru 以外の -u で終わるものは自動詞の場合も他動詞の場合もあります。なお、-eru (-reru を含む) で終わるものはすべてⅡ類動詞です。

◆なお、サ変動詞の中には自動詞と他動詞が同形であるものがあります。

- (8) a. 駅前にスーパーが開店した。
 b. その会社が駅前にスーパーを開店した。

他動詞がない場合は使役形で代用します。

- (9) a. 水温が上昇した。 cf. 水温が上がった。
b. 山田さんが水温を上昇させた。 cf. 山田さんが水温を上げた。

もう少し

◆日本語では自他の対応がある場合、両者は通常別語ですが、英語では同形式であるのが普通です（ただし、lie – lay など一部例外もあります）。

- (10) a. The vase broke.
b. John broke the vase.

◆自動詞と他動詞の間には以上で見たような意味的な関係がありますが、このような関係が最も典型的に見られるのは、変化動詞の場合です。なお、変化動詞か否かは「～ている」の意味を考える際や、「～ている」と「～てある」の区別にも重要です（→§6）。

◆日本語では、動作主の存在を含意しない表現のほうが、それを含意する表現より好まれる傾向があり（→§7）、前者のほうが後者よりも丁寧な表現と感じられる傾向にあります。そのため、次の(11)のようなアナウンスなどでは動作主の存在を含意しない自動詞のほうがよく使われます。

- (11) ドアが閉まります。ご注意ください。 cf. ドアを閉めます。

2. 自動詞と受身文

- | |
|---|
| (1) 窓ガラスが割れた。（自動詞）
(2) 窓ガラスが割られた。（他動詞の受身文） |
|---|

これだけは

◆自動詞文と類似の表現に（他動詞の）受身文があります。両者の共通点は、

影響の受け手（通常は「物」）を中心に出来事を描くことにあります。

◆両者の違いは、受身文には明示されていなくても動作主の存在は含意されているため、その出来事を引き起こした者がいるというニュアンスがあるのに対し、自動詞文にはそうしたニュアンスが全くないということです。なお、受身文の動作主は(3)のように文中に挿入することも可能です。

(3) 窓ガラスが何者かによって割られた。

3. 他動詞と使役文

- | | |
|-----------------------|-------|
| (1) 田中さんは卵を割った。 | (他動詞) |
| cf. 卵が割れた。 | (自動詞) |
| (2) 田中さんは冷蔵庫で野菜を腐らせた。 | (使役文) |
| cf. 野菜が腐った。 | (自動詞) |

これだけは

◆前述のように、自他の対応が存在する場合、典型例では両者の間に次のような意味上の関係があります。

XがVi
Yが^s XをVt
Yが^s [XがVi] ことを引き起こす

例 ガラスが割れる
太郎が^s ガラスを割る
太郎が^s [ガラスが割れる] ことを引き起こす

つまり、他動詞は、動作をする人（Y。動作主）が自動詞で表される出来事を引き起こすという関係を表しています。この関係は使役と似ています。そのため、上の(2)の「腐る」や次の(3)の「光る」のような対応する他動詞を持たない非意志的自動詞では使役形が他動詞の代わりに使われます。

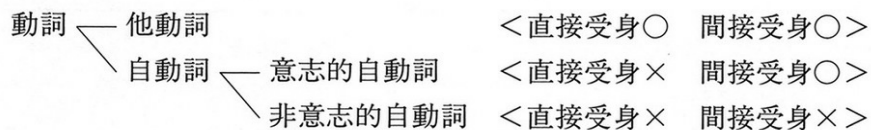
(3) 暗闇で猫が目を光らせた。 cf. 暗闇で猫の目が光った。

なお、(4)の「割れる」のような自他の対応を持つ自動詞の場合使役形（「割れさせる」）は使われません。これは、その意味を表す他動詞（「割る」）が存在するためです。

(4) 卵が割れた。 cf. 私は落として卵を{○割った／×割れさせた}。

もう一步進んでみると

◆最初に述べたように、日本語の動詞は次のように分類できます。



これと同様の分類の必要性を受身との関連で指摘していたのが三上章です（三上章（1953））。三上の分類は次のようなものです。



三上はまず、動詞を受身になる**能動詞**と、受身にならない**所動詞**に分け、前者をさらに、直接受身（三上の用語では「まものの受身」）になる「他動詞」と、間接受身（同じく「はた迷惑の受身」）にしかない「自動詞」に分けたのです。従って、三上の言う「自動詞」は「意志的自動詞」に、「所動詞」は「非意志的自動詞」に対応することになります（一般に言う自動詞と、三上の言う自動詞では指す内容が異なるので注意が必要です）。この三上の主張は長い間あまり重要視されていませんでしたが、最近生成文法で盛んに議論されている「非対格性の仮説」という考え方を先取りしたものとして近年再評価されています。なお、非対格性の仮説及びその日本語における応用については影山太郎（1993）などを参照してください。

◆受身文や使役文については§30を参照してください。なお、2や3で取り上げた、自動詞・他動詞と受身文・使役文との関連については、野田尚史(1991)が参考になります。

まとめ

自他の対応がある場合

自動詞：出来事が自然の力などによって引き起こされたという形で表現する。

他動詞：人間などが意志的に出来事を引き起こしたという形で表現する。

自動詞と他動詞の受身文

自動詞：動作主の存在を全く含意しない。動作主の挿入不可。

他動詞の受身文：動作主の存在は含意される。動作主の挿入が可能な場合あり。

他動詞と使役文

非意志的自動詞が対応する他動詞を欠くとき、使役形が他動詞の代わりに使われる。

○参考文献

影山太郎(1993)『文法と語形成』ひつじ書房

須賀一好・早津恵美子編(1995)『日本語研究資料集 動詞の自他』ひつじ書房

野田尚史(1991)「文法的なヴォイスと語彙的なヴォイスの関係」仁田義雄編『日本語のヴォイスと他動性』くろしお出版

三上 章(1953)『現代語法序説－シンタクスの試み－』くろしお出版から復刊(1972)

§11. 授受の表現 ーあげる・くれる・もらうー

同じことがらを違った**視点**から表現することはどの言語でもよく見られます。例えば日本語の「売る・買う」「貸す・借りる」「教える・教わる」などは（ほぼ）同じことがらを与え手側と受け手側の視点で表現したものです。

授受を表す「あげる・くれる・もらう」も違った視点から同じことがらを表現するという特徴を持った形式群です。ただ「売る・買う」などとは異なり、「～てあげる・～てくれる・～てもらう」という恩惠的行為の授受を表す補助動詞としての用法を持つためにまとめて扱われます。

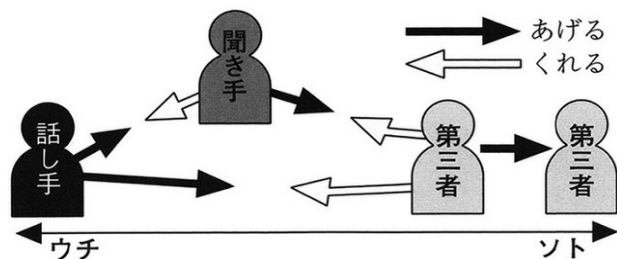
このような補助動詞を持った言語は少数派ですし、日本語のように「あげる」と「くれる」を区別する言語は極めてまれです。そのため誤用や非用もよく見られますので、注意が必要です。

1. 動詞としての使い方

- (1) (私は) 田中くんにはバレンタインデーにチョコをあげた。
- (2) 田中くんはおかえしにキャンディーをくれた。
- (3) ひろ子さんは田中くんにはキャンディーをもらいました。

これだけは

◆「あげる」と「くれる」は次のように図示される方向性を持っています。



与え手が主語になって、話し手から聞き手や第三者へ、あるいは聞き手から第三者へというように、話し手から見てウチからソト（図中の色の濃い方から薄い方）への「物」や所有権などの移動を表すときには「あげる」を使います。逆にソトからウチへの移動には「くれる」を使います。

(4) 私は田中くんチョコを{○あげた／×くれた}。

(5) 田中くんは私にチョコを{×あげた／○くれた}。

「私の息子」のように話し手にとって身近な者は話し手と聞き手の中間として、「あなたの息子」のように聞き手にとって身近な者は聞き手と第三者との中間として扱われます。

(6) (私は) あなた／息子さん／田中さんに本をあげましょう。

(7) あなた／息子さん／田中さんがくれた本は、とてもおもしろかったわ。

第三者間の授受を客観的に描写する場合には(8)のように「あげる」しか使えません。(9)のように「くれる」を使った場合には二格の「マリア」は話し手にとって身近な者という解釈になってしまいます。

(8) ジョンさんがマリアさんに花をあげたそうだよ。

(9) ジョンさんがマリアに花をくれたそうだよ。

◆「もらう」は「くれる・あげる」と同じ「物」や所有権の移動を受け手の側から（つまり受け手が主語になって）表現したものです。

(10) 田中さんは私にキャンディーをくれました。

(11) 私は田中さんにキャンディーをもらいました。

◆第三者間での授受で受け手側からの表現には「もらう」を使います。この場合受け手が身内でなければならないという制限はありません。

(12) マリアさんはジョンさんから花をもらったらしい。

もう少し

◆「あげる」と「くれる」は、上で見たように人称的な制限がありますので特定のモダリティ表現を取りません。

	意向形	てしまう	はずだ／らしい
あげる	○(あげよう)	○(あげてしまった)	△(あげるはずだ)
くれる	×(くれよう)	×(くれてしまった)	○(くれるはずだ)

意向形と「てしまう」は、話し手の意志や判断を表す形式ですので、話し手が主語にならない「くれる」は「くれよう」や「くれてしまった」の形を持ちません。ただし、「くれよう」は「くれるだろう」の古い言い方としてであれば使えます。

「はずだ」や「らしい」のような自分以外のものに対して行う判断を表す形式(→§13)は「あげる」には付きません。ただし「私の息子が」など主語が話し手以外であれば可能です。

「もらう」は「あげる」と基本的に同じ制限を持ちます。

◆「あげる」と「くれる」は基本的に受け取った人が「よいものである」と感じると話し手が考えるものに使います。ですから次のような場合には「あげる」や「くれる」は使えず、代わりに「渡す」や「出す」などの動詞を使います。

(13) ×先生に給食費をあげました。 →先生に給食費を渡しました。

(14) ?先生がたくさん宿題をくださいました。

(本当にありがたく感じている場合や皮肉としてであれば使えます。)

→先生がたくさん宿題を出しました。／宿題がたくさん出ました。

◆「与える」は、恩恵を表さないものの授与にも使う他、恩恵的な物事の授与の場合には「与え手が判断し権限を持って」という意味が加わります。

- (15) 契約違反をして取引相手に重大な損害を与えた。
 (16) 職員会議で優秀な学生に賞を与えることに決めた。

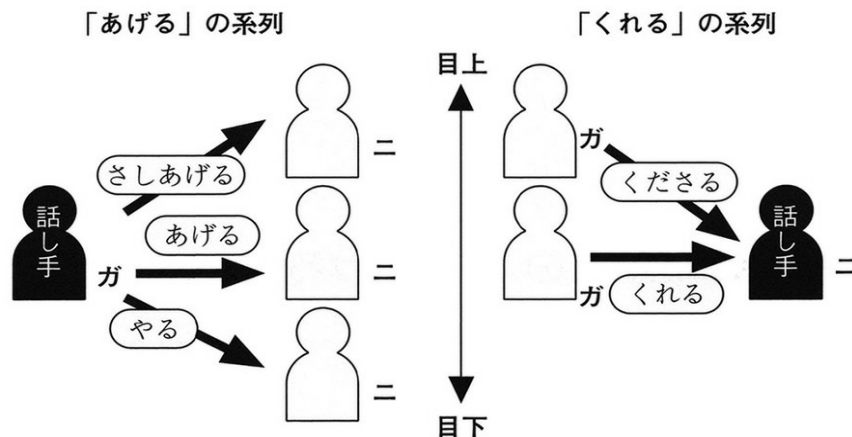
2. 待遇形式

- (1) 林先生に海外旅行のお土産をさしあげました。
 (2) 代わりに先生はご自分の書かれた本をくださいました。
 (3) 先生にいただいた本をバスの中に置き忘れてしまいました。

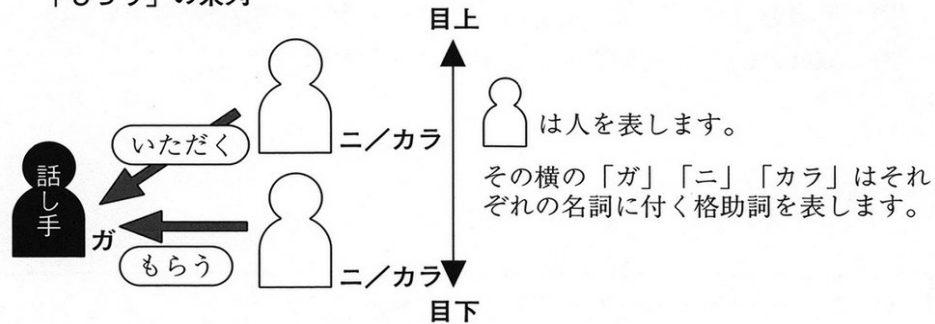
これだけは

◆「あげる・くれる・もらう」は、いずれも尊敬・謙譲の形式として特殊な形を持ちます。規則的な形である「×おあげする・×おくれになる・×おもらいする」などの形はありません。

- (4) 先生にお土産を{○さしあげました／×おあげしました}。
 (5) 先生がご著書を{○くださいました／×おくれになりました}。
 (6) 先生にご著書を{○いただきました／×おもらいしました}。



「もらう」の系列



◆「私」と身内との授受を表す場合、普通、尊敬形や謙譲形は使われません。授受表現の場合も同じです。

- (7) 父の誕生日にプレゼントを{×さしあげました／○あげました}。
- (8) 父がこの本を{×くださいました／○くれました}。
- (9) 父からこの本を{×いただきました／○もらいました}。

◆「電話／手紙をさしあげる」は「やる」「あげる」で置き換えられません。

もう少し

◆以前は「花に水をあげる」や「犬にえさをあげる」はおかしいとされていましたが、「あげる」が「やる」よりも丁寧なことばであるという意識から許容されるようになってきています。

◆「ください」は「くださる」の命令形です。現代語では規則的に作られる「くだされ」を使わず不規則な活用の「ください」を用います。このような動詞は他に「なさる」や「おっしゃる」があります（→動詞・形容詞活用表）。

3. 補助動詞としての「～てあげる・～てくれる」

- (1) 田中さんに本を貸してあげました。
- (2) 林くんが、けがをした僕の代わりに走ってくれました。

これだけは

◆「～てあげる・～てくれる」は、行為の受け手や「～のために」や「～の代わりに」などで表される人物にとって、主語が行う行為が有益であると話し手が考える場合に使います。

◆受益者（＝恩恵を受ける人）の格はすべて二格や「～のために」で表せるわけではありません。次のようなルールがあります。

- ① もともと動詞のヲ格・二格・ト格などで表されている場合、その格で表す（二格の例文については(1)を見て下さい）

- (3) よくできた子供をほめてやりました。
 (4) 田中さんがうちの子と遊んでくれました。

- ② 「何か作る」という意味があれば生産物の受け手を二格で表す

- (5) ひろしくんは恋人にセーターを編んでやった。
 (6) 先生はお別れに私たちに歌を歌ってくださった。

この場合「～のために」でも表すことができます。

- (5)' ひろしくんは恋人のためにセーターを編んでやった。

- ③ 目的語が受益者の所有物の場合には受益者は「～の」で表す

- (7) 弟の宿題を見てやった。
 (8) 田中さんが壊れた私の自転車を直してくれた。

- ④ ①～③以外の場合「～のために」または「～に代わって」で表す

- (9) カルメンさんは私のためにタンゴを踊ってくれた。
 (10) 酒の飲めない野原さんに代わってワインを飲んでやった。

ただし、文脈からわかる場合には省略されるのが普通です。

- (11) 弟は宿題がわからなくて困っていたようだったので、僕は（弟の）宿題を見てやった。

◆目上の人に対して直接言うときには「～てさしあげる」は使いません。謙讓の形を使うか依頼の形式を使います（→コラム「丁寧話す」とは？」）。

(12) ?先生、この本貸してさしあげましょうか。

→先生、この本お貸ししましょうか。

(13) ×来週のピクニックに先生も誘ってさしあげましょうか。

→来週のピクニックに先生も来てくださいませんか。

ただし、直接相手に向かって言う場合でなければ使うことができます。

(14) 先生が本を持っていらっしやらなかったから貸してさしあげた。

4. 補助動詞としての「～てもらう」

(1) 小林さんに本を貸してもらいました。

(2) 祖母に教えてもらった歌を歌います。

これだけは

◆「～てもらう」は行為の受け手の側を主語にして恩恵を表す表現です。実際に動作を行う人は基本的に二格で表します。主語の恩恵を受ける人は、普通話し手ですので、省略されるのが普通です。

◆(1)や(2)は同じく受け手の側からの表現の「借りる」や「教わる」を使うこともできます。また(2)は「教えられた」のように受身を使っても出来事としては同じです。ただし、いずれの場合も恩恵という意味は薄れます。

(3) 小林さんに本を借りました。

(4) 祖母に教わった歌を歌います。

(5) 祖母に教えられた歌を歌います。

◆「～てもらう」は「～させると同時に主語がその恩恵をこうむる」といったように、主語に置かれた人物が意志的に事態を引き起こそうとする場合に

も用いられます。

(6) わからないことは田中さんに教えてもらおう。

(7) 君には辞めてもらうよ。

「～てくれる」は「～させる」という意味があるときは使えません。

(8) 今度の弁論大会は{○マルコさんに出てもらうことにします／
×マルコさんが出てくれることにします}。

◆「～てもらう」は動作主を主語にしないため、「～てくれる」と比べてやや丁寧な印象を与えます。

(9) a. 田中先生が論文の資料を貸してくださった。

b. 田中先生に論文の資料を貸していただいた。

(10) a. 先生、本を貸してくださいませんか。

b. 先生、本を貸していただけませんか。

もう少し

◆「～てもらう」には「～させると同時に主語がその恩恵をこうむる」という意味を持つ場合が多いので、基本的に二格の名詞句は意志を持って動作をすることができるものに限られます。

(11) ×雨に降ってきてもらった。 cf. 雨が降ってきてくれた。

(12) ×時に忘れさせてもらうよ。 cf. 時が忘れさせてくれるよ。

ただし、コンピュータや組織や人が運転する車など、擬人化されやすいものは二格に来ることができます。

(13) 複雑な計算は、このコンピュータにやってもらおう。

(14) 道がわからないからタクシーに連れていってもらおう。

◆動作主は二格の他にカラ格でも表される場合があります。

(15) 実家の母{に／から}みかんを送ってもらいました。

(16) その事件のことは田中さん{に／から}教えてもらって知った。

カラ格が使えるのは「送る、届ける」や「教える、ほめる、話しかける」などの（抽象的な知識やことばを含めて）何らかの対象の移動を表す動詞が「～てもらう」と共に用いられた場合です（受身文で「から」が使える「愛する」や「招待する」なども「～てもらう」文では「から」が使いにくくなります）。

「実家」など基本的に場所を表す名詞はカラ格のほうが自然です。

(17) 実家{？に／○から}みかんを送ってもらいました。

ニ格のほうがカラ格よりも「こちらから依頼した」という感じがすると言われることもありますが、これは傾向にとどまり絶対的な区別ではありません。◆感謝の表現が後に続く場合「～てもらう」は使えず「～てくれる」が用いられます。

(18) 教えて{×もらって／○くれて}ありがとう。

これは主語の人物が「させた」からそのような好ましい事態が起こったわけではないことを表す（またはそのように配慮する）ためです。ただし、「～ていただいて」とすると、待遇的な配慮によって「させた」という意味がなくなるために、自然な表現になります。

もう一步進んでみると

◆恩恵的な意味を持つ「～てもらう」がそのような意味を持たない受身文と意味的に補い合う関係にあることは既を示したとおりですが、ではなぜ「～てあげる」や「～てくれる」を使わなければならないのでしょうか。もちろん恩恵という意味を表示するためにはこの形式を使いますがそれだけではありません。

一つは方向性を明示するためです。日本語では抽象的なものも含めて「移動」を表す動詞の文では話し手が主語になる傾向が強く、話し手以外を主語にすると不自然になる場合があります。この場合、話し手を主語以外の位置

においたまま「～てくれる」を用いると自然な文になります。

- (1) 母が私にみかんを{×送りました／○送ってくれました}。
- (2) 道に迷ったとき、親切な人が私に{×話しかけました／○話しかけてくれました}。

このような話し手への求心的方向性を表す場合、「送ってきました、話しかけてきました」のように「～てくる」を用いて表すこともできます。なお、話し手側の人物を主語に取る「～てあげる」はこのような方向性を明示する機能を持ちません。

もう一つは談話中で主語や目的語を頻繁に省略する代償として行為の方向性を明示するためです。

- (3) 暑そうにしていたから窓を開けてやったのに何も言わなかった。
- (4) 何も話してくれないから困っちゃったよ。

(3)は「～てやる」があるために「私がその暑そうにしている人のために窓を開けた」ことが明確に示されています。(4)も同様に、単に「何も話さないから」とすると、「だれがだれに話した」のかがわからなくなります。

このような「授受表現」や「やりもらい」と呼ばれる形式の代表的な研究としては大江三郎(1975)や久野^{すすむ} 暉(1978)が挙げられます。

◆恩恵を表す補助動詞表現は韓国語やタイ語などにも見られますが、英語などの西洋語には見られない表現です。韓国語の授受表現は「(～て)やる」と「(～て)くれる」の区別がなく、また補助動詞としての「～てもらう」の用法がないなど、細部で日本語のそれとは違っています。

◆「～てくれる・～てもらう」には依頼や願望を表す表現もあります(→§14, §15)。「～てあげる・～てくれる・～てもらう」の恩恵を表さない用法については中上級編で扱います。

○参考文献

大江三郎(1975)『日英語の比較研究』南雲堂
久野 暉(1978)『談話の文法』大修館書店

§12. ～ていく・～てくる

移動を表す表現にはいくつかありますが、「行く」と「来る」は補助動詞としての用法を持つ点で文法的に重要です。補助動詞としての「～ていく」と「～てくる」（この場合は普通ひらがなで書きます）には、話し手など文中の特定の人物の視点を基準にした空間的な移動の方向性を示す用法と、特定の時点からの出来事の時間的推移や展開のとらえ方を表す用法があります。

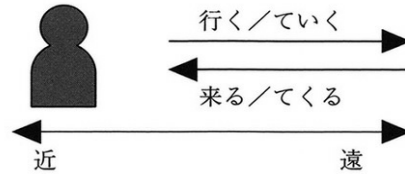
日本語は、出来事の空間的方向性や時間的なとらえ方を話し手の視点の位置との関係において表す傾向の強い言語ですが、「～ていく・～てくる」はこうした関係を表す上で重要な役割を果たしています。

1. 「(～て)いく・(～て)くる」の空間的用法 1： 主体の移動

- (1) その飛行機は、西から飛んできて、東へ消えていった。
- (2) 演奏会にこの間買った服を着ていった。
- (3) (電話) A：途中でお酒を買ってきて。
B：じゃあ、買っていきます。

これだけは

◆「(～て)いく」は話し手の発話時の位置から離れていく**遠心的方向性**を持つ動作・出来事に、「(～て)くる」は話し手の発話時の位置の方へ向かってくる**求心的方向性**を持つ動作・出来事に対して基本的に使います。



話し手が聞き手の方へ移動することを伝える場合、英語ではcomeを使いますが、日本語では「(～て)いく」を使います。

- (4) 明日10時にそちらへ{○行く／×来る}とき、ワインを{○買っていきます／×買ってきます}。

◆「～ていく・～てくる」は前に来る動詞の性質によっていくつかの用法に分けられます。

- ① 「歩く、走る、泳ぐ、飛ぶ」などに「～ていく・～てくる」が付いた「歩いていく」などの場合
「歩く」などは移動の様式を表します。
- (5) 向こうから田中さんが歩いてきます。
- (6) 道が混んでいるから、バスを降りて駅まで走っていった。

「歩く」などは単独でも移動を表しますので、第三者の移動や話し手みずからの過去の移動を特定の場面から離れて客観的に表現する場合には、「～ていく・～てくる」なしで用いるのが普通です。

- (7) 昨日は時間があつたので駅から家まで{○歩いた／?歩いてきた}。

移動の場所は「国道を走ってきた」のようにヲ格で表します。運動の場所を表すテ格名詞句を伴った「川で泳いできた」は③の用法です。

- ② 「着る、(靴を)はく、(眼鏡を)かける」など、特に身に着けることを表す動詞の場合
「～ていく・～てくる」はこれらの動作の結果の状態を伴って移動することを表します。「持っていく・持ってくる」「連れていく・連れてくる」もこの用法であると考えられます。

(8) 今日のパーティーにはどの服を着ていこうかしら。

(9) 持ってきたものは自分で持ち帰りましょう。

③ 「食べる、買う」など一般的な動作を表す動詞の場合

「～ていく・～てくる」は「食べる、買う」などの動作の後に生じた移動を表します。

(10) A：おかえりなさい。食事は？

B：駅前で食べてきた。

(11) 昨日はパーティーに行く途中でワインを買っていった。

(10)のように「食事」に着目している場合や(11)のように「買う」という動作の後の移動に特に着目されていない場合には、「食べた」や「買った」だけでも表すことができますが、次の(12)のように移動に着目したり(13)のように「買う」という動作の結果が発話の場所まで残っている場合には、「～ていく・～てくる」を用いたほうが自然です。

(12) (電話で) A：遊びに来てくれるのはうれしいけど、今、家には何も食べるものがないから何か{○食べてきて／? 食べて}ね。

B：じゃあ、軽く{○食べていく／? 食べる}よ。

(13) A：お帰りなさい。

B：お土産{○買ってきた／? 買った}ぞ。

特に、ある動作が発話の場所以外で行われる（または行われた）ことを表す場合には「～てくる」を伴った表現のほうが自然です。

(14) A：出かけるの？

B：うん。そこのコンビニまで。

A：じゃあ、ジュースを{○買ってきて／? 買って}。

(15) A：どこ行ってきたの？

B：コンビニでジュースを{○買ってきた／? 買った}。

あいさつ表現の「行ってきます」もこの延長でとらえられます。

(16) (あいさつ) 行ってきます。

もう少し

◆初級では問題になりませんが他に次のような用法があります。

- ④ 「(においが) する、聞こえる」に「～てくる」が後続すると、知覚情報の到達を表します。

(17) 隣の家から変なにおいがしてきました。

(18) お寺から鐘の音が聞こえてきます。

これらは「においがします」や「聞こえます」と同じ意味を表します。「～ていく」にはこの用法はありません。また知覚でも視覚的な「見えてくる」は時間的な用法になります。

他に「やってくる」や「ついていく・ついてくる」のように全体で意味を持ち、これ以上分けることができない動詞もあります。

2. 「～てくる」の空間的用法2：対象の移動

- (1) 実家からお米を(私に) {○送ってきた／×送った}。
 (2) 大学のときの友人が手紙を(私に) {○書いてきた／×書いた}。
 (3) 田中さんが私に電話を {○かけてきた／×かけた}。

これだけは

◆「品物を送る、手紙を書く、電話をかける、届ける」など対象の移動を表したりそれに準ずる移動の意味を持つ動詞は、話し手の方向への移動をそのままでは表すことができません。この場合必ず「～てくる」を使います。

もう少し

◆「教える、預ける、貸す、売る」も「送る」などと同じように、基本的に「[人] が [人] に [もの] を～」というパターンを取る動詞ですが、これらの動詞に「～てくる」は付かず、付いても「必要ないのに～した」のような

強意的な意味を帯びるのが普通です。これはこれら「教える」などの動詞には受け手側を主語にした「教わる、預かる、借りる、買う」という表現があるためです。

3. 「～ていく・～てくる」の時間的用法

- (1) 日本で学ぶ留学生の数が増えてきた。これからも増えていくだろう。

(2) 国に帰ってからも日本語の勉強を続けていくつもりです。

これだけは

◆空間的な位置関係を時間軸上に移して、基準時以前から基準時への推移・変化を表す場合には「～てくる」が、また基準時から基準時以後への推移・変化を表す場合には「～ていく」が用いられます。



基準時が現在・過去・未来のいずれであるかによって、「～てくる・～ていく」のテンス (→§5) が変わってきます。

基準時	現在	
未来	てくる(だろう)	ていく(だろう)
現在	てきた	ていく(だろう)
過去	てきていた	ていった

◆「増える、変わる、(雪が) 解ける」など変化動詞と共に「～てくる・～ていく」を用いると、段階的な意味が出てきます。

- (3) 太陽が出たので、だんだん雪が{○解けてきた／?解けた}。
 (4) 積もった雪も昨日1日ですっかり{?解けてきた／○解けた}。

もう少し

◆このような時間的な用法はアスペクト(→§6)として扱われるのが普通ですが、空間的な位置関係の応用と考えられます。

もう一步進んでみると

◆対象の移動を表す動詞には、「～てくる」の代わりに「～てよこす」という言い方が可能な動詞もあります。

◆日本語は英語などと比較して話し手の視点から表現する傾向が強く現れる言語です。話し手に視点を置く表現には二つの方法があります。一つは話し手を主語にする方法で受身文や「～てもらう」文を用います(→§11, §30)。もう一つは文の中の話し手を主語にしないで話し手への方向性を表す形式を用いる方法で「～てくる・～てくれる」を用います。

◆このような視点に関する代表的な研究としては大江三郎(1975)と久野^{すすむ} 障(1978)があります。

○参考文献

大江三郎(1975)『日英語の比較研究』南雲堂
 久野 障(1978)『談話の文法』大修館書店

§13. 話し手の気持ちを表す表現(1) －判断－

ここでは次のような表現を扱います。

- | | |
|-----------------|----------------|
| 1. 断定を表す表現 | |
| 2. 断定を避ける表現 | だろう、と思う |
| 3. 可能性を表す表現 | かもしれない |
| 4. 確信を表す表現 | はずだ、にちがいない |
| 5. 外観・兆候を表す表現 | そうだ① |
| 6. 状況からの判断を表す表現 | ようだ、みたいだ、(らしい) |
| 7. 伝聞を表す表現 | そうだ②、(らしい) |

上の表現は、あることからの正しさや起こる可能性に関する話し手の考えを述べたり、他から得た情報を表したりするのに使われます。このうち2・3・4の3グループと5・6・7の3グループは、互いに意味が接近しており、使い分けが問題になります。以下では、各グループごとに表現を見た後、最後に、異なるグループに属する表現の間の使い分けについてまとめます。

1. 断定を表す表現

- (1) あの人は田中さんの奥さんだ。

(2) このすいかは甘いです。

これだけは

◆述語を普通形か丁寧形で言い切ると、話し手がそのことがらを確かなこと

として断定している表現になります。

もう少し

◆ただし、「たぶん」「おそらく」などの副詞が伴うと、述語が言い切りの形であっても、ことがらを断定しない表現になります。

- (1)' あの人はたぶん田中さんの奥さんだ。
- (2)' このすいかはおそらく甘いです。

2. だろう、と思う

- (1) あの人は田中さんの奥さんだろう。
- (2) このすいかはたぶん甘いでしょう。
- (3) 彼は今日会社に来ないと思います。

これだけは

<接続> ㊦ + だろう (ただし、Na・N~~だ~~ + だろう)

㊦ + と思う

◆「だろう」は話し手の考えを断定しない(非断定)で述べるときに使います。デス・マス体では「でしょう」、デアル体では「であろう」の形になります。「あの人は田中さんの奥さんだ」がことがらを確かなものとして述べているのに対し、(1)は確かかどうか分からないことがらとして述べています。

◆これらの表現とは「たぶん」「おそらく」などの副詞がいっしょに用いられることが多いです。

- (4) このカードはおそらく使えないでしょう。
- (5) 明日の授業はたぶん休講だろう。

◆上昇イントネーションで使うと、話し手の考えが正しいかどうかを聞き手に確かめる意味になります。この用法については中上級編で詳しく扱います。

(6) A：このカードは使えないでしょう↑。

B：いいえ、使えますよ。

◆「だろう」とほぼ同じ意味で使える表現に「と思う」があります。

(7) あの子は田中さんの奥さんだと思います。

「です」「ます」などの丁寧形の後に「と思う」を付けて、

(8) ×明日は大学に来ませんと思います。

のように言う誤用がよく見られるので、「と思う」の前は常に普通形であることに注意が必要です。(→§9)

もう少し

◆「と思う」は、話し手の個人的・主観的な考えを明示するための表現なので、客観的な情報を示す必要がある場合や論文などには適しません。

(9) (天気予報で) ×明日は大雪になると思います。

(10) (論文) ? 以上のことから実験の結果は信頼できると思う。

このような場合には「と思われる」の形のほうが適切です。これは自発(→§8)の形で「自然にそういう結論になる」といったニュアンスが表現されるためです。

(9)* 明日は大雪になると思われる。

(10)* 以上のことから実験の結果は信頼できると思われる。

◆「と思う」は「だろう」「かもしれない」といっしょに使われることもありますが、この場合、表現をより控えめにする効果があります。

(11) この計画はうまくいくだろうと思います。

(12) 本当の犯人は他にいるかもしれないと思う。

なお、「ようだ」「みたいだ」「そうだ」「らしい」といっしょに使うことはできません。

◆日常の話しことばで話し手の考えを述べる場合には、「だろう」単独の形は使いにくいことが多く、「だろうと思う」や「と思う」がよく使われます。

(13) A：田中さんはどこにいますか。

B：図書館にいる{？でしょう／○と思います／○だろうと思います}。

3. かもしれない

- (1) 今日は大雨なので、電車が遅れるかもしれません。
(2) あのビルが山田さんの会社かもしれません。

これだけは

<接続> [普] + かもしれない (ただし、Na・N~~だ~~ + かもしれない)

◆「かもしれない」はあることがらが正しい可能性があるという考えを述べる表現です。

◆「かもしれない」とは低いけれども可能性があるということを示す「もしかすると」「ひょっとすると」などの副詞がいっしょに用いられることが多いです。

(3) あの人はもしかすると渡辺さんの妹さんかもしれません。

(4) この調子ではひょっとすると授業に間に合わないかもしれない。

◆「かもしれない」は話しことばと書きことばの両方に使えますが、話すときには「かもしんない」「かも」などのくだけた形も使われます。

もう少し

◆ある事実や状況からその背景にある事情や原因を想像して述べるような場合には、前に「の」を付けて使う必要があります (→§28)。

(5) 金さんは元気がない。何か心配なことがあるのかもしれない。

(6) ? 金さんは元気がない。何か心配なことがあるかもしれない。

このような「の」の有無による意味の違いは「だろう」の場合も同じです。

4. はずだ、にちがいない

(1) 今日は月曜日だから、銀行は開いているはずだよ。

(2) 彼は今ごろ家でテレビに熱中しているにちがいない。

これだけは

<接続> 〔普〕 + はずだ／はずのN (ただし、Na な／Nの + はずだ／はずのN)

〔普〕 + にちがいない (ただし、Na・N ~~は~~ + にちがいない)

◆「はずだ」は自分の考えで確信していることがらを表す表現です。この表現とは「たぶん、おそらく」や可能性が高いことを示す「きっと」などの副詞がいっしょに用いられることが多いです。

(3) 部屋のかぎはおそらく田中くんが持っているはずだ。

◆よく似た意味を表す表現に「にちがいない」があります。

(4) 森田さんは家にいるにちがいありません。

(5) 彼女はきっと留守にちがいない。

もう少し

◆「はずだ」が否定の形になった「はずがない」という表現もあり、そのことがらが実現する可能性がないといった意味を表します。

(6) 王さんは、今、日本にいるはずがない。

(6)' 王さんは、今、日本にいないはずだ。

(6)と(6)'は結果的にはほぼ同じ内容になるものの、(6)のほうが否定の意味がより強くなります。

◆「はずだ」と「にちがいない」には厳密には次のような違いがあります。
「はずだ」は論理的に考えた結果得られた確信を表すのが基本です。

(7) 朝子は弁護士だから、法律に詳しいはずだ。

そのため、(8)のように、思考の結果の確信と現実とが食い違う場合にも用いることができますし、(9)のように、以前から知っていた現実のことがらの理由や背景を知って論理的に納得したという場合にも用いられます。

(8) 朝子は弁護士だから法律に詳しいはずなのに、憲法さえろくに知らない。

(9) A：夕子さんは弁護士なんだって。

B：そう、道理で法律に詳しいはずだね。

このような場合「にちがいない」は使えません。

(8)' × 朝子は弁護士だから法律に詳しいにちがいないのに、憲法さえろくに知らない。

(9)' × B：そう、道理で法律に詳しいにちがいないね。

一方、「にちがいない」は直感的な確信も表すことができますが、「はずだ」はできません。

(10) 彼を一目見て親切な人にちがいないと思った。

(10)' × 彼を一目見て親切な人のはずだと思った。

◆以上のような性格から「にちがいない」は主観的な思い込みというニュアンスを帯びやすいので、客観的な述べ方が必要な場合は「はずだ」のほうが適切です。

(11) (論説文) 以上のデータから考えると、この町の人口は今後も増え続ける { ○はずである / ?にちがいない }。

また、「はずだ」は話しことばと書きことばの両方に使えます。「にちがい

ない」は話しことばではあまり使われず、特に質問に対する答えには使いません。

5. そうだ①

- (1) このケーキはおいしそうです。
- (2) このワープロはとても便利そうです。
- (3) 山下さん、上着のボタンが落ちそうですよ。

これだけは

<接続> V_{マス}/A・Na[語幹] + そうだ/そうなN/そうにV・A・Na

◆「そうだ①」は、(1)(2)のように形容詞に付くと、ある対象の外観の印象からその性質を推察して述べる意味になります。次の(1)'は実際にこのケーキを食べた経験がない場合は使うことができず、(1)のように言う必要があります。逆に、(4)(5)の「きれいだ」「背が高い」のように一見してわかる性質には「そうだ①」は用いることができません。

- (1)' (ケーキを食べる前に) ×このケーキはおいしいです。
- (4) ×あの人はきれいそうです。
- (5) ×田中さんは背が高そうです。

◆(3)のように動きや変化を表す動詞に付くと、そのような動き・変化を起こす兆候を表します。

(6)のような話し手の意志的な行為には普通使えません。(6)'と比べてみてください。

- (6) ×私は今夜早くうちへ帰りそうだ。
- (6)' 私は今夜早くうちへ帰れそうだ。

◆否定の形はやや複雑で、形容詞に付く場合、「～そうではない」と「～なさそうだ」の二通りの形があります。両者の意味に大きな違いはありません。

- (7) a. この映画はあまりおもしろそうではない。
 b. この映画はあまりおもしろくなさそうだ。

動きや変化を表す動詞に付く場合は、「～そうにもない」の形を取ります。
 「に」または「も」を省略した形もあります。

- (8) a. 明日までに宿題ができそうにもありません。
 b. 明日までに宿題ができそうもありません。
 c. 明日までに宿題ができそうにありません。

6. ようだ、みたいだ、(らしい)

- (1) a. 電気がついています。王さんはまだ勉強しているようです。
 b. 電気がついています。王さんはまだ勉強しているみたいです。
 (2) 坂本さんは今日も私に口をきいてくれなかった。まだ怒っている
らしい。

これだけは

<接続> ㊦ + ようだ／ようなN／ようにV・A・Na
 (ただし、Naな／Nの + ようだ)

㊦ + みたいだ／みたいなN／みたいにV・A・Na
 (ただし、Na・N~~な~~ + みたいだ)

㊦ + らしい (ただし、Na・N~~な~~ + らしい)

◆「ようだ・みたいだ」はその場の状況からの判断を表す表現です。

両者は同じ意味ですが、「ようだ」は書きことばや改まった話しことばで使われるのに対し、「みたいだ」はくだけた話しことばで使われます。

(3) (会議で議長が) 全員そろったようですので、会議を始めたいと思います。

(4) (夫が妻に) 休みみたいだから、別の店に行こうか。

◆「ようだ・みたいだ」には対象の様子を他のものに例える**比喻**の用法もあります。

(5) 鈴木さんのマンションはまるでホテルのようです。

(6) あの二人の会話はけんかをしているみたいだ。

この意味の場合は副詞「まるで」がいっしょに使われることが多いです。「ような／みたいな＋名詞」「ように／みたいに＋動詞／形容詞」の形でもよく使われます。

(7) 鈴木さんの自宅はホテルのようなマンションです。

(8) 鈴木さんの自宅はホテルのようにきれいです。

◆二つの意味の両方に解釈できる場合もあります。

(9) あの人は日本人のようだ。

「あの人」の国籍を知らない場合は状況からの判断の意味、「あの人」が中国人であることを知っている場合は比喻の意味になります。どちらの意味かはっきりさせるためには副詞が役に立ちます。状況からの判断の場合は「どうやら」「どうも」などが、比喻の場合は「まるで」がいっしょに用いられることが多いです。

(10) あの人はどうやら日本人のようだ。

(11) あの人はまるで日本人のようだ。

◆「らしい」については、次項7を見てください。

7. そうだ②、(らしい)

- (1) 今度駅前に新しいスーパーができるそうだ。
 (2) 日替わり定食はもう売り切れだそうです。
 (3) 昨日近所で強盗事件があったらしい。

これだけは

<接続> 普 + そうだ

普 + らしい (ただし、Na・N~~が~~ + らしい)

◆「そうだ②」は、伝聞、つまり、他の人から聞いたり本で読んだりして知ったことがらを表す表現です。この表現とは情報源を表す「～によると」「～の話では」などがいっしょに用いられることが多いです。

- (4) 先輩の話では月曜日のゼミはとても役に立つそうです。
 (5) 新聞によると昨日の雪で新幹線が遅れたそうだ。

◆伝聞の表現は引用 (→§9) と関連しています。例えば(4)'(5)'の意味は(4)(5)に近いものです。

- (4)' 先輩は月曜日のゼミはとても役に立つと言っています。
 (5)' 新聞に昨日の雪で新幹線が遅れたと書いてある。

もう少し

◆「そうだ②」は聞き手本人から聞いた情報には使えません。例えば、「田中」から「明日のゼミは休みだ」と聞いた後で「田中」に(6)のように言うことはできません。例えば(6)'のように他の表現を使う必要があります。

- (6) ×明日のゼミは休みだそうですね。
 (6)' 明日のゼミは休みだと言っていましたね。

◆「らしい」は状況からの判断を表す場合と伝聞を表す場合の両方にまたが

った表現です。次の例の「らしい」は状況からの判断を表す「ようだ・みたいだ」とほぼ同じ意味を表しています。

(7) 王さんはせきをしている。風邪を引いているらしい。

ただし、「らしい」は、伝聞にもつながる意味を持つことから無責任なニュアンスを帯びやすいので、責任を持って発言しなければいけない場合や論文などでは不適切になることがあります。

(8) (医者が患者に)

×胃が弱っているらしいです。この薬を飲んでください。

(8)' 胃が弱っているようです。この薬を飲んでください。

一方、次の例では伝聞を表す「そうだ②」とほぼ同じ意味を表しています。

(9) 田中さんは来月神戸へ引っ越すらしいですよ。

「そうだ②」が情報源がはっきりしている場合に使われることが多いのに対して、「らしい」はうわさなど情報源が不明確な場合によく使われるという傾向があります。

(10) うわさによると田中さんは来月神戸へ引っ越すらしいですよ。

(11) 本人に聞いたんですが、田中さんは来月神戸へ引っ越すそうですよ。

◆次のような、名詞にのみ接続して、その名詞の典型的な性質が表れているといった意味を表す「らしい」は接尾辞であり、ここで挙げた「らしい」とは別の形式です (→§42)。

(12) 学生なら学生らしくしっかり勉強しなさい。

◆伝聞を表す形式には他に書きことば的な「という」や話しことば的な「だって」があります。

(13) 今回の地震で1万人以上の死者が出たという。

(14) 夕食はカレーだって。

8. 区別が問題になる表現

- (1) 父はもう帰っている { だろう / かもしれない / はずだ }。
 (2) この本は { 難しいようだ / 難しそうだ }。
 (3) 田中さんは結婚した { ようだ / そうだ }。

これだけは

以上で見てきた表現の中で、別のグループに属しながら互いに使い分けが問題になる表現をまとめておきましょう。

◆「だろう」vs.「かもしれない」

「だろう」はあることがらが「正しい」と話し手が思っている場合に使われます。それに対して、「かもしれない」はそのことがらが「正しい可能性がある」ということを述べるにすぎず、裏側には「正しくない可能性もある」ことを含意しています。そのため、「かもしれない」は、例えば次のように相反する複数のことがらを並べて述べることもできます。一方、「だろう」はそのような使い方はできません。

- (4) 田中さんはうちにいるかもしれないし、いないかもしれない。
 (4)' ×田中さんはうちにいるだろうし、いないだろう。

◆「だろう」vs.「はずだ」

「はずだ」は何らかの根拠から論理的に考えた結果を示すのが基本です。そのため、前述のように、考えた結果と現実とが食い違う場合にも使うことができます。「だろう」はできません。

- (5) a. 日曜日だから田中さんは家にいるはずだ。それなのに、いない。
 b. ×日曜日だから田中さんは家にいるだろう。それなのに、いない。

◆「ようだ・みたいだ」vs.「そうだ①」

「ようだ・みたいだ」が状況をもとにした話し手の判断を表すのに対し、「そうだ①」は基本的に外観を描写する表現です。

(6) a. このケーキはおいしいようです。

b. このケーキはおいしそうです。

(6)aが何らかの状況（「よく売れている」「みんなが喜んで食べている」など）から話し手が判断したことであるのに対し、(6)bはあくまでケーキの外観について述べているだけである点が異なります。例えば、「そうだ①」は次のように使うことが可能ですが、「ようだ・みたいだ」ではできません。

(6)' a. ×このケーキはおいしいようですが、実はおいしくありません。

b. このケーキはおいしそうですが、実はおいしくありません。

◆「ようだ・みたいだ」vs.「そうだ②」

「ようだ・みたいだ」が表す状況からの話し手の判断と「そうだ②」が表す伝聞は、基本的には別のものです。しかし、「らしい」がその両方の意味を表すことができることからわかるように、両者の意味はかなり接近することがあります。

(7) 山本さんから聞いたんですが、部長は病気のようです。

(7)は「山本さんから聞いた」内容から「部長は病気だ」と判断したという表現のしかたをとっていますが、結果的には(7)'に近い意味になっています。

(7)' 山本さんから聞いたんですが、部長は病気だそうです。

しかし、両者の基本的な意味の違いは次のような文脈で明らかになります。「そうだ」は他の人から聞いたことなので話し手自身の考えと違うときにも使うことができますが、「ようだ」は自分の判断を表すものなのでこのような場合は使えません。

(8) a. なすは秋に一番おいしくなるそうだが、私はそうは思わない。

b. ×なすは秋に一番おいしくなるようだが、私はそうは思わない。

もう一步進んでみると

◆ここで扱ったのは話し手の判断のしかたや情報のとらえ方を細やかに表示し分けるための表現です。この分野はモダリティの中でも最も盛んに研究されてきたところです。個々の形式の意味・用法について考察したものも数多くありますが、特に重要なものとしては寺村秀夫（1984）が挙げられます。その他、仁田義雄（1991）、益岡隆志（1991）、森山卓郎（1989）、三宅知宏（1995a, b, c）、森山卓郎・安達太郎（1996）なども参考になります。

○参考文献

- 寺村秀夫（1984）『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版
 仁田義雄（1991）『日本語のモダリティと人称』ひつじ書房
 益岡隆志（1991）『モダリティの文法』くろしお出版
 三宅知宏（1995a）「ラシイとヨウダー概言の助動詞①ー」宮島達夫・仁田義雄編『日本語類義表現の文法（上）』くろしお出版
 ———（1995b）「ニチガイナイとハズダとダロウー概言の助動詞②ー」同上
 ———（1995c）「カモシレナイとダロウー概言の助動詞③ー」同上
 森山卓郎（1989）「認識のモダリティとその周辺」仁田義雄・益岡隆志編『モダリティの文法』くろしお出版
 森山卓郎・安達太郎（1996）『日本語文法セルフマスターシリーズ6 文の述べ方』くろしお出版

S14. 話し手の気持ちを表す表現(2) －意志・願望－

ここでは次のような表現を扱います。

- ・意志を表す表現 意向形 (～ (よ)う)、つもりだ、ことにする
- ・願望を表す表現 ほしい、～たい

これらの表現といっしょに使われるのは意志動詞に限られます。

1. 意向形「～ (よ)う」

- (1) 今夜は早く寝よう{と思っています／と思います}。

(2) 今夜は早く寝よう。

これだけは

◆動詞の意向形は**意志**を表す形式ですが、自分がある行為をする意志があることを聞き手に伝える場合には、(1)のように「と思う」を付けて使うのが普通です。(1)の2形式はどちらも可能ですが、意志を一定期間持ち続けている場合は「と思っている」のほうがよく使われます。

(2)のように意向形単独で使った場合、意志の意味では聞き手を意識しない独り言になります。また、聞き手に対して使って勧誘を表すこともできます(→§15)。

もう少し

◆動詞のル形 (→§5) でも意志を表すことができます。

- (3) 今日はもう { 帰る / 帰ります }。
- (4) 川村さんとはもう { 付き合わない / 付き合いません }。

「意向形＋と思う」を使った場合に比べ、既に決めてしまったことで変更はきかないといった強い調子になります。

◆意向形に「か」を付けると、意志が完全に固まっておらず流動的な状態であることが表現されます。

- (5) 明日は大学を休もうかと思っています。
- (6) 今日は焼き肉でも食べようか。

◆意向形に「とする」を付けた「～ (よ)うとする」という表現もあります。

- (7) ドアを開けようとしたが、開かなかった。
- (8) 出かけようとすると、電話が鳴った。

この表現は、ある行為が試みられたが達成されていない状態や、ある行為が行われる直前の状態を表します。

2. つもりだ

- (1) 夏休みにアルバイトをするつもりです。
 - (2) 今年のお盆には実家に帰らないつもりです。

これだけは

<接続> V [辞・否] + つもりだ

◆「つもりだ」は事前に決意し固まっている意志を表します。次の例のようにその場でやろうと決めたことには使えません。

(3) A：雨が降りそうですよ。

B：×じゃあ、傘を持っていくつもりです。

このような場合、ル形か、後述の「ことにする」を使います。

(3)' B：じゃあ、傘を{持っていきます／持っていくことにします}。

◆否定の形は普通、動詞を否定形にして「～ないつもりだ」にします。

(4) 明日は出かけないつもりだ。

「～つもりはない」という表現もありますが、相手の勧めを断るときなど強い否定に使われます。

(5) A：部長に謝ったらどうですか。

B：いいえ、謝るつもりはありません。

もう少し

◆「つもりだ」との使い分けが問題になる表現に「予定だ」があります。

(6) 私は来年就職する{つもりです／予定です}。

「つもりだ」が話し手の個人的な心づもりを表すのに対し、「予定だ」は他の人と相談の上決めたことや公的な決定事項を表します。

(7) 今度の週末にクラス全員でお花見に行く{×つもりだ／○予定だ}。

3. ことにする

(1) 夏休みに国へ帰ることにした。

(2) 毎朝ジョギングをすることにしています。

これだけは

＜接続＞ V [辞]・[否] + ことにする

◆「ことにする」はある行為をするという決心を表します。(1)のようにタ形で用いられて、既に決心したことという意味で意志を表すことが多いですが、前節で見たようにル形でその場での決心を表すこともできます。

(3) A：夕飯はすき焼きにするわ。

B：じゃあ、早く帰ることにするよ。

(2)のように「ことにしている」の形で用いると、ある時点で決心して現在も行っている習慣を表します。

もう少し

◆「ことにする」と使い分けが問題になる表現は「ことになる」と「ようにする」です(→§7)。

(4) 来週東京へ行く{ことにしました／ことになりました}。

(5) 私は毎朝朝食を食べる{ことにした／ようにした}。

4. ほしい、～たい

(1) 新しい自転車がほしいです。

(2) 来年大学院に入りたいです。

(3) 佐藤さんはもっと広いマンションに引っ越したがっています。

(4) 私は子供に正直な人間になってほしいです。

これだけは

◆「ほしい」はあるものを手に入れることに対する願望を表す形容詞です。願望の対象になるものは「Nが」で表されます。

- (5) 大きい車がほしい。

この文型は主語が話し手の場合のみ使えます。

- (5)' {○私は／×あなたは／×妻は} 大きい車がほしい。

これは願望に限らず感情を表す形容詞に共通する制約です (→§39)。

◆ある行為をすることに対する願望は「～たい」を使って表します。

<接続> V_{マス} + たい

- (6) 早く家に帰りたいです。(行為：家に帰る)
(7) 和子さんと結婚したい。(行為：和子さんと結婚する)

行為が「水を飲む」「漫画を読む」などヲ格をとる場合、「を」を「が」に替えることがあります。

- (8) おいしいコーヒー{を／が}飲みたい。
(9) 漫画{を／が}読みたい。

「～を／が～たい」も「～が～ほしい」と同様に基本的に主語が話し手の場合しか使えません。

- (8)' {○私は／×あなたは／×夫は} おいしいコーヒーが飲みたい。

◆第三者の願望を表すにはいくつか方法があります。一つは「ほしい／～たい」に「がる」をつけて動詞化することです。

願望は、ある程度継続するものなので、普通「～がっている」の形を取ります。

- (10) 妻は大きい車をほしがっています。
(11) 夫はおいしいコーヒーを飲みたがっています。

この場合「を」の代わりに「が」を使うことはできません。

- (10)' ×妻は大きい車がほしがっています。
(11)' ×夫はおいしいコーヒーが飲みたがっています。

その他、「と言っています」を使って引用の形にしたり、「そうだ①・そうだ②・ようだ」(→§13)などを使って伝聞や話し手の判断として表せば、第三者の願望を表現することができます。

(12) 夫はおいしいコーヒー{を／が} 飲みたいと言っています。

(13) 夫はおいしいコーヒー{を／が} 飲みたいようです。

ただし、「～がる」という形はやや批判的なニュアンスを帯びることがあるので、注意が必要です。

このように主語が話し手であるか第三者であるかによって使い方が変わるの、願望の表現だけでなく、感情を表す形容詞一般に共通することです(→§39)。

◆自分以外の人(聞き手・第三者)がある行為をすることを望むことを表す場合は「～に～てほしい」という文型を使います。

(14) (春子に対して) 春子にそばにいてほしい。

(15) 家族においしいものを食べてほしい。

「～に～てもらいたい」でもほぼ同じ意味を表すことができます。

(14)' 春子にそばにいてもらいたい。

(15)' 家族においしいものを食べてもらいたい。

(14)～(15)' のような表現は依頼の表現につながるものです(→§15)。

もう少し

◆「～を～たい」は常に「～が～たい」に替えられるわけではありません。ヲ格の意味が行為の対象でない場合(16)、ヲ格と動詞の間に他の要素が入っている場合(17)、動詞に「～ている」などの形式が付いている場合(18)など、「が」が使えないケースは多いので、注意が必要です(→コラム「ことばのゆれ」)。

- (16) 空{○を／×が}飛びたい。 (「空」は通過する場所)
(17) おいしいコーヒー{○を／×が}たくさん飲みたい。
(18) もっと話{○を／×が}していたい。

◆聞き手を主語にして願望を尋ねる次のような質問は、聞き手が目上の人やあまり親しくない人である場合は、失礼になります。

- (19) #お客様はどんな靴がほしいですか。
(20) #先生は私たちのパーティーに参加したいですか。

日本語には、親しい間柄でなければ相手の心情に直接触れることが許されない、という待遇上のきまりがあるからです (→コラム「丁寧話す」とは?)。失礼にならないようにするためには、別の表現を使って間接的に尋ねる必要があります。

- (19)' お客様はどんな靴をお探しですか。
(20)' 先生は私たちのパーティーに参加されるご予定ですか。

もう一步進んでみると

◆ここで取り上げた表現に関連して次のようなものがあります。

「意向形+とする」(無意志的なできごとを表す場合)

- (1) もうすぐ日が沈もうとしている。
(2) 新しい時代が始まろうとしています。

「ことにする」(虚偽・ごまかしを表す場合)

- (3) この話は内緒だから、知らないことにしておいてね。
(4) レポートを10枚出して、試験を受けたことにしてもらった。

「まい」(ある行為をしない意志を表す場合)

- (5) 二度とあの人とは会うまい。

- ◆意志の表現を体系的に考察したものに仁田義雄(1991)があります。
- ◆願望の表現についての研究はあまり多くありませんが、その中でよく取り上げられてきたのは「～を～たい」と「～が～たい」の使い分けです。この問題については庵功雄(1995)が詳しく考察しています。

○参考文献

- 庵 功雄(1995)「ガ～シタイとヲ～シタイー直接目的語の格表示のゆれー」宮島達夫・仁田義雄編『日本語類義表現の文法(上)』くろしお出版
- 仁田義雄(1991)『日本語のモダリティと人称』ひつじ書房

コラム

ことばのゆれ

ある文が正しいかどうかの判断を**文法性判断**と言います。例えば、「田中さんが洋子さんを結婚した。」という文が文法的に正しくないことは日本語母語話者なら直感的にわかります。このように、母語話者は母語の文が正しいかどうかを判断できる直感（**文法能力**）を持っており、通常その判断は母語話者どうしで共通しています。しかし、中には、母語話者の間でも文法性判断に違いがある場合があります。こうした違いを**ゆれ**と言います。ここではゆれの例として、条件を表す形式と「～たい」の文の目的語について考えます。

<と、ば、たら>

§ 24にあるように、条件を表す形式には「～と」「～ば」「～たら」があります（「～なら」は除く）。この3形式の使い分けは難しいですが、問題をさらに複雑にしているのは出身地による違い（**方言差**）です。次の表は下の(1)～(4)の場合に東京・大阪・福岡でその地域の出身者を対象に調査をし、その文が自然だと判断した人の割合（％）を表しています。東京、大阪のデータは真田信治（1989）からです。なお(4)の合計が100にならないのは「なら」の回答があったためです（東京68、大阪9）。一方福岡のデータは田尻英三（1992）からですが、ここでは○の回答に3点、△に1点、×に0点を与えて割合を出しています（田尻は「なら」を対象としていません）。

	と			ば			たら		
	東京	大阪	福岡	東京	大阪	福岡	東京	大阪	福岡
(1)	4	0	11	94	20	59	2	78	30
(2)	75	4	41	16	13	31	8	83	28
(3)	0	0	9	0	0	10	100	100	81
(4)	0	0	5	6	0	42	26	91	53

- (1) もっと早く{起きると／起きれば／起きたら}よかった。
- (2) 右に{行くと／行けば／行ったら}、ポストが見えます。
- (3) もし火事に{なると／なれば／なったら}どうしよう。
- (4) あの人が{書くと／書けば／書いたら}、私も書く。

これを見ると、こうした文の文法性判断にはその人の出身地が大きく影響していることがわかります（cf. 田尻英三（1992））。

<「が～たい」と「を～たい」>

§ 14 で見たように、「～たい」の目的語は「が」で表されることも「を」で表されることもあります。「が」の方が本来の形（規範）だとする意見が強いですが、現在の実際の用法としてはこれは妥当ではありません。

次の表は「芥川賞全集」などを資料に「が」と「を」の使用回数を集計したのですが、これを見ると、全体の使用頻度などどの点をとっても「を」が一般的であることがわかります（データ及び詳細は庵功雄（1995）参照）。

意味分野	ガ～シタイ		ヲ～シタイ	
	異なり	のべ	異なり	のべ
抽象的關係	1(6)	1(2)	131(36.2)	205(23.9)
精神及び行為	15(88)	49(96)	192(53.0)	600(70.0)
自然現象	1(6)	1(2)	8(2.2)	11(1.1)
その他	0(0)	0(0)	31(8.6)	43(5.0)
合計	17(100)	51(100)	362(100)	859(100)

() 内は%

○参考文献

庵 功雄（1995）「「ガ～シタイ」と「ヲ～シタイ」ー直接目的語の格標示のゆれー」

宮島達夫・仁田義雄編『日本語類義表現の文法（上）』くろしお出版

真田信治（1989）『日本語のバリエーション』アルク

田尻英三（1992）「日本語教師と方言」『日本語教育』76

§15. 話し手の気持ちを表す表現(3) ー命令・依頼・勧誘ー

ここでは次のような表現を扱います。

- ・命令を表す表現 ～なさい、命令形(しろ)／～な
- ・依頼を表す表現 ～てください、～てくださいませんかetc.、
 ～てくれ、～て
- ・勧誘を表す表現 ～ましょう、～ましょうか、～ませんか
 ～(よ)う、～(よ)うか、～ないか

これらはいずれも聞き手に何らかの行為をするように働きかける表現ですが、命令・依頼は聞き手だけが行う行為であるのに対し、勧誘は話し手と聞き手が共に行う行為である点が違います。また、命令は聞き手に行為を強制するものであるのに対し、依頼は決定権は聞き手にあるものとして働きかける点が異なっています。なお、ここではある行為をしないことを強制すること(禁止)も命令に含めて扱います。

1. ～なさい、命令形(しろ)／～な

- (1) 早く寝なさい。
 - (2) さっさと行け。
 - (3) 勝手なことをするな。

これだけは

◆命令とは、何らかの行為をすること(または、しないこと)を聞き手に強

制することなので、原則的には、話し手が聞き手に強制力を発揮できるような人間関係や状況のもとで使われる表現です。

◆「～なさい」 <接続> V_{マス} + なさい

(1)のような「～なさい」は、親→子、教師→学生などの間でよく用いられる命令の表現です。ぞんざいではありませんが、権威や支配力を持つ立場の人が下の人に対して使う表現ですので、使える場合は限られています。

◆命令形（しろ）

「～な」 <接続> V_辞 + な

(2)のような命令形は典型的な命令の表現であり、(3)の「～な」の形はある行為をしないことを命令する（つまり、**禁止**する）表現です。両者ともかなりぞんざいであるため、聞き手に直接発話できる場合は限られています。

- (4) (子供に) たけし、こっちへ来い。
- (5) (親友に) おい、田中、おれの電話を勝手に使うな。
- (6) あっ、カーテンが燃えてるぞ。早く消せ！
- (7) ふざけるな！

普通、女性は使いませんし、男性が使う場合も、聞き手が丁寧さの配慮のまったくいない相手（子・兄弟・親しい友人など）である場合 ((4)(5)) か、丁寧さに配慮できない緊急の場合 ((6)) やけんかのとき ((7)) などに限られます。その他に命令形や「～な」が使われるのは次のような場合です。

- ① 交通標識やはり紙など、不特定多数の聞き手に対して指示内容を事務的に伝える場合
 - (8) 止まれ。
 - (9) ペンキぬりたて。さわるな。
- ② 命令的な意味を持つ発言を引用する場合

実際の発言が命令形や「～な」でなくても使うことができます(→§9)。

 - (10) 先生は私にもう1本論文を書けとおっしゃいました。
cf. (先生の実際の発言) もう1本論文を{書きなさい／書いたらどうですか／書いたほうがいいですよ}。

もう少し

◆命令の表現には他にもいろいろなものがあります。

- (11) 君、早く行きたまえ。
- (12) 整列！点呼！出発進行！
- (13) 研究室でたばこを吸わないこと。

2. ～てください、～てくださいませんか etc., ～てくれ、～て

- (1) ここに名前を書いてください。
 - (2) ちょっと手を貸してくださいませんか。
 - (3) 窓を開けてくれ。
 - (4) 悪いけど、後でもう一度電話してて。

これだけは

◆**依頼**とは話し手の利益のために何らかの行為をすること（しないこと）を聞き手に頼む表現です。命令との違いは、強制ではなく、決定権はあくまで聞き手にあるものとして働きかける点です。

◆「～てください」

＜接続＞ V テ + ください

「～てください」はもっぱら依頼を表すのに使われる形式です。丁寧形ですが、直接的な表現であるため、頼むのが当たり前でない場面で用いると、失礼な感じを与えることもあります。

- (5) a. (銀行で) 千円札に両替してください。
- b. (駅の売店で) # 千円札に両替してください。

b の場合は次の「～てくださいませんか」のように間接的な依頼がふさわし

いです。

◆「～てくださいますか」etc.

<接続> V **テ** + くださいますか

「～てくださいますか」は聞き手の意向を尋ねることによって依頼の意味を表します。そのためやや間接的な表現になるので、丁寧度が高く、相手に与える負担が大きい依頼や、上で見たような頼むのが当たり前でないような場面でも使うことができます。

(6) もしできれば、来週引越しを手伝ってくださいますか。

(5)'b. (駅の売店で) 千円札に両替してくださいますか。

同種の表現に「～てくれませんか」「～てもらえませんか」「～ていただけませんか」などがあります。

◆「～て」(テ形)

「～てくれ」<接続> V **テ** + くれ

「～てくれ」は「～てください」の普通形と考えられますが、直接聞き手に発話する表現としてはぞんざいで、男性が家族や親しい友人に対して使う場合などに限られます。動詞のテ形だけの「～て」のほうが、性別に関係なくよく使われます。

(7) 早く帰ってきてくれ。

(7)' 早く帰ってきて。

ただし、「～てくれ」も、命令形や「～な」と同様、引用の中で用いられる場合があります。

(8) お客様はメニューを見せてくれとおっしゃっています。

◆依頼の表現には様々なものがありますが、これらは次のように整理できます。

- ・直接的な依頼の表現…～て(くれ)、～てください
- ・やや間接的な依頼の表現

疑問の形…～てくれますか、～てくださいますか、～てもらえますか、
～ていただけますか

否定疑問の形…～てくれませんか、～てくださいませんか、
～てもらえませんか、～ていただけませんか

一般に疑問の形よりも否定疑問の形のほうがより丁寧です。また、「～てくれる・～てくださる」を使うよりも「～てもらえる・～ていただける」を使ったほうがより丁寧度が上がります（→§11）。なお、（否定）疑問の形は、上昇イントネーションを伴って「～てくれる↑」「～てくれない↑」のように普通形で使われることもあります。

◆ある行為をしないことを依頼する場合は、「～ないでください」「～ないでくださいませんか」「～ないで（くれ）」の形になります。

- (9) 仕事のじゃまを{しないでください／しないでくださいませんか／しないで}。

「～てくれるな」という形もありますが、あまり一般的ではありません。

- (9)* 仕事のじゃまをしてくれるな。

もう少し

◆「～てください」の尊敬語（→§32）は「お～ください」という形です。

<接続> お + V_{マス} + ください

- (10) (入り口のはり紙) 靴を脱いでお上がりください。

- (11) (レストランで店員が) 満席ですので、しばらくお待ちください。

ただし、この表現は純粋な依頼ではない聞き手自身の利益になる行為を勧める場合にもよく用いられます。

- (12) (客に) おしほりです。どうぞお使いください。

- (13) お疲れさまでした。今夜はゆっくりお休みください。

3. ～ましょう、～ましょうか、～ませんか、 ～（よ）う、～（よ）うか、～ないか

- | |
|--|
| (1) いっしょに <u>食事に行きましょう</u> 。
(2) いっしょに <u>食事に行こう</u> 。
(3) そろそろ <u>出発しましょうか</u> 。
(4) そろそろ <u>出発しようか</u> 。
(5) 研究会に <u>参加しませんか</u> 。
(6) 研究会に <u>参加しないか</u> 。 |
|--|

これだけは

◆勧誘とは話し手がする行為を聞き手もするように働きかけることです。勧誘専用の形式はなく、他の意味で使われるのを基本とする次のような形式が使われます。それぞれ丁寧形と普通形があります。

- ・意志の表現（動詞の意向形）…～ましょう、～（よ）う
- ・意志の表現が疑問の形になったもの…～ましょうか、～（よ）うか
- ・否定疑問の形…～ませんか、～ないか

◆普通形の使い方には、少し男女差があります。女性の場合「～ないか」は、「か」を省略して上昇イントネーションで尋ねる形にするのが普通です。

- (7) (女子学生が友達に) そろそろ教室に行かない？

もう少し

◆三つの形式は厳密には次のような違いがあります。

- ① その行為をするかどうかについての聞き手の意向を尊重する表現にしたい場合には「～ませんか」（「～ないか」を含む）が適当です。そのため、逆に、その行為をすることがあらかじめ約束されている場合や、習慣になっている場合などには、「～ませんか」は不自然になります。

(8)(教室で先生が) さあ、授業を { ○始めましょう／○始めましょうか／? 始めませんか }。

② 既に話し手が始めている行為に聞き手も参加するよう勧誘する場合には「～ませんか」が適当です。

(9)(宴会が既に始まっているところへ来た人に)

君も { ? 飲みましょう／×飲みましょうか／○飲みませんか }。

cf. (宴会を始めるとき)

さあ、{ 飲みましょう／飲みましょうか／飲みませんか }。

このような違いは、「～ましょう」「～ましょうか」がもともと自分の行動について述べる意志の表現であるのに対し、「～ませんか」は聞き手の意向を尋ねる表現であることから来ています。

もう一步進んでみると

◆依頼のところで様々な表現を見ましたが、「～てくださいますか」などの他にも、次のような間接的な依頼の表現のしかたがあります。

① 希望を述べる

(1) 手伝ってほしいんですが。

② 聞き手の行為が自分の利益になることを述べる

(2) 手伝ってもらえるとうれしいです。

これらの表現には、敬語を使うかどうかなどによりたくさんのバリエーションがあり、丁寧度もそれぞれ違います。自分と聞き手との親疎・上下関係や、頼む内容が聞き手にどのぐらい負担をかけるものか、また頼むのが当然のことかどうかなどの条件により、これらの表現が使い分けられています。

一般に、命令・依頼・勧誘は働きかけて聞き手を動かそうとすることなので、丁寧度を上げるために様々な表現のしかたがとられます。例えば、次のような勧誘の表現も、聞き手や場面によっては丁寧さに欠けてしまうことがあります。

(3) 先生、明日のパーティー、先生もいらっしゃいませんか。

(3)は、敬語を使っているにもかかわらず、先生を自分と対等に扱っているような感じがします。そこで、そうした印象を避けるために、次のように依頼の形を取って勧誘するという方法がよくとられます。

(3)' 先生、明日のパーティー、先生も来てくださいませんか。

以上のような丁寧さの問題については、コラム「丁寧に話すとは？」でも少し触れていますが、中上級編で詳しく扱います。

◆既にいくつかのケースを見たように、話し手の気持ちを表す表現（命令、依頼、願望、許可、意志など）の領域では、形式の持つ基本的な意味と実際の使用において持つ意味が一对一で対応していません。同じ形式でも、ことごとの内容や聞き手・場面などによって違った意味を持つことになります。

その他の例を挙げると、命令形の基本的な意味は命令ですが、次のような例で最終的に担っている意味は命令とは言えないものです。

① 命令→願望（自然現象など人がコントロールできないことがら）

(4) 雨、雨、降れ、降れ。

② 命令→許可（その行為を聞き手が欲しているという場面）

(5) (帰りがっている人に) 帰りたいなら、もう帰りなさい。

cf. 帰りたいなら、もう帰ってもいいですよ。

このように形式の意味が移行するケースはたくさんあり、意味の領域が複雑に関連し合っていることを示しています。このセクションと§14・§16とは特に関連が深いので、参照してください。

◆命令・依頼・勧誘の表現を詳しく扱った研究に仁田義雄（1991）があります。同書では上で見たような意味の移行関係にも詳しく触れられており、文法体系全体の中でこれらの表現をとらえることができます。なお、依頼の表現については安達太郎（1995）や姫野伴子（1998）が詳しい分析を行っています。

○参考文献

- 安達太郎（1995）「シナイカとシヨウとシヨウカー勧誘文」 宮島達夫・仁田義雄
編『日本語類義表現の文法（上）』くろしお出版
- 仁田義雄（1991）『日本語のモダリティと人称』ひつじ書房
- 姫野伴子（1998）「勧誘表現の位置－「しょう」「しょうか」「しないか」－」『日本語教育』96

.....コラム..... 文の種類

文には様々なものがあり、いくつかの観点から分類することができます。ここで特に重要な分類のしかたについて見ておきましょう。

① 文を構成する節（述語とそれに伴う様々な要素のまとまり）の数による分類

一つの節から構成される文を「単文」、複数の節から構成される文を「複文」といいます（→コラム「複文」）。

- (1) 良子さんは昨日帰国した。（単文）
- (2) 良子さんが帰国したので、家がにぎやかになった。（複文）

② 述語の品詞による分類

述語（複文の場合は主節の述語）が動詞である文を「動詞文」、形容詞である文を「形容詞文」、「名詞＋だ」である文を「名詞文」といいます。

- (3) 太郎は部屋の掃除をしています。（動詞文）
- (4) 母の料理はおいしい。（形容詞文）
- (5) 明日は私たちの結婚記念日だ。（名詞文）

③ 表現機能による分類

例えば(6)の命令（話し手が聞き手に何らかの行為をするように働きかける）のような、文が担う表現機能による分類であり、「命令文、依頼文、勧誘文、意志文、願望文、平叙文、疑問文」などがあります。

- (6) 早く来い。(命令文)
- (7) 私は明日帰国するつもりです。(意志文)
- (8) 温かいうどんが食べたい。(願望文)
- (9) このトマトは{新鮮だ／新鮮ではない}。(平叙文)
- (10) 田中さんは来ない{はずです／ほうがいいです}。(平叙文)
- (11) 今日は何曜日ですか。(疑問文)

平叙文は、話し手が聞き手に情報を伝えるという機能を持つ文であり、(9)のような肯定文・否定文を共に含みます。また、(10)のような話し手の判断や評価を表す文も平叙文です。一方、疑問文は話し手が聞き手に情報を求めるという機能を持つ文です。

ただし、このような観点からの文の分類のしかたにはまだ定説がなく、研究者によって立場が分かれるところです。

§16. 話し手の気持ちを表す表現(4) ー義務・勧め・許可・禁止などー

ここでは次のような表現を扱います。

- ・義務・必要を表す表現 ～なければいけない、～なければならない etc.
- ・勧め・忠告を表す表現 ～ほうがいい
- ・許可・許容を表す表現 ～てもいい
 (不必要を表す表現 ～なくてもいい)
- ・禁止を表す表現 ～てはいけない

1. ～なければいけない、～なければならない etc.

- (1) 田中さん、この本は明日までに返さなければいけませんよ。
 - (2) 私は今日の午後病院へ行かなければいけない。
 - (3) 強い薬は注意して使わなければならない。

これだけは

<接続> V_{tai} + なければいけない／なければならない

◆「～なければいけない」「～なければならない」は、ある行為が**義務**であること、必ず**必要**であることを表す表現です。

(1)のように聞き手に直接行為を促すときにも用いられますが、自分の行為にも使えますし ((2))、一般論として述べる場合にも使えます ((3))。

◆これら2形式の他に次のような形式があります。

～なくてはいけない／ならない

～ないといけない

これらの形式間に意味の違いはありませんが、「いけない」より「ならない」の方が文体的にやや硬くなります。さらに書きことば的な形式に「～ねばならぬ」もあります。

◆話しことばでは、「～なければ」が「～なきゃ」に、「～なくては」が「～なくちゃ」になることがあります。また、「いけない」「ならない」など後半部分が省略されることもよくあります。

(4) 今日は心理学のレポートを書かなきゃいけないんだ。

(5) さあ、早く掃除しなきゃ。

2. ～ほうがいい

- (1) (出かける人に) 今日は傘を持っていったほうがいいよ。
 (2) (空を見ながら) 今日は傘を持っていったほうがいいかなあ。
 (3) 寝る前には食事をしないほうがいい。

これだけは

<接続> V[タ]・[否] + ほうがいい

◆「～ほうがいい」はある行為をすることが望ましいことを述べる表現です。聞き手の行為について用いると勧めや忠告の意味になります ((1)) が、自分の行為に用いる場合 ((2)) も、一般論として述べる場合 ((3)) もあります。

「～なかったほうがいい」の形はありません。ある行為をしないことが望ましいと述べる場合は「～ないほうがいい」の形になります。

◆次のように「～より～ほうがいい」の形で、別の行為と比較してより望ましいことを述べる場合もあります。

(4) 外食するより自分で料理を作ったほうがいいですよ。

◆「～ほうがいい」と「～なければいけない」の違いは、前者は行為の望ま

しさを述べるだけで後者ほど拘束力を持たないという点です。例えば、(5)のような場合、両者の違いがはっきりします。

- (5) a. 制服は買ったほうがいいけど、無理なら買わなくてもいい。
b. ?制服は買わなければいけないけど、無理なら買わなくてもいい。

◆「～ほうがよかった」の形で過去の行為について述べると、その行為をせずに別の行為をしたことに対する後悔や不満の意味を表します。

- (6) (車で渋滞にあって) 電車で行ったほうがよかったなあ。
(7) 花より食べ物を買ってきてくれたほうがよかったんだけど。

◆「～ほうがいい」が動詞の辞書形に接続した形もあり、タ形に接続した形とほとんどの場合置き換えられます。ただし、傾向としては、前者は一般論を述べるときによく用いられ、具体的・個別的な場面では後者のほうが圧倒的に多く用いられます。

- (8) a. 熱があるときは、厚着をするほうがいい。
b. (熱がある人に) 厚着をしたほうがいいですよ。

なお、「辞書形+ほうがよかった」で後悔・不満の意味を表すことはできません。

もう少し

◆学習者が次のような使い方をすることがあります。

- (9) ? 香港へ行ったら、港を見に行つたほうがいいですよ。

(9)が不自然に感じられるのは、「～ほうがいい」はその行為をしないと悪い結果が生じるという含意を持ちやすいためです。例えば、(10)aは意味的に(10)bに近いものと言えます。

- (10) a. 早く帰つたほうがいい。終電車に間に合わなくなるよ。
b. 早く帰らないと、終電車に間に合わなくなるよ。

(9)のように行為を単純に勧める場合は、「～といい」のほうが適当です。

- (9) 香港へ行ったら、港を見に行くといいですよ。

3. ～でもいい、～なくてもいい

- (1) 君、今日はもう帰ってもいいよ。
(2) 部長、窓を開けていいでしょうか。
(3) 都合が悪かったら、無理に来なくてもいいよ。

これだけは

<接続> V_テ + もいい

◆「～でもいい」はその行為が容認されるものであることを表す表現です。聞き手の行為について(1)のように用いると、聞き手に許可を与える表現になります。一方、話し手の行為について疑問文で用いると、聞き手に許可を求める表現になります ((2))。

◆動詞を否定形にして「～なくてもいい」の形にすると、その行為をしないことが容認される、つまり不必要であることを表します ((3))。

- (4) 忙しい人は会議に参加しなくてもいいです。
(5) 明日は出勤しなくてもいいですよ。

◆「何」「だれ」「いつ」「いくら」のような疑問語（疑問詞）といっしょに用いる次のような用法もあります。

- (6) 今回の作文は何について書いてもいいです。
(7) このパーティーではお酒をいくら飲んでもいいですよ。

これらは次のような「ても」を用いた複文に対応するものです (→§25)。

- (8) このお店は、いつ行っても、混んでいる。
(9) 彼は、お酒をいくら飲んでも、全然酔いません。

16.

話し手の気持ちを表す表現 (4) — 義務・勧め・許可・禁止など —

◆「いい」の代わりに「よろしい」「かまわない」が接続した形もあります。

(10) 入ってもよろしいですか。

(11) このパソコンは自由に使ってもかまわないですよ。

もう少し

◆「～でもいい」は、話し手の行為について次のように用いて、その行為をする意向を表すこともあります。

(12) A：君も映画を見に行かない？

B：行ってもいいよ。

(13) 忙しいのなら、私が料理を作ってもいいですよ。

◆「も」のない「～ていい」という形もあります。多くの場合「～でもいい」と置き換えられますが、例外もあります。まず、(6)(7)のような疑問語（疑問詞）が共起する場合には「～ていい」は使えません。

(6)' ×今回の作文は何について書いていいです。

(7)' ×このパーティーでは、お酒をいくら飲んでいいですよ。

また、(12)(13)のような意向を表す場合も「～ていい」は不自然です。

(12)' B：？行ってもいいよ。

(13)' ？忙しいのなら、私が料理を作ってもいいですよ。

4. ～てはいけない

(1) 未成年者は酒を飲んではいけない。

(2) この部屋で食事をしてはいけませんよ。

これだけは

<接続> V [テ] + はいけない

◆「～てはいけない」はある行為が容認できないということを述べることに
より、**禁止**の意味を表します。(1)のように一般論を述べる場合が多いですが、
(2)のように直接聞き手の行為について用いることもあります。

◆話しことばでは「～ては」が「～ちゃ」になることがあります。

◆同じ意味で書きことば的な「～てはならない」があります。また、「～て
はだめだ」の形もありますが、これは(1)のような一般論ではなく、(2)のよう
に直接聞き手の行為について用いる表現です。

もう少し

◆(2)のように直接聞き手の行為について用いる禁止はかなり意味が強いので、
使えるのは、親・教師・上司が、子・学生・部下に向かって使う場合などに
限られます。

ただし、次のように「ことになっている」などをいっしょに用いると、規
則や一般的な道徳として禁止されているという意味になるので、間接的な表
現になり、上で述べた以外の、例えば初対面の人に対する場合でも使えるよ
うになります。

(2)′ この部屋で食事をしてはいけないことになっています。

◆話し手の行為について質問文で使って、間接的に聞き手に許可を求める機
能を果たすこともあります。この場合、「～てもいい」を使った場合より幾
分遠慮を含めた表現になります。

(3) 先生、僕もゼミに参加してはいけませんか。

cf. 先生、僕もゼミに参加してもいいですか。

もう一步進んでみると

◆ここで扱った表現に共通することは、あることがらに対する評価を表すも
のであるという点です。つまり、「～ても」「～なければ」などの前半部分で

そのことがらの成立・不成立を表し、「いい」「いけない」などの後半部分でそれに対する評価が示されているわけで、表のように整理できます。なお、「いい」には積極的な肯定評価を表す場合と「容認できる」といった意味の場合があります。

	ことがら「行く」の	評価	生じる意味
行ったほうがいい	成立	肯定評価	→ 勧め・忠告
行ってもいい	成立	容認する	→ 許可・許容
行ってはいけない	成立	容認しない	→ 禁止
行かなくてもいい	不成立	容認する	→ 不必要
行かなければいけない	不成立	容認しない	→ 義務・必要

勧めや禁止といった意味は、評価を聞き手の行為に対して行うところから結果的に生じる意味だと言えます。

◆表のような分析が可能なことは、これらの表現は文法形式としての固定度が低いということも意味しています。例えば、次の(1)(2)(3)は、それぞれ「～ほうがいい」「～なければいけない」「～てはいけない」を用いた文に意味的に連続性を持つものと言えます。

- (1) 駅までタクシーで行ったほうが楽ですよ。
→ 駅までタクシーで行ったほうがいいですよ。
- (2) 早く行かなければ授業に間に合わない。
→ 早く行かなければいけない。
- (3) 暗いところで本を読んで目は悪くなりますよ。
→ 暗いところで本を読んではいけませんよ。

◆以下のような類義表現については中上級編で扱います。

- ・～ほうがいい…～といい、～ばいい、～たらいい、べきだ
- ・～なければならない…～必要がある、～ざるをえない など
- ・～なくてもいい …～必要がない、～までもない など

◆この課で扱った表現や上に挙げた類義表現については、これまで詳しい研究が少なく、個々の形式の意味の違いなど明らかになっていないところがあ

ります。従来の研究で参考になるものとしては森山卓郎（1997）があります。

○参考文献

森山卓郎（1997）「日本語における事態選択形式－「義務」「必要」「許可」などのムード形式の意味構造－」『国語学』188

16.

話し手の気持ちを表す表現（4）－義務・勧め・許可・禁止など－

§17. 話し手の気持ちを表す表現(5) －終助詞－

終助詞は文末に現れ、聞き手や出来事に対する話し手の態度を表す助詞です。終助詞には「か、よ、ね、よね、ぞ、ぜ、さ、もの、なあ、な、かな、わ」があります。これらは、基本的に話しことばでのみ使われ、自然な会話のやりとりを成立させるために大変重要な働きをしています。

ここでは初級で問題となる「ね」「よ」「よね」の三つを扱います。

1. ね

- | |
|--|
| (1) A：毎日暑い <u>です</u> <u>ね</u> 。
B：そうです <u>ね</u> 。 |
| (2) A：あの二人、お似合いだ <u>ね</u> 。
B：ええ、本当にいいカップル <u>ね</u> 。 |
| (3) A：会議は10時から <u>です</u> <u>ね</u> 。
B：ええ、そうです。 |
| (4) A：明日の会合には参加します <u>ね</u> 。
B：いや、まだわかりません。 |

これだけは

◆「ね」は、基本的には、聞き手が知っていると思われることがらを述べるときに使われます。

次のような場合には、「ね」が必須であり、使わないと不自然になります。

第一に、(1)(2)のAのように、話し手が自分と聞き手の意見が一致していると想定して、聞き手に**同意**を求める場合です。この場合、(1)(2)のBのように、それに対する答えとして同意を表すのにも、やはり文末に「ね」が必要です。一方、同意しないことを表す答えのときは、(1)'のBのように「ね」は必要ありません。

(1)' A：毎日暑いですね。

B：私の故郷に比べれば涼しいです。

第二に、(3)(4)のAのように、話し手が自分の知識や判断に確信が持たなくて、自分よりもよく知っていると想定できる聞き手に**確認**する場合です。この場合の答えには普通「ね」は使われません。

もう少し

◆上で見た場合以外にも「ね」が使われることがあります。

(5) 昨日歌舞伎を見たんですよ。いやあ、すごく感動しましたね。

(6) A：締め切りまで何日ありますか。

B：えーと、あと2週間ですね。

(7) A：生涯最高の日はいつですか。

B：やっぱり結婚した日ですね。

(5)や(6)(7)のBはいずれも相手の知らないことについて述べており、「ね」は必須ではありません。次のように「ね」を取っても不自然にはなりません。

(5)' いやあ、すごく感動しました。

(6)' B：えーと、あと2週間です。

(7)' B：やっぱり結婚した日です。

この場合「ね」を使うと本来自分しか知らないことを相手も知っているように表現することから、相手との距離を縮め、一種の親密感が表されますが、場合によっては押しつけがましい感じを与えることもあります。

ただし、このような「ね」は、話し手が記憶をたどったり考えたりした結果を述べる場合にのみ使えます。(5)(6)(7)はいずれもそのような例であり、例

えば(6)の「えーと」は話し手が記憶をたどっていることを表しています。そうではなく、次のように自明のことについて述べる場合には「ね」は不自然になります。

(8) A：お住まいはどちらですか。

B：大阪市内{×ですね／○です}。

◆依頼・勧誘や「なさい」を用いた命令の文で「ね」が使われることもあります。この場合も親密でやわらかい表現にする効果があります。

(9) 向こうへ着いたら、連絡してね。

(10) また会いましょうね。

(11) ご両親を大切になさいね。

次のように差し迫った状況での依頼・勧誘・命令の文では、「ね」は使えません。

(12) あっ、おなべが吹いてる。火を止めて{×くださいね／○ください}。

(13) 電車が出るよ。早く{×乗ろうね／○乗ろう}。

2. よ、よね

(1) もしもし、切符を落とされましたよ。

(2) A：会議は10時からですね。

B：いいえ、9時半からですよ。

(3) あれ、電気がついている。さっき確か消したよね。

これだけは

「よ」は、「ね」と違って、必ず用いなければならないような場合はなく、任意的なものと言えます。しかし、(1)や(2)Bのような場合、使ったほうがより自然で座りのよい文になります。これらはいずれも聞き手の知らないこと

を述べているためです。

「よ」の基本的な機能は聞き手の知らないことに注意を向けさせることにあると言えます。

もう少し

◆「よ」は命令や依頼を表す文にも用いられますが、この場合、イントネーションによって意味に違いがあります。

上昇イントネーションを伴わない「よ」が使われるのは、相手が命令や依頼の内容に反する行為をしているような場合であり、そのことをとがめる感じが表されます。

- (4) (怠けている学生に) しっかり勉強しろよ。
- (5) (危うく事故になるところだったとき) 気をつけて運転してよ。

一方、上昇イントネーションを伴う「よ」は上のような前提なしに用いられ、むしろやわらかい表現にする効果があります。

- (4)' (これから留学する学生に) しっかり勉強しろよ↑。
- (5)' (出発する前に) 気をつけて運転してよ↑。

勧誘の文に用いられるときは上昇イントネーションが伴うことはありません。

- (6) (遅れてきた人に) 時間はきっちり守りましょうよ。
- (7) 早く結婚しようよ。

◆「よ」と「ね」が組み合わさった形の「よね」は、意味は「ね」に近く、基本的に聞き手が知っていると思われることを述べる場合に使われます。既に見た、同意を求めたり確認したりする「ね」は「よね」に置き換えることが可能です。

- (8) あの二人、お似合いだ{ね／よね}。
- (9) 会議は3時からでした{ね／よね}。

しかし、ニュアンスには違いがあり、「よね」は、「ね」に比べ、話し手自身

の意見や記憶に不確かなところがあるという意味が強く出ます。そのため、(10)のように明らかで異議の出ようのないことがらの場合、「よね」は不適當です。

(10) 今日は暑いです { ○ね / ? よね }。

cf. 今日は昨日より暑いです { ○ね / ○よね }。

逆に、話し手の記憶や判断と現実食い違いがあるような状況では、「ね」よりも「よね」のほうが自然です。

(11) あれ、かぎがない。私、さっきここに置いた { ? ね / ○よね }。

(12) 田中さんが会議は2時からだって言うんだけど、3時からです { ? ね / ○よね }。

また、「ね」と違って、「よね」には聞き手の知らないことについて述べる用法 (1の(5)(6)(7)) はありません。

(13) A: 締め切りまで何日ありますか。

B: ×えーと、あと2週間です よね。

もう一步進んでみると

◆一般に終助詞の使い方には男女差があります (→§33)。「ね」「よ」「よね」については、ダ体で、特に述語が名詞かナ形容詞の場合に、違いが問題になります。(1)のように「だ」を用いると男性的な表現になり、(2)のように「だ」を省略すると女性的な表現になります。

(1) この部屋は { 禁煙だね / 禁煙だよ / 禁煙だよね }。

(2) この部屋は { 禁煙ね / 禁煙よ / 禁煙よね }。

◆「ね」「よ」「よね」は、述べることがらについて聞き手がどのくらい知っているか、聞き手は自分と同じ意見かどうかなどに関する話し手の判断によって使い分けられていると言えます。日本語は、このような聞き手の情報量 (そのことをどのくらい知っているか) や意見についての話し手の把握のしかたが繊細に表現される言語だと言われています。「ね」「よ」「よね」など

の終助詞が使いこなせる学習者は日本語が上手だという印象を与えますが、逆に言えば、それだけ習得が難しい項目だと言えます。

終助詞は日本語研究の中では比較的新しい分野です。ここで扱った「ね」「よ」「よね」を含め、その意味や機能についてはまだ定説といったものはなく、これから解明されていくものと思われます。参考になるものとしては、神尾昭雄（1990）、白川博之（1992）、蓮沼昭子（1995）などがあります。

○参考文献

神尾昭雄（1990）『情報のなわ張り理論—言語の機能的分析—』大修館書店

白川博之（1992）「終助詞『よ』の機能」『日本語教育』77

蓮沼昭子（1995）「対話における確認行為「だろう」「じゃないか」「よね」における確認用法」仁田義雄編『複文の研究（下）』くろしお出版

§18. 比較

ここでは、二つ以上の物事を、それらが共通して持っている性質によって比較する表現を扱います。

日本語には次の3種類の**比較**の表現があります。

- (1) 田中さんは林さんより頭がいい。
- (2) 鈴木さんは林さんと同じぐらい頭がいい。
- (3) 田中さんは3人の中で一番頭がいい。

英語などのように形容詞や副詞に比較を表す特別な形がある言語と異なり、日本語の比較の表現は上のように格助詞「より」や「同じぐらい」「一番」などの程度副詞（→§40）を用いて表します。

1. 二つの物事を比較する表現

- (1) 兄は母より背が高い。
 - (2) 兄は父と同じぐらい背が高い。

これだけは

◆(1)(2)は、二つの物事を、それらが共通に持っている性質について比較するときに用います。

◆(1)のような「AはBより～」は、AとBという二つの物事の性質に優劣・大小・多寡・長短などの差があることを表す文型です。

述部の「～」には、(1)のように「(背が) 高い」などの形容詞の他に、副詞を伴った動詞や一部の程度性を持つ名詞が来ます。

(3) 太田さんは小林さんより速く走れる。 (副詞＋動詞)

(4) 上村さんは山田さんより努力家だ。 (名詞)

「程度性を持つ名詞」とは、「努力家」「美人」などのような、程度副詞(→§40)で修飾することが可能である名詞です。

格助詞「より」に「も」を添えた「よりも」も用いられますが、意味は同じです。

(5) このテレビはあのテレビ{より／よりも}安いです。

◆述部が否定の場合には、「AはBほど～ない」の形で表されます。

(6) あのテレビはこのテレビほど安くありません。

◆「A」が主題化されていない(「は」で示されていない)場合は「AのほうがBより」または「BよりAのほうが」の形が用いられます。(3)'(3)''を上(3)と比べてください。

(3)' 太田さんのほうが小林さんより速く走れる。

(3)'' 小林さんより太田さんのほうが速く走れる。

(3)は「太田さん」が話題になっている場合に用いられるのに対し、(3)'や(3)''は「太田さん」と「小林さん」を比べる場合に用いられます。例えば、(7)の質問には(3)が、(8)の質問には(3)'や(3)''がそれぞれ適当です。

(7) 太田さんは速く走れますか。

(8) 太田さんと小林さんとはどちらが速く走れますか。

(4)についても同様のことが言えます。

◆なお、(9)のような二つの物事を比べる質問文では「どちら」を用い、「どれ」や「どれ」は使えません(→§1)。また、二つの物事は「AとBとでは」や「AとBの」で示します。

(9) 田村君と高田さんとは{○どちら／×だれ}が早起きですか。

(10) 和定食と洋定食の{○どちら／×どれ}が高いですか。

◆AとBの差がどのくらいあるかを述べたいときは、述部の直前に数量詞(→§41)や「ずっと、やや、少し」などの程度副詞を入れて表します。

(11) 兄は母より10センチ背が高い。

(12) このテレビはあのテレビよりずっと新しい。

(13) 和定食のほうが洋定食よりやや高い。

◆(2)の「AはBと同じくらい～」は、AとBという二つの物事の性質に優劣・大小・多寡・長短などの差がないことを表す表現です。

述部には「AはBより～」と同じく、形容詞、副詞+動詞、程度性を持つ名詞などが来ます。

(14) この動物はうさぎと同じくらいすばやく動く。 (副詞+動詞)

(15) 上村さんは山田さんと同じくらい節約家だ。 (名詞)

もう少し

◆二つの物事を比べる比較表現には、細かく分けると次の二つの場合があります。「～」は比較する性質を表します。

① AとBを単純に比べて、Aのほうがより～である場合

② AもBも～だが、その二者を比べるとAのほうがより～である場合

両者の違いは副詞の使い方などに表れます。例えば、「もっと」はもっぱら上の②の場合に用いられる副詞です。

(16) 姉は兄より{もっと／ずっと}食いしん坊だ。

(16)で「もっと」は「兄も姉も食いしん坊である」場合にしか使えません。この点で単にAとBの差が大きいことを示す「ずっと」と異なります。

(17) 兄も食いしん坊だが、姉は{○もっと／×ずっと}食いしん坊だ。

◆述部に否定が来る場合も同様のことが問題になります。「AはBほど～ない」という表現では、「AもBも（一般的な基準から言って）～だ」という含みが表されます。例えば、(18)では「母も兄も（一般的な基準から言って）背が高い」という含みが表されます。つまり、②の場合になります。

(18) 母は兄ほど背が高くない。

(19) 太田さんは小林さんほど速く走れない。

(18)(19)はそれぞれ「兄も母も背が高い」「小林さんも太田さんも速く走れる」場合に使われます。そうでない場合は、次のように別の表現を使う必要があります。

(18)' 母は兄より背が低い。

(19)' 太田さんは小林さんより走るのが遅い。

18.

比較

2. 三つ以上の物事を比較する表現

- (1) 兄は家族の中で一番背が高い。
(2) アナさんはこのクラスで最も優秀だ。

これだけは

◆三つ以上の物事を比較して、その中で最も程度が著しいものを挙げる場合の表現としては、「AはX(の中)で一番／最も～」を使います。

もう少し

◆「Xで」と「Xの中で」のうち、「Xで」は場所を表す名詞に、「Xの中で」は人数や範囲を表す名詞に付くのが原則です。

(3) 富士山は日本{○で／?の中で}一番高い山です。

(4) レズリーさんはこの4人{?で／○の中で}一番背が高い。

ただし、両方使える場合も多く、それほど強い使い分けの規則はありません。

もう一步進んでみると

◆比較の表現はこれまで文法研究で取り上げられることが少なかった分野です。それは、冒頭に述べたように日本語では比較を表す特別な文型がないためです。日本語学習者にとっても特に習得が難しいことはないでしょう。

注意すべき点としては、程度副詞とのかかわりがあります。「もっと」と「ずっと」など比較表現の中での使い分けが問題になる副詞の他、「かなり」「ずいぶん」「わりあい」など比較表現の中で使わなくても比較の意味を含み、学習者にとって使い方が難しいものもあります。このような比較に関わる程度副詞についての研究に佐野由紀子（1998）があります。

また、「～ほうがいい」「～ほうがまし」など比較と関連する複合形式もいくつかあります。

○参考文献

佐野由紀子（1998）「比較に関わる程度副詞について」『国語学』195

コラム モダリティ

本書の§13から§17までで扱った表現はすべて**モダリティ表現**と呼ばれるものです。**モダリティ**とは、簡単に言えば、話し手がことがらをどのようにとらえ、どのように述べるかを表すものです。

- (1) 太郎は会社にいる{ だろう／かもしれない／はずだ }。
- (2) 太郎は会社にいる。
- (3) たばこは{ 吸わないほうがいい／吸ってはいけない }。

(1)では「だろう」「かもしれない」「はずだ」で表されているのがモダリティであり、「太郎は会社にいる」ということがらに対する話し手のとらえ方や述べ方をそれぞれ異なるものとして表現しています。また、(2)のように言い切りの形で述べた文も、話し手の断定というモダリティをもっています。

モダリティにはいろいろな種類のものがあります。(1)や(2)はことがらの正しさに関する話し手の判断を表しているのに対し、(3)はことがらの望ましさに関する話し手の評価を表しています。

また、(4)が表している命令・依頼・勧誘、(5)が表している意志・願望といった表現機能もモダリティであり、これは命令文、依頼文といった文の種類（→コラム「文の種類」）を決定するものです。

- (4) さっさと{ 行け／行ってください／行こう }。
- (5) もう{ 寝よう／寝たい }。

その他、「ね」「よ」などの終助詞や「幸い」「もちろん」などの話し手の気持ちを表す副詞などもモダリティ表現に含まれます。

- (6) いいお天気ですね。
- (7) 事故に遭ったが、幸いけがはなかった。

このようにすべての文は客観的なことがら（**命題**）と、話し手の主観であるモダリティによって構成されているとするのが、現在の文法研究の定説です。

§19. 埋め込み表現

埋め込み表現とは、「どうする」「何がどうした」といった句または文相当の内容を持つ表現が、別の文の主語や目的語などの要素になっているものをいいます。例えば、

私は泳ぐことが大好きです。

高田さんが結婚したのを知っていますか。

いつ会議があるかを教えてください。

の「泳ぐこと」「高田さんが結婚したの」「いつ会議があるか」は埋め込み表現です。

1. ～こと、～の

- (1) 彼はおいしいものを食べる{こと／の}が趣味です。
- (2) あのホテルのサービスがいい{こと／の}は有名です。
- (3) 昨日大学で火事があった{こと／の}を知っていますか。

これだけは

<接続> 晋 + こと／の

(ただし、Naな + こと／の、Nな + の、Nである + こと／の)

◆「こと」と「の」は様々な表現を**名詞化**する機能があります。上の例ではそれぞれ波線部の表現が「こと」「の」で名詞化されて埋め込み表現になっています。

こうして作られる埋め込み表現の末尾は普通形です。これは「こと」「の」が（形式）名詞であり、埋め込み表現が名詞修飾（→§20）の形になるためです。初級の学習者は次のように丁寧形を使う間違いをすることがあるので注意が必要です。

- (4) ×昨日大学で火事がありましたことを知っていますか。

名詞に接続する形は、「こと」と「の」で違うので、注意しましょう。

- (5) a. 田中くんの妹が女優な{×こと／○の}はみんな知っています。
b. 田中くんの妹が女優である{○こと／○の}はみんな知っています。

◆埋め込み表現の中では主題を表す「は」は使えません。これは名詞修飾節の中では主題を表す「は」は使われないためです（→§20）。これも学習者が作文などでよく間違えるところです。

- (6) 杉本さん{×は／○が}病気なのを知っていますか。

◆もう一つよく見られる誤用は「こと」で名詞化することそのものを忘れる間違いです。こうした間違いは、特に埋め込み表現が「Nは～だ」のような強調構文（→§31）の述語（「～」の部分）に当たる場合に多いので注意が必要です。

- (7) a. ×一番うれしかったのは、大勢の日本人と友達になれました。
b. 一番うれしかったのは、大勢の日本人と友達になれたことです。

もう少し

◆「こと」と「の」は多くの場合置き換え可能ですが、一方しか使えない場合もあります。以下に整理しておきましょう。

<「こと」しか使えない場合>

- ① 後ろに来る動詞が「話す、伝える、約束する、命じる、祈る、希望する、聞く（話を）」など主に発話に関する動詞の場合

- (8) ゼミに出られない{○こと／×の}を先生に伝えてください。
- (9) ご病気が早くよくなる{○こと／×の}を祈っています。

② 後ろに「です、だ、である」が来る場合

- (10) 私の趣味は映画を見る{○こと／×の}です。

これは、関連づけの「のだ」(→§28)との区別ができなくなるためです。

③ 「ことができる、ことがある、ことにする、ことになる」などの複合表現の場合

- (11) あの女優は1週間で100万円稼ぐ{○こと／×の}ができる。
- (12) 私は外国で暮らした{○こと／×の}があります。

<「の」しか使えない場合>

① 後ろに来る述語が「見る、見える、聞く(声、音を)、聞こえる」など知覚を表す動詞の場合

- (13) 公園で和子さんが走っている{×こと／○の}が見えます。
- (14) 隣の家でだれかが叫ぶ{×こと／○の}が聞こえた。

② 後ろに来る述語が「待つ、手伝う、じゃまする、写す」などある事態に合わせて行う動作の場合

- (15) 子供が寝る{×こと／○の}を待って、電話をかけた。
- (16) このパソコンを運ぶ{×こと／○の}を手伝ってください。

③ 後ろに来る述語が「止める」の場合

- (17) 彼が出ていこうとする{×こと／○の}を止めました。

◆後ろに来る動詞が「話す、伝える、聞く」などの場合、次のように「こと」の前に「という」(→§20)が用いられることがあります。

- (18) ハイキングが中止になったということを学生に伝えた。

特に、埋め込み表現が長くなる場合は、「こと」だけではまとまりがわかりにくくなるため、「という」でくくるほうが自然です。

- (18) 明日もし雨が降ったらハイキングが中止になる { ? こと / ○ という こと } を学生に伝えた。

同様に「という」を介すれば、埋め込み表現の中に主題を用いることも可能になります。

- (19) 昨日来た女性は田中さんの奥さんだということを知っていますか。

2. ～か、～かどうか

- (1) 川村さんがいつ来るかを知っていますか。
 (2) 川村さんが来るかどうかを知っていますか。
 (3) どんな友達を作るかは大切な問題だ。
 (4) 決めるかどうかではなく、実行するかどうかが重要だ。

これだけは

<接続> 晋 + か (ただし、Na・N~~だ~~ + か)

◆疑問文が埋め込み表現になる場合は、「こと」「の」は不要です。

「何、だれ、いつ、どこ」などを含む疑問語疑問文の場合、「疑問語（疑問詞）～か」の形になります。疑問語（疑問詞）を含まない選択疑問文の場合、「～かどうか」の形になります。

末尾は普通形ですが、ナ形容詞と名詞の場合は「だ」を介せずに直接「か」がつきます。

◆「～か～ないか」の形も「～かどうか」と同様に使えます。また、話しことばでは「～か」だけで使われる場合もあります。

(5) 川村さんが来るか来ないかがわかりません。

(6) 川村さんが来るかがわかりません。

◆このような疑問の埋め込み表現の後ろに来る格助詞の「が」と「を」は話しことばではしばしば省略されます。

(7) 川村さんがいつ来るか知っていますか。

(8) 川村さんが来るかどうか知っていますか。

◆学習者が起こしやすい誤用は次のように疑問語疑問文の場合に「どうか」を付けてしまうケースです。

(9) ×川村さんがいつ来るかどうか知っていますか。

もう一步進んでみると

◆「こと」「の」を用いた埋め込み表現と関連するのが、「と」を用いた引用の表現です (→§9)。

(1) 田中さんは加藤さんが結婚した{こと／の}を知らせてくれた。

(2) 田中さんは加藤さんが結婚したと思っている。

「こと」「の」および「と」による引用の使い分けについての研究では、久野^{すすむ}暲(1973)や井上和子(1976)が重要です。両研究は「知らせる、思う、考える、悔やむ」など埋め込み表現に後続する動詞を、埋め込み表現((1)(2)では「加藤さんが結婚した」)の真偽をどのように考えるものかという点から分類し、それらのどのグループと共に使われるかという点から、「こと、の、と」の使い分けを分析しています。

特に、「こと」と「の」の使い分けについては、両研究以外にも多くの研究がありますが、簡潔にまとめられたものとしては野田春美(1995)があります。

○参考文献

井上和子（1976）『変形文法と日本語（上）』大修館書店

久野 暲（1973）『日本文法研究』大修館書店

野田春美（1995）「ノとコトー埋め込み節を作る代表的な形式ー」宮島達夫・仁田
義雄編『日本語類義表現の文法（下）』くろしお出版

§20. 名詞修飾

日本語では「廊下を走っている人」「庭に植えた野菜」「日本語を教える仕事」のように、「人」「野菜」「仕事」という名詞句がどのようなものであるかを詳しく言う（＝修飾する）ために、その詳しく言いたい名詞の前に「廊下を走っている」「庭に植えた」「日本語を教える」などの節を添えて表すことがあります。このような節を**名詞修飾節**と呼びます。

日本語は、英語などと異なり、名詞修飾を表すための特別な形式である関係詞を持ちません。また名詞修飾の持つ働きも細部では少し違ってしています。

1. 名詞修飾の種類と基本的な特徴

<内の関係の名詞修飾>

- (1) これは昨日ローマから帰ってきた 人 が買ってきてくれた本です。
- (2) 田中さんが先週から行っている ローマ は今日も晴れです。

<外の関係の名詞修飾>

- (3) 隣の部屋からテレビを見て笑っている 声 が聞こえます。
- (4) 田中さんが昨日休んだ 理由 を聞いた。

これだけは

◆日本語の名詞修飾は大きく次の二つに分けられます。

- ① 文の中のある名詞句を修飾する名詞修飾

- (5) 田中さんが食堂でラーメンを食べている。

(5)には枠で囲んだ三つの名詞句が含まれますが、それぞれの名詞句を修飾する名詞修飾節を次のように作ることができます。

- (6) a. 食堂でラーメンを食べている田中さん
 b. 田中さんがラーメンを食べている食堂
 c. 田中さんが食堂で食べているラーメン

このような名詞修飾を内の関係の名詞修飾と呼びます。

② 文の要素以外を修飾する名詞修飾

(5)の文を使って次のような名詞修飾節を作ることができます。

- (7) a. 田中さんが食堂でラーメンを食べているといううわさ
 b. 田中さんが食堂でラーメンを食べている理由を知っていますか。

「うわさ」や「理由」などの名詞句は、(5)の文にどのような格助詞を用いても入れることができません。このような名詞修飾を外の関係の名詞修飾と呼びます。

◆内の関係でも外の関係でも名詞修飾節には次のような制限があります。

① 主題を表す「は」は使えません。

- (8) 田中さん{×は／○が}ラーメンを食べる食堂

対比を表す「は」であれば使うことができます。

- (9) 田中さんは利用するけれど小林さんは利用しない食堂

② 命令形や「か」「よ」などの終助詞は入ることができません。

- (10) ×こっちへ来い君 (呼びかけであれば可)
 (11) ×降るよ雨

③ 「かもしれない」など判断を表す表現は、基本的に名詞修飾節内に入れます。「だろう」はやや自然さを欠くと感じる人も多いようです。

(12) ダンスに入れたかもしれない **服**

(13) ? もうすぐ来るだろう **バス**

④ 「です」「ます」は使わず、普通形を使います。

(14) 木下さんが{×買いました／○買った} **服**は、赤い服です。

(15) 野菜が{×安いです／○安い} **店**が、近所にあります。

(16) {×安全です／×安全だ／○安全な} **場所**へ避難しました。

(17) 夜道でも{×安全でした／○安全だった} **昔の日本**

◆名詞修飾節内のガ格は「～の」で言い表すことも可能です。

(18) 太郎{が／の}書いた**手紙**

このような交替を**ガ・ノ交替**と呼びますが、ガ格名詞句と修飾される名詞との間にいろいろな語句が入っている場合にはガ格のほうが自然です。

(19) 太郎{○が／×の}夏休み中に一生懸命書いた**手紙**

もう少し

◆英語で言うと、内の関係の名詞修飾は関係代名詞あるいは関係副詞を用いる関係節に、外の関係の名詞修飾は内容を表すthat節にほぼ相当します。

2. 内の関係の名詞修飾

(1) 田中さんはワープロで友達に手紙を書いた。

(2) a. ワープロで友達に手紙を書いた**田中さん**

b. 田中さんがワープロで手紙を書いた**友達**

c. 田中さんがワープロで友達に書いた**手紙**

d. 田中さんが友達に手紙を書いた**ワープロ**

これだけは

◆内の関係の名詞修飾は文の中のある名詞句を修飾する名詞修飾です。(2)a～(2)dのそれぞれの名詞修飾は(1)のような文に対応します。

◆名詞修飾で修飾される名詞を**被修飾名詞**（あるいは主名詞）と言います。もとの文の名詞句は、その格によって内の関係の被修飾名詞になれるものとなれないものがあります。

被修飾名詞になれるのはもとの文のガ格・ヲ格・ニ格・ヘ格・デ格の名詞句です。上に挙げた(2)aはガ格、(2)bはニ格またはヘ格、(2)cはヲ格、(2)dはデ格の名詞句がそれぞれ被修飾名詞になっています。

一方、被修飾名詞になれないのはもとの文のカラ格・マデ格名詞句です。ト格名詞句の場合は少し複雑です。

(3) 田中さんは会社の同僚と結婚した。

(4) 田中さんは会社の同僚と映画を見に行った。

(3)のように「といっしょに」に置き換えられない場合、「会社の同僚」は被修飾名詞になりますが、(4)のように置き換えられる場合には「会社の同僚」は被修飾名詞になりにくいです。

(5) 田中さんが結婚した会社の同僚は林さんです。

(6) ? 田中さんが映画を見に行った会社の同僚は林さんです。

ただし(6)は「いっしょに」を補うことでかなり自然になります。

(7) 田中さんがいっしょに映画を見に行った会社の同僚は林さんです。

この点についてはコラム「格の階層性」も参照してください。

◆名詞修飾節内のテンス・アスペクト（→§5, §6）は、文末で述べられている場合のテンス・アスペクトと基本的に同じ意味を表します。例えば次の(8)と(9)のタ形は「読む」という行為が過去に行われたことを、また、(10)と(11)のテイル形は現在行われていることを表したものです。

- (8) 小林さんが昨日読んだ^本
- (9) 小林さんは昨日その本を読んだ。
- (10) 小林さんが今読んでいる^本
- (11) 小林さんは今その本を読んでいる。

この場合、名詞修飾節内のタ形とテイル形によって表される出来事の時間的なとらえ方は異なります。

しかし、「(眼鏡を) かける、やせる、(青い目を) する、腐る」など、内の関係の名詞修飾節内で使われた場合、タ形とテイル形のどちらでも同じ意味を表す動詞もあります。

- (12) あの眼鏡を{ かけた／かけている } ^人は山下さんです。
- (13) { 腐った／腐っている } ^{お菓子}を食べておなかをこわした。

このような動詞を含む名詞修飾節は被修飾名詞の状態を表しています。

このような名詞修飾節内のタ形は文末のタ形とは意味が異なります。

- (14) 山下さんは眼鏡を{ # かけた／かけている }。
- (15) お菓子が{ # 腐った／腐っている }。

(14)の「かけた」と(15)の「腐った」は過去の動作や変化を表し、(12)や(13)と同じ時間的な意味を表しません。

もう少し

◆内の関係の名詞修飾は細かく分けるとさらに二つに分類されます。

① いくつかある中から選ぶ制限的な意味を持つ用法

- (16) 大橋さんがいつも行く^{図書館}は県立図書館です。

(16)の被修飾名詞の「図書館」は、名詞修飾節なしで「図書館は県立図書館です」と言ったのではどの図書館か特定されておらず意味をなしません。それで図書館の中からさらに絞り込み、他の図書館と区別するために、「大橋さんがいつも行く」という名詞修飾節を付けて限定するのです。このような名詞修飾を**制限的**（限定的）**用法**の名詞修飾と言います。

② 既にわかっている名詞句に情報を付加的に与える用法

(17) 大橋さんがよく行く **県立図書館** は大学の隣にあります。

(17)の「**県立図書館**」は普通一県に一館ですから、いくつかある中から選ぶという意味は持ちません。この場合、単に「**県立図書館**は大学の隣にあります」と言ってもいいのですが、そこに「大橋さんがいつもそこへ行く」という情報が付け加えられているのです。このような名詞修飾を**非制限的**（非限定的）**用法**の名詞修飾と言います。

このような非制限的な名詞修飾については、その談話的な機能と併せて中上級編で詳しく扱います。

また、ここで述べた制限的用法と非制限的用法は、英語では被修飾名詞の後にコンマを置いたり話すときにポーズを置いたりして区別されますが、日本語においては特に形の面では区別されません。ただし、「私」や「彼」なども非制限的な名詞修飾の被修飾名詞になれる点では、日本語のほうが使用範囲が広いと言えるでしょう。

3. 外の関係の名詞修飾

- (1) 大学の図書館を日曜も使えるようにしてほしいという **意見** がある。
- (2) 海外で日本語を教える **仕事** に応募した。
- (3) その家の入り口には少女が笑っている **絵** が飾ってあった。
- (4) 彼が留学した **理由** を知っていますか。

これだけは

◆外の関係の名詞修飾では内関係の名詞修飾と異なり被修飾名詞にどのような格助詞を付けても名詞修飾節の動詞といっしょに使うことはできません。

(1)' その意見 { ×が／×を／×に／×で… } 大学の図書館が使える

◆外関係の名詞修飾節の用法としては次のようなものがあります。

まず、(1)～(3)の外の関係の名詞修飾では名詞修飾節（下線部）が被修飾名詞（網掛け部分）の内容を表します。この用法では「という」を使う場合と使わない場合とがあります。(1)や次の(5)のように、「意見、うわさ、考え、訴え、命令」など、発話や思考を表す名詞の内容を名詞修飾節が表す場合には、「という」を用いたほうが自然です。

- (5) マリオさんが国に{ ? 帰る / ○ 帰る という } うわさ を聞いた。

この場合、形式名詞の「こと」を使っても同じです。

- (6) マリオさんが国に{ ? 帰る / ○ 帰る という } こと を聞いた。

(2)や次の(7)のように「仕事、経験、事件、事故、特徴、性格」などの名詞が被修飾名詞になる場合、その内容を表す名詞修飾節は「という」を用いても用いなくてもどちらでもかまいません。

- (7) 特急列車が車に{ 衝突する / 衝突するという } 事故 があった。

(3)や次の(8)(9)のように「音、味、におい、痛み、写真、絵」など感覚や知覚の内容を名詞修飾節が表す場合、「という」は使えません。

- (8) 遠くに電車が{ ○ 走る / × 走る という } 音 が聞こえる。

- (9) 少女がピアノを{ ○ 弾いている / × 弾いている という } ルノワールの絵 は有名だ。

「という」は「～と言う」から来ていますので、基本的に発話の内容を表し、単なる内容を表すためには使いにくいと考えることができます。

「という」がある場合、名詞修飾節の中で「～てほしい」「～たい」や命令などのモダリティ表現（→§14, §15）を使うことができます。

- (10) 6時までには必ず{ × 戻れ / ○ 戻れ という } 命令 を守らなかった。

◆次に(4)の「彼が留学した理由」という外の関係の名詞修飾では名詞修飾節が全体で名詞のような働きをし、「留学の理由」のような「N₁のN₂」という関係を持っています。他に被修飾名詞としては「原因、理由、秘訣、結果」などの名詞や「せい、おかげ」などの形式名詞が用いられます。

- (11) A社と合併した結果、業績が回復した。(=合併の結果)
 (12) 株価が上がった おかげ で景気がよくなった。(=株価上昇のおかげ)

この場合、名詞修飾節は内容を表しませんので「という」は入りません。

- (13) 景気が{○低迷している／×低迷しているという} 原因 は、どこにあるのか。

もう少し

◆上の二つの用法の他に次のような用法もあります。

「前日、翌日、～前、～後」などの相対的な時間を表す名詞句や、「隣、前、後ろ、左、右、横」など相対的な位置関係を表す名詞が被修飾名詞になる場合、名詞修飾節の表す時間や場所の「前日」や「隣」という意味になります。

- (14) コンピュータを買った 3日後 に壊れた。(=買った日の3日後)
 (15) 寝ている 横 に子どもの寝顔がある。(=寝ている場所の横)

もう一歩進んでみると

◆名詞修飾に関する研究としては寺村秀夫の一連の研究、寺村秀夫(1975-1978)や奥津敬一郎(1974)が有名です。「内の関係・外の関係」は寺村の用語です。その後の研究としては益岡隆志(1997)が重要です。

◆なぜ名詞修飾表現を用いるかという問題に答えるのは容易ではありませんが、一つには名詞修飾が二つの文を一つにすることによって談話をよりコンパクトに表現するという機能も持っていることが挙げられます。例えば「昨日生協で買った本は表紙が破れていた」というほうが、「昨日生協で本を買った。その本は表紙が破れていた」というよりも短くなります。他にも名詞修飾にはいろいろな機能がありますが、これについては中上級編で談話の観点から扱います。

○参考文献

奥津敬一郎(1974)『生成日本文法論』大修館書店

寺村秀夫(1975-1978)「連体修飾のシンタクスと意味(その1)～(その4)」

寺村秀夫(1992)『寺村秀夫論文集Ⅰ 日本語文法編』くろしお出版に再録

益岡隆志(1997)『新日本語文法選書2 複文』くろしお出版

§21. 複文と接続詞(1)

－「～て」・付帯状況・並列などの表現－

ここでは次のような表現を扱います。

- ・「～て」と中止形
- ・「～て」の否定の形 ～ないで、～なくて、～ずに
 (中止形の否定の形 ～ず、～なく)
- ・付帯状況を表す従属節 ～ながら、～たまま
- ・並列節 ～たり～たり、～し
- ・並列を表す接続詞 それに

1. ～て、中止形

- (1) 教科書を見て答えてください。
 - (2) 太郎は就職して、次郎は大学院に入りました。
 - (3) 6時にうちに帰り、夕食を食べた。

これだけは

◆**テ形**「～て」は、「PてQ」の文型で、動作やことがらの**継起**(続いて起こること)や、並列を表しますが、PとQの述語の種類や内容によって、Pの意味は様々に解釈されます(ここでP・Qは節を表します)。

- (4) 手を上げて道路を渡った。(付帯状況)
- (5) 暑かったので、窓を開けて寝ました。(付帯状況)

- (6) 牛乳パックを使っておもちゃを作った。(手段)
- (7) 早くうちに帰ってごはんを食べましょう。(継起)
- (8) 子供が生まれ、家がにぎやかになりました。(原因・理由)
- (9) おじいさんは山へ行って、おばあさんは川へ行きました。(並列)
- (10) この図書館は、広く、新しい。(並列)

付帯状況とは動作Qに伴う付随的な動作または動作の結果の状態(P)のことです。例えば、(4)では「手を上げる」という動作、(5)では「窓が開いている」という状態がそれぞれ「道路を渡る」「寝る」という動作に伴っていることが表されています。**並列**とは複数の動作やことがらを重要度に差をつけることなく並べて示す表現のしかたのことです。例えば、(9)では「おじいさんが山へ行った」「おばあさんが川へ行った」という二つのことがらを同じ重要度で並べています。

もう少し

◆上のような「～て」による節は、述語が動詞かイ形容詞の場合、**中止形**に置き換えることができます。

- (11) 牛乳パックを使いおもちゃを作った。
- (12) この図書館は広く新しい。

意味にはほとんど違いがありませんが、中止形のほうが書きことば的です。

◆「～て」による節は、意味によって構造的にもいくつかの種類(段階)に分かれ、節の中に現れる要素が違います。付帯状況や**手段**を表す「～て」の場合、主語は現れません(主語は必ず主節と同じです)。継起や**原因・理由**の「～て」の場合は、(8)の「子供が」のように独自の主語を表すことが可能です。並列の「～て」は主語はもちろん独自の主題を示すこともできます。例えば、(9)の「おじいさんは」は主節の「おばあさんは」と異なる独自の主題です。つまり、文的度合い(→コラム「複文」)の点からいえば、付帯状況・手段の「～て」が最も低く、並列の「～て」が最も文に近いことになります。

2. ～ないで、～なくて、～ずに、(～ず、～なく)

- (1) 教科書を見ないで教えてください。
 - (2) 窓を閉めないで寝ました。
 - (3) お金が足りなくて、電車に乗れませんでした。

これだけは

<接続> V_ナ + ないで / なくて / ずに / ず

(ただし、Ⅲ「～する」→「～せずに」)

A_ナ / Na・Nでは + なくて / なく

◆「～ないで」「～なくて」は、いずれも「～て」の前に来る動詞が否定形である場合に取り得る形ですが、「～て」の持つ様々な用法に対応して、使える場合がそれぞれ限られています。使い分けはおおよそ次のようです。

- (4) 窓を閉めて寝ました。(付帯状況)
→窓を{○閉めないで / ×閉めなくて}寝ました。
- (5) 包丁を使って料理をした。(手段)
→包丁を{○使わないで / ×使わなくて}料理をした。
- (6) 彼が来て安心した。(原因・理由)
→彼が{×来ないで / ○来なくて}心配した。
- (7) 太郎は合格して、次郎は合格しなかった。(並列)
→太郎は{合格しないで / 合格しなくて}、次郎は合格した。

なお、継起を表す「～て」に対応する否定の形はありません。

◆「～なくて」は名詞や形容詞にも接続します。

- (8) 料理がおいしくなくて、半分残した。(原因・理由)
- (9) 彼は医者ではなくて、看護師です。(並列)

もう少し

◆「～ないで」と似た形式に「～ずに」があります。使える場合は「～ないで」とほぼ同じですが、並列の意味で使いにくい点が異なります。

- (10) 窓を閉めずに寝ました。(付帯状況)
- (11) 包丁を使わずに料理をした。(手段)
- (12) ×彼が来ずに心配した。(原因・理由)
- (13) ×太郎は合格せずに、次郎は合格した。(並列)

また、文体的な違いもあり、「～ずに」は主に書きことばに用いられます。

◆「～ず」と「～なく」は中止形の否定の形に当たるものです。「～ず」は動詞にのみ、「～なく」は名詞と形容詞にのみ接続します。「～ず」は「～ずに」が使いにくい、並列の用法でも使えます。

- (11)' 包丁を使わず料理をした。(手段)
- (13)' 太郎は合格せず、次郎は合格した。(並列)
- (8)' 料理がおいしくなく、半分残した。(原因・理由)
- (9)' 彼は医者ではなく、看護師です。(並列)

3. ～ながら

- (1) 彼はいつもテレビを見ながらごはんを食べる。
- (2) 辞書を引きながら英語を読むのは疲れます。

これだけは

<接続> V_{マス} + ながら

◆「PながらQ」という文型は付帯状況の一つで、ある主体が動作Qを行うときに同時に別の動作Pを行うことを表します。このときPは時間的な幅のある動作であることが必要です。次の例はPが時間的な幅のない動作である

ため不適格になります。

- (3) ×ねずみは死にながら足をバタバタさせた。

また、二つの動作のうち、主な動作は普通Qで、Pは付帯的な動作です。次のaとbの意味の違いは、aは「アイロンをかける」、bは「テレビを見る」をそれぞれ主要な動作としてとらえているという点です。

- (4) a. 私はテレビを見ながら、アイロンをかけました。
b. 私はアイロンをかけながら、テレビを見ました。

もう少し

◆「PながらQ」を意味を変えずに「PでQ」に置き換えることはできません。(5)bは付帯状況ではなく継起の意味に、(6)bは手段の意味になります。

- (5) a. テレビを見ながらごはんを食べました。
b. テレビを見てごはんを食べました。
(6) a. 資料を使いながら勉強した。
b. 資料を使って勉強した。

◆「PながらQ」という文型には、次のように、逆接(→§25)の意味を表す用法もあります。これについては中上級編で扱います。

- (7) 先生はカンニングを知りながら、何もおっしゃいませんでした。
(8) 田中選手は若手ながら大活躍をした。

4. ～たまま

- | |
|--|
| <p>(1) 窓を開け<u>たまま</u>出かけてしまった。
(2) コンタクトレンズをし<u>たまま</u>寝ないほうがいいです。</p> |
|--|

これだけは

<接続> V [タ] + まま

◆「P たまま Q」という文型も付帯状況の一つで、ある主体が「P た」という状態（動作Pの結果生じて、そのまま続いている状態）で動作Qを行うことを表します。Pは主体や動作を受けるものに何らかの変化を起こす動作に限られます。例えば、(1)の「窓を開ける」は動作を受ける「窓」に、(2)の「コンタクトレンズをする」は動作の主体に変化を起こす動作です。一方、次の例の「歌う」は変化を起こさない動作であるため不適格になります。

(3) ×彼は歌ったまま出かけてしまった。

また、Pが「死ぬ」などいったん起こったら元に戻らない、不可逆的な変化を表す場合も不適格になります。

(4) ×彼は死んだまま路上で発見された。

◆この文型を使うのは「P た」という状態が動作Qにそぐわないものである場合が普通です。

(5) a. ネクタイを締めたまま寝てしまった。

b. ?ネクタイを締めたまま出かけた。

(5)bが不自然なのは、「ネクタイを締めた」状態と「出かける」という動作が当たり前の組み合わせであるためです。この場合には、「～て」を使って次のように表現すると自然になります。

(5)' ネクタイを締めて出かけた。

◆助詞「で」がついた「たまま」の形もありますが、意味は同じです。

(6) a. クーラーをつけたままで眠ってしまった。

b. クーラーをつけたまま眠ってしまった。

もう少し

◆次のように名詞に接続して「Nのまま」の形で使われることもあります。
(7)(8)は、それぞれ(7)'(8)'と同じ意味になります。

- (7) ホテルでは浴衣のまま廊下に出てはいけません。
- (8) 妹は仏頂面のまま 2階へ上がっていった。
- (7)' ホテルでは浴衣を着たまま廊下に出てはいけません。
- (8)' 妹は仏頂面をしたたまま 2階へ上がっていった。

ただし、このような表現が可能なのは、「浴衣」「スーツ」「裸」「裸足」などの服装の重要な部分や、「仏頂面」「笑顔」などの表情を表すものなど、一部の名詞に限られます。例えば、次のような文は不自然になります。

- (9) ×学生のまま結婚した。
- (10) ×ネックレスのまま寝てしまった。

◆「まま」には次のように「(～の)通り」「(～と)同じ」といった意味で使われる用法もあります。

- (11) 感じたまま(を)話してください。
- (12) 足の向くまま(に)歩いていった。

5. ～たり～たり

- (1) 日本語の授業では、会話を練習したり作文を書いたりします。
- (2) 休みの日は、買い物に行ったり映画を見たりします。

これだけは

◆タリ形を用いた「PたりQたりする」という文型は、複数の動作の中から並列的に例を挙げる場合に使います。例えば、(1)では、日本語の授業でする

こととして「会話を練習する」「作文を書く」という動作を挙げ、他にもすることがあることを暗示しています。

複数の中から例を挙げるという特徴は、並列助詞「や」を使った「 N_1 や N_2 」と共通するものです。例えば、(1)は次のような文とほぼ同じ意味になります。

(1)' 日本語の授業では会話や作文をします。

◆動詞一つだけで「Pしたりする」の形で使うことも可能です。

(3) 休みの日は買い物に行ったりします。

この場合も他の動作（例えば「映画を見る」）を暗示する点は同様です。一種の婉曲表現として使われることが多いものです。

(4) かぎをなくしたりするといけないから、すぐ返してください。

もう少し

◆似た意味の文型にテ形を用いた「PてQ」があります。例えば、次の例は(2)との違いが問題になります。

(2)' 休みの日は、買い物に行って映画を見ます。

「PてQ」は、①PとQ以外にもすることがあるという暗示がない点、②「 $P \rightarrow Q$ 」という継起関係が表されるという点で、「PたりQたりする」と異なります。

◆同じ動詞Pの肯定形と否定形を並べて次のように使う場合もあります。

(5) 彼は大学に来たり来なかつたりする。

(6) 薬を飲んだり飲まなかつたりしていると、病気が治らないよ。

この場合は「Pする場合とPしない場合がある」という意味を表します。

6. ～し

- (1) この町は静かだし、空気がきれいです。
(2) 今日は試験があるし、ゼミにも出なければならない。

これだけは

<接続> ㇿ／ㇿ + し

◆「PしQ」は複数のことがらを並列的に述べる表現です。PとQには動詞だけでなく、名詞・形容詞など様々な述語が来ます。

もう少し

◆「PしQ」と並列を表す「PてQ」との間には次のような違いがあります。まず、「PてQ」では、Pが動作を表す述語の場合、「P→Q」という継起関係が表されますが、「PしQ」ではそれは表されません。また、「PてQ」は複数のことがらを単に並べるだけなのに対し、「PしQ」の場合は「PだけでなくQも」といった意味が含意されます。

- (3) a. 今年の夏は海に行って、山にも行った。
b. 今年の夏は海に行ったし、山にも行った。

◆「PしQしR」の形でPとQがRの理由になる用法もあります。

(4)(5)は、(4)'(5)'のように後ろの「し」を理由を表す「から」(→§23)と置き換えてもあまり意味は変わりません。

- (4) 荷物が多いし、雨も降ってきたし、どこかで休もうか。
(5) 彼は頭もいいし、責任感もあるし、議長に最適の人だ。
(4)' 荷物が多いし、雨も降ってきたから、どこかで休もうか。
(5)' 彼は頭もいいし、責任感もあるから、議長に最適の人だ。

「PしR」で理由を一つだけ示すこともできますが、Pの他にも何か理由があるという暗示が表現される点で「から」と異なります。

- (6) 荷物も多い{し／から}、どこかで休もうか。

7. それに

- (1) このマンションは駅から近い。それに、環境もいい。
 (2) ハンバーガー、コーラ、それに、ポテトをください。

これだけは

◆「それに」は複数のことがらや事物を並列的に述べるのに用いられる接続詞です。(1)のようにことがらを並べる用法は、「～し」を用いた複文とほぼ並行的な関係にあります。(1)は(1)'とほぼ同じ意味です。

- (1)' このマンションは駅から近いし、環境もいい。

もう一步進んでみると

- ◆「～て」の用法を詳細に考察したものに仁田義雄(1995)があります。
 ◆「～ないで」「～なくて」「～ずに」の三つの形式については、既に述べた他にも注意すべきことがあります。テ形は、後ろに「ある・いる」「あげる・くれる・もらう」「もいい、はいけない」などの形式を伴って様々な意味を表しますが、これらに対応する用法も、「～ないで」「～なくて」「～ずに」の三つの形式の中で使い分けがあります。三つの形式の異同についての研究は多く、簡潔に整理されたものとしては日高水穂(1995)があります。

○参考文献

- 仁田義雄(1995)「シテ形接続をめぐって」仁田義雄編『複文の研究(上)』くろしお出版
 日高水穂(1995)「ナイデとナクテとズニーテ形の用法を持つ動詞の否定形式ー」宮島達夫・仁田義雄編『日本語類義表現の文法(下)』くろしお出版

§22. 複文と接続詞(2)－時間－

ここでは次のような表現を扱います。

・ 時の設定にかかわる従属節

～とき、～ときに、～とき(に)は

～て、～てから、～たあとで、～たあと、～まえに、～まえ

～までに、～まで、～あいだに、～あいだ、～うちに

・ 時の設定にかかわる接続詞

そして、それから

1. ～とき、～ときに、～とき(に)は

- (1) 子供のとき、私はよく熱を出した。
- (2) 子供のときに、私はアメリカに移住した。
- (3) 子供のとき(に)は、友達との関係がとても重要だ。
- (4) 困った{ ?とき / ?ときに / ○とき(に)は } いつでも来てください。

これだけは

<接続> 〔普〕 + とき / ときに / とき(に)は

(ただし、Naな / Nの + とき / ときに / とき(に)は)

◆ここでは**時の設定**に関わる従属節について考えます。

まず、「～とき」は継続する事態に関する時の設定を行います。例えば、
(1)の主節は過去の習慣（継続的）を表しますから、それに関わる時の設定も

広がりのあるものである必要があり、「～とき」が適当です。

◆一方、「～ときに」は一回的な出来事に関わる時の設定に使われます。例えば、(2)の主節は一回的な出来事ですから、それにかかわる時の設定も限定的なものが必要であり、「～ときに」が適当です。

◆これに対し、「～とき(に)は」は「～が成り立つ場合は」といったニュアンスを持ち、「～が成り立つ場合には、……という事態がよく起こる」といった関係を表したり、一種の条件表現として、「もし～が成り立てば、……する」といった関係を表したりします。例えば、(3)は「子供のとき」の一般的な属性として、「友達との関係が重要だ」ということがある、ということを書いて述べています。一方、(4)は「困る」という事態がもし生じたら、そのときにはいつでも来てよいということを書いて述べています。

もう少し

◆「～とき」と「～ときに」の違いは基本的には格助詞「に」の有無に由来するものであり、「～まで」と「～までに」、「～あいだ」と「～あいだに」などの関係と平行的なものです。また、「～とき(に)は」が条件表現的な意味を持つのは、「は」という主題を表す助詞を含んでいるためです。

2. ～て、～てから、～あとで、～あと、～まえに、～まえ

- (1) 歯をみがいて寝た。
- (2) 田中くんが{帰ってから／帰ったあとで}、山田さんが来ました。
- (3) 私の家を出たあと、彼は一晩中酒を飲んでいたので。
- (4) 彼が部屋に戻るまえに、彼女は帰った。
- (5) 彼が部屋に戻るまえ、私は彼女と彼について話していた。

これだけは

<接続> V 夕 + あとで／あと V 辞 + まえに／まえ V テ + から

◆ここでは出来事が連続して起こる**継起**を表す表現を考えます。

まず、「PでQ」は二つの出来事が起こったということを表すだけであり、それが継起と**因果関係**のどちらを表すかはPとQの関係によります。例えば、(1)は継起と解釈されますが、(6)は因果関係的です。

(6) 歯をみがいて口の中がすっきりした。

◆「PしてからQ」と「PあとでQ」は共にQがPより後に起こることを表し、(2)のように多くの場合交換可能です。一方、「QまえにP」は「PしてからQ」「PあとでQ」を逆の時間関係で述べたもので、通常互いに交換可能です。なお、この場合、「あと(で)」の前はタ形になるのに対し、「まえ(に)」の前は辞書形になることに注意してください。

◆これに対し、「PあとQ」はP以後Qという動作・状態が継続することを、「PまえQ」はP以前にQという動作・状態が継続していたことを表します。例えば、(3)は「私の家を出る」という出来事の後、彼が「酒を飲む」という行為が続けていたことを表し、(5)は「彼が部屋に戻る」という出来事の前に、彼女と私が「話す」という行為が続けていたことを表します。

もう少し

◆「PしてからQ」と「PあとでQ」は交換可能な場合も多いですが、そうでない場合もあります。両者の違いは、「PしてからQ」がPに関心がある表現であるのに対し、「PあとでQ」はPとQの前後関係を客観的に述べたものであるという点にあります。例えば、次の(7)では「歯をみがく」ことは「寝る」ための準備的動作であり重要な行為として解釈されますから、「PしてからQ」は適当ですが、PとQの前後関係は確定していて取り立てて言う必要もないため「PあとでQ」は不自然になります。

(7) 歯を{○みがいてから／？みがいたあとで}寝なさい。

◆「PまえQ」は継続的なものとして時を設定しますので、Qには命令・意志・勧誘などの文は来にくくなります。

(8) 暗くなる{○まえに／×まえ}帰ってきなさい。

(9) 彼が来る{○まえに／×まえ}いちごを食べてしまおう。

◆「PあとQ」でもQには命令・意志・勧誘などの文は来にくいですが、この場合は「PあとでQ」も使いにくく、「PてからQ」のほうが適当な場合が多いです。これは、こうした文の場合、QよりもPのほうに意味的な重点があるためです。

- (10) 金を{×ためたあと／?ためたあとで／○ためてから}旅行に行こうと思っています。

◆継起を表す表現にはこの他に「～たら」「～と」がありますが、これらと「～てから・～あとで」は置き換えられない場合が多く、置き換えられるときでもニュアンスが異なることが多いです。

まず、「～たら」「～と」が条件を表すときには置き換えられません。

- (11) a. ○このボタンを{押したら／押すと}お湯が出ます。
b. ×このボタンを{押してから／押したあとで}お湯が出ます。

次のように、前件と後件に明確な時間的前後関係があり、前件が後件のきっかけと解釈できる場合は「～たら」も「～てから・～あとで」も使えます。

- (12) a. 夕立が降たら涼しくなった。
b. 夕立が降ってから涼しくなった。
c. 夕立が降ったあとで涼しくなった。

また、次のように、前件と後件が同一主語による連続的動作である場合は「～と」も「～てから・～あとで」も使えますが、「～てから・～あとで」のほうが前件と後件の間の時間的前後関係がはっきりと出ます。

- (13) a. 彼は部屋に入ると上着をハンガーにかけた。
b. 彼は部屋に入ってから上着をハンガーにかけた。
c. 彼は部屋に入ったあとで上着をハンガーにかけた。

なお、次の(14)の「～と」「～たら」などは因果関係を表しますが、(15)のようにそれを「～てから・～あとで」に変えると、そうした因果関係の読みはなくなり、継起を表すようになります。

- (14) ボタンを{押すと／押したら}切符が出てきた。
 (15) ボタンを{押してから／押したあとで}切符が出てきた。

3. ～までに、～まで、～あいだに、～あいだ、 ～うちに

- (1) 1時までに{a. 私はここにいた／b. 氷は溶けた／
c. 私はここに来た／d. 私は宿題をした}。
 (2) 1時まで{a. ○私はここにいた／b. ×氷は溶けた／
c. ×私はここに来た／d. ○私は宿題をした}。
 (3) 彼が出かけているあいだに{a. ×私はここにいた／b. ○氷は溶けた／
c. ○私はここに来た／d. ○私は宿題をした}。
 (4) 彼が出かけているあいだ{a. ○私はここにいた／b. ×氷は溶けた／
c. ×私はここに来た／d. ○私は宿題をした}。
 (5) 子供が{a. 寝ている／b. 目を覚まさない}うちに洗濯をした。

これだけは

<接続> V [辞] / N + まで (に)

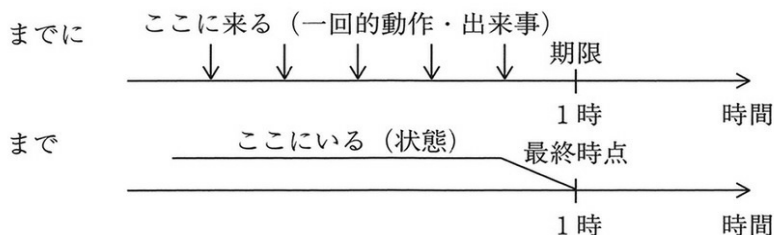
V [辞] / A [辞] / Naな / Nの + あいだに / あいだ

V [辞]・[否] / A [辞] / Naな / Nの + うちに

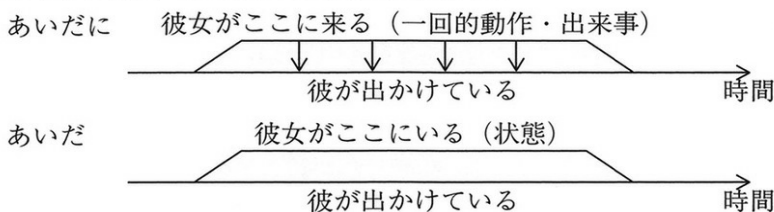
◆ここでは、格助詞「に」の有無が意味の違いに明確に反映している従属節「～までに」「～まで」「～あいだに」「～あいだ」と「～うちに」を取り上げます。

「～までに」は動作が行われたり出来事が起こったりする期限を表します。例えば、(1)cは「ここに来る」という行為を行う期限が「1時」とであると述べています(1時以前であればいつでもかまいません)。なお、「いる」は通常は状態動詞ですが、この場合は「いるための行為をする」という意味であり、「来る」に近い意味になっているため使えるのです。

◆「～まで」は状態が継続する最終時点を表します。例えば、(2)aは「ここにいる」という「状態」を「1時」まで継続させることを表します。この場合、「溶ける」のような変化動詞や「来る」のような往來に関する動詞は一回的な出来事を表すため、「～まで」といっしょには使えません。両者の違いを図示すると次のようになります。



◆「～あいだに」と「～あいだ」の関係も「～までに」と「～まで」の関係と平行的です。図示すると次のようになります。



◆「～まで(に)」と「～あいだ(に)」の違いは、前者では動作や状態が成立すべき期限(最終時点)が指定されるのに対し、後者では動作や状態が成立する時間的範囲が指定されているということです。

◆「～うちに」は「～あいだに」「～まえに」との使い分けが問題です。

- (6) a. 子供が寝ているうちに洗濯をした。
 b. 子供が寝ているあいだに洗濯をした。
 c. 子供が目覚ますまえに洗濯をした。

まず、「PうちにQ」と「PあいだにQ」との違いは、「うちに」には「PでないとQができない(だから、PのあいだにQをする)」というニュアンスが強いのにに対し、「あいだに」にはそうしたニュアンスがあまりないということです。なお、「うちに」の場合は「Pでないと」の部分に否定が含まれていることから、(7)aのように普通形の否定形に後接できますが、「あい

だに」は否定形には後接できません。

- (7) a. ○子供が目を覚まさないうちに洗濯をした。
b. ×子供が目を覚まさないあいだに洗濯をした。

一方、「PうちにQ」と「P'まえにQ」とには次のような違いがあります。まず、「P'」は意味的にPの反対になるものです。例えば、(6)で言えば、「寝ている(P)」の反対の「目を覚ます」が「P'」になります。「うちに」と「まえに」のニュアンスの違いは「うちに」と「あいだに」の違いと同様です。また、「あいだに」と同様、「まえに」も否定形には後接できません。

- (8) ×子供が目を覚まさないまえに洗濯をした。

もう少し

◆ここで、動詞の種類と「～までに」「～まで」の関係をまとめると、次のようになります。

	までに	まで
状態動詞（「いる」）	○（動作的解釈）	○
変化動詞（「溶ける」） 位置変化動詞（「来る」）	○	×
動作・出来事を表す動詞（「(宿題を)する」）	○（完結）	○（未完結）

状態動詞と変化動詞（「来る」などの位置変化動詞を含む）の例は(1)(2)で見ました。次に動作・出来事を表す動詞について見てみましょう。

- (9) a. 1時までに宿題をした。（×しかし、宿題は終わらなかった。）
b. 1時まで宿題をした。（○しかし、宿題は終わらなかった。）

◆「(宿題を)する」のような動作・出来事を表す動詞が、(9)aのように「までに」と共に使われると、その動作や出来事が完結した（「し終わった」）ことを表します。一方、(9)bのように「まで」と共に使われると、その動作・出来事が未完結である（「し終わっていない」）ことを表します。各々に（ ）の中の文を続けられるか否かに違いがあるのはこのためです。こうし

た違いが生じるのは、「までに」が完結的（「点的」）に出来事を描くのに対し、「まで」は未完結的（「継続的」「線的」）に出来事を描くためです。

◆一般に、「までに」のように動作・出来事を点的にとらえるには、その動作・出来事自体が全体的にとらえられていなければなりません。本来語彙的意味としては終わりを持たない一般の動作・出来事を表す動詞は、そのままでは全体的にはとらえられませんが、終結点を持てば全体的にとらえられるようになります。(9)aの「した」が動作の完結を表すのはこのためです。また、「いる」のような状態動詞が「までに」と使われるときには「いるための動作をする」といった出来事を表すようになるのも同様の理由によるものです。

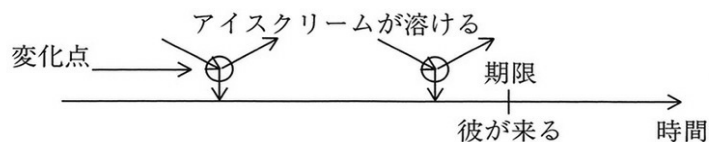
ただし、こうした動詞の中には「泳ぐ」のように全体量が想定しにくいものもあり、その場合は「までに」とは共に使いにくくなります。

(10) a. ? 1時までにプールで泳ぎました。

b. ○ 1時までプールで泳ぎました。

◆一方、変化動詞の場合は「変化点」(11)の○)と期限（「彼が来る」時点）の前後関係を表せるため適格となるのです。

(11) 彼が来るまでに、アイスクリームは溶けた。



◆これに対し、「まで」は出来事を線的に描きますから、状態動詞や一般の動作・出来事を表す動詞のように、本来継続的（線的）な動詞はそのまま使えますが、変化動詞のような点的な動詞は使えないのです。

◆なお、アスペクト（→§6）のうち、終結を表す「～終わる」が付いた動詞は、「までに」といっしょには使えますが、「まで」とは使えません。一方、継続を表す「～続ける」が付いた動詞は、「まで」といっしょには使えますが、「までに」とは使えません。このことも上のことから説明できます。

- (12) a. 昨日 { ○までに / ×まで } レポートを書き終わった。
b. 昨日 { ×までに / ○まで } レポートを書き続けた。

◆ここで「までに」と「まで」について考察した現象は、基本的にはすべての「に」を伴う時間表現と「に」を伴わない時間表現について成り立ちます。

4. そして、それから

- (1) 太郎は両親に手紙を書いた。そして、すぐポストに入れに行った。
(2) 夕日が海に沈みました。それから、夜がやってきました。

これだけは

◆「そして」「それから」は時間的に連続して起こる二つの出来事を前件・後件としてつなぐのに用いられ、この用法では両者の意味にほとんど違いはありません。(1)(2)は接続詞を互いに置き換えることができます。

ただし、「それから」は、(3)のように前件の起こった時を起点として「それ以来」の意味でも使うことができます。この場合、「そして」に置き換えることはできません。

- (3) 彼は3年前事故で大けがをした。{ ○それから / ×そして }、一歩も歩けない。

もう少し

◆「そして」「それから」は複数のことがらや事物を並べる用法もあります。

- (4) 彼女は頭がよく有能な秘書だ。{ そして / それから }、気立てもいい。
(5) 昨日の会議には、田中さん、森田さん、{ そして / それから } 佐藤さんが出席した。

このような「そして」「それから」は、「それに」(→§21) とほぼ同じ意味です。ただし、3形式のうち「それから」のみが使える場合として、会話で後から新しい情報を付け加える用法があります。

- (6) 連絡は以上です。…あ、{ ○それから / ?そして / ?それに }、次回の予定は9日です。

もう一步進んでみると

- ◆ 1～3で、「に／で」の有無と従属節による時の設定のしかたの違いについて考えましたが、こうした問題のとらえ方は寺村秀夫(1983)が初めて提示したものを益岡隆志(1997)がさらに一般化したものです。
- ◆ 3で、動詞の種類と「に」の有無の関係を見ました。こうした動詞分類はアスペクト(→§6)を考える際にも重要です。これについては、金田一春彦(1950)以来、多くの研究がありますが、それらを簡潔にまとめ、英語との対照という観点から整理したものに三原健一(1997)があります。

○参考文献

- 金田一春彦(1950)「国語動詞の一分類」金田一春彦編(1976)『日本語のアスペクト』むぎ書房に再録
 寺村秀夫(1983)「時間的限定の意味と文法的機能」寺村秀夫(1993)『寺村秀夫論文集Ⅰ 日本語文法編』くろしお出版に再録
 益岡隆志(1997)『新日本語文法選書2 複文』くろしお出版
 三原健一(1997)「動詞のアスペクト構造」中右実編『日英語比較選書7 ヴォイスとアスペクト』研究社出版

§23. 複文と接続詞(3)－理由・目的－

ここでは次のような表現を扱います。

- | | |
|--------------|---------------------|
| ・理由を表す従属節 | ～から、～ので |
| ・目的を表す従属節 | ～ために、～（し）に、～のに、～ように |
| ・理由・目的を表す接続詞 | だから、それで、そのために |

1. ～から

- (1) 昨日は体調が悪かったから、早めに布団に入った。

(2) 今日は日曜日だから、田中さんは家にいるだろう。

(3) この道は車がよく通るから、気をつけてね。

これだけは

<接続> 普／丁 + から

◆「～から」は理由を表す形式の中で最も代表的なものです。普通形と丁寧形の両方に接続しますが、(4)のように後件が丁寧形の場合は、bのように「～から」の前も丁寧形にしたほうがより自然です。

- (4) a. 今日は日曜日だから、田中さんは家にいるでしょう。
b. 今日は日曜日ですから、田中さんは家にいるでしょう。

ただし、ことがらの原因を表す「～から」(後述)は、通常、後件の形にかかわらず普通形で表されます。

◆「～から」によって表される理由は、厳密には、後件に表されたことがらの原因である場合 ((1)) と、後件に表された話し手の判断や意図の根拠である場合 ((2)(3)) があります。

- (5) 今はお歳暮の季節ですから、デパートは混んでいるでしょう。
- (6) 雨が降ったから、道がぬれているのです。

(5)の「今はお歳暮の季節だ」は、話し手が「デパートは混んでいるだろう」という判断をした理由であるのに対し、(6)の「雨が降った」は、「道がぬれている」という事実そのものの原因を示しています。両者の違いは、理由の部分を探ねる文を考えてみるとはっきりします。

- (5)' # どうしてデパートは混んでいるのですか？
- (6)' どうして道がぬれているのですか？

もう少し

◆「～から」には理由を表すとは言えない用法もあります。

- (7) 必ず明日返すから、1万円貸してくれ。
- (8) 冷蔵庫にビールが冷えていますから、召し上がってください。
- (9) 8時に迎えに行くから、いっしょにレストランへ行こう。

この用法での後件は、命令・依頼・勧誘など相手に何らかの行為を要求する表現に限られます。相手が後件の行為を行うにあたって参考になる条件 ((7)) や、その行為を可能にする準備・段取り ((8)(9)) を提示するもので、広い意味で後件の前提となる情報を示す働きをしています。

◆また、「～から」には終助詞的用法と呼ばれるものもあります。

- (10) (出かけるときに) すぐに帰りますから。 cf. すぐに帰ります。
- (11) (別れ際に) 連絡待ってるから。 cf. 連絡待ってる。

この用法は、上で見た用法の前件 (前提情報) だけを述べるものです。(10)(11)の後件部分を復元すれば、例えば次のようなものになります。

(10)' すぐに帰りますから、心配しないでください。

(11)' 連絡待ってるから、ちょうだいね。

このような隠れた後件の存在を感じさせるところから、(10)(11)には、「～から」なしで言い切った場合と違う、聞き手に何らかの自分の要求を察してもらおうとするような含みが表されます。

2. ～ので

(1) 昨日は仕事が休みだったので、映画を見に行きました。

(2) 風邪を引いたので、水泳の練習は見学させてください。

(3) 全員そろったようですので、会議を始めたいと思います。

これだけは

<接続> ㊦／㊧ + ので (ただし、Na・Nな + ので)

◆「～ので」も「～から」と同じく普通形と丁寧形の両方に接続します。ただし、「～ので」は、後件が丁寧形の場合、前件が普通形でも違和感なく使えます ((1)(2))。もちろん、(3)のように前件も丁寧形にすると、(3)'のように前件が普通形の場合に比べてより丁寧な表現になります。

(3)' 全員そろったようなので、会議を始めたいと思います。

◆「ので」も、「から」と同様に、後件のことがらの原因 ((1)) と、話し手の判断や意図の根拠 ((2)(3)) の両方を表すことができます。

もう少し

◆「～ので」も、「～から」と同様に、理由から外れた前提情報を示す用法や、終助詞的用法で使われることがあります。

(4) 折り返しお電話いたしますので、少々お待ちください。

(5) 折り返しお電話いたしますので。

◆以上に見たように、「～から」と「～ので」の用法は大部分重なっていますが、いくつかの違いも見られます。

① 「～から」は話し手の判断を表す「だろう」に接続できますが、「～ので」はできません。

(6) 道路が混んでいるだろう {○から／×ので}、早めに出発しよう。

② 次のような理由を尋ねる質問に対して答える場合は、「～から」を用いるのが普通です。

(7) A：どうして図書館が混んでいるのですか。

B：試験が近いからです。

これは、「～から」で表された理由は、「～ので」の場合と違って、疑問文の焦点 (→§29) になることができるためです。次の例でも「～から」しか使えません。

(8) 試験が近いから、図書館が混んでいるのですか。

また、「～から」のみが「～のは～からだ」という強調構文 (→§31) で用いることができるのも同様の現象です。

(9) 図書館が混んでいるのは、試験が近いからだ。

③ 後件が命令・勧誘・意志などのときは「から」のほうが自然です。

(10) 時間がない {○から／?ので}、急げ。

(11) 明日は早い {○から／?ので}、もう寝よう。

ただし、後件が丁寧形のときは「ので」も自然に使えます。

(10)' 時間がない {○ですから／○ので}、急いでください。

(11)' 明日は早い {○ですから／○ので}、もう寝ましょう。

3. ～ために

- (1) 山本さんはパソコンを買うためにアルバイトをしています。
 - (2) 私は車の免許を取るために数十万円使った。
 - (3) 町内の安全のために役員が毎晩見回りをしている。

これだけは

<接続> V [辞]/Nの + ために/ためのN

◆「～ために」は**目的**を表す形式の中で最も代表的なものです。注意すべき点は、「PためにQ」で、Pは意志的な動作であり、PとQの動作主は同一であることです。

◆「～ために」の「に」は省略されることがありますが、意味は同じです。

- (4) 山本さんはパソコンを買うためアルバイトをしています。

もう少し

◆「～ために」は人物や団体を表す名詞に接続して、それに対する**利益**を表すこともあります。

- (5) 母親は子供たちのためにケーキを焼きました。
- (6) 彼は会社のために働きすぎて病気になった。

◆「～ために」には理由を表す用法もあります。

- (7) 風邪を引いたために授業を欠席しました。
- (8) 子供が熱を出したために仕事を休んだ。

(7)はPが意志的な動作でないこと、(8)はPとQの動作主が別であることから、目的ではなく理由を表していると解釈されます。

「～ために」は、(7)(8)のようにことがらの原因を表すことはできますが、判断の根拠を表すことはできません。そのため、「～ために」の後件に話し

手の判断や命令・依頼・意志などの表現が来ることはありません。

- (9) a. ○雨が降っているために道がぬれています。
 b. ×雨が降っているために今日の遠足は中止でしょう。(判断)
 c. ×雨が降っているために傘を持っていきなさい。(命令)

4. ～(し)に、～のに

- (1) スーパーへ買い物をしに行きました。
 (2) 父は毎日うちへ昼ごはんを食べに帰ってくる。
 (3) この道具は野菜の皮をむくのに使います。
 (4) この容器は食品を冷凍するのに便利だ。

これだけは

<接続> V_{マス} + に

V_辞 + のに

◆「～しに」は移動動作の目的を表します。「PしにQ」において、PとQは同一主体の意志的な動作であり、また、Qは「行く、来る、帰る、戻る、上がる、降りる」などの移動動詞に限られます。

「買い物、勉強」など動作を表す名詞に目的を表す格助詞「に」が付いた場合もほぼ同じ意味を表すことができます。

- (1)' スーパーへ買い物に行きました。

◆「～のに」は、「使う、用いる、役立つ」などの使用を表す動詞や形容詞で表される「必要だ、便利だ、有用だ」などの目的を表すのに使われます。

「～しに」と同様に、「～のに」も「動作を表す名詞+に」と置き換えることができる場合があります。

- (4)' この容器は食品の冷凍に便利だ。

もう少し

◆「～ために」はPが移動動作の場合や、使用を表す動詞の場合にも用いることができるので、「～しに」「～のに」との違いが問題になります。

- (5) 昼食を{食べるために／食べに}出かけた。
- (6) この網は魚を{焼くために／焼くのに}使っている。

両者の違いは、「～しに」「～のに」の場合、PとQの間に他の要素が入ると不自然になる点です。これは、「PしにQ」「PのにQ」では、PとQが密接に結び付いたひとつなぎの動作のように扱われるためです。

- (5)' 昼食を{○食べるために／?食べに}わざわざ出かけた。
- (6)' この網は魚を{○焼くために／?焼くのに}母が毎日使っている。

5. ～ように

- (1) はしで食べられるように肉を小さく切っておいてください。
- (2) 蚊が入らないように網戸をつけています。
- (3) 先生は、留学生もわかるように、ゆっくり説明した。

これだけは

<接続> V辞・否 + ように

◆「～ように」は望ましい状態・状況を述べることにより目的を示す表現です。例えば、(1)では「はしで食べられる」という状況を作ることを「肉を小さく切る」ことの目的として示しています。「PようにQ」で、Qは意志的な動作ですが、Pは意志的な動作ではなく、可能形・否定形や「なる」などの状態を表す動詞が来ます。PとQの主体は同じ場合((1))も異なる場合((2)(3))もあります。

◆「～ように」と「～ために」とは通常置き換えられません。両者は基本的

に次のように使い分けられています。

- (4) 進学する { ×ように / ○ために } 貯金した。(意志的・同一主体)
- (5) 進学できる { ○ように / ×ために } 貯金した。(無意志的・同一主体)
- (6) 子供が進学できる { ○ように / ×ために } 貯金した。
(無意志的・異主体)

もう少し

◆複合表現の「～ようにする」(→§7)は、目的を表す「～ように」に連続するものです。

- (7) a. 戸外がよく見えるように窓を開けた。
- b. 戸外がよく見えるようにした。

6. だから、それで、そのために

- (1) 今日は都合が悪いんです。だから、来週また来てください。
- (2) 財布を忘れて取りに帰った。それで、約束に遅れてしまった。
- (3) ゆうべ近所で火事があった。そのために、騒がしくて眠れなかった。

これだけは

◆接続詞「だから」「それで」「そのために」は、基本的には、前件に理由、後件にその帰結を述べる表現です。それぞれ「から」「ので」「ために」との関連が見られ、次のように、複文と連文(接続詞でつないだ二つの文)で同じ意味を表せる場合があります。

- (4) 彼はだれにでも親切だから、みんなから慕われている。
- (5) 彼はだれにでも親切だ。だから、みんなから慕われている。

しかし、すべての用法が重なるわけではなく、置き換えられない場合もあり

ます。例えば、次のような前提情報を示す「～から」や「～ので」は、「だから」「それで」に置き換えることができません。

- (6) a. 1時に駅で待っているから、迎えに来てください。
- b. ×1時に駅で待っています。だから、迎えに来てください。

◆「だから」は後件に事実・話し手の判断・命令・依頼・意志などいろいろな表現を述べることができます。「それで」と「そのために」は、通常、後件に来るのは事実で((2)(3))、判断や命令・依頼・意志などは使えません（これは「～から」「～ので」に見られるのと同様の制約です）。

- (7) 今日は日曜日だ。{ ○だから／×それで／×そのために }、デパートは混んでいるだろう。(判断)
- (8) 急いでいるんです。{ ○だから／×それで／×そのために }、早くしてください。(依頼)
- (9) 明日は試験だ。{ ○だから／×それで／×そのために }、今夜は早く帰ろう。(意志)

◆「それで」については「で」、「そのために」については「そのため」のように省略された形も同じ意味で使われます。

もう少し

◆「そのために」は目的を表していると解釈できる場合もあります。

- (10) 私は来年留学します。そのために今アルバイトをしているんです。

◆「だから」と「それで」は、次のように、会話で相手の発言を受けて使うこともできます。次の例は、帰結に当たる事実を既に知っている状況で、相手から理由を聞き、納得したことを示す用法です。

- (11) A：山本さん、海外旅行に行っているんだって。
- B：そう。{ だから／それで }、電話してもいなかったんですね。

◆その他、会話での用法として、次のようなものもあります。

① 相手に発言の続きを述べるように促す

(12) 学生：すみません。この1週間とても忙しかったんです。

教師：{だから／それで}？

学生：発表の準備ができませんでした。

② 相手との意見や感情の食い違いがあるような状況で、幾分いらだたしさを込めて主張する（「だから」のみが使える）

(13) 夫：遅くなって、ごめん。

妻：遅いわねえ。寝ないで待っていたのよ。ひどいじゃないの。

夫：だから、謝っているだろう。

このような会話における様々な用法については、中上級編で詳しく扱います。

もう一步進んでみると

◆理由の表現に関する研究の中で、これまで最も大きなテーマになってきたのは「から」と「ので」の違いについてです。永野賢（1952）が「「から」は主観的、「ので」は客観的」という見方を示して以来、それに対する反論も含め多くの研究がなされてきました。このテーマについての研究の概観と現在も残る問題点については、岩崎卓（1995）に簡潔にまとめられています。

◆目的を表す「ために」「～しに」「のに」「ように」の使い分けについては、前田直子（1995）に詳しく整理されています。

○参考文献

- 岩崎 卓（1995）「ノデとカラー原因・理由を表す接続助詞一」宮島達夫・仁田義雄編『日本語類義表現の文法（下）』くろしお出版
- 永野 賢（1952）「「から」と「ので」はどう違うか」服部四郎他編（1979）『日本の言語学第4巻文法Ⅱ』大修館書店に再録
- 前田直子（1995）「スルタメ(ニ)、スルヨウ(ニ)、シニ、スルノニ一目的を表す表現一」『日本語類義表現の文法（下）』くろしお出版

§24. 複文と接続詞(4)－条件－

ここでは次のような表現を扱います。

- ・条件を表す従属節 ～と、～ば、～たら、～なら
- ・条件に関連する接続詞 すると、それなら、それでは、では

条件とは、二つのことがら（前件と後件）の依存関係、すなわち、後件が前件に依存して起こるという関係を表すものです。

- (1) 携帯電話が { あると／あれば／あったら／あるなら }、いつでも連絡できます。

条件の表現に関して難しい点は上の四つの接続形式の使い分けなので、以下ではこの点に重点を置いて条件の表現を見ていくことにしましょう。

1. ～と

- (1) 3月の後半になると、桜が咲き始めます。
(2) 毎朝起きると、紅茶を1杯飲みます。
(3) お金を入れてボタンを押すと、切符が出てきます。

これだけは

<接続> 辞／否 + と

◆「～と」の基本的な用法は反復的・恒常的に成り立つ依存関係（Pが起これば通常Qが起こるという関係）を表すものです。自然現象（(1)）や習慣

((2))、機械の操作と結果 ((3)) などがその典型的な例です。

◆「～と」は反復的・恒常的な依存関係を表すのが普通なので、後件に意志や希望・命令・依頼などの表現が来ることはありません。

- (4) a. ×桜が咲くと、花見に行くつもりだ。
- b. 桜が咲いたら、花見に行くつもりだ。
- (5) a. ×食事ができると、呼んでください。
- b. 食事ができたら、呼んでください。

もう少し

◆一方、「～と」は前件・後件とも既に起こったことから（**事実的条件**）を表すこともできます。

- (6) 窓を開けると、冷たい風が入ってきた。
- (7) 田中さんにメールを送ると、すぐ返事が来ました。

(6)(7)はいずれも前件が契機となって後件が起こったという関係を表しています。これと似ているのが、**発見**と呼ばれる、前件の動きをした結果後件のことから発見したという関係を表す用法です。

- (8) デパートへ行くと、チョコレートが山積みになっていた。
- (9) 四つ角を曲がると、すぐ彼のマンションが見えた。

◆以上からわかるように、「～と」は仮定性が薄く、本質的には典型的な条件というより、二つのことから間の継起関係を表す表現だと言えます。

このような「～と」の本質は、次のような、同じ主体の連続した動作を表す用法を持つことにも表れています。これは既に条件から外れた用法です。

- (10) 男は玄関に現れると、断りもせずに上がり込んできた。
- (11) 先生は教室に入ってくると、早速授業を始められました。

2. ～ば

- (1) ちりも積もれば山となる。
- (2) 品がよくて安ければ、よく売れます。
- (3) 試験に合格すれば、大学院生になれます。

これだけは

◆「～ば」の基本的な用法も恒常的な依存関係を表すことです。ことわざに代表されるような一般的法則によく用いられます。

◆「～と」と似ている面もありますが、「～ば」は「～と」と違って、**仮定条件**によく用いられます。

- (4) 明日もし雨が{○降れば／×降ると}、どうしますか。

もう少し

◆「～ば」の文では、原則として、後件に意志・希望・命令・依頼などの表現が来ることはありません。この点で後に述べる「～たら」とは異なります。

- (5) {×帰宅すれば／○帰宅したら}、必ずうがいをなさい。

ただし、前件の述語が状態性の場合 ((6))、および前件と後件の主体が異なる場合 ((7)) は例外となります。

- (6) わからないことがあれば、いつでも聞いてください。
- (7) 父が許してくれれば、彼と結婚するつもりです。

また、「～ば」の文では、「～と」と違って前件も後件も既に起こっている事実的条件を表すことはできません。

- (8) 注射を{×打ってもらえば／○打ってもらうと}、すぐ直りました。

◆「～ば」は、後件の成立が望まれているという文脈で、そのためにどんな

前件が必要かを述べるような文（前件に焦点のある条件文）には、最もふさわしい形式です。

(9) A：どうすれば、服が安く買えますか。

B：バーゲンの時期まで待てば、安く買えますよ。

そのため、下の例の場合「～ば」と「～と」では意味に若干違いがあります。

(10) このボタンを{押せば／押すと}、回数券が買えます。

回数券の買い方を尋ねられたときの答えとして普通用いられるのは「～ば」のほうで、「～と」を使うと一般に券売機の使い方を説明している感じがします。

◆上で述べた、前件に焦点のある条件を表す用法を持つことと関連することですが、「～ば」の文では後件に望ましいことがらが来ることが多く、望ましくないことがらの場合は「～ば」は用いにくくなります。

(11) 徹夜{？すれば／○すると／○したら}、体調が悪くなります。

逆に、前件に「さえ」などを伴って、後件が成立するための最低条件を示す用法は、「～ば」にしかありません。

(12) お金さえ{○あれば／×あると／？あったら}、遊んで暮らせる。

◆また、現実と異なることがらを仮定する条件（反事実的条件）の場合も、普通「～ば」が用いられます。

(13) あと1,000円あれば、このコートが買えるのに。

3. ～たら

- (1) 雨が降ったら、キャンプは中止です。

(2) 午後になったら、散歩に行きましょう。

これだけは

◆「～たら」は、特定の、一回的な依存関係を表すのが典型的な用法です。(1)(2)からわかるように、「～たら」は、(1)のように前件が成立するかどうかわからない場合（**仮定条件**）にも、(2)のように前件が成立することがわかっている場合（**確定条件**）にも用いることができます。このうち仮定条件の場合のみ「～ば」に置き換えることができます。

- (1)' 雨が降れば、キャンプは中止です。（仮定条件）
- (2)' ×午後になれば、散歩に行きましょう。（確定条件）

◆「～たら」は後件に意志・希望・命令・依頼などが来る文でも用いることができます。

- (3) 山本さんに会ったら、よろしく伝えてください。

◆「～たら」は前件・後件ともに成立している事実的な条件を表すことができます。この点では「～と」と共通しています。

- (4) 窓を開けたら、冷たい風が入ってきた。

4. ～なら

- (1) A：携帯電話を持っています。
B：携帯電話があるなら、いつでも連絡できますね。
 - (2) A：スーパーへ行ってくるよ。
B：スーパーへ行くのなら、しょうゆを買ってきて。
 - (3) もしスーパーへ行くのなら、しょうゆを買ってきて。

これだけは

<接続> ㊦ + なら（ただし、Na・N~~な~~、Na・Nである+なら）

◆「～なら」の前に「の」(または「ん」)が入ることがありますが、ほとんど同じ意味です。話しことばでは「のだったら (んだったら)」になることもあります。

◆「～なら」は他の3形式とは大きく性格の異なるものです。

「～なら」の用法で最も典型的なのは、(1)(2)のように聞き手の発言を受ける用法です。この場合、聞き手の発言によって新しく知ったことが前件になり、それに基づく帰結が後件として述べられます。

(3)は純粹に話し手が仮定したことがらが前件になっていますが、後件がそれにに基づく帰結であるという点では(1)(2)の例と変わりありません。

もう少し

◆「～なら」が他の3形式と違う点は、前件の述語にタ形と辞書形のいずれも用いることができるという点です。

(4) a. 旅行に行ったのなら、写真を見せてください。

b. 旅行に行くのなら、カメラを持っていくといいですよ。

(4)aの場合、ことがらの前後関係は「前件→後件」の順ですが、bの場合は「後件→前件」です。「～と・～ば・～たら」の文と比べてみましょう。

(5) 旅行に行くと、食欲が出る。

(6) 旅行に行けば、嫌なこともすっかり忘れる。

(7) 旅行に行ったら、昔の友達にばったり会った。

いずれの場合も「前件→後件」の順です。「～と・～ば・～たら」の文では必ず成り立つことがらの前後関係から「～なら」の文は自由であるわけです。これは、「～と・～ば・～たら」を用いた条件の文が、ことがらとことがらの依存関係を示すのに対して、「～なら」の文は、あることがらを仮定することから導かれる帰結(話し手の判断)を後件に述べるものであるからです。

ただし、前件の述語が形容詞など状態性の場合、「～なら」と他の3形式の違いは薄まり、4形式とも使える場合があります(意味は同じではありません)。このセクションの冒頭にも挙げた(1)はそのような例です。

◆話し手の判断は意志・命令などいろいろな形を取ります。従って、「～な

ら」の後件には、「～たら」と同じく、意志・希望・命令・依頼などの表現が可能です。ただし、上述のことからわかるように、両者を使った場合の文の意味は大きく異なります。

- (8) a. パリへ行ったら、おしゃれな靴を買おう
b. パリへ行くなら、おしゃれな靴を買おう。

つまり、aでは「パリへ行く→靴を買う」という前後関係が表されるため「パリで靴を買う」ことになりますが、bでは上のような前後関係は表されず、靴を買う場所はパリとは限りません。同じく前後関係についての「～たら」と「～なら」の違いがわかりやすい例として次のようなものもあります。

- (9) (飲酒運転禁止の標語) 飲んだら、乗るな。乗るなら、飲むな。

「飲んだら」は「飲んだあとは」の意味になるのに対し、「乗るなら」は「乗るまえには」の意味になります。

5. 4形式の使い分け

「～と・～ば・～たら・～なら」のそれぞれの特徴を見てきましたが、これらを完全に把握して使い分けるのは簡単ではありません。以下に学習者が気をつけるべき最低限のポイントをまとめておきましょう。

これだけは

◆使える範囲が最も広いのは「～たら」です。したがって、最低限の知識として、「～たら」が使えない場合を知っておけば、不自然な文を作らずに済みます。

「～たら」が使えないのは、前件のことがらを仮定して後件にその帰結(話し手の判断、命令、希望、意志など)を述べる場合(「～なら」を使う場合)です。

- (1) 市役所へ行くなら、地下鉄が便利です。
(2) 大学院に進むなら、この本を読みなさい。

このような場合に「～たら」を用いると、不自然な文になったり、意味が変わったりします。(2)'は前件と後件の前後関係が(2)と変わってしまいます。

(1)' ×市役所へ行ったら、地下鉄が便利です。

(2)' 大学院に進んだら、この本を読みなさい。

ただし、上述のように「のだったら (んだったら)」の形は「～なら」と同じ意味で使います。

もう少し

◆さらに、「～たら」でも間違いではないが他の形式のほうがより自然な場合をまとめておきましょう。

① 前件に焦点のある条件文の場合、「～ば」がふさわしい

(3) だれに聞けば、田中さんの住所がわかるでしょうか。

② 後件が成立するための最低条件を表す場合、「～ば」がふさわしい

(4) お金さえ払えば、だれでも入会できる。

③ 反事実的条件を表す場合、「～ば」がふさわしい

(5) あと10分早く出れば、バスに間に合ったのに。

④ 恒常的・一般的な条件の場合、「～ば」または「～と」がふさわしい

(6) 駅から近ければ、便利です。

(7) 春になると、観光客が増えます。

なお、①～③の場合、「～と」は使えません。

(8) ? だれに聞くと、田中さんの住所がわかるでしょうか。

(9) ×お金さえ払うと、だれでも入会できる。

(10) ? あと10分早く出ると、バスに間に合ったのに。

◆以上が4形式の基本的な使い分けですが、関西方言では「～たら」がよく使われるなど方言差もあるので、注意が必要です (→コラム「ことばのゆれ」)。

6. すると、それなら、それでは、では

- (1) 窓を開けた。すると、涼しい風が入ってきた。
(2) 窓を開けた。すると、知らない男が立っていた。
(3) A：スーパーに行ってくるよ。
B：それなら、しょうゆを買ってきて。

これだけは

◆上のような接続詞は形からわかるように意味の上で条件に連続するものです。それぞれ、下のような条件文との平行性を考えれば、意味がつかみやすいでしょう。

- (1)' 窓を開けると、涼しい風が入ってきた。
(2)' 窓を開けると、知らない男が立っていた。
(3)' スーパーに行くなら、しょうゆを買ってきて。

(1)(2)の「すると」は、前件のことがらが契機となって後件のことがらが起こった、または後件のことがらを発見したという関係を、(3)の「それなら」は、前件のことがらを前提に話し手が導き出した帰結を後件に述べるという関係を表しています。

もう少し

◆しかし、上に述べた接続詞と条件文の平行関係が常に成り立つわけではなく、接続詞にしかない用法もあります。「それなら」は、「～なら」の条件文と違って、後の文が疑問文の場合にも使えます。

- (4) A：お金は持ってないんだ。
B：それなら、カードは持ってる？

◆「それなら」に似た接続詞に「それでは（では、じゃ）」があります。置き換えられる場合が多いですが、次のような場面や話題を転換する用法は

「それなら」にはありません。

- (5) それでは、会議を始めます。
- (6) (別れるとき) じゃ、またね。

もう一步進んでみると

◆条件の表現に関する研究は数多くあります。以上見てきた「～と・～ば・～たら・～なら」の用法について簡潔にまとめたものとしては、寺村秀夫(1981)、益岡隆志(1993)、前田直子(1995)などが参考になります。

◆条件を表す形式はこの4形式だけではありません。「とすれば、としたら、とすると」など複合形式の他、普通は条件と呼ばれなくても条件とのかかわりが深く連続性が見られる形式がいろいろあります。例えば、次のような文は条件文に非常に近いものです。

- (1) 雨が降った場合は、ハイキングは中止です。
- (2) 困ったときは、いつでも連絡してください。
- (3) わからないことがある人は、手を挙げてください。

その他、作文の際に条件との使い分けの関連が出てくる表現は、理由、譲歩、時間などいろいろな意味分野にわたります。

以上のような様々な問題については中上級編で扱います。

○参考文献

- 寺村秀夫(1981)『日本語教育指導参考書5 日本語の文法(下)』大蔵省印刷局
 前田直子(1995)「バ、ト、タラ、ナラー仮定条件を表す形式ー」宮島達夫・仁田義雄編『日本語類義表現の文法(下)』くろしお出版
 益岡隆志(1993)「日本語の条件表現について」益岡隆志編『日本語の条件表現』くろしお出版

§25. 複文と接続詞(5)－逆接－

ここでは次のような表現を扱います。

- ・逆接を表す従属節　～ても、～のに、～けれども（けれど、けど、が）
- ・逆接を表す接続詞　しかし、けれども、が、だけど、でも、
それなのに、ところが

逆接とは、広い意味で、前件から予想されるのとは反対のことがらが後件に来るような関係のことを言います。例えば、次の(1)(2)はそれぞれ（ ）内の条件文・理由文の「前件→後件」という関係が成り立たないことを示しています。

- (1) 時間があっても行きません。　（⇔時間があれば行きます。）
- (2) 時間があるのに行きません。　（⇔時間があるので行きます。）

(1)は前件が成立するかどうかわからない（仮定的な）場合であり、(2)は前件が成立している、もしくは成立するとわかっている（事実的な）場合ですが、どちらも逆接と呼ばれます。

1. ～ても

- (1) 雨が降っても、試合は行われます。
- (2) お金がなくても、カードで買い物ができます。
- (3) たとえ結果が不合格でも、絶望することはありません。

これだけは

<接続> テ + も

◆「～ても」は、典型的には、(1)(2)(3)のように**仮定的な逆接**を表します。これは「～のに」「～けれども（けれどetc.）」にはない用法です。

このような仮定的な逆接の場合、「たとえ」「もし」「万一」などの仮定を表す副詞がいっしょに使えることが特徴です。

◆「～ても」は次のように複数の前件を並べて使うこともできます。

- (4) 雨が降っても、風が吹いても、試合は行われます。
 (5) このコップは、落としても、ぶつけても、割れない。

(4)(5)では、二つの前件が共に後件と逆接の関係になっています。このような用法が可能なのは、「～ても」がもともとテ形ととりたて助詞の「も」(→ §26)が組み合わさってできているためです。

◆上の用法に関連して、「疑問語（疑問詞）～ても」の形で使う用法があります。

- (6) 何が起こっても、試合は行われます。

例えば、(6)は(4)に対応してとらえることができ、「雨が降る」「風が吹く」やそれに類するすべての前件について、後件との逆接関係が成り立つことを意味します。

{

 雨が降っても

 風が吹いても

 : (同類の前件)

 }

 → 何が起こっても、試合は行われます。

以下も同様の例です。

- (7) このコップは、どんな衝撃を与えても、割れない。
 (8) こんな名画は、いくらお金を積んでも、手に入らないだろう。

もう少し

◆「～ても」には逆接とは言えない用法もあります。

(9) 湯を冷ますと水ができるし、氷を溶かしても水ができる。

(9)は、「湯を冷ますと水ができる」と「氷を溶かすと水ができる」という、後件が同一の二つの条件文を並べたものと言え、それぞれの前件と後件の間には逆接の関係はありません。この場合、少なくとも後ろの条件文では必ず「～ても」を用いなければなりません（前の条件文で次のように「～ても」を用いることも可能です）。

(9)' 湯を冷ましても水ができるし、氷を溶かしても水ができる。

また、もちろん前件のみを並列させた形もできます。

(9)" 湯を冷ましても、氷を溶かしても、水ができる。

このような用法があることから、「～ても」がもともと「テ形+も」であることがわかります。

2. ～のに

- (1) 3か月間ダイエットをしたのに、ほとんどやせませんでした。

(2) この桃は、高かったのに、全然甘くない。

(3) つとむくんは、まだ5歳なのに、九九を言えるそうだ。

これだけは

<接続> 〔晋〕+ のに（ただし、Na・Nな+ のに）

◆「～のに」はもっぱら**事実的な逆接**に用いられます。前件から本来予想されるのとは食い違うことがらが後件として成立することを述べ、多くの場合それに対する驚きや不満が表現されることが特徴です。

例えば、(2)では「この桃は高かった」という前件から導かれた「この桃は甘い」という予想が裏切られた不満が表されています。

◆「～のに」の文の後件は基本的に事実であることがわかっていることがらです。そのため後件に次のような表現が来ることはありません。

① 命令・依頼・意志などの表現

(4) ×もう8時なのに、もう少し寝ていなさい。

(5) ×もう8時なのに、もう少し寝ていよう。

② 「だろう」「かもしれない」などの話し手の判断を表す表現

(6) ×日曜日なのに、先生は研究室にいるだろう。

③ 質問の表現

(7) ×会社は休みなのに、出勤しますか。

ただし、「のだ」を用いた質問は可能です。これは「のだ」の関連づけの機能によるものです (→§28)。

(8) 会社は休みなのに、出勤するんですか。

もう少し

◆上の①には例外があり、「ある行為をしないこと」を命令したり依頼したりする表現（禁止の表現）は、「～のに」の後件に使うことが可能です。

(9) 風邪を引いているのに、そんな格好で出かけるな。

(10) 謝っているのに、しつこく責めないでください。

ただし、これは既にその行為をしようとしている人に対して言う場合に限られます。

◆また、「～のに」には前件に当たる部分だけを述べる終助詞的用法と呼ばれるものもあります。

(11) A：山本さん、プールで泳いでいるよ。

B：えっ、まだ朝の6時なのに。

(12) (店が閉まっているのを見て) 今日は定休日じゃないのになあ。

これらの例では、通常の「～のに」の後件に当たるのは、相手の発話内容や状況です。つまり、予想外の発話や状況に対して、その予想の前提となっていたことがら（前件）を示すことにより、驚きや意外感を表すのです。

3. ～けれども（～けれど、～けど、～が）

- (1) 毎日アルバイトをしていますが、なかなかお金がたまりません。
(2) 朝から図書館に出かけたけど、休館だった。
(3) 私はせっかちなが、妻はのんびり屋だ。

これだけは

<接続> ㊦／㊧ + けれども、けれど、けど、が

◆「～けれども、～けれど、～けど、～が」の間に意味の違いはありません。以下、これらの形式をまとめて「～けれども」で示します。ただし、文体的な違いはあり、「～けれども」「～けれど」「～けど」の順でより話しことば的になります。「が」は書きことば・話しことばの両方で使われます。

◆「～けれども」はもっぱら事実的な逆接に用いられます。その点は「～のに」と同じであり、上の例もすべて「～のに」に置き換えることが可能です。

- (1)' 毎日アルバイトをしているのに、なかなかお金がたまりません。
(2)' 朝から図書館に出かけたのに、休館だった。
(3)' 私はせっかちなのに、妻はのんびり屋だ。

しかし、ニュアンスは異なり、「～けれども」では、「～のに」のように後件が予想と食い違ふことがらであることに対する驚き・不満・意外感は表されません。逆接の意味自体があまり強くなく、むしろ前件と後件を対比的に並

べて示しているような場合もあります。例えば、(3)もそのような例で、次のようにテ形を使って言い換えても、大きな意味の違いはありません。

(3) 私はせっかちで、妻はのんびり屋だ。

◆「～けれども」の後件には「～のに」のような制限はありません。「～のに」ではできない次のような表現も可能です。

① 命令・依頼・意志などの表現

(4) もう8時だけれども、もう少し寝ていよう。

② 「だろう」「かもしれない」などの話し手の判断を表す表現

(5) 日曜日だけど、先生は研究室にいるだろう。

③ 質問の表現

(6) 会社は夏休みですが、出勤しますか。

もう少し

◆「～けれども」には逆接の意味がまったくない用法もあります。前件で、後件に述べることがらの話題を示したり ((7))、前提となる情報を示したり ((8))、相手に質問や依頼などをするをあらかじめ知らせたり ((9)) するもので、広い意味での**前置き**を提示する表現だといえます。

(7) さっき話した件ですけど、内密にしてくださいね。

(8) 日本には火山がたくさんありますけれども、桜島もその一つです。

(9) ちょっとお尋ねしますが、区役所はこの近くですか。

◆「～けれども」の部分だけを述べる、終助詞的な用法もよく使われます。

(10) すみません、切符を間違えて買ったんですけど。

(11) 明日の会合、ちょっと都合が悪いんですが。

これらの例の続きである後件の部分を復元するとすれば、例えば次のような

ものが考えられます。

(10)' 切符を間違えて買ったんですけど、払い戻してください。

(11)' 明日の会合、ちょっと都合が悪いんですが、欠席していいですか。

つまり、終助詞的な用法は既に見た前置きの用法の前置き部分だけを述べたものととらえることができます。後に来る部分を聞き手に察してもらおうとしているもので、質問や依頼をする場合によく用いられます。

4. それなのに、けれども、しかし、ところが etc.

(1) 1年間一生懸命勉強したそれなのに、希望の大学に入れなかった。

(2) 仕事はうまくいっている。けれども、楽しいことばかりではない。

(3) 私はお金を払おうとしました。ところが、財布がありません。

これだけは

◆ここで扱う逆接の接続詞は大きく次の3グループに分類できます。

① それなのに、なのに (以下、「それなのに」で代表)

② けれども、けれど、だけど、が、でも、しかし

(以下、「けれども」で代表)

③ ところが

このうち「それなのに」と「けれども」については、それぞれ接続形式の「～のに」と「～けれども」と平行的に性格をとらえることができます。(1)(2)を次のように複文にしても、ほとんど意味は変わりません。

(1)' 1年間一生懸命勉強したのに、希望の大学に入れなかった。

(2)' 仕事はうまくいっているけれども、楽しいことばかりではない。

◆「それなのに」を用いると、前件から予想されるのとは食い違うことがらが成立したことに対する驚き・不満・意外感などが表現されます。また、後

件の表現に制限があるのは、「～のに」による複文の場合と同様であり、命令・依頼・意志・質問・話し手の判断などの表現は使えません。

(4) ×あまり行きたくない。それなのに、行こう。

(5) ×彼は病気だ。なのに、仕事に出ているかもしれない。

◆「けれども」の場合は、「それなのに」のようなニュアンスはありません。単に前件と後件を相反することがら、対比的なことがらとして、並べる場合に使われます。ただし、(2)と(2)'を比べると、複文よりも接続詞で二つの文をつないだほうが、逆接の意味が幾分はっきりします。ちなみに、接続詞には前置きを示す用法はありません。

(6) ×ちょっとお尋ねします。が、図書館はどこですか。

もう少し

◆「ところが」は独自の性格を持った接続詞です。後件に命令・依頼・意志・質問・話し手の判断などの表現が使えない点と、後件が予想と食い違うことに対する驚きや意外感が表される点では、「それなのに」と似ています。

(7) 希望の会社に就職できる可能性は低い。{ ×ところが／×それなのに／○けれども } あきらめずに頑張ろう。

(8) このチームは優勝候補の筆頭だった。{ ところが／それなのに／けれども }、初戦であっけなく敗れてしまった。

(三つの接続詞が全て可能だが、意味的には前の二つが近い。)

しかし、ニュアンスは異なり、(3)や次の(9)では「ところが」独自の効果が感じられます。

(9) 大学生ってみんな暇だと思っているでしょう。ところが、寝る暇もないぐらい勉強している人も大勢いるんですよ。

「ところが」の特徴は、単に意外な後件を述べるだけでなく、話し手が前件と後件の対比を承知した上で効果的に表現することにあります。

もう一步進んでみると

◆「～ても」や「～のに」で結ばれた逆接の複文は、**譲歩文**と呼ばれることもあり、主に対応する条件文や理由文との関係から考察されてきました。

逆接についての研究は条件や理由に比べ少ないですが、その中では「譲歩文」を「論理文」の中で位置づけた小泉保（1987）、「～ても」の意味を詳細に検討しその形式の成り立ちから説明した前田直子（1993）などが重要です。また、「～ても」「～のに」「～けれども」の使い分けについては、前田直子（1995）で明解にまとめられています。

「ところが」の特徴については浜田麻里（1995）を参照してください。

○参考文献

小泉 保（1987）「譲歩文について」『言語研究』91

前田直子（1993）「逆接条件文「～ても」をめぐって」益岡隆志編『日本語の条件表現』くろしお出版

———（1995）「ケレドモ・ガとノニとテモー逆接を表す接続形式ー」宮島達夫・仁田義雄編『日本語類義表現の文法（下）』くろしお出版

浜田麻里（1995）「トコロガとシカシ・デモなどー逆接接続詞の談話における機能ー」同上

コラム 複文

複文とは複数の節（述語とそれに伴う様々な要素のまとまり）から構成される文のことです。

- (1) 彼はテレビを見ながら食事をする。
- (2) 夫が帰ってきたとき、妻はもう寝ていた。
- (3) 姉は読書が好きだが、妹はスポーツが好きだ。

複数の節のうち、文末の述語を中心とした節（「彼は食事をする」「妻はもう寝ていた」「妹はスポーツが好きだ」）を**主節**と呼びますが、主節以外の節は、主節に対する関係から**従属節**と**並列節**とに分けられます。(1)の「テレビを見ながら」や、(2)の「夫が帰ってきたとき」のように主節に対して従属的にかかっていくものを従属節、(3)の「姉は読書が好きだが」のように主節と対等の関係にあるものを並列節と言います。

従属節・並列節は、言語要素としてのまとまりが大きくて文に近いものから、より小さくて文から遠いものまで、いくつかの段階に分けられ、これを**文的度合い**といいます。

例えば、「～が」の中には独自の主語や主題が現れますが、「～とき」の中には主語は現れますが、主題は現れません。「～ながら」は主題はもちろん主語も現れません（「～ながら」の主語は常に主節の主語と同一です）。つまり、文的度合いは、「～ながら」「～とき」「～が」の順に高くなります。文的度合いのより高い節はより低い節を中に含むこともできます。

- (4) 【地震は〔彼が〔テレビを見ながら〕 食事をしていたとき〕 起こったが】、1 分ほどでおさまった。

文的度合いは様々な節の文法的性質をとらえる上で大変重要な概念です。

なお、上で挙げたものの他、次のような名詞修飾節や埋め込み節を持つ文も複文に含まれます。

- (5) 母が買ってきた洋服は少し小さかった。
- (6) 太郎は次郎が結婚することを聞いて喜んだ。

§26. とりたて助詞

§2の格助詞は述語と名詞句との意味関係（格）を表すものですが、助詞の中には、格を表すのではなく、出来事に対する話し手のとらえ方を表すものがあります。このタイプの助詞は**とりたて助詞**と呼ばれます。

とりたて助詞には次に示すようなものがありますが、以下では、「も」「だけ」「しか～ない」「ばかり」を扱います。「は」については§27を参照してください。その他のとりたて助詞は中上級編で扱います。

も、だけ、しか～ない、ばかり、は、くらい（ぐらい）、こそ、さえ、すら、だって、でも、など、なら、なんか、のみ、まで

1. とりたて助詞とは

- (1) 中田さんも見舞いに来てくれた。
- (2) 中田さんしか見舞いに来てくれなかった。

これだけは

◆田中という人が入院しているとします。ある日、午前中に吉田さんが、午後から中田さんが見舞いに来たとすると、その日の日記は(1)のようになり、見舞客が中田さんのみだった日の日記は(2)のようになるでしょう。

この(1)と(2)には共通点と相違点があります。まず、共通するのはどちらも

(3)という文を含んでいることです。つまり、(1)や(2)を発する場合、話し手は(3)が事実であることを知っているのです。このように、文中で話し手が事実であることを知っている部分をその文の**前提**と言います(→§29)。

(3) 中田さんが見舞いに来てくれた(こと)

では、(1)と(2)で何が違うのでしょうか。違いは(3)に対する話し手の気持ちにあります。つまり、(1)は「中田さん」に加えて「中田さん以外の人」が見舞いに来たことを暗示し、(2)は(3)に加えて「中田さん以外の人」は見舞いに来なかったことを暗示しているのです。こうした暗示的な意味を**含意**と言います。ここで、(2)の意味関係を図示すると次のようになります。

(4) 中田さんしか見舞いに来てくれなかった。

a. <含意>中田さん以外は見舞いに来てくれなかった

b. <前提>中田さんが見舞いに来てくれた(こと)

このように、文中の要素に付いてその要素やその要素が表す出来事などに対する話し手のとらえ方を暗示することを「取り立てる」と言い、そのことを表す助詞を「とりたて助詞」と言います。(4)からわかるように、各とりたて助詞は、(4)bにあたる前提を持つ点で共通していると同時に、(4)aにあたる、文中に暗示される話し手の気持ちの部分で互いに異なっているのです。

2. とりたて助詞の基本的性質

(1) 田中さんもパーティーに来ました。(×がも)

(2) 田中さんはパーティーでもお酒を飲みました。(×も)

これだけは

◆とりたて助詞にはいくつかの特徴があります。これらはすべてのとりたて助詞に共通して見られる特徴です。

<取り立てられる要素>

◆とりたて助詞で取り立てられるのは、名詞句・動詞・副詞などです。

◆名詞句（名詞＋格助詞）を取り立てる場合、次のような規則があります（ここでは、初級編で扱うとりたて助詞についてのみ考えます）。

① ガ格・ヲ格の名詞句を取り立てるときは、通常「が」「を」を削除する

(3) 弟が来た→弟も来た（×弟がも）

② 「も」「しか」がガ格・ヲ格以外の名詞句を取り立てるときは、「格助詞＋も／しか」の語順になる

(4) 恋人に手紙を書く→恋人にしか手紙を書かない（×恋人しかに）

③ 「だけ」がガ格・ヲ格以外の名詞句を取り立てるときは、「格助詞＋だけ」でも「だけ＋格助詞」でもよい

(5) 母は兄にお菓子を買ってきた。

→母は兄{にだけ／だけに}お菓子を買ってきた。

◆動詞を取り立てるときは次のようになります。

① 「～ている／ある／みる」などを取り立てるときは、「～て」と「いる／ある／みる」などの間にとりたて助詞を挿入する

(6) テレビを見ている→テレビを見てばかりいる

② ル形やタ形などの動詞を取り立てるときは、「V_{マス}＋{は／も}＋する／します／しない／しません／した／しました／しなかった／しませんでした」の形になる

(7) 手紙を書いた→手紙を書きはした

(8) 手紙を書かなかった→手紙を書きもしなかった

なお、この形が使われるのは「は」「も」のときが普通で、それ以外のとりたて助詞ではこの形はあまり使われません。

◆その他の要素を取り立てるときは、とりたて助詞を取り立てる要素に直接付加します。

- (9) 少しお酒を飲みました。→少しだけお酒を飲みました。

<とりたて助詞と格助詞の違い>

◆格助詞は基本的に続けて使うことはできませんが、格助詞ととりたて助詞は続けて使うことができます。これは両者の機能が異なるためです。なお、(12)のようにとりたて助詞を続けて使うことができる場合もあります。

- (10) ×子供にへ夢を与える仕事をしたいと思います。(格助詞+格助詞)
 (11) 患者の病状を家族だけに知らせた。(とりたて助詞+格助詞)
 (12) 私も英語だけは話せます。(とりたて助詞+とりたて助詞)

もう少し

◆「だけ」「ばかり」の場合、「が」「を」が削除されず、「だけが／を」「ばかりが／を」の形で使われることもあります。

- (13) このクラスでは田中くんだけがブラジルに行ったことがある。
 (14) 毎日インスタントラーメンばかりを食べてはいけません。

◆「は」「も」は形容詞や「名詞+だ」を取り立てることもできます。その場合、次のような形になります。

イ形容詞 Aく+{は／も}+ある／あります／ない／ありません

ナ形容詞・名詞+だ

Na・Nで+{は／も}+ある／あります／ない／ありません

- (15) 12月になったが、ストーブを使うほど寒くはない。
 (16) 彼女は優しくないし、親切でもない。

ただし、肯定形は硬い文体を除いてあまり使われません。

- (17) 母は、優しくもあり、ときに厳しくもある。(イ形容詞)
 (18) この会社の社員ではあるが、正社員ではない。(名詞+だ)

◆とりたて助詞が取り立てるのは通常、直前の要素です。たとえば、次の(19)では今朝食べたものに「果物」以外のものがあることを暗示しています。

(19) 今朝は果物も食べました。

しかし、中には動詞句（名詞句＋動詞）全体が取り立てられることがあります。例えば、次の(20)は、「薬以外を飲ませた」ことを暗示しているのではなく、「薬を飲ませる以外のことをした」ことを暗示しているのです。

(20) 部屋を暖かくして、子供をゆっくり休ませました。薬も飲ませました。しかし、いっこうに熱が下がりません。

つまり、次の関係が成り立っています。

(21) 薬も飲ませた＝薬を飲ませもした（〔薬を飲ませ〕もした）

この場合、「薬を飲ませもした」という表現は、「も」が取り立てている要素が「薬を飲ませる」全体であることを明示しています。

◆とりたて助詞を含む文の文末には、制限がつく場合があります。

(22) 私の母は日本語しか {○話せません／×話せます}。

(23) 映画でも {○見ませんか／×見ました}。

(24) ビールを8杯も {○飲みました／×飲んでください}。

どんな文末制限がつくかということについては、とりたて助詞によって異なるので、(中上級編を含めた) 各とりたて助詞の項で扱います。

3. 「も」－並立を表すとりたて助詞

<「も」の基本用法（並立の「も」)>

(1) パーティーには田中さんも来ました。

(2) 田中さんはハンサムです。住んでいる家も広いです。

これだけは

◆「Xも」はX以外に要素が存在することを暗示します。例えば、(1)はパーティーに田中さん以外の人 came ことを暗示し、(2)は田中さんが「ハンサムである」「住んでいる家が広い」以外の特徴を持つことを暗示します。

<意外の「も」>

- (1) このカレーはインド人もびっくりするほどの辛さだ。
- (2) 田中くんは吉田くん到大変失礼なことを言った。だから、普段は怒らない吉田くんも怒ってしまった。

これだけは

◆「も」には「意外さ」を表す用法があります。例えば(1)はカレーの辛さが「(日本では辛い食べ物を好むことで有名な) インド人」が驚くほどのものであるということを述べて、話し手が感じる意外さ（通常の辛さとの違い）を表しています。(2)も、「(普段怒らない) 吉田くん」が怒ったということを述べて、そのことから話し手が感じる意外さや驚きを表しています。

もう少し

◆この「意外の「も」」を、「並立の「も」」と区別する考え方もありますが、それはあまり得策ではありません。次の例を考えてみましょう。

- (3) パーティーにはインド人も来た。

この(3)の「インド人も」は通常の文脈では「並立の「も」」と解釈されます。その解釈は次のように図示できます。

- (4) パーティーにはインド人も来た。(並立の「も」)

<含意>パーティーにインド人以外が来た

<前提>パーティーにインド人が来た

さて、ここでもしこのパーティーの出席者の大部分がイスラム教徒であり、ヒンドゥー教徒が多いインド人は来ないだろうと予想されていたとしたらどうでしょうか。その場合には(3)の「インド人も」は「意外の「も」」と解釈されます。この場合の解釈は次のように図示できます。

(5) パーティーにはインド人も来た。(意外の「も」)

<+ α >パーティーにはインド人は来ないだろうという予想

<含意>パーティーにはインド人以外が来た

<前提>パーティーにはインド人が来た

つまり、「意外の「も」」の意味は、取り立てられる要素（この場合は「インド人」）が文脈的にどのような特徴を持っているか（この場合で言えば、「パーティーには来ない」と予想されていたということ）に対応して生じる「含意+ α 」の意味であると言えます。こうしたことから、「並立の「も」」と「意外の「も」」は連続的な関係にあることがわかります。

<数量詞+も>

- (1) パーティーにはお客さんが10人も来た。
- (2) パーティーにはお客さんが10人しか来なかった。

これだけは

◆「も」が数量を表す語と共に使われると、その量が多いことを表します。たとえば、(1)はパーティーに来た人の人数（10人）を「多い」ととらえていることを表します。この場合の「も」は「意外の「も」」の一種です。

◆この「も」の反対のとらえ方を表すのが「しか～ない」で、その量が少ないことを表します。

もう少し

◆「数量詞+も」が否定述語を伴う場合、複数の解釈の可能性があります。これらの意味は、文脈とプロミネンス（卓立）によって区別されています。

(3) 今日の講演会には8人も来ませんでした。

解釈 A) 欠席人数が8人で、その数が思ったより多い。

B) 出席人数は8人に及ばず、だいたい5、6人だった。

Aの解釈では、「も」にプロミネンスが置かれ強調されますが、Bの解釈では、「も」に特にプロミネンスは置かれません。

4. 「だけ」と「しか～ない」 －限定を表すとりたて助詞

- (1) 大学1年生のときは中国語だけを勉強しました。
(2) 大学1年生のときは中国語しか勉強しませんでした。

これだけは

◆「だけ」と「しか」は共に**限定**を表すとりたて助詞です。「しか」は常に「ない」と共に使われます。これを「ない」と呼応すると言います(→§40)。

◆「Xだけ～」「Xしか～ない」では共に「X以外は～(では)ない」ということが述べられます。たとえば、(1)(2)は共に、(大学1年生のときは)「中国語以外を勉強しなかった」ということを表しています。

両者の違いは、「だけ」は「～」に限定することに表現のポイントがあるのに対し、「しか～ない」は「～ない」ということに表現のポイントがあるということです。たとえば、(1)は、大学1年生のときに勉強する内容を(自らの意志で)「中国語」に限定したということを表すのに対し、(2)では、大学1年生のときに勉強した内容が「中国語」以外にないということを否定的に(後悔などの気持ちを込めて)述べることに表現のポイントがあります。従って、それぞれは次のような文脈で使われるのが自然です。

- (1) 私は大学で中国に関する総合的な知識を身につけ、卒業後は中国関係の研究者になりたいと思っています。大学1年生のときは中国語だけを勉強しました。2年生の今年は中国史を勉強しました。

- (2) 私は中国が好きで、大学も中国語学科に入りました。大学1年生のときは中国語しか勉強しませんでした。しかし、専門の授業では英語の文献を読むことも多いので、今ちょっと困っています。

もう少し

◆「しか～ない」に比べて「だけ」は使える文脈が限られています。例えば次の(3)の「しか～ない」を「だけ」に置き換えることはできません。これは、「飲むものを水に限定する」ということを猫が自らの意志で選択するという状況が考えにくいからです。

- (3) うちの猫は元気がなくて、水しか飲まないんだ。

ただし、(4)のように「は」を付加して「だけは」とすると自然な文になることが多いです。これは、「は」は対比を表すことができる（→§27）ため、「水だけ飲む」ということを、生命維持のために最低限必要なこととして、「えさを食べる」などの他の行為と対比できるためです。

- (4) うちの猫は元気がないんだが、水{×だけ／○だけは}飲むんだ。

◆「だけ」が手段を表す格助詞「で」と共起する場合、その位置によって意味が変わるので注意が必要です。

- (5) この料理は電子レンジ{だけで／でだけ}作れます。

(5)の「電子レンジだけで」は、「その料理を作るのに、電子レンジが唯一の手段であり、それ以外に何も使わなくてもいいこと」を表しますが、「電子レンジでだけ」は、「その料理は電子レンジ以外のものでは作れないこと」を意味します。

◆「しか～ない」の意味を強調しながら、限定の意味を強めたい場合、「だけしか～ない」という表現が使われることがあります（この場合も「しか～ない」と同様、常に「～ない」と呼応します）。

- (6) 鉛筆だけしか持っていないません。ペンを貸してください。

5. ばかりー「多い」という気持ちを表すとりたて助詞

- (1) 毎日暑いのでアイスクリームばかり食べています。
 (2) かわいがっていた犬が死んでしまい、妹は泣いてばかりいます。

これだけは

◆「ばかり」は、量や回数などが「多い」という話し手の気持ちを表すとりたて助詞です。たとえば、(1)はアイスクリームを食べる量が多いことを、(2)は妹が泣いていることが多いことを、それぞれ含意しています。

もう少し

◆次のような例では「ばかり」と「だけ」がよく似た意味で使われています。

- (3) 兄弟はたくさんいるのに、いつも太郎 { ばかり／だけ } が用事を言いつけられます。

この場合、「太郎ばかり」は「太郎が用事を言いつけられることが多い」ということを表し、「太郎だけ」は「用事を言いつけられるのはいつも太郎だ」ということを表します。

ただし、「Xばかり」はXが「多い」ことを表すのに対し、「Xだけ」はX以外のものが存在しないというものですから、次のような文脈では「ばかり」のほうが自然です。

- (4) 弟は毎日酒 { ばかり／？だけ } 飲んで、全然働かない。

この場合、もし「だけ」を使うと、酒以外のものは飲まないということになりますが、そのようなことは普通考えられないので、「だけ」は使えません。これに対し、「ばかり」は「酒を飲むことが多い」ということを意味するだけなので、自然に使えるのです。

◆「ばかり」を含む形式に「～たばかりだ」がありますが、これはアスペクトを表す形式です (→§6)。

◆「多いこと」に不満を込めて強調的に言う場合、話しことばでは「ばかり」が「ばっかり」となることがあります。

(5) いつもテレビばかり見ているから、成績が悪くなるんだよ。

◆「ばかり」は、状態や単一動作を表す動詞の辞書形の後ろに置かれて、「だけ」と同じ意味を表すことがあります。この(6)のような「ばかり」は、やや古い文体で好まれますが、これについては中上級編で扱います。

(6) 部屋には机が一つある{ばかり／だけ}だ。

◆「ばかり」を含むその他の形式、「～ばかりでなく～も」「～ばかりか」なども中上級編で扱います。

もう一步進んでみると

◆とりたて助詞は、前提となることがらの他に、それに対する話し手のとらえ方を表します。例えば、「太郎しか試験に合格しなかった。」という文は「太郎が試験に合格した」ということがら(命題)を前提とし、「太郎以外の人物は試験に合格しなかった」ということを含意します。この「太郎」と「太郎以外の人物」のように暗示的に対立する要素は互いに**範列的(paradigmatic)**な関係にあると言います。これに対し、「太郎が(主語)－試験に(目的語)－合格する(述語)」のように、文中に明示的に現れている要素どうしは互いに**統合的(syntagmatic)**な関係にあると言います。

◆とりたて助詞が表す、この含意としての(暗示的な)意味を寺村秀夫は「影」と呼んでいます。3で、「並立の「も」」「意外の「も」」について触れましたが、両者の関係に関するこうしたとらえ方も寺村のものです(寺村秀夫(1986))。寺村にはこの他にも寺村秀夫(1989、1991)などの論考があります。

◆「は」にもとりたて助詞としての側面がありますが、これについては§27を参照してください。

◆日本語学で「とりたて助詞」と呼ばれている助詞は国語学では「副助詞」「係助詞」などと呼ばれています。とりたて助詞の研究は宮田幸一(1948)が「取立て助詞」という用語を使用したことに始まり、その後、鈴木重幸

(1972)、沼田善子(1986)、寺村秀夫(1991)、野田尚史(1995)などによって研究が進められてきています。

○参考文献

- 鈴木重幸(1972)『日本語文法・形態論』むぎ書房
寺村秀夫(1986)「前提」「含意」と「影」寺村秀夫(1993)に再録
——(1989)「意味研究メモーその1ー」寺村秀夫(1993)に再録
——(1991)『日本語のシンタクスと意味Ⅲ』くろしお出版
——(1993)『寺村秀夫論文集Ⅱ 言語学・日本語教育編』くろしお出版
沼田善子(1986)「とりたて詞」奥津敬一郎・沼田善子・杉本武『いわゆる日本語助詞の研究』凡人社
野田尚史(1995)「文の階層構造から見た主題ととりたて」益岡隆志・野田尚史・沼田善子編『日本語の主題ととりたて』くろしお出版
宮田幸一(1948)『日本語文法の輪郭』三省堂

コラム 主語

§ 27 では「主題」について扱っていますが、**主語**と主題はよく混同される概念です。ここでは、主語について考えてみましょう。

次の(1)の主語は何でしょうか。

- (1) John loves Mary.

正解は“John”ですが、ではなぜ“John”が主語なのでしょう。それは、“John”が述語動詞の形を決めていることによります。実際、(2)aのように(1)の“John”を複数にすると述語動詞の形は変わりますが、(2)bのように“Mary”を複数にしても述語動詞の形は変わりません。

- (2) a. John and Bill { ○ love / × loves } Mary.
b. John { × love / ○ loves } Mary and Kate.

この(1)の“John”のように、名詞句が述語の形を規定するとき、その名詞句は述語と「一致する」と言いますが、欧米の言語の「主語」はこうした一致に基づいて決められているのです。このように、「主語」は文中で特別な働きをする名詞句です。

日本語にはこうした述語との一致に基づく主語はありませんが、文の中で特別な働きをする名詞句は存在します。次の例を見てください。

- (3) 田中先生が吉田くん_に本をお貸しになった。

この(3)は「田中先生」に対する敬意を表しています(→§ 32)。この場合、敬意の対象はガ格でなければなりません。実際、次の文は不適切です。

- (4) # 吉田くんが田中先生_に本をお貸しになった。

また、次の例を考えてみましょう。

- (5) a. お母さんがお父さん_に自分のスカートを自慢した。
b. お父さんがお母さん_に自分のスカートを自慢した。

「自分」のような代名詞(→§ 37)は、あるものを直接指すのではなく、それを受けて間接的に指すものです。ここで、(5)aと(5)bを比べると、前者は自

然であるのに対し、後者は意味的に不自然であることがわかります。これは、どちらの場合にも、代名詞「自分」が指すもの（これを先行詞と言う）が（他の格ではなく）ガ格の名詞句であることによります。

こうした意味で、日本語のガ格名詞句も（述語との一致という特徴は持たないものの）文中で特別な働きをしていると言えるので、これを「主語」と考えることができます。

ただし、そうすると次のような場合がやや問題になります。

(6) 田中先生にはお子さんがおありになる。

(7) 田中先生には学生の気持ちがおわかりにならない。

所有の「ある・いる」や「わかる」などはものや感情などの持ち主として二格を取ります（→§ 2）が、この場合、(6)(7)などからわかるように、敬意の対象はガ格名詞句ではなく、二格名詞句になるのです。

以上のような点を踏まえて、柴谷方良は「主語」を次のように規定しています（cf. 柴谷方良（1985, 1989））。

a. 所有の「ある・いる」、「できる、わかる」など「～に～が」のパターンを取る動詞・形容詞を述語とする文の主語は二格名詞句である。

b. それ以外の語を述語とする文の主語はガ格名詞句である。

その上で、典型的な主語はガ格主語であり、二格主語は周辺的なものであるという位置づけをしています。

主語については、これ以外にも、日本語には主語は存在しないとする三上章の主語廃止論や仁田義雄（1997）など様々な考え方があります。いずれにしても、教育上重要なのは、主語と主題の違いを理解することです（→§ 27）。

○参考文献

柴谷方良（1985）「主語プロトタイプ論」『日本語学』4－10 明治書院

———（1989）「言語類型論」太田朗編『英語学大系6 英語学の関連分野』大修館書店

仁田義雄（1997）『日本語文法研究序説－日本語の記述文法を目指して－』くろしお出版

三上 章（1960）『象は鼻が長い－日本文法入門－』くろしお出版

———（1963）『日本語の論理－ハとガー－』くろしお出版

§27. 「は」と「が」

英語などの西欧語の「主語」に当たるものが、日本語では「は」と「が」の双方に対応するよう見えることがよくあります。そのため、両者の区別は学習者にとって極めて難しいものの一つとなっています。両者の使い分けを理解するには、まず、両者の基本的な性質の違い（「は」は主題を表し、「が」は主語を表す）を理解することが必要です（→コラム「主語」）。

1. 「は」の基本的性質(1)（主題を表す）

- (1) 洋子さんは美しい。
- (2) スミスさんはハンサムだ。
- (3) 山田さんは学生です。
- (4) 山田さんはパーティーに来ました。

これだけは

◆「は」の基本的な機能は文の**主題**を表すことです。主題というのはその文で述べたいことの範囲（対象）を限定したものです。主題の後にはその主題について叙述した**解説**が続きます。例えば、(1)は、「洋子さんは」の部分でこの文で述べる主題（対象）として「洋子さん」を提示し、それについて「美しい」という解説（属性づけ）を付した、という構造をしています。これを言い換えると(1)'のようになります。（ただし、これは「文の意味」を説明しているのであって、(1)'が自然な文として使われるという意味ではありません

ません。)

- (1)' 洋子さんについて言えば、(洋子さんは) 美しい。

主題

解説

洋子さんは

主題

美しい。

解説

叙述内容の範囲を限定

主題について叙述

◆(1)~(3)のような形容詞文や名詞文で通常使われるのは「は」で、「が」を使うと後述の総記の意味になります。これは形容詞文や名詞文が属性を表すものであるためです。一方、(4)のような動詞文の場合は「は」も「が」も使えることもありますが、後述のように一方しか使えない場合もあります。

もう少し

◆「は」は「主題」(theme, topic)を表すものであり、「主語」(subject)を表すものではありません。主語は英語を初めとする西欧語などで述語と「一致」するものに使われる語です(→コラム「主語」)。例えば、(5)の“am”という語形を決めるのは“I”であって“a student”ではありませんから、この文の主語は“I”です。同様に、(6)の主語は“John”です。なお、これらは主語であると同時に主題でもあります。

- (5) I am a student.

主題

主語

- (6) John has these cameras.

主題

主語

目的語

◆西欧語(特に英語)では主語と主題が一致することが多いため、両者を混同して「主語」と呼ぶことが多いですが、(7)のような文では両者の違いがはっきりします。この場合、(8)が非文法的であることから、文の「主語」は文頭の“These cameras”ではなく、“John”であることがわかります。つまり、“These cameras”は「主語」ではなく「主題」なのです。

27.

「は」と「が」

- (7) ○ These cameras, John has (them). cf. (6)

主題
目的語 主語

- (8) × These cameras, John have (them).

一方、同様のことが(5)~(7)に対応する日本語の文(5)'~(7)'についても言えます。つまり(5)'の私はは主語であると同時に主題でもあるのです。

- (5)' 私は 学生です。

主題
主語

また、(6)は(6)'a(6)'bのいずれにも訳せますが、このうち、(6)'aのジョンはは((5)'と同じく)主語でありかつ主題です。一方、(6)'bの下線部は主語ではありますが、主題ではありません(この文は後述の無題文です)。

- (6)'a. ジョンは このカメラを持っています。

主題
主語 目的語

- b. ジョンが このカメラを持っています。

主語 目的語

さらに、(7)'は((7)と同じく)主題ではありますが、主語ではありません。

- (7)' このカメラは ジョンが持っています。

主題
目的語 主語

このように、日本語と英語との違いは、日本語は主題を「は」によって明示的に表すのに対し、英語の主題は語順によって表されるという点にあります。そのため、英語的な発想では主題という概念が理解されにくいところがありますが、主題は日本語の文構造の中核をなす概念なのです。

◆ただし、実際の教室では“subject”のほうが理解されやすいので、この語を使うこと自体は問題ではありません。重要なのは、教師が、「は」の機

能が「主題」を表すことであることを理解していることです。

2. 「は」の基本的性質(2) (対比を表す)

- (1) 今度のパーティーに、田中さんは来ますが、山田さんは来ません。
- (2) 雨は降っていますが、雪は降っていません。
- (3) 私はみかんが好きです。
- (4) 田中さんはパリには行かないと思います。

27.

「は」と「が」

これだけは

◆「は」には主題を表す機能のほかに、**対比**を表す機能があります。

対比は、「Xは」で表されたXをそれ以外のものと比較し、「Xについては……だが、(それ以外の) Yについては……ではない(ーだ)」と述べるものです。例えば、(3)は「みかん」については「好き」だが、それ以外のもの(りんごなど)についてはそうではない、ということを表しています。

◆こうした対比を表す典型的な文型は(1)(2)のような「XはA(だ)が、YはB(だ)」ですが、それ以外でも(3)(4)のように文中に二つ以上の「は」がある場合、二つ目以降の「は」は基本的に対比的に解釈されます。これは文頭の「は」は主題と解釈されるが、主題は1文の一つに限られるためです。

もう少し

◆1文中に二つの「は」があるると対比的な含意が生じるので、そうした含意がないときは「は」を使いません。例えば、(3)(4)が対比的にしか使えないのに対し、(3)′(4)′は非対比的に使われます。

(3)′ 私はみかんが喜欢です。

(4)′ 田中さんはパリに行かないと思います。

◆文中に二つ「は」があるときでも、(5)のような名詞文の否定の場合の「は」は必ずしも対比的な解釈を受けません。

(5) 私は学生ではありません。

◆一方、形容詞文や動詞文の否定の場合の「は」は対比的に解釈されます。

(6) この部屋はきれいではありません。

(7) この本はおもしろくはありません。

(8) 私はこの本を読みはしませんでした。

これは形容詞は程度性を持っているのが普通であり、「Xではない」ということが直ちにその反意語のYであることを意味しないためです。例えば、(7)は必ずしも「つまらない」といっているわけではなく、(9)で示される段階のどこか（ただし、両端は除く）にあるということを述べています。つまり、「おもしろくはない」というのは、「おもしろい」でも「つまらない」でもない段階について述べているため、この両者との対比性が生じるのです。

(9) _____
つまらない おもしろくはない おもしろい

これに対し、名詞にはそうした程度性がないのが普通なので、名詞文の否定では対比性が生じにくいのです。なお、述語が名詞やナ形容詞の場合、否定文では「は」を省略することはできません。

(5)' ×私は学生ではありません。

(6)' ?この部屋はきれいでなかった。

一方、動詞文では(8)のような否定は(10)などとは違い、「読む」ことを他の行為と対比して否定します。(8)のタイプの否定は中上級編で扱います。

(10) 私はこの本を読まなかった。

3. 「が」の基本的性質(1) (中立叙述を表す)

- (1) (あっ、) 雨が降っている。
 (2) A：私の留守の間に何かありましたか。
 B：山田さんが来ました。

これだけは

◆「が」には**中立叙述**を表す用法と「総記」を表す用法があります。

このうち、中立叙述を表す文は一般に、(1)のように何かを発見した場合や、(2)Aのようなわかっていること（前提→§29）がない疑問文に対する答えとして使われます。なお、こうした文は原則として話しはじめの文で使われます。また、この場合の「が」は「は」に変えられません。これは、こうした文が「全体が新情報の文」であるためです。

◆(1)(2)Aのような中立叙述を表す文を**現象文**と言います。

もう少し

◆現象文の述語は通常、動詞ですが、形容詞であることもあります。

- (3) (高原でバスを降りた直後に) うーん、空気がうまい。

4. 「が」の基本的性質(2) (総記を表す)

- (1) A：だれが来たのですか。
 B：山田さんが来ました。(山田さんです。)
 (2) A：どの料理がおいしかったですか。
 B：ステーキがおいしかったです。(ステーキです。)
 (3) A：どなたが幹事さんですか。
 B：田中さんが幹事です。(田中さんです。)

これだけは

◆「Xが」の今一つの用法である**総記**は典型的には疑問語疑問文に対する答えとして使われ、「他でもないXが…（だ）」という意味を表します。

◆総記の文では「Xが」はその文で一番言いたいこと（焦点→§29）であり、文中でそこだけが新情報です。なお、(1)～(3)のA文のようなXが疑問語（疑問詞）である疑問語疑問文に対しては焦点（新情報）であるXだけを残して、「Xです」という形でも答えられます（むしろこのほうが自然な応答です。→§34）。これは「Xが」以下が質問の段階でわかっている前提であるためです。

◆後述のように、名詞文・形容詞文のような通常「は」が用いられる環境で「が」を使うと、その「が」は総記として解釈されます。

5. 「は」と「が」の基本的な違い

- | |
|---|
| <p>(1) 山田さん<u>は</u>大学生である。</p> <p>(2) 田中さん<u>は</u>山本さん<u>を</u>愛している。</p> <p>(1)' 山田さん<u>が</u>大学生であること(は事実だ。)</p> <p>(2)' 田中さん<u>が</u>山本さん<u>を</u>愛していること(はみんなが知っている。)</p> |
|---|

これだけは

◆1で見たように、(1)のような名詞文や形容詞文では「は」が使われます。(2)のような動詞文でも「は」がよく使われます。しかし、(1)'や(2)'のように、こうした「文」が他の文の成分になると、「は」ではなく「が」が使われます。これは、「文」が「こと」や「の」を被修飾名詞とする名詞修飾節に言わば「格下げ」されたためですが、この現象は「は」と「が」の違いを最も明確に表しています。つまり、「が」は名詞の「格」を表す「格助詞」なのです。これを(2)'を例に考えてみましょう。

「愛する」という動詞は、愛する人と愛される人（＝愛する対象となる人）を必須成分として取ります。この場合、「愛する人」はガ格で「愛される人」

(5) その本は | 私が買った。

主題 | 解説

a. 私が その本を 買った。

主題

b. その本を 私が その本を 買った。

↑

移動

c. その本をは 私が 買った。

「は」付加

d. その本をは 私が買った。

「を」削除

(10) その本には | 有名な作家がサインをした。

主題 | 解説

a. 有名な作家が その本に サインをした。

主題

b. その本に 有名な作家が その本に サインをした。

↑

移動

c. その本には 有名な作家が サインをした。

「は」付加

まず、(5)aで「その本を」が主題として選ばれ、(5)bで文頭に移動します。(5)cでは文頭の「その本を」に「は」が付加されます。最後の(5)dで「を」が削除されますが、これは格助詞が「が」「を」のときだけで、(10)のようなそれ以外の格助詞の場合には削除は行われません。なお、これはとりたて助詞一般に見られる性質です (→§26)。(5)や(10)はこうにして作られますが、これらの文も(1)(2)と同様に「主題－解説」という構造を持っています。ただし、(8)のような存在・所有を表す文中の二格や(9)の「この部屋」のような場所や時間を表す要素は通常文頭にありますから、移動は起こりません。

◆主題を持つ文を**有題文**と呼びます。典型的な有題文は文頭に「～は」を持つ文です。一方、現象文のように全体が新情報である文を**無題文**と呼びます。

このように、有題文と無題文の違いは基本的には「～は」の有無に対応しますが、両者は完全に対応するわけではありません。

(11) A：林さんはどなたですか。

旧情報 新情報

B 1：林さんはこの方です。

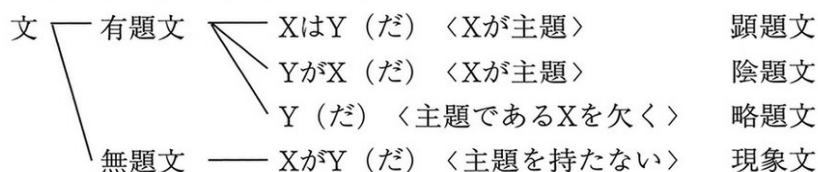
旧情報 新情報

B 2：この方が林さんです。

新情報 旧情報

(11)Aには(11)B 1、B 2のいずれの答え方も可能です。この場合、(11)Aの段階で「林さん」は旧情報です。後で見るように、「は」は旧情報を、「が」は新情報の後に使われるので、旧情報の「林さん」を文頭に持ってくると(11)B 1のようになり、新情報の「この方」を文頭に持ってくると(11)B 2のようになります。この(11)B 2のような文では、対応する(11)B 1で主題となっている要素が「が」の後にいわば隠れているので、こうした文は**陰題文**と呼ばれます(一方、(11)B 1のような「～は」を持つ文は**顕題文**と呼ばれます)。この場合、(11)B 2の「この方が」は総記として解釈されます。従って、有題文／無題文と「は」／「が」の関係は次のようになります。

「Xは／がY (だ)」と有題文／無題文の関係



なお**略題文**とは(11)B 3のように主題の「林さん」が省略された文です。

(11) A：林さんはどなたですか。

B 3：この方です。

6. 「は」と「が」の使い分けの規則

ここまで見てきたように、「は」と「が」は、「主題」と「主語」という異なる機能を表す助詞ですが、実際には主語と主題が一致することが多いため、その使い分けが学習者にとっては困難であることが多いです。以下では「は」と「が」の使い分けの規則について考えます。

<従属節・名詞修飾節の場合>

- (1) 彼が来たので、パーティーはおもしろかった。
- (2) 私が生協で買った靴下はこれです。
- (3) 田中さんがこっちに走ってくるのが見えた。
- (4) 田中さんは英語が得意だが、山田さんはドイツ語が得意だ。

これだけは

<規則1> 従属節・名詞修飾節の中では「が」を使う。ただし、対比的・並列的な意味を表す従属節では「は」を使う。

◆規則1は従属節や名詞修飾節に関するものです。一般に、これらの中では「は」ではなく「が」が使われます。これは、「は」は主題を表し、主題は文レベルのものであるにもかかわらず、従属節や名詞修飾節は文の一要素にすぎないためです。ただし、従属節の中でも、「～が／けど」「～し」及び「～て」の一部の用法では「は」が使われます。これは、これらの節が表す対比的・並列的關係と、「は」の持つ対比性が合致するためです。

<文の種類など>

- (1) 山田さんは英語の先生です。
- (2) この荷物は重い。
- (3) 彼は毎朝公園を走っている。 cf. 彼{が／は}公園を走っている。
- (4) 私は映画館へ行った。 cf. 山田さん{が／は}映画館へ行った。
- (5) 雨は降っていない。 cf. 雨が降っている。

これだけは

＜規則 2＞述語が動詞以外（形容詞・名詞十だ）のときは通常「は」を使う。

動詞の場合でも次のときは通常「は」を使う。

- ① 主語が「私」「あなた」（一、二人称）である場合
- ② 恒常的な出来事を表す場合
- ③ 否定文である場合

◆ここからは単文における規則になります（なお、複文の主節は単文の場合と同様に考えることができます）。まず、最初の規則は文の種類によるもので、単純に言うと動詞文以外では「は」を使うということになります。

◆動詞文の場合でも①～③の場合は次の理由から「は」が使われます。

まず、①ですが、「私」や「あなた」はそれが指しているものが常に了解されている要素です（そうでなければコミュニケーションはできません）。一方、主題はそれについて何かを述べるためのものですから、それが指しているものは明確でなければならず、そのため「私」や「あなた」は主題になりやすいのです。一方、②や③で「は」が使われるのはこうした場合は文が（形容詞文や名詞文と同じく）状態的（属性づけ的）になるためです。

◆なお、規則 2 から通常「は」を使う場合に「が」を使うと総記の解釈になります（ただし、3 の(3)のような形容詞を述語とする現象文や次に述べる否定語を述語とする現象文の場合を除く）。

もう少し

◆上述のように、否定文の場合通常「は」が使われ、(6)のように「が」を使うとその「が」は総記と解釈されます。

(6) 田中さんがパーティーに来ませんでした。

しかし、あるものや出来事が存在しないことを「発見」した場合は次の(7)(8)のように「が」を使ってもその「が」は中立叙述的に解釈されます。

(7) あっ、財布がない。

(8) あっ、かぎがかかっていない。

これらは現象文ですが、こうした文が使われるのは話し手が反対の予測を持っていたときに限られます。例えば(8)は話し手が「かぎはかかっている」と思ってノブを回したのにかぎがかかかっていなかったという場合に使われます。

<情報の新旧>

- (1) 山田さんが英語の先生です。
- (2) この荷物が重い。
- (3) 彼が毎朝公園を走っている。
- (4) だれが来たのですか。 cf. ×だれは来たのですか。
- (5) 来たのはだれですか。 cf. ×来たのがだれですか。
- (6) 雨が降っている。
- (7) 公園で子供が遊んでいる。

これだけは

<規則 3> 主語が新情報なら「が」を、旧情報なら「は」を付ける。

◆次の規則は情報の新旧にかかわるもので、主語が新情報なら「が」を、旧情報なら「は」を付けるということになります。まず、旧情報に「は」を付けるのは、「は」が主題を表すということの帰結です。つまり、主題になれるのは指すものがはっきりしているもの（旧情報）に限られるのです。一方、「～が」を含む文には、(1)～(3)のような陰題文と(6)(7)のような現象文があります。このうち、陰題文における「～が」は総記の解釈を受ける、文の「焦点」ですから新情報です。また、現象文は前提を持たない文ですから、文全体が新情報であり、「～が」も新情報になります。

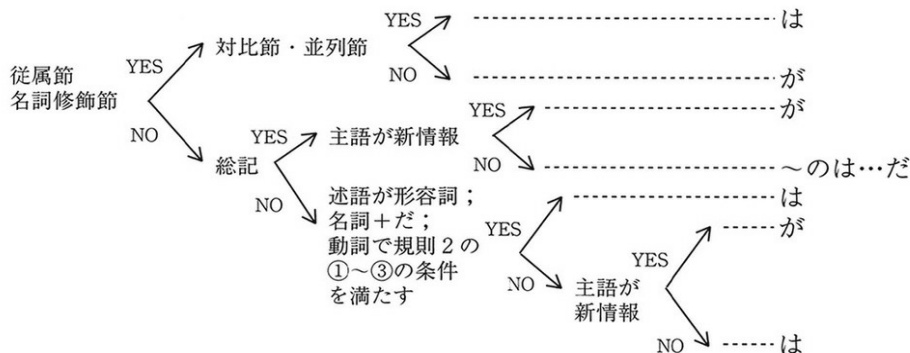
◆また、規則 3 から次のことが言えます。

<規則 3-1> 疑問語疑問文において、疑問語（疑問詞）が主語なら主語の疑問語（疑問詞）に「が」を、疑問語（疑問詞）以外が主語なら主語に「は」を付ける。

これは、疑問語（疑問詞）は内容がわからない語であり、そのため常に焦点（新情報）になる、ということから説明できます。

◆以上の規則を図示すると次のようになります。

「は」と「が」の使い分け



（「総記」か否かを規則2よりも先に考えるのは、総記の場合は述語の品詞による違いなどが関係なくなるためです。）

「は」と「が」の使い分けについては、この他にも2文以上の場合における場合も重要ですが、これについては中上級編で扱います。

もう一歩進んでみると

◆「は」と「が」は、近代日本語研究の開拓者である山田孝雄^{よしお}以来、多くの人々によって研究されており、研究書の数も膨大なものがあります。その中で、日本語教育で広く使われているのは久野 暲^{すすむ}（1973）です。久野は「は」に「主題」と「対比」、「が」に「総記」と「中立叙述」という二つの機能を認め、「は」と「が」の用法を記述しました。「は」が旧情報を表し、「が」が新情報を表すという説も同書によって広まったものです。

◆一方、三上章は「は」が主語ではなく主題であることを力説しました。5で、(1)(2)と(1)′(2)′の関係を使って「は」と「が」の機能の違いを考えましたが、これは三上が創案した無題化と呼ばれる操作です。これにより、「は」と「が」（一般的には各成分とそれが主題として取り立てられたもの）の関係が明確になりました。彼の主語廃止論は生前にはあまり受け入れられませんでした。死後高く評価されその後の研究に大きな影響を与えています。三上の「は」と「が」に関する著作で読みやすいのは三上章（1960）です。

◆こうした様々な研究を巧みにまとめそこに自らの研究も織り込んで「は」と「が」の研究に一つの節目を作ったのが野田尚史（1996）で、「は」と「が」に関する研究史の概要はこの本を見ればほぼわかります。なお野田には「は」と「が」の問題を学習者の観点からまとめた野田尚史（1985）もあります。

◆その他にも佐治圭三（1991）や寺村秀夫（1991）も重要です。

○参考文献

久野 暉（1973）『日本文法研究』大修館書店

佐治圭三（1991）『日本語の文法の研究』ひつじ書房

寺村秀夫（1991）『日本語のシンタクスと意味Ⅲ』くろしお出版

野田尚史（1985）『セルフマスターシリーズ1 「は」と「が」』くろしお出版

———（1996）『新日本語文法選書1 「は」と「が」』くろしお出版

三上 章（1960）『象は鼻が長いー日本文法入門ー』くろしお出版

コラム

格の階層性

「教室ではジュースを飲まないでください」や「田中さんから毎年みかんを送ってもらう」のようにデ格やカラ格は主題の「は」といっしょに使えるのに、「×小林さんがは学生です」とか「×その本をは図書館で借りました」と言えないのはなぜでしょう。

また、「雪が降る」から「降る雪」という名詞修飾は作れますが、「国際商事はイタリアからトマトを輸入した」から「×国際商事がトマトを輸入したイタリア」が作れないのはなぜでしょう。

このような格の違いによる文法的な制限が存在する理由を明確に説明するのは困難ですが、いろいろな言語を調べた結果をまとめたキーナンとコムリー (Keenan & Comrie) の研究から、格には次の表のような順序 (階層性) が見られることが知られています。この階層性は次のような日本語の文法現象に反映しています。

	ガ格	ヲ格	ニ格	へ／デ格	ト格	カラ格など
名詞修飾節の被修飾名詞	可				一部可	不可
「は」での主題化	格形式を必ず省略		一部省略可	格形式の省略不可		
「の」の後接	不可		他形で代替	可		
格の省略	多		少	不可		

3 段目の「の」の後接は、「駅への道」や「恋人とのデート」は言えても「×雨がの降り方 (→雨の降り方)」や「×本をの売買 (→本の売買)」は言えず、「×学生にの本の貸出」は「学生への本の貸出」で代用されることを示します。詳しくは§3を見て下さい。

また、話しことばでガ格やヲ格は省略されることが多く「僕φ本φ買った」と言えますが、その他の格は「田中さんと結婚したい」の意味で「田中さんφ結婚したい」と言えないように省略できません。

§28. 関連づけ

一つの文は談話の中では常に、他の文や、その文が使われている状況との関連の中で存在しています。日本語にはこうした関連づけを明示する形式がいくつか存在しますが、その中で最も多用されるのが「のだ」です。

1. 関連づけの「のだ」(1)

- (1) 昨日は学校を休みました。頭が痛かったんです。
- (2) 昨夜2時間ぐらい停電した。発電所に雷が落ちたのだ。
- (3) (朝起きて道路がぬれているのを見て) ゆうべ、雨が降ったんだ。
- (4) (一人で泣いている子供を見て) きっと、迷子になったんだ。

これだけは

<接続> ㊦ (ただし、Na・Nな) +のです (んです) <デス・マス体>
／のだ (んだ) <ダ体>／のである<デアル体>

◆「のだ」には先行する文や発話を取り巻く状況との関連づけを表す用法があります(それ以外にも§29で見るような前提を表す用法もあります)。

◆**関連づけ**とは、ある発話がそれを取り巻く状況と関連があることを示すということで、図示すると次のようになります。このうち、**状況**は(1)(2)のように先行文として表現されることもあれば、(3)(4)のように言語的には表現されないこともあります。

状 況 ————— 発 話

関連づけ

こうした関連づけを表す形式には「のだ」「からだ」「わけだ」があり、関連づけの方法、関連づけるときの意味関係などの違いによって使い分けられますが、このうち、最もよく使われるのは「のだ」です。

◆関連づけを表す「のだ」(関連づけの「のだ」)の第一の用法は、(1)(2)のように、「のだ」を含む文(以下、「のだ」文)が先行文の理由を表す場合です。例えば(1)では「頭が痛かった」という「のだ」文が「昨日は学校を休んだ」という先行文の理由を表しています。なお、この用法では「のです(んです)」「のだ(んだ)」「のである」の全ての形が可能で、聞き手との関係などで使い分けられます。

◆「のだ」には、(3)(4)のように、発話を取り巻く状況との関連づけを表す用法もあります。この場合、「のだ」文は状況に対する話し手の解釈を表します。例えば、(4)は「一人で子供が泣いている」という状況を、「(その子供は)迷子になった」と解釈したということを表します。なお、この用法は状況に対する話し手の解釈を表すもので聞き手の存在は問題とならないため、通常「のだ(んだ)」だけが使われます。

28.

関連づけ

もう少し

◆(1)(2)のような理由を表す場合と、(3)(4)のような話し手の解釈を表す場合は基本的に同一のものと考えられます。まず、両者を「P。Qのだ。」という形でとらえることにします。ここで、Pは、(1)(2)のような場合では先行する文を、(3)(4)のような場合では発話を取り巻く状況を表します。そうすると、両者は次のような形に言い換えられます。

(5) どうしてPであるのかというと、Qなのだ。

例えば、(3)は「どうして道がぬれているのかというと、ゆうべ、雨が降ったのだ」と言い換えられます。両者の違いは、「理由」は話し手が聞き手を対象として述べるのに対し、「解釈」は話し手が言わば自分自身を対象として述べるという点にあります。

◆「のだ」と同じく関連づけを表す形式に「からだ」があります。「からだ」

は、(6)のような「…のは～からだ」という構文(→§31)から前提を表す「…のは」の部分が省略されてできた形式です。

(6) 昨日学校を休んだのは頭が痛かったからです。

「のだ」と「からだ」は似た意味を表すことがあり、特に、(1)(2)のように先行文に対する理由を述べる場合、両者は基本的に言い換えられます。

(1)' 昨日は学校を休みました。頭が痛かった{のです／からです}。

(2)' 昨夜約2時間停電した。発電所に雷が落ちた{のだ／からだ}。

ただし、(3)'(4)'からもわかるように、(3)(4)のような状況に対する解釈を表す用法では「からだ」は使えません。

(3)' (朝起きて道路がぬれているのを見て)

ゆうべ、雨が降った{○んだ／×からだ}。

(4)' (一人で泣いている子供を見て)

きっと、迷子になった{○んだ／×からだ}。

なお、(3)'に似た状況で「からだ」が使えることがあります。それは話し手が、ゆうべ雨が降ったことを知っている場合です。

(3)" ゆうべ、雨が降ったからなあ。

(3)'と(3)"は似ていますが、前者が「道路がぬれている」ということの理由を「ゆうべ、雨が降った」とことと関連づけているのに対し、後者は「ゆうべ、雨が降った」という既に知っている事実の帰結として「道路がぬれている」という眼前の事態をとらえるという違いがあります。

<(3)'の場合>道路がぬれている——→ゆうべ、雨が降った
既知の事実 理由 想像する事態

<(3)"の場合>ゆうべ、雨が降った——→道路がぬれている
既知の事実 帰結 眼前の事態

こうした、既知の事実の帰結を表す用法は「のだ」にはありません((3)"の「からだ」を「のだ」に置き換えると、(3)'の意味になってしまいます)。

2. 関連づけの「のだ」(2)

- (1) 今日、私は大学を卒業した。明日からは学生ではないのだ。
 (2) 彼女は日本人の父親とは日本語で、アメリカ人の母親とは英語で話す。彼女はバイリンガルなのである。
 (3) (それまでわからなかった機械の使い方がわかったとき) なんだ、このボタンを押せばいいんだ。
 (4) (なくしたと思っていた傘を見つけたとき) なんだ、こんなところにあったんだ。

これだけは

- ◆「のだ」には理由や解釈を表す以外の用法もあります。
- ◆まず、(1)(2)の用法は、「P。Qのだ。」において、QがPの意味することを表したり、Pの言い換えになっている場合です。この場合、PとQの関係は次のようにとらえられます。

- (5) Pというのは、どういうことかということ、Q。

例えば、(1)は「今日大学を卒業したというのは、どういうことかということ、明日からは学生ではないということだ。」と言い換えられます。

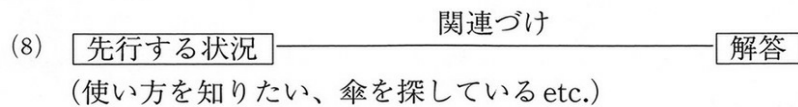
- ◆一方、(3)(4)は、それまでわからなかったことがそのときに初めてわかったということを示す発見の用法です。例えば、(3)はそれまで使い方がわからなかった機械の正しい使い方が、「このボタンを押す」ことであったということを発見したということを述べるときに使います。

もう少し

- ◆発見の用法は関連づけとは異なるように考えられそうですが、そうではありません。この点について考えるために、次の(6)(7)を見てみましょう。

- (6) 窓を開けると、富士山が見えた。
 (7) こんなところに傘がある。

これらの文も発見を表しますが、これらが表す発見と「のだ」が表す発見には違いがあります。つまり、(6)(7)のような文には先行文脈が存在しないのに対し、「のだ」が表す発見は、いわば、先行文脈内で未解決だった問題に対する解答を見つけたということだと言えます。これを図示すると次の(8)のようになります。言い換えると、この場合の「のだ」は、(8)の中の関連づけの存在を発見したことを表すのです。従って、そうした先行文脈がない(6)(7)のような場合には「のだ」は使えません。



3. 関連づけの「のだ」(3)

- (1) 田中くんからいっしょに帰ろうと誘われたが、忙しかったので断った。彼は一人で帰ったのだろう。
- (2) 日曜で会社は休みのはずだが、吉田くんは電話に出ない。洋子さんとデートをしているのかもしれない。

これだけは

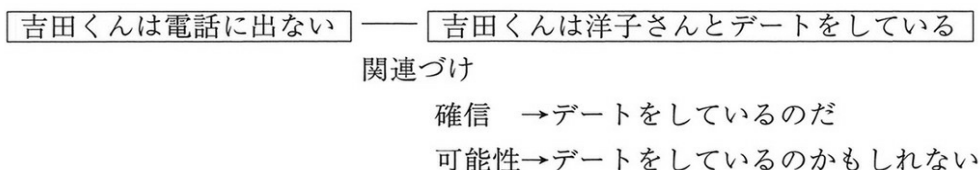
◆(1)(2)のようにモダリティ表現(だろう、かもしれない)の前に「の」が付いている場合があります。この場合、これらは意味的に「のだ+モダリティ表現」と考えられます。例えば(2)は(2)'のような構造を持っています。

(2)' (吉田くんは) 洋子さんとデートをしているのだ+かもしれない

こうした場合の意味は「のだ」の意味と、モダリティ表現の意味を合わせたものとして考えられます。例として(2)と(3)とについて考えてみましょう。

- (2) 日曜で会社は休みのはずだが、吉田くんは電話に出ない。洋子さんとデートをしているのかもしれない。
- (3) 日曜で会社は休みのはずだが、吉田くんは電話に出ない。洋子さんとデートをしているのだ。

(2)と(3)の違いは「のだ」文の最後に「かもしれない」があるかないかですが、この違いが両者の意味の違いに反映しています。まず、(3)は「吉田くんが電話に出ない」ということと「吉田くんは洋子さんとデートをしている」ということを話し手が関連づけ、それに疑いを持っていない、言い換えれば、話し手がその関連づけの妥当性を確信しているということを表しています。一方、(2)でも話し手は同様の関連づけを行っていますが、ここではその妥当性を確信しているわけではなく、その可能性があると考えているだけなので、そのことを表すために「かもしれない」を使っているのです。このあたりの事情を図示すると次のようになります。



もう少し

◆ここで見たような「のだ+モダリティ表現」の形で使えるモダリティ表現は「だろう」と「かもしれない」に限られます。この他のモダリティ表現(「ようだ、なければならない」など)は「のだ」といっしょには使えません。

- (4) ×部屋の電気が消えている。彼は出かけているのようだ。

なお、「にちがない」は「のだ」と共に使えますが、「の」の有無で意味の違いはあまり生じません。

- (5) a. 部屋の電気が消えている。彼は出かけているにちがない。
 = b. 部屋の電気が消えている。彼は出かけているのにちがない。

◆次の(6)のように、ここで扱ったのとは逆の、「モダリティ表現+のだ」という語順もあります。なお、この場合はほとんどのモダリティ表現が使えますが、「だろうのだ」という形は使われません。

(6) 今晚は雨が降るかもしれないんだ。だから、早く帰ろう。

これと通常の(=モダリティ表現がついていない)「のだ」文との違いは、通常の「のだ」文の場合は、話し手はその文の内容を確信しているのに対し、モダリティ表現がついている場合はそうではないということです。

(6)と次の(7)を比べてみると、話し手は、(7)では「今晚雨が降る」ということを確信しているのに対し、(6)ではその可能性があると考えている、という違いがあります。

(7) 今晚は雨が降るんだ。だから、早く帰ろう。

なお、(6)や(7)の「のだ」は関連づけを表していません。こうした、関連づけを表さない「のだ」については中上級編で扱います。

4. 関連づけの「のだ」(4)

- | |
|--|
| (1) a. 田中さんは大学生ですか。
b. 田中さんは大学生 <u>なん</u> ですか。 |
| (2) a. 洋子さんは背が高いですか。
b. 洋子さんは背が高い <u>ん</u> ですか。 |
| (3) a. 吉田さんはこの本を買いましたか。
b. 吉田さんはこの本を買った <u>ん</u> ですか。 |

これだけは

◆「のだ」には前提を表す用法があります(→§29)。疑問文では「のですか」がよく使われますが、(1)のような名詞文や(2)のような形容詞文では、b文のような「のだ」を使った疑問文ではなく、a文のような「のだ」を使わない

疑問文を使うのが普通です。これは、これらが必須成分のみから構成されているために、文に前提がないためです。(3)のような必須成分のみから構成される動詞文の場合も同様です（ただし、これらの文でも文中の特定の要素を音声的に強調すると「のですか」型疑問文が適当になります。→§29）。

◆こうした、本来「のだ」が必要でない疑問文で「のだ」を使うと、その文が正しいことを疑うというニュアンスが生じやすくなります。例えば、(1)では「田中さんは大学生ではない」という含みが感じられやすくなります。こうした場合の「のですか」型疑問文は、本節で扱った「関連づけの「のだ」」が疑問文になったものと言えますが、こうした場合に生じる含意は聞き手に不快感を持たせる可能性があるので注意が必要です。

もう一歩進んでみると

◆「のだ」は日本語の文章や談話で頻繁に用いられる形式ですが、その用法は複雑で、これまでに多くの研究が行われてきました。その中で手に入りやすく重要なものには三上章（1953）、寺村秀夫（1984）、奥田靖雄（1990）、田野村忠温（1990）、益岡隆志（1991）、野田春美（1997）などがあります。

◆「のだ」に対する考え方にはいろいろなものがありますが、その中の有力なものの一つに野田春美（1997）があります。野田は「のだ」の機能を、ここで扱った「関連づけ」（野田の用語では「ムード」）を表すものと、§29で扱う前提を表す（野田の用語では「スコープ」を広げるために使われる）ものとに分けています。本書は基本的にこの野田の考えに従っています。ただし、益岡隆志（1991）のように、野田の言う「スコープの「のだ」」の存在を否定する考え方もあります。なお、野田の言う区別に従うとしても、前提を表すもの（「スコープの「のだ」」）と関連づけを表すもの（「ムードの「のだ」」）はいつも完全に二分されるものではありません。例えば、次の(1)は「どうして」という、必須成分以外の要素を含んでおり、文に前提が存在するため、「のだ」が必要とされると考えられます（→§29）が、同時に、「学校を休んだ」ということが話し手と聞き手の共通の前提となっており、その事態に対する理由を話し手が尋ねていると考えれば、「関連づけの「のだ」」とも解釈することができます。

(1) どうして、学校を休んだのですか。

◆「のだ」には、本節で扱った「関連づけの「のだ」」と§29で扱う「前提を表す「のだ」」の他に、(2)(3)のような「強調」を表すものや(4)のような「前置き」を表すものなどがありますが、これらは中上級編で扱います。

(2) さっさと行くんだ。(強い命令)

(3) 僕がやると言ったらやるんだ。(強い意志の表明)

(4) 願いがあるんですが、今、お時間ありますか。(前置き)

◆「のだ」と類似した関連づけを表す形式に「わけだ」がありますが、両者の相違については中上級編で扱います。

○参考文献

奥田靖雄 (1990) 「説明 (その1) - のだ、のである、のです -」『ことばの科学4』
むぎ書房

小金丸 (現野田) 春美 (1990) 「ムードの「のだ」と「スコープの「のだ」」『日本語学』9-3

田野村忠温 (1990) 『「のだ」の意味と用法 - 「のだ」の意味と用法 -』和泉書院

寺村秀夫 (1984) 『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版

野田春美 (1997) 『日本語研究叢書9 「の (だ)」の機能』くろしお出版

三上 章 (1953) 『現代語法序説 - シンタクスの試み -』くろしお出版から復刊
(1972)

益岡隆志 (1991) 『モダリティの文法』くろしお出版

コラム

相補分布

英語の動詞の活用を覚えるとき、なぜ、goはgo - went - goneと過去形だけまったく違う形を使うのか考えたことはありませんか。これはgoとwendという2つの動詞の活用が混じりあってできたからだと言われています。このような一方の（活用）体系に他の（活用）体系の形式が混じり込んで体系を成している状態を**相補分布**と言います。

日本語でも、「愛する」など語幹が漢字一文字のサ変動詞は、一部、Ⅰ類（五段）動詞である「愛す」の活用形を使用しています。

辞書形	マス形	テ形	否定形	命令形	バ形	意向形
愛する（Ⅲ類）	愛します	愛して	愛しない	愛しろ	愛すれば	愛しよう
愛す（Ⅰ類）	愛します	愛して	愛さない	愛せ	愛せば	愛そう

「愛する」はサ変動詞の扱いがされますが、実際には否定形・命令形・意向形ではサ変（Ⅲ類）の形が用いられず、Ⅰ類の活用をする「愛す」の活用形が用いられています。一方で、辞書形とバ形ではⅠ類とⅢ類の両方の活用形が用いられますが、Ⅰ類の「愛す」と「愛せば」はやや古風な感じがします。このように、二つの形式のどちらも使われる箇所がある点で英語のgoの活用とはやや違いますが、現代語としての「愛する」は基本的にはゴシック体で示した相補分布的な活用体系を持つと考えることができます。

§29. 疑問文の種類と文末形式

日本語の疑問文には「のだ」が付くものと付かないものがあります。両者の使い分けは、難しいだけでなく失礼な表現になることがあるので、注意が必要です。ここでは、疑問文の種類について概観した後、「のだ」が付く疑問文と「のだ」が付かない疑問文の違いを考えます。また、疑問文の文末形式にはいくつかのバリエーションがあるので、ここで併せて見ておきます。

1. 疑問文の種類とその答え方

(1) 山田：田中さんは大学生ですか。

田中：○はい、そうです。 ○いいえ、ちがいます。

○はい、大学生です。 ○いいえ、大学生ではありません。

(2) 山田：田中さんは忙しいですか。

田中：×はい、そうです。 ×いいえ、ちがいます。

○はい、忙しいです。 ○いいえ、忙しくありません。

(3) 山田：田中さんは朝6時に起きますか。

田中：×はい、そうです。 ×いいえ、ちがいます。

○はい、起きます。 ○いいえ、(6時には)起きません。

(4) 山田：田中さんはどんな音楽をよく聞くんですか。

田中：×はい、聞きます。 ×いいえ、聞きません。

○クラシック音楽です。

これだけは

◆疑問文は、(1)～(3)のように、文中に疑問語を含まずその文の真偽を尋ねるために用いられる**真偽疑問文（Yes－No 疑問文）**と、(4)のように、文中に疑問語（疑問詞）を含む**疑問語疑問文（WH 疑問文）**に大別されます。

◆真偽疑問文に対しては「はい」や「いいえ」で答えることができますが、疑問語疑問文に対しては「はい」や「いいえ」で答えることはできません。

◆真偽疑問文のうち、「はい、そうです。」「いいえ、ちがいます。／そうではありません。」で答えることができるのは、(1)のように述語が「名詞＋だ」の場合に限られます。(2)のように述語が形容詞の場合や、(3)のように述語が動詞の場合は、「はい、そうです。」「いいえ、ちがいます。／そうではありません。」は使えず、代わりに、述語を繰り返す必要があります。

◆後述のように、疑問語疑問文では多くの場合「のだ」が使われます。ただし、次のように、疑問語（疑問詞）が述語に含まれる場合は「のだ」は不要です。

- (5) 文学部の学部長はどなたですか。

2. 疑問文に使われる「のだ」

- (1) 田中さんは学生ですか。
 (2) この本はおもしろいですか。
 (3) 田中さんはこの時計を買いましたか。
 (4) どうしてこの時計を買ったのですか。
 (5) 田中さんはこの時計をあの店で買ったのですか。

これだけは

◆(1)～(5)からわかるように、疑問文には「ますか、ましたか、ですか、でしたか」で終わるものと、「～のですか」で終わるものがあります（これらのバリエーションについては3を参照）。後者は、前者の「か」の前の部分と

「か」の間に「のです」が挿入された形です。

田中さんはこの時計をあの店で買いました+「のです」+か

→×田中さんはこの時計をあの店で買いましたのですか。

→○田中さんはこの時計をあの店で買ったのですか。

◆この例からわかるように、「のです（のだ、のである）」の前の述語は普通形になります。なお、「の」は話しことばでは「ん」になるのが普通です。

◆(1)のような名詞文、(2)のような形容詞文で「のだ」を使うと、その「のだ」は通常、§28の「関係づけの「のだ」」となり、先行文や状況に対する理由を尋ねるものとなります。

(6) 田中さんは頭が痛いのですか。

例えば、(6)は「田中さん」が額に手を当てているといった状況を見て、その理由が「頭が痛い」ことなのか否かを尋ねるために使われます。

◆一方、(3)～(5)のような動詞文には「～（ます）か」型疑問文と「～の（です）か」型疑問文があります。両者の違いは、前者はある出来事が起こったか否かを尋ねているのに対し、後者はある出来事が起こる／起こったことを事実として認めた上でそれについてさらに詳しい限定を求めるものである、という点にあります。例えば、(3)は「田中さんがこの時計を買った」という出来事が起こる／起こったか否か（この文が正しいか否か）を尋ねているのに対し、(5)は「田中さんがこの時計を買った」ことは正しいと認めた上で、購入場所が「あの店」であるか否かを尋ねているのです。

両者の違いはこれらの文に対する答え方を見るとはっきりします。例えば、(3)に対して「いいえ」で答えた場合、それは「何も買わなかった」ことを意味しますが、(5)に対して「いいえ」で答えた場合には、それは「何も買わなかった」ことは意味しません。そのため、(5)に対する答えとしては「買いませんでした」は使いにくくなります。

(3) A：田中さんはこの時計を買いましたか。

田中：○いいえ、買いませんでした。

○いいえ、買いませんでした。何も買いませんでした。

(5) A：田中さんはこの時計をあの店で買ったのですか。

田中：？いいえ、買いませんでした。

×いいえ、買いませんでした。何も買いませんでした。

○いいえ、あの店では買いませんでした。

◆なお、形の上では疑問文であっても、機能の上で勧誘・依頼など質問以外の意味を表す場合には「のだ」は使われません。

(7) ○山田さんも私たちといっしょに行きますか。(勧誘)

×山田さんも私たちといっしょに行くんですか。(勧誘)

◆「のだ」の前には普通形が使われますが、普通形は丁寧形よりも複雑なので、提出順が丁寧形の後になるのが普通です。従って、初級の教室活動では、(特に直接法の場合、)多少不自然であっても「のだ」がない疑問文を使うことが多く、そのことは教育上重要ですが、それと同時に、学習者のレベルに合わせて、徐々に自然な日本語に移行していくことも重要です。

もう少し

◆1で疑問文の二つの種類について述べましたが、疑問文は機能的には、次の二つのタイプに分けられます。

A. その文が正しいかどうかを尋ねるために使われるもの

B. その文が正しいことを知った上でその文の一部の成分を特定するために使われるもの

(8) 田中さんは『タイタニック』を見ましたか。

(9) 田中さんは何を見たのですか。

◆疑問文で「のだ」が使われるのはBタイプに限られます。ここで、話し手が正しいことを知っている部分をその文の**前提**と言います。例えば、(5)の前提は「田中さんがこの時計を買った」ということであり、(9)の前提は「田中さんが何かを見た」ということです。一方、Bタイプの疑問文で話し手が特定したい成分をその文の**焦点**と言います。例えば、(5)の焦点は「あの店で」であり、(9)の焦点は「何を」です。一般に、前提を持つ疑問文には焦点があ

り、逆に、焦点がある疑問文には前提があります。従って、焦点がある疑問文では「のだ」が使われることになります。

◆疑問文が焦点や前提を持つのは次の場合です。

疑問文が焦点や前提を持つ（＝疑問文で「のだ」が必要な）場合

- ① 疑問文中に疑問語（疑問詞）が含まれている（疑問語疑問文の）場合
- ② 疑問文中の成分が音声的に強調されている場合
- ③ 疑問文に必須成分以外の成分が含まれている場合

◆①について言えば、疑問語疑問文はBタイプの疑問文の典型です。これは疑問語疑問文に対する答え方からわかります。つまり、これらには「はい」や「いいえ」では答えられないのです。これはこれらが「田中さんが何かを見たこと」が正しいか否かを尋ねているのではないことを示しています。

(9) 山田：田中さんは何を見たのですか。

田中：×はい、見ました。

×いいえ、見ませんでした。

○『タイタニック』を見ました。

なお、疑問語（疑問詞）を含んでいてもその疑問語（疑問詞）が述語に含まれているときは名詞文と同じ構造になるので、「のだ」は必要ではありません。

(10) 田中さんが見たのは何ですか。 cf. (9)

◆次に、②について言えば、疑問文の中の成分を強調するということは、その文が正しいか否かではなく、強調された成分が適当か否かを尋ねることになります。例えば、『タイタニック』の部分音声を音声的に強調した(11)と、そうした強調のない(8)を比べてみると、(11)では「田中さんが映画を見た」ことは前提となっていることがわかります（一方、(8)は「田中さんが『タイタニック』を見たか否か」を尋ねています）。

(11) 田中さんは『タイタニック』を見たのですか。

(8) 田中さんは『タイタニック』を見ましたか。

◆最後に、③について考えましょう。例えば、「買う」「見る」の必須成分は「～が」と「～を」なので、(3)(8)には「のだ」は不要ですが、場所を表す「～で」や相手を表す「～と」などは必須成分ではない（＝それがなくても文が成り立つ）ので、(5)や(12)では「のだ」が必要になります。

(5) ○田中さんはこの時計をあの店で買ったのですか。

cf. ? 田中さんはこの時計をあの店で買いましたか。

(12) ○田中さんは彼女と『タイタニック』を見たのですか。

cf. ? 田中さんは彼女と『タイタニック』を見ましたか。

では、どうしてこうした場合に「のだ」が必要となるのでしょうか。(3)'や(8)'は必須成分だけを含む文です。

(3)' 田中さんはこの時計を買いました。

(8)' 田中さんは『タイタニック』を見ました。

必須成分はある述語を中心に出来事を描く際に最低限必要とされる成分ですから、それだけを含む文は出来事をさらに詳しく限定しているわけではありません。そのため、それを疑問文にした場合はその出来事が起こったか否か（その文が正しいか否か）を尋ねられます。つまり、Aタイプの疑問文として使えるのです（ただし、この場合でもどれかの成分を音声的に強調すればBタイプの疑問文になるので、「のだ」が必要になります）。

一方、(5)'や(12)'の「あの店で」や「彼女と」は必須成分ではなく、出来事を限定する機能を持っています。

(5)' 田中さんはこの時計をあの店で買いました。

(12)' 田中さんは彼女と『タイタニック』を見ました。

そして、そのためにこれらの成分はこれらを含む文を疑問文にした場合には焦点になります。つまり、(5)や(12)は「田中さんがこの時計を買った」ことや「山田さんが『タイタニック』を見た」ことではなく、「あの店で」買ったのか否か、「彼女と」見たのか否かを尋ねることになり、そのために「のだ」が必要になるのです。

(5) A : 田中さんはこの時計をあの店で買ったのですか。

B : ○いいえ、あの店では買いませんでした。

×いいえ、何も買いませんでした。

(12) 田中さんは彼女と『タイタニック』を見たのですか。

A : ○いいえ、彼女とは見ませんでした。

B : ×いいえ、何も見ませんでした。

なお、こうした場合には形容詞文や名詞文でも「のだ」が使われます。

(13) いつごろから頭が痛い{○のですか／?ですか}。

◆ここまで見たように、「のだ」はそれが前提を持つ疑問文であることを示すために使われますが、次の(14)のように、本来「のだ」が必要とされる文で「のだ」が使われないことがあります。この場合、「のだ」を使っても問題はないので、学習者は「「のだ」が不要になることがある」ということを知っていれば十分です。

(14) 田中さんは昨日何をしましたか。

なお、(15)の「どうして」のような理由を表す語や(16)(17)のような従属節を含む場合には「のだ」は常に必要です。

(15) どうして学校を{○休んだのですか／×休みましたか}。

(16) 頭が痛かったから、学校を{○休んだのですか／×休みましたか}。

(17) 絵を学ぶために、パリに{○行ったのですか／×行きましたか}。

◆一方、逆に、(18)のような本来「のだ」が必要とされない場合に「のだ」を使うと、聞き手の発言を疑うといった含意が生じることがありますから、注意が必要です。例えば、(19)は(20)のような文脈を想像させやすく、意図せず失礼な発言になることがあるので、注意をする必要があります。

(18) 彼は大学院生ですか。

(19) 彼は大学院生なんですか。

(20) 彼は大学院生なんですか。その割に専門のことを知りませんね。

◆「のだ」が使われる真偽疑問文に対しては「はい、そうです。」「いいえ、ちがいます。／そうではありません。」で答えることができます。これは、「のだ」が「の+だ」に由来し、「の」が形式名詞であるため、「のだ」全体が名詞文に相当する形になっているためです。

(2) 山田：田中さんはかばんを銀座で買ったんですか。

田中：○はい、そうです。

○いいえ、ちがいます。／○そうではありません。

cf. 山田：田中さんはかばんを買いましたか。

田中：×はい、そうです。

×いいえ、ちがいます。／×そうではありません。

○はい、買いました。

○いいえ、買いませんでした。

3. 「か」のバリエーション

疑問文の文末には「か」がつくのが典型的ですが、文体差、男女差、世代差、方言差などによって、様々な形（バリエーション）が使われます。

<「のだ」がない疑問文>

- (1) a. 山田さんはあの映画を{見ますか／見ましたか}。
- b. 山田さんはあの映画を{見ます↑／見ました↑}。
- c. あの映画を{見るか／見たか}。
- d. あの映画を{見る↑／見た↑}。
- (2) a. ○だれが{来ますか／来ましたか}。
- b. ○だれが{来ます↑／来ました↑}。
- c. ×だれが{来るか／来たか}。
- d. ○だれが{来る↑／来た↑}。

これだけは

◆日本語の疑問文は、文末に「か」をつける、または、文末イントネーションを上昇調にする、のいずれかで作られます。

◆「です・ます／でした・ました+か」((1)~(4)のa文)は、デス・マス体の平叙文に対応する疑問文で、品詞や性別などに関係なく使われますが、これから「か」を除いて上昇イントネーションを加えたもの((1)~(4)のb文)は、動詞では文法的ですが、それ以外の品詞では非文法的です。一般に「です↑／だ↑」((3)b(4)b(4)e)は非文法的になります。ただし、「でした↑／だった↑」((4)b'(4)e')は文法的です。

- (3) a. ○その本は{おもしろいですか／おもしろかったですか}。

(イ形容詞)

- b. ×その本は{おもしろいです↑／おもしろかったです↑}。

- c. ○その本は{おもしろいか／おもしろかったか}。

- d. ○その本は{おもしろい↑／おもしろかった↑}。

- (4) a. ○彼は学生{ですか／でしたか}。(ナ形容詞・「名詞+だ」)

- b. ×彼は学生です↑。 cf. ○彼は学生です。

- b.' ○彼は学生でした↑。

- c. ○彼は学生か。

- d. ○彼は学生↑。

- e. ×彼は学生だ↑。 cf. ○彼は学生だ。

- e.' ○彼は学生だった↑。

◆一方、「普通形+か」((1)~(4)のc文。ただし、ナ形容詞と「名詞+だ」の場合は「だ」を「か」に変える)は主に男性が使う、ダ体の平叙文に対応する疑問文ですが、現在ではあまり使われなくなりつつあります。(2)cのような疑問語疑問文の場合には特にそうです。現在では、この形の代わりに、「普通形↑」((1)~(4)のd文)がよく使われます。

◆なお、埋め込み文では「普通形+か」も使われます(→§19)。

- (5) 私の留守中にだれが来たか教えてください。

◆また、これらの文（ただし(2)cのような疑問語（疑問詞）を含む場合を除く）を下降イントネーション（↓で表す）で発話すると、納得の意味になります。

(6) (そうか。) 彼は学生か↓。

<「のだ」がある疑問文>

動詞・イ形容詞の場合

- (1) a. あの映画を{見るのですか／見たのですか}。
 b. あの映画を{見るのか／見たのか}。
 c. あの映画を{見るの↑／見たの↑}。

ナ形容詞・「名詞+だ」の場合

- (2) a. 彼は学生なのですか。／彼は学生だったのですか。
 b. 彼は学生なのか。／彼は学生だったのか。
 c. 彼は学生なの↑。／彼は学生だったの↑。

これだけは

◆「のだ」がある場合には、すべての品詞で、「のですか、のか、の↑」がすべて文法的になります。ただし、「のか」((1)(2)のb文)が主に男性によって使われるのに対し、「の↑」((1)(2)のc文)は女性がよく使う傾向にある（ただし、男性が使わないわけではない）という特徴があります。なお、この場合も「のだか」は使われません。

(3) ×彼は学生なのだか。 cf. (2)a～(2)c

もう一步進んでみると

◆「のだ」の研究は数多いですが、その多くは、§28の「関係づけの「のだ」」と、ここで扱った「のだ」を同様に扱っています。その中で、野田春美(1997)は、両者を各々「ムードの「のだ」」「スコープの「のだ」」と呼んで区別しています。「ムード」は「モダリティ」とほぼ同義です。「スコープ」は、文中のどこまでを疑問や否定などの対象とするかということです（否定

の場合については中上級編で扱います)。例えば、次の(1)のスコープは [] で囲んだ部分であり、「学校を休んだ」だけではありません。

(1) 頭が痛かったから、学校を休んだのですか。

[頭が痛かったから、学校を休んだ] のですか。

野田春美 (1997) の「スコープの「のだ」」は、(1)で「のだ」が使われる理由を、スコープを「学校を休んだ」だけではなく文全体に広げるためと考えるものです。

◆2で扱った疑問文の文末形式のバリエーションについては野田春美 (1995) がよくまとまっています。

まとめ

疑問文の種類

真偽疑問文 (Yes - No 疑問文) :

文中に疑問文を含まず、その文の真偽を尋ねる疑問文

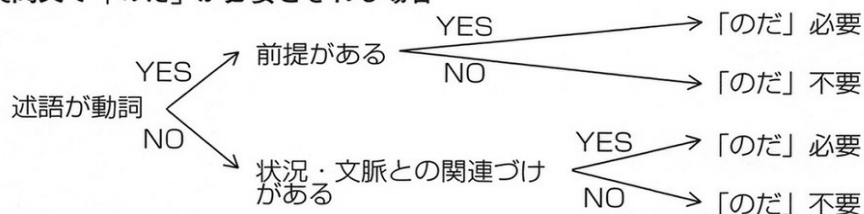
疑問語疑問文 (WH 疑問文) :

文中に疑問語 (疑問詞) を含み、その疑問語 (疑問詞) の内容を特定することを目的とする疑問文

「はい、そうです」「いいえ、ちがいます。／そうではありません。」による応答

疑問語疑問文では不可能。真偽疑問文でも、述語が「名詞+だ」以外の場合
は不可能。ただし、「～の(です)か」型疑問文では可能。

疑問文で「のだ」が必要とされる場合



疑問文が前提を持つ場合

- ① 疑問文に疑問語 (疑問詞) が含まれている、疑問語疑問文
- ② 疑問文中の成分が音声的に強調されている
- ③ 疑問文に必須成分以外の成分が含まれている

○参考文献

小金丸（現野田）春美（1990）「ムードの「のだ」と「スコープの「のだ」」『日本語学』9-3

野田春美（1995）「～ノカ？、～ノ？、～カ？、～ ϕ ？－質問文の文末の形－」

宮島達夫・仁田義雄編『日本語類義表現の文法（上）』くろしお出版

———（1997）『日本語研究叢書9 「の（だ）」の機能』くろしお出版

§30. 立場を表す表現 ーヴォイス（受身・使役・使役受身）ー

AとBという二つの野球チームが対戦して、AチームのバッターがBチームのピッチャーからホームランを打ったとします。Aチームのファンであれば「〇〇選手がホームランを打った」と言うでしょうし、Bチームのファンなら「〇〇選手にホームランを打たれた」と言うでしょう。

この「打つ」と「打たれる」のような違いは、「〇〇選手がホームランを打った」という事実をAとBどちらの立場からとらえるかによって生じるもので、このような表現の対応をヴォイスと呼びます。

日本語には次のようなヴォイスの表現があります。

- ・受身 「AがBを殴る」に対する「BがAに殴られる」
- ・使役 「AがBを殴る」に対する「CがAにBを殴らせる」

この他、「～てあげる・～てくれる」と「～てもらう」（→§11）もどの立場からとらえた表現かという点でヴォイス的な特徴を持っていますし、「教える・教わる」「捕まえる・捕まる」などの語彙的な対応もありますが、ここでは受身と使役に関する文法的表現を中心に見ておきます。

1. 受身形・使役形・使役受身形の作り方

- (1) この本は世界中の子供たちに読まれている。
- (2) 親はできるだけたくさんの本を子供に読ませようとする。
- (3) 学校で読まされた本は大きくなっても覚えているものだ。

これだけは

◆ I 類動詞の**受身形**は語幹（→§36）に-areruを付けます。

書く 語幹 kak- + -areru → kakareru（書かれる）

読む 語幹 yom- + -areru → yomareru（読まれる）

II 類動詞の受身形は語幹に-rareruを付けます。

見る 語幹 mi- + -rareru → mirareru（見られる）

出る 語幹 de- + -rareru → derareru（出られる）

III 類の「来る」も II 類と基本的に同じですが、語幹の母音が変化します。

来る 語幹 ku- + -rareru → **kor**areru（来られる）

「する」は「される」という形を使います。

II 類および III 類の受身形は可能形（→§8）と同じ形です。

また受身形自身は II 類動詞と同じ活用をします。

書かれる kakare-nai / ru / te / ta / reba …

◆ I 類動詞の**使役形**は語幹（→§36）に-aseruを付けます。

書く 語幹 kak- + -aseru → kakaseru（書かせる）

読む 語幹 yom- + -aseru → yomaseru（読ませる）

II 類動詞の使役形は、語幹に-saseruを付けます。

見る 語幹 mi- + -saseru → misaseru（見させる）

出る 語幹 de- + -saseru → desaseru（出させる）

III 類の「来る」も II 類と基本的に同じですが、語幹の母音が変化します。

来る 語幹 ku- + -saseru → **kos**aseru（来させる）

「する」は「させる」という形を使います。

使役形も II 類動詞と同じ活用をしますが、I 類型の活用をする-(s)asu 型の使役形である「書かす」が（やや少ないが「見さす」も）使われます。

	辞書形	否定形	テ形	バ形	意向形
語幹+ -(s)aseru 型	書かせる 見させる	書かせない 見させない	書かせて 見させて	書かせれば 見させれば	書かせよう 見させよう
語幹+ -(s)asu 型	書かす (見さす)	書かさない (見ささない)	書かして (見さして)	書かせば (見させば)	書かそう (見さそう)

◆使役受身形は次のように作ります。

I 類 書く 語幹 kak- + -as-areru → kakasareru (書かされる)

II 類 見る 語幹 mi- + -sase-rareru → misaserareru (見させられる)

III 類 来る 語幹 ku- + -sase-rareru → kosaserareru (来させられる)

I 類は-(s)asu型(前ページの表下段)に-areruを付け「書かされる」とするのが一般的ですが、-(s)aseru型(同上段)に-rareruを付けた「書かせられる」も用いられます。

「出す」などの語幹がsで終わる動詞は同じ音の連続が嫌われるため「出さされる」よりも「出させられる」のほうが普通です。

II 類と III 類は-(s)aseru型(同上段)に-rareruを付けて作ります。

もう少し

◆「書かせて」などの代わりに「書かさせて」という使役形を最近よく耳にします。これは可能のラ抜きことばに対して「サ付きことば」や「サ入れことば」と呼ばれる形ですが正式に認められた形ではありません。

2. 受身文の種類

- (1) 弟が兄にしかられる。

(2) 隣の人に大声で騒がれた。

これだけは

◆日本語の受身文は二つの代表的なタイプに分けられます。

◆能動文のヲ格やニ格の名詞句を受身文の主語にするタイプ：直接受身

能動文： 兄が 弟を しかる。 兄が 弟に 話しかける。

受身文： 弟が 兄に しかられる。 弟が 兄に 話しかけられる。

このような受身文は英語などと同じタイプです。また意味的な特徴から中立受身と呼ばれることもあります。

◆能動文にない名詞句が受身文の主語になるタイプ：間接受身

能動文： 隣の人が 騒ぐ。

受身文： 私は 隣の人に 騒がれる。

「私は」は「隣の人が騒ぐ」ことによって影響（＝迷惑）を受ける存在として文に現れてきます。このような性質から**迷惑受身**とも呼ばれます。

もう少し

◆日本語の受身文にもう一つ次のようなタイプを認める立場もあります。

(3) 私は知らない人にいきなり頭をたたかれた。

(4) 私は息子を先生にほめられてうれしかった。

このような受身文は「頭」や「息子」が主語の「私」の身体部位や所有物または関係者であるという特徴から**持ち主の受身**と呼ばれます。

持ち主の受身文の主語は対応する能動文のヲ格名詞やニ格名詞に対応しません。例えば、(3)は「知らない人が私の頭をたたいた」という能動文に対応しますが、(3)の主語の「私」は能動文のヲ格名詞である「頭」の持ち主として「私の」の形で表されています。この点で、上で挙げた基準からすれば間接受身ですが、意味的には(4)に見られるように必ずしも迷惑を意味するとは限りません。

特に「頭」など身体部位が能動文のヲ格である場合、その受身文は「私の頭がたたかれた」ではなく、持ち主の受身の「私は頭をたたかれた」となることに注意しなければなりません。「かばん」などの持ち物や「息子」などの関係者の場合、「私のかばんが盗まれた」や「私の息子がほめられた」のように直接受身でも言えますが、持ち主の受身を使って「私はかばんを盗まれた」「私は息子をほめられた」とすると、主語の「私」が間接的な影響を受けていることがはっきりしてきます。

30.

立場を表す表現――ヴォイス（受身・使役・使役受身）――

3. 受身の形を持つ動詞と持たない動詞

これだけは

◆直接受身は、能動文のヲ格やニ格の名詞句が受身文の主語になりますので、ヲ格やニ格を取る動詞しか受身文になることができません。

- (1) 兄が弟をしかる。 ⇨ 弟が兄にしかられる。
(2) 田中が小林に声をかける。 ⇨ 小林が田中に声をかけられる。

◆間接受身では能動文に含まれない名詞句が主語になるので、能動文の動詞は、自動詞やト格の動作の相手を取る動詞であっても、またもちろんヲ格やニ格を取る他動詞でもかまいません。

- (3) 隣の人が騒いだ。 ⇨ (私は) 隣の人に騒がれた。
(4) 田中が幸子と結婚した。 ⇨ (私は) 田中に幸子と結婚された。
(5) 先生がライバルをほめた。 ⇨ (私は) 先生にライバルをほめられた。

◆間接受身にできない動詞もあります。

- ・能力を表す動詞：「できる」および動詞の可能形
- ・自発的な意味を持つ動詞：「見える、聞こえる、売れる」など
- ・その他、意向形を持たない、いわゆる無意志動詞（→§38）で、動詞の表す動作が他のものに影響を与えない状態動詞：「ある、要る」など
- ・既に受身的な意味を持っている動詞：「教わる、見つかる」など

もう少し

◆いくつかの動詞は能動形を持たずもっぱら受身形で使われます。このような動詞には「(悪夢に) うなされる、(彼女の魅力に) 魅せられる、(火事で) 焼け出される、(名人と) うたわれる、うちひしがれる、けおされる、とらわれる」の他「足を取られる、気を取られる、身につまされる」など身体部位を含む慣用表現があります。

4. 直接受身文の動作主を表す格

- (1) 弟が兄に殴られた。
 (2) 弟が兄{に／から}ほめられた。
 (3) 市長から大会の優勝者にメダルが渡された。
 (4) この小説は有名なロシア人作家によって書かれたものだ。

これだけは

◆受身文では動作主は一般的に二格によって表されます。この他にカラ格や「～によって」でも表されることがあります。

◆二格を用いず他の格を用いるのは次の二つの場合です。

- ①「(AがBにCを) 渡す、送る、与える」など、何かを受け取る人が二格で表される動詞の場合

受身文の動作主が二格で表されると混乱が生じるため、動作主はカラ格で表されます。

- (5) 大会委員長{○から／×に}参加者全員に記念品が渡された。
 (6) 権利は国{○から／×に}与えられるものでなく獲得するものだ。

- ②「(AがBを) 作る、建てる、書く、編む」など生産物が生じる動詞の場合

生産物を受け取る人が二格で表される可能性があるため、動作主は二格ではなく「～によって」で表するのが普通です。

- (7) 法隆寺は聖徳太子{○によって／?に}建てられた。
 (8) このオペラはプッチーニ{○によって／?に}作曲されたものだ。

◆カラ格は上の①の他にも直接接触をしない動作を表す他動詞の受身文で広く使われます。この場合には二格でもかまいません。

- (9) 町を歩いていたら見知らぬ人{から／に} 話しかけられた。
- (10) 田中さん{から／に}パーティに招待された。
- (11) 花子はみんな{から／に}とても愛されている。

5. 受身文の働きーなぜ受身文を使うのか

- (1) 田中さんは山下さんに殴られてけがをしました。
- (2) 地震の後、多くの人がビルの下から助け出された。
- (3) 道を歩いているとき、一人のおじいさんに声をかけられた。
- (4) 買ったばかりの車を汚されて頭にきました。

これだけは

◆受身文は能動文と比べて複雑な形をしています。ではどのような場合に受身文を使うのでしょうか。

① 動作主側より動作の受け手側について何かを言いたい場合

- (5) a. 川上投手は松井選手を三振に打ち取った。
- b. 松井選手は川上投手に三振に打ち取られた。

(5)bは松井選手の側に、より着目した表現です。

② 複文において前件の主語と後件の主語をそろえる必要がある場合

- (6) 彼に殴られながら、私は「いつか見返してやる」と思った。
- (7) みんなに愛されて彼女は幸せそうでした。
- (8) 年齢を聞かれると29歳と答えることにしている。

特に、付帯状況の「ながら、つつ」と原因・理由および継起的な「て」の場合には主語は必ずそろえなければなりません。

- (9) ×彼が私を殴りながら、私は「いつか見返してやる」と思った。

一方、条件を表す「と、ば、たら」や逆接を表す「のに、ても」は、動作主が明示されていれば能動文で言うことも可能ですが、やはり受身文のほうが自然です。

(10) ×みんなが愛して彼女は幸せそうでした。

(11) ×年齢を聞くと29歳と答えることにしている。

③ 動作主がわからなかったり不問である場合

(12) この歌は広く歌われている。

④ 不特定の人が何かの動作をし、話し手がその動作を受ける場合

(13) a. ?見知らぬ人が私に道を尋ねました。

b. (私は) 見知らぬ人に道を尋ねられました。

日本語は話し手を主語にしたほうが自然に感じられる傾向の強い言語なので、(13)bのような受身を使った表現のほうが自然です。

◆間接受身は、被害の意味を表すために用いられ、特に原因・理由のテ節を含む複文の後件に「困る、残念だ」など感情を表す表現を伴って用いられます。

(14) 隣の家の人に何時間も大声で騒がれて困った。

6. 使役文の種類

(1) 先生は学生たちを走らせた。

(2) 田中さんは小林くんにわざと転ばせた。

(3) 田中さんは子供に絵を描かせた。

(4) 神戸まで車を走らせた。

これだけは

◆**使役文**は出来事を実現させようとする人（ で示す）が文中に現れると同時に、動詞が使役形になり格が一部変わることによって作られる表現です。

能動文： 子供が 遊ぶ。 兄が 弟を しかる。

使役文： 先生は 子供を／に 遊ばせる。 母親が 兄に 弟を しからせる。

◆自動詞の場合、基本的には動作主はヲ格でも二格でも表されます。

(5) 先生は子供たち{を／に}泳がせた。

他動詞の場合、他にヲ格があるので動作主は二格で表されます。

(6) 先生は子供たち{×を／○に}作文を書かせた。

◆上に述べたように、ヲ格と二格の使い分けが問題となるのは自動詞の場合です。基本的に、動作主がヲ格で表される使役は動作主の意向を考慮しない言い方なのに対して、動作主を二格で表す場合には動作主の意向が入る余地を残していると言えます。上に挙げた(2)のように「わざと」という「小林くんの意志」が入る場合には二格が用いられます。

動作主の意向に逆らって「させる」場合には、ヲ格も二格も使われます。

(7) 先生は嫌がっている子供たち{を／に}無理やり泳がせた。

反対に、動作主が動作を意志的に起こす場合には、ヲ格もまったく不自然でないものもありますが、二格のほうが自然に聞こえます。

(8) オーナーはチーム{？を／○に}わざと試合に負けさせた。

(9) そんなに行きたいんだったら君{？を／○に}行かせてやるよ。

(10) 次は僕{？を／○に}走らせてください。

この用法は**許可**や**放任**という名で呼ばれることもあります。

「物」のように意志を持たないものに対してはヲ格しか使えません。

- (11) 倒れていた看板{○を／×に}立たせた。
- (12) 神戸まで車{○を／×に}走らせた。

もう少し

◆次のような使役文もまれに見かけます。

- (13) 彼は戦争で息子を死なせている。
- (14) その老人は妻を事故で死なせたことで悩んでいる。

これらは主語にある人は何も動作者に働きかけたり許可を与えたりしていない用法で、むしろ間接受身文に近い用法です。

◆他動詞ではありませんが「道を歩く」「空を飛ぶ」など通過域を表すヲ格がある場合もやはり二格が使われます。

- (15) 田中は林{×を／○に}危険な道を通らせた。

◆「～てもらふ」も使役的な意味を持つことがあります(→§11)。

- (16) 子供たちはお手本として先生に泳いでもらった。

7. 使役を使ったその他の表現

- (1) 子供にクリスマスプレゼントを買わされた。
 - (2) 頭が痛かったので早めに帰らせてもらった。
 - (3) その仕事は私にやらせてください。

これだけは

◆「走らされる」「食べさせられる」は使役受身と呼ばれる表現形式で、自らの意志ではなく他の人に強制されてした動作であることを表します。この場合、強制する人は二格で表されます。

30.

立場を表す表現――ヴォイス(受身・使役・使役受身)――

(4) 選手たちはコーチにグラウンドを走らされた。

(5) 太郎は親に嫌いな野菜を食べさせられた。

(4)は「選手たちはグラウンドを走った」と比べて「コーチに強制されて（いやいや）走った」という意味が加わっています。

◆「選手たち」が「グラウンドを走る」ことを「コーチ」に頼んで行った場合には「させてもらう」の形を使います。

(6) 選手たちはコーチに競技会で走らせてもらった。

この「させてもらう」の形は(7)のように謙讓的な表現としてよく使われますが、聞き手に許可を得る必要がなく、また話し手にとってその行為が特に利益とならない(8)のような場合に使うとやや不自然になります。

(7) そろそろ帰らせていただきます。

(8) ? 私から話させてもらいます。(→私からお話しします。)

(7)のようなⅠ類動詞の「させてもらう」の形で「帰らせていただきます」のようなサ付き（サ入れ）ことばが見られます。ただし(8)のようなサ行のⅠ類動詞ではこのようなサ付き（サ入れ）ことばは見られません。

もう一步進んでみると

◆ヴォイスはある出来事を異なる立場からとらえる表現形式が基本ですが、この他に次の3点をヴォイスとして認定する基準とする立場もあります（村木新次郎1991など）。

- ① 文の意味構造：主語の文法役割の交替
- ② 名詞の統語形式：格の交替
- ③ 動詞の形態：形態的に何らかが付加されて派生する

「太郎が次郎を殴った」という能動文に対する受身文「次郎が太郎に殴られた」を例にとると、①は主語が、能動文で「太郎」という動作主であるのに対して、受身文では「次郎」という動作の受け手になっていること、②は「殴る」という動作をする「太郎」に付く格がガ格から二格に替わり、同時

に「殴られる」側の「次郎」の格もヲ格からガ格に変化していること、③は受身形は能動形にない-areruという有標の形態素を含むことを意味しています。このように受身は①②③の条件をすべて満たす最も典型的なヴォイス形式と言えるでしょう。使役もこの条件を満たしていると考えられます。

①②③の要件を一部でも満たしていればその表現をヴォイスに含めるという立場もあります。最も広く取る立場では、自動詞と他動詞、相互、再帰、可能、希望、自発、授受表現、「～である」、「～やすい・～にくい」などの難易表現、願望の「～たい」をヴォイスに含めます。

◆受身にならない動詞については、三上章（1953）における、受身形を持つ能動詞と受身形を持たない所動詞の区別が有名です（→§10）。所動詞の「ある、売れる、もうかる」などを受身にして「×会議にあられた」「×著書に売られた」「×金にもうかられた」などは言えません。

三上自身はこの区別を晩年に放棄しましたが、近年様々な文法現象への反映から一定の評価がされるようになりました。

◆受身文の主語は日本語では特に意識を持った人などの有情物に限られるという議論がずっとありました。例えば「×ピアノが田中さんによって弾かれた」とは言えません。ただし「木が切られる」などは自然な表現であり、様々な議論がされる部分です。

◆なぜ受身が使われるかに関しては、談話の観点から村木新次郎（1989）がまとまっています。本文中に挙げたものの他、「問題の解決が（委員会によって）急がれた」のように対象のほうに視点が置かれている場合にも受身文が用いられることが指摘されています。

また、久野 暲^{すすむ}（1978）は受身文の「？だれかが僕に殺されてしまった。」が言えない理由を視点制約という観点から説明しています。

○参考文献

三上 章（1953）『現代語法序説―シンタクスの試み―』くろしお出版から復刊（1972）

久野 暲（1978）『談話の文法』大修館書店

村木新次郎（1989）「ヴォイス」北原保雄編『講座日本語と日本語教育 4 日本語の文法・文体（上）』明治書院

———（1991）『日本語動詞の諸相』ひつじ書房

§31. その他の構文

本書ではテンス・アスペクト・モダリティなどのカテゴリーごとに表現をまとめて考えていますが、中にはこうした分類ではうまく扱えないものもあります。ここでは、そうした表現をまとめて扱います。

1. ハーガ構文

- (1) 象は鼻が長い。
- (2) あのスーパーは水曜日が休みだ。
- (3) その事件は警察が調べている。
- (4) ここにあたりんごは田中さんが食べた。

これだけは

◆日本語の構文の中には、一つの文の中に「は」と「が」が共に現れるものがあります。こうした構文を**ハーガ構文**と呼びます。

◆「ハーガ構文」にはいくつかのパターンがありますが、その中で最も重要なのは次の二つの場合です。

「XはYがZ」という構文において、

- ① Zが形容詞（または名詞）で、「YがZ」全体がXの属性を表す。
- ② Zが（他）動詞で、XがZの目的語である。

まず、①は(1)(2)のような場合です。例えば、(1)は「象」が「鼻が長い」と

いう属性を持っているということを表しています。この場合のY（「鼻」）は側面語と呼ばれることもあります。

一方、②は(3)(4)のような場合です。例えば、(3)の「その事件」は「調べている」の目的語です。このことは、(3)を次の(3)'のように無題化（→§27）してみるとよくわかります。

(3)' その事件を警察が調べている（ことは事実だ）。

ここで注意する必要があるのは、①のタイプではXは主題であると同時に主語でもあるのに対し、②のタイプではXは主題ではあるが主語ではなく、主語はYであることです（→§27）。

もう少し

◆①のタイプでは、Xが全体的な範囲を示し、Yが部分的な範囲を示します。例えば、次の(5)(6)において、文全体の叙述対象はそれぞれ「田中さん」「吉田さん」であり、「背」「頭」は「高い」「いい」を限定しています。

(5) 田中さんは背が高い。

(6) 吉田さんは頭がいい。

◆①のタイプの中には「XのYはZ」という言い方ができる場合もありますが、この場合両者の間には違いがあります。

(7) a. 象は鼻が長い。(=(1))

b. 象の鼻は長い。

「は」は主題（その文で述べることの範囲）を表します（→§27）から、(7)aは「象」の属性について述べる文になります。一方、(7)bは「象の鼻」について述べる文になります。従って、次の(8)のように「象」のことが話題になっている場合には(8)B 1のほうが(8)B 2よりも自然であるのに対し、(9)のように「象の鼻」のことが話題になっている場合には、(9)B 1よりも(9)B 2のほうが自然になります（ただし、「象の鼻」は旧情報なので、それを省略した(9)B 3のほうがより自然です→§34）。

(8) A：象って、どんな動物なの？

B 1： 象は鼻が長いんだよ。

B 2：？象の鼻は長いんだよ。

(9) A：象の鼻って、長いの？

B 1：？うん、象は鼻が長いんだよ。

B 2： うん、象の鼻は長いんだよ。

B 3： うん、長いんだよ。

◆①のタイプの中には、次の(10)のように、Yが人間を表す名詞であることがありますが、この場合のYは「父親、弟」などの親族名詞や「友人」などの人間関係を表す名詞に限られます。

(10) 山田さんは弟さんが医者だ。

従って、話し手が「博くん」が山田さんの弟であることを知っている場合でも、次のようにYが固有名詞である文は正しくありません。

(11) ×山田さんは博くんが医者だ。

◆①のタイプの「XはYがZ」を無題化(→§27)すると、「XがYがZ」という形で「が」が連続することになります。

(12) 田中さんが頭がいいことは有名だ。(←田中さんは頭がいい。)

◆形の上で「XはYがZ」になるものには、次のような、述語が「好きだ／嫌いだ」、動詞の可能形、「～たい」などの場合があります(ただし、「～たい」では「Yが」よりも「Yを」のほうがよく使われます→§14)。なお、これらは通常「ハーガ構文」には含まれません。

(13) 私は洋子さんが好きだ。

(14) 田中さんは英語が話せる。

(15) 私は水が飲みたいです。

2. 強調構文

- (1) 私が先週買ったのはこの本です。
 (2) 田中さんがこのカメラを買ったのはあの店(で)です。

これだけは

◆文中の一つの要素を強調するために使われる構文を**強調構文**（または分裂文）と言います。強調構文は次のような文型を取り、Xを強調します。

- (3) ～のはXだ。

例えば、(4)の各要素を強調した文はそれぞれ(5)a～(5)cのようになります。

- (4) 田中さんはこの本を生協で買った。
 (5) a. 先週この本を生協で買ったのは田中さんだ。 (田中さん)
 b. 田中さんが先週生協で買ったのはこの本だ。 (この本)
 c. 田中さんが先週この本を買ったのは生協(で)だ。(生協)

この場合、「の」は形式上は名詞であり、それに前接する節（(3)の「～」の部分）は名詞修飾節になるため、その中では「は」は使われず「が」が使われます（(5)b(5)c→§20, §27）。

もう少し

◆強調構文では文中の前提と焦点が明らかになります（前提と焦点については§29を参照）。つまり、(6)のようになります。

- (6) ～の は X だ。
 <前提> <焦点>

例えば、次の(7)aには前提がありませんが、(7)bは「田中さんが何かを買った」ことを前提（既にわかっていること）として、その条件を満たすのが「この服」であること、言い換えれば、この文で最も伝えたい情報（この文

の焦点)が「この服」であることを述べるために使われています。

- (7) a. 田中さんはこの服を買った。
- b. 田中さんが買ったのはこの服だ。

◆強調構文では、次の(8)a～(8)eからもわかるように、もとの文で名詞(句)が伴っていた格助詞は省略されるのが普通です。

- (8) a. ×先週この本を生協で買ったのは田中さんがだ。
- b. ×田中さんが先週生協で買ったのはこの本をだ。
- c. ×田中さんがこのことを相談したのは吉田さんにだ。
- d. ?田中さんが行ったのは大阪へだ。
- e. ×田中さんが結婚したのは洋子さんとだ。

ただし、「で」は省略しなくてもよく、「から」「まで」は省略できません。なお、「と」は「～といっしょに」の意味のときは省略しにくいです。

- (9) a. 田中さんが先週この本を買ったのは生協{で/φ}だ。
- b. 田中さんが来たのは大阪{○から/×φ}だ。
- c. この回数券が使えるのは6月30日{○まで/×φ}だ。
- d. 田中さんが食事をしたのは吉田さん{○と/?φ}だ。

((9)cで「まで」を省略した文は、回数券が使えるのが6月30日だけの場合には正しい文となりますが、それはもとの文と同じ意味ではありません。)

◆強調構文(「～のはXだ」)は、あること(「～の」)を前提として、Xを強調する文ですから、(10)のような話しはじめの文では使えません。

- (10) a. ○昨日東京ドームへ行きました。満員でした。
- b. ×昨日行ったのは東京ドームです。満員でした。

一方、次の(11)のように、ある要素だけを問題とする場合は強調構文のほうが適当です。つまり、Bが否定したいのは「昨日どこかへ行ったこと」ではなく行き先なので、B2のように、「昨日どこかへ行ったこと」を前提として、その行き先(「東京ドーム」)を特定する機能を持つ強調構文のほうが、B1のように前提がない文よりも、この場合はふさわしいのです。

(11) A：昨日神宮球場へ行ったそうですね。

B 1：？いいえ、昨日東京ドームへ行きました。

B 2：○いいえ、昨日行ったのは東京ドームです。

なお、こうした場合の強調構文は「のだ」文と置き換えられることが多いです。例えば、(11)B 2 は次の(12)と置き換えられます。

(12) いいえ、東京ドームへ行ったんです。

3. ～のは…からだ

(1) 昨日学校を休んだのは、風邪で熱があったからです。

(2) 私が日本に留学したのは、日本の企業を研究したかったからです。

(3) A：どうして、映画に行かなかったんですか。

B：(映画に行かなかったのは、) 急におなかが痛くなったからです。

これだけは

◆強調構文の中で理由を強調するために使われるのがこの構文です。例えば、(1)は(1)' の下線部を強調するために使われます。

(1)' 風邪で熱があったから、昨日学校を休みました。

◆この構文では前提の部分が省略されることがよくあります。例えば、(3)B では () の中の表現 (この文の前提) は省略するのが普通です (→§34)。

もう少し

◆「～のは…からだ」の「～のは」が省略されて、「のだ」と同様の関連づけを表すモダリティ表現となったのが「からだ」です。

(4) 私は毎朝6時30分に家を出る。満員電車に乗りたくないからだ。

例えば、(4)は「満員電車に乗りたくない」ということを「私は毎朝6時30分に家を出る」ということの理由として提示しています。

このように、「からだ」も関係づけを表す形式ですが、これと「のだ」との違いについては§28を参照してください。

4. ～やすい、～にくい、～すぎる

- (1) この本は読みやすい。
- (2) これから1週間は雨が降りやすいでしょう。
- (3) 彼の論文は読みにくい。
- (4) 消防士の服は燃えにくい材質で作られている。
- (5) あの人はお酒を飲みすぎますね。

これだけは

<接続> V_{マス} + やすい／にくい／すぎる

◆「～やすい」には次の二つの意味があります。

- ①～することが容易である
- ②しばしば～する

例えば、(1)は「この本」が「容易に読める」という属性を持っていることを表しています。一方、(2)は、これから1週間の間、しばしば雨が降るということを表します。

◆「～やすい」に前接する内容 ((1)では「読む」、(2)では「(雨が) 降る」) が、(1)のように、話し手が意志的に行い得るものであるときは、「～やすい」は①の意味になるのに対し、(2)のように、それが無意志的なもののときは、「～やすい」は②の意味になります。

◆「～にくい」は、「～やすい」の①の意味の反対語で、「～することが困難である、なかなか～しない」という意味を表します。例えば、(3)は「彼の論文」が「容易に読めない (=理解するのが容易ではない)」ということを表

しています。また、(4)は「消防士の服」が「容易に燃えない」という性質を持っていることを表します。

◆「～すぎる」は「過剰に／程度を越えて、～する」という意味で、～することは好ましいことではないという含意を持ちます。例えば(5)は、あの人がたくさんお酒を飲むこと、及び、それが適正な水準を超えて好ましくない程度である、ということを表しています。

◆「～すぎる」が習慣的な内容や現在進行中の出来事を表すときは、次の(6)bや(7)bのように「～すぎだ」と言い換えられます。

- (6) a. 君は甘いものを食べすぎるよ。
- b. 君は甘いものを食べすぎだよ。
- (7) a. 君はもうお酒を飲みすぎているよ。
- b. 君はもう飲みすぎだよ。

一方、次のように一回的な出来事を表すときは言い換えにくいです。

- (8) a. ○昨日はお酒を飲みすぎたわ。
- b. ?昨日はお酒を飲みすぎだったわ。

ただし、次のような場合は言い換えられます。

- (9) a. この間は言いすぎしました。おわびします。
- b. この間は言いすぎでした。おわびします。

もう少し

◆「～やすい」が②の意味を表すときは、「～がちだ」と言い換えられることが多いです。

- (10) a. 出かけるときに急いでいると、忘れ物をしやすい。
- b. 出かけるときに急いでいると、忘れ物をしがちだ。

なお、「～てしまう」がつくと動作が無意志的になることが多い(→§5)ため、「～やすい」は②の意味になり「～がちだ」と言い換えられます。

- (11) a. 緊張すると、話す内容が変なものになってしまいやすい。
 b. 緊張すると、話す内容が変なものになってしまいがちだ。

もう一步進んでみると

◆「ハーガ構文」は日本語に特徴的な表現形式の一つですが、これについては①のタイプを「二重主語構文」とする分析が古くからあります。これは、「XはYがZ」（Zは形容詞、名詞）のXもYも「主語」とであるとするもので、Xを「大主語」、Yを「小主語」と呼ぶこともあります。これに対し、「主語廃止論」を唱えた三上章は、これを無題化した「XがYがZ」は「二重主格構文」であり、「XはYがZ」はこの最初の主格Xが主題化したものであるということを主張しました（三上章（1960））。

◆この構文については、益岡隆志（1987）、三原健一（1990）、杉本武（1995）など多くの研究がありますが、その中でも野田尚史（1996）はこの構文の様々な類型を巧みにまとめており、非常に参考になります。

まとめ

ハーガ構文（XはYがZ）

- ①Zが形容詞・「名詞+だ」のとき……「YがZ」全体がXの属性を表す。
- ②Zが他動詞のとき……XはZの目的語（無題化すると「を」になる）

強調構文（文中の一要素を強調するために使われる構文）

～のは…だ（～：前提、…：焦点）

～のは…からだ

理由を表す節を強調するのに使う。「～のは」は省略されることも多い。

～やすい ①～することが容易だ（意志的な動詞の場合）

②しばしば～する（無意志的な動詞の場合）

（②の意味の時は「～がちだ」と言い換えられることが多い）

～にくい ～することが困難だ、なかなか～しない

～すぎる 程度を越えて～する（～することは好ましくない）

○参考文献

- 杉本 武 (1995) 「大主語構文と総記の解釈」 益岡隆志・野田尚史・沼田善子編
『日本語の主題ととりたて』 くろしお出版
- 野田尚史 (1996) 『新日本語文法選書 1 「は」と「が」』 くろしお出版
- 益岡隆志 (1987) 『命題の文法』 くろしお出版
- 三上 章 (1960) 『象は鼻が長いー日本文法入門ー』 くろしお出版
- 三原健一 (1990) 「多重主格構文をめぐって」 『日本語学』 9-8

§32. 敬語

敬語とは聞き手や話題の人物に対する敬意を表す表現です。敬語はほとんどの言語に存在すると言われていますが、中でも日本語は敬語が非常に高度に発達した言語の一つです。

敬語は、尊敬語・謙譲語・丁寧語の三つに分類されることが多いですが、大まかすぎて問題が生じる面があります。ここでは上の三つの他に丁寧語・美化語の2種類を立てて整理することにします。

1. 素材敬語と対者敬語

- (1) a. 先生はもうお帰りになった？
b. 先生はもうお帰りになりましたか？
(2) (田中に対して) 田中さんはもうお昼を召し上がりましたか？

これだけは

◆敬語には、大きく分けて、話題の人物に対する敬意を表す**素材敬語**と、聞き手に対する敬意を表す**対者敬語**があります。上の例の下線部に敬語が使われていますが、(1)aでは話題の人物「先生」に対する敬意のみが表現されているのに対し、(1)bではそれに加えて聞き手に対する敬意も表現されています ((2)のように話題の人物と聞き手が同一人物の場合もあります)。

尊敬語・謙譲語は素材敬語、丁寧語・丁寧語は対者敬語です (美化語については後で述べます)。

2. 尊敬語

32.

敬語

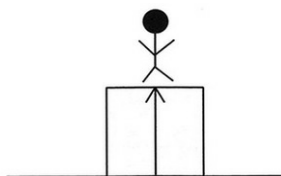
- (1) 先生はもうお帰りになりましたか。
(2) お客様は玄関にいらっしゃいます。

これだけは

◆尊敬語は動作や状態の主体に対する敬意を表現するものです。

(1)(2)は、それぞれ「先生」「お客様」に対する話し手の敬意を表現しています。

動作や状態の主体



◆尊敬語の形式をまとめておきましょう。

<動詞>

① 特別な形

319ページの表をみてください。

② おーV_{マス}になる (例：待つ→お待ちになる、教える→お教えになる)

Ⅲ類動詞とV_{マス}が1音節の動詞 (いる、見る、着るなど) には、この形はありません。また、2音節以上でも、①の特別な形がある動詞の場合、普通この形は使いません。

③ I類 V_{タイ}ーれる (例：待つ→待たれる)

Ⅱ類 V_{タイ}ーられる (例：教える→教えられる)

「できる」「わかる」や可能形にはこの形はありません。

一般に③に比べて①②の形のほうがより改まった表現ととらえられています。

<名詞>

① その名詞で表される人物を高めるもの

こちら・そちら・あちら・どちら、どなた、方（人）
ーさん、ー様、ー氏、一方（例：先生方）など

② その名詞の広い意味での所有者を高めるもの

お／ごー

「お」は和語、「ご」は漢語に付くのが原則ですが、例外（※の付いたもの）もあります。

「お」が付くもの…※お時間、※お電話、お名前、お宅、お仕事、お部屋、
※お食事、※お留守、お手紙 など

「ご」が付くもの…ご住所、ご両親、ご兄弟、ご家族、ご研究 など

<形容詞>

(3) 田中さんは今お忙しいそうです。

人の状態を表す形容詞には「お」「ご」を付けて尊敬語にできるものがあります（※は和語・漢語の別についての例外です）。

「お」が付くもの…お忙しい、※お元気、お暇、お寂しい、お早い など
「ご」が付くもの…ご多忙、ご心配、ご不満、ご満足など

3. 謙譲語・丁重語

<謙譲語>

- (1) 私はゆうべ社長を車でお送りしました。
- (2) 先生の研究室をぜひ拝見したいです。

<丁重語>

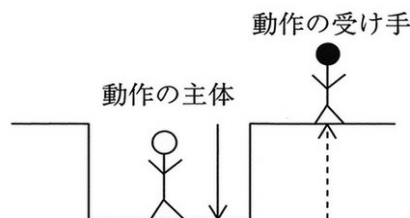
- (3) 私はただ今自宅におります。

これだけは

◆**謙譲語**は、動作の主体を低めることにより、相対的に（広い意味での）動

作の受け手に対する敬意を表現するものです。

(1)では「車で送る」という動作の受け手である「社長」、(2)では「見る」という動作を受ける「研究室」の持ち主である「先生」に対する話し手の敬意がそれぞれ表現されています。



◆謙讓語の形をまとめておきましょう。

<動詞>

① 特別な形

319ページの表を見てください。

② おーV_{マス}ーする (例：待つ→お待ちする 教える→お教えする)

ごーV_{マス}ーする (漢語動詞) (例：案内する→ご案内する)

<名詞>

動作にかかわる名詞には、「お」「ご」を伴って謙讓語になるものがあります (お電話、お話、ご相談、ご連絡、ご案内など)。

(4) 先生、ちょっとご相談があるんですが。

◆謙讓語は動作の受け手に対する敬意を表すものですから、受け手が存在しない動作に謙讓語を用いることはありません。

(5) a. ×昨日図書館に伺った。

b. ○昨日先生の研究室に伺った。(→「先生」に対する敬意)

(6) a. ×昨日テレビを拝見しました。

b. ○昨日田中さんが出演されたテレビ番組を拝見しました。
(→「田中さん」に対する敬意)

もう少し

◆**丁重語**とは(3)や次の(7)のようなものです。

(7) 先日仕事で東京に参りました。

これらのような例は三分類では謙譲語に含められています。しかし、「自宅にいる」「東京に行く」という動作には受け手が存在せず、敬意の対象になっているのは聞き手です。つまり、これらは正確には謙譲語ではなく、対者敬語の一種であることがわかります。丁重語とは、この「おる・参る」のような、動作の主体を低めることにより聞き手に対する敬意を表す表現です。

丁重語の他の例については319ページの表を見てください。

謙譲語専用の動詞、謙譲語と丁重語の両方に使える動詞、丁重語専用の動詞があり、それぞれ使い方が異なるので注意が必要です。例として、「参る」と「伺う」、「申す」と「申し上げます」の違いを確認してみましょう。

- (8) a. 先日仕事で東京に{○参りました／×伺いました}。(丁重語)
b. 先日先生のお宅に{参りました／伺いました}。(謙譲語)
(9) a. 私は山本太郎と{○申します／×申上げます}。(丁重語)
b. 皆様にお礼を{申します／申上げます}。(謙譲語)

動作の受け手が存在しない(8)(9)の場合、謙譲語専用の「伺う・申し上げます」は使うことができません。

◆**尊敬語・謙譲語**は素材敬語ですから、話題の人物と聞き手が異なる場合、その使用は基本的には聞き手がだれであるかと無関係です。しかし、実状としては、聞き手が敬語を使う必要のない人物である場合には尊敬語・謙譲語は省かれる傾向があります。

例えば、聞き手が親しい友達などの場合、(10)aのように言うこともありますが、(10)bのように言うことも多いです。

- (10) a. 昨日先生の研究室に伺ったよ
b. 昨日先生の研究室に行ったよ。

尊敬語		謙譲語・丁重語
いらっしゃる	行く・来る	参る○ 伺う☆
いらっしゃる	いる	おる★
召し上がる	食べる・飲む	いただく○
お休みになる	寝る	————
お亡くなりになる	死ぬ	————
おっしゃる	言う	申す○ 申し上げる☆
ご覧になる	見る	拝見する☆
お召しになる	着る	————
なさる	する	いたす○
ご存知だ	知っている	存じている○
くださる	くれる	————
————	あげる	さしあげる☆
————	もらう	いただく☆

☆…謙譲語専用 ★…丁重語専用 ○…謙譲語・丁重語両用

4. 丁寧語・美化語

<丁寧語>

- (1) お手洗いは階段の横です。

<美化語>

- (2) お菓子でも買いに行こうかな。

これだけは

◆**丁寧語**は丁寧な言葉を使うことにより聞き手への敬意を表す表現です。代表的なものは文末の「です・ます」など丁寧な形です。

- (3) a. 先生がいらっしゃるから、お茶をお出ししたよ。
b. 先生がいらっしゃるから、お茶をお出ししましたよ。

(3)aでは話題の人物「先生」に対する敬意のみが表現されているのに対し、(3)bでは文末に丁寧な形を用いることによって同時に聞き手への敬意も表現されています。つまり、丁寧語は対者敬語ということになります。

◆文体という観点から言うと、このような文末に「です・ます」がついた文体は「デス・マス体」と呼ばれます（→§33）。

もう少し

◆美化語とは次のようなものです。

(4) (客に) お茶をお入れしましたので、どうぞ。

(5) (独り言で) お茶でも入れようかなあ。

「お茶」のような名詞に「お」がついた形は、三分類では丁寧語に含まれますが、文末の「です・ます」とは性質が異なるものです。なぜなら、このような「お」は、(5)のように独り言でも使えることからわかるように、聞き手に対する敬意を表すために使われるものではないからです。このような、いわば上品で美しいことば遣いにするために使われる表現を美化語と呼びます。従って、美化語は厳密には素材敬語でも対者敬語でもありませんが、日本語教育では敬語に準じるものとして扱われています。

・美化語の例

お茶、お菓子、*お天気、おすし、お店、ごはん、*お食事、お手洗い

原則として、和語には「お」が、漢語には「ご」が付きますが、「お天気、お食事」など例外もあります。また、単語によって、「お／ご」を付けるのが普通のもの（お茶、ご祝儀）、男女差や個人差があるもの（お米、お花）、普通は付けないもの（おジュース、お机）、絶対付けないもの（教科書、パソコン）などいくつかの段階が見られます。

なお、前述のように、名詞に付く「お／ご」には尊敬語・謙譲語として使われているものもあります。「お電話（通話という意味で）、おかばん、お傘」など、尊敬語や謙譲語としては使えても美化語としては使わないことばもあるので、注意が必要です。

- (6) a. わざわざお電話をありがとうございました。(尊敬語)
 b. 後ほどこちらからお電話をかけさせていただきます。(謙譲語)
 c. ×妹にお電話をかけました。(美化語)

5. どんなときに敬語を使うか

これだけは

◆これまで敬語の種類と形式について見てきましたが、これらを知識として知っているだけでは敬語は使えません。ここで敬語の運用の問題について見ることにしましょう。

基本的には、敬語が使われる場合は次のようにまとめられます。

- ① 目上の人（先生や上司、年長者など）と話すとき
- ② 知らない人や親しくない人と話すとき
- ③ 改まった場面で話すとき

敬語というと①が強調されがちで、学習者の中には「敬語＝上下関係」と思い込む人がいますが、それは一面的な見方です。年齢や社会的地位に差がない大人どうしの場合、初対面ではむしろ敬語を使うのが普通です。その後二人が互いに敬語を使わなくなれば、親しくなった証拠と言えますし、逆に敬語を使い続ければ二人の間に一定の距離が保たれることになります。また、親しい同僚どうしが会議で敬語を使うように、人間関係だけでなく場面にも敬語の運用は左右されます。

◆もう一つ注意しなければいけないことは、「ウチ」と「ソト」の概念です。日本語では家族以外の人との会話で家族を高める表現を使いません。家族をいわば自分に準じるもの（ウチ）として扱い、それ以外（ソト）の人と区別するわけです。さらに自分の属する集団・会社・組織などに属する人についても同様にウチとして扱うことがあります。会社では、社外の人との改まった会話では社長について述べるときも謙譲語を使うのが普通です。

- (1) 客：お父さんはご在宅ですか。
 息子：はい、おります。ちょっとお待ちください。

(2) 他社の社員：山本社長にお会いしたいのですが。

山本の部下：山本はただいま外出しております。

このようなウチとソトの概念は授受表現の用法にも関係します (→§11)。

◆以上のように、どんな場面でどんな相手にどの程度の敬語を使うかという運用は、実は学習者だけでなく、日本語母語話者にとっても簡単ではない問題です。

もう一步進んでみると

◆以上で述べた敬語の分類のしかたをまとめておきます。

本書での五分類			三分類では
敬語	素材敬語	尊敬語	尊敬語
		謙讓語	謙讓語
	対者敬語	丁重語	丁寧語
		丁寧語	
敬語に準じるもの		美化語	

◆敬語は**待遇表現**（人間関係や場面に対する話し手の配慮に基づく表現）の中に位置づけられるものです。ここでは取り上げませんでしたが、動詞に付く「やがる」のように、敬語とは反対に聞き手や話題の人物を低く扱う表現もあります。「マイナス敬語」と呼ばれるこのような表現も待遇表現の一種です。

◆敬語については、膨大な量の研究がありますが、大石初太郎（1975）、宮地裕（1976）、辻村敏樹（1994）などが重要です。また、菊池康人（1996）は簡潔にまとめられていて、実用面からも便利です。

○参考文献

大石初太郎（1975）『敬語』筑摩書房

菊池康人（1996）『敬語再入門』丸善ライブラリー

辻村敏樹（1994）『敬語論考』明治書院

宮地 裕（1976）「待遇表現」『日本語と日本語教育－文字・表現編－』大蔵省印刷局

.....コラム.....

「丁寧に話す」とは？

- (1) #社長、お荷物を持ってさしあげます。
- (2) #先生、授業で苦勞様でした。
- (3) #先生、コーヒーをお飲みになりたいですか。

上の表現は形の上では正しい敬語です。にもかかわらず、いずれも聞き手に対して失礼になりますが、それはなぜでしょうか。(1)は目上の人である「社長」に対して恩恵を与えるというとらえ方を表現しているために失礼な印象を与えます。また、(2)は目上の人にねぎらいの言葉をかけている点、(3)は目上の人希望を直接尋ねている点で失礼になっていると考えられます。

このように、「丁寧に話す」ためには、単に「です・ます」や尊敬語・謙讓語などを正しく使えるだけでなく、様々な文化的な決まりごと（目上の人に対して「恩恵を与えることを明示してはいけない」「ねぎらってはいけない」「希望を直接尋ねてはいけない」など）を理解している必要があります。

また、命令・依頼・勧誘など相手に何らかの行為をするように働きかける表現では、**丁寧度**を上げるために間接的な表現を使うということがよく行われます（→§15）。

以上のような、広い意味で丁寧に話すためのことばの運用技術については中上級編で詳しく扱いますが、参考になる文献としては蒲谷宏ほか（1998）があります。

○参考文献

蒲谷宏・川口義一・坂本恵（1998）『敬語表現』大修館書店

§33. 文体

文体とは、その用途・形式・場面、時には個人的な好みによって使い分けられる、文章全体に一貫する文章のスタイルのことで、現在では書かれた文章だけではなく談話についても適用される用語となっています。広い意味の文体は地域差・男女差を含むこともあり、さらには、平安期・明治期の文体など時代差を問題にしたり、現代における若者の文体など世代別の文体まで含めることもあります。

ここでは、日本語教育で特に問題となる、デス・マス体とダ体・デアル体の別や、書きことばと話しことばの違い、および男女差などを扱います。

1. デス・マス体とダ体・デアル体

- | |
|---|
| <p>(1) 彼は商社マン<u>です</u>。外国の会社と取引を<u>しています</u>。(デス・マス体)</p> <p>(2) 彼は商社マン<u>だ</u>。外国の会社と取引を<u>している</u>。(ダ体)</p> <p>(3) 彼は商社マン<u>である</u>。外国の会社と取引を<u>している</u>。(デアル体)</p> |
|---|

これだけは

◆次に示す文章は、(4)がデス・マス体、(5)がダ体、(6)がデアル体と言われるものです。日常の言語生活においては読み手や目的に応じて文体を使い分けるのが普通です。手紙文など読み手への敬意を表す必要がある文章では**デス・マス体**、小説や日記・報告・論説などでは**ダ体・デアル体**、学術的なレ

ポートや論文ではデアル体が好まれます。

- (4) このたびは就職祝いにネクタイを贈っていただきありがとうございますございました。色も柄もととても気に入りました。早速入社式の日に締めていくつもりです。(手紙)
- (5) このお寺には、悪ガキの頃ずいぶんお世話になった。秋になると、必ず柿を盗みに来ていたからだ。(小説：『少年H』妹尾河童)
- (6) 新聞によれば、週明けにも、円高ドル安を懸念して日米協調介入が実施されるとのことである。このところの円高傾向に歯止めがかけられるであろう。(論説：経済状況)

◆ダ体とデアル体で活用形が異なるのは、ナ形容詞と「名詞＋だ」、および、「のだ」のような「～だ」で終わる助動詞だけで、動詞やイ形容詞では両者の活用形は同じです。

◆日本語教育の初級段階では、まず、デス・マス体を導入し、その後、中級段階になってからダ体（デアル体）による文体の変換を導入します。

- (7) 私の兄は薬剤師{です→だ（である）}。
- (8) このスーパーの魚はいつも新鮮{です→だ（である）}。
- (9) 妹は私より背が{高いです→高い}。
- (10) 健康のために毎日野菜ジュースを{飲んでます→飲んでいる}。

そのため、ダ体（デアル体）の導入以後、学習者が次のような誤りを犯すことがあります。

① イ形容詞とナ形容詞の形を混同する

- (11) きれいです→○きれいだ、○きれいだである（ナ形容詞）
美しいです→×美しいだ、×美しいである（イ形容詞）

② 名詞修飾節の中の述語をデス・マス形にする

- (12) ×昨日{×買いました／○買った}本を持ってきました。

この場合、述語は原則として文体にかかわらず普通形を用います（→§20）。

- (13) ×今朝東京で地震があった。交通機関のダイヤが乱れ、通勤客約5万人の足に影響があったそうです。

(1) 田中くんはやはり帰ってしまった。(書きことば)
(2) 田中くん、やっぱり帰っちゃった。(話しことば)

◆学習者は初級段階で話しことばとしても書きことばとしても用いられるデス・マス体を学びますが、実際に話されている日本語にはデス・マス体を基調とする折り目正しい話しことばとダ体を基調とするくだけた話しことばの2種類があります。そこで、より自然な会話指導を意図するならば、以下のようなくだけた話しことばに特有な点を考慮する必要があります。

① 縮約形

- ・「は」にかかわるもの…では→じゃ ～ては→～ちゃ など
- ・テ形にかかわるもの…～ている→～てる ～ておく→～とく
～てしまう→～ちゃう ～てあげる→～たげる など
- ・バ形にかかわるもの…行けば→行きゃ 食べれば→食べりゃ など
- ・引用の「と」にかかわるもの…～と→～って ～という→～って など
- ・「の」にかかわるもの…～のだ→～んだ ～ものだ→～もんだ など

② 語順（述語と主語や目的語、修飾語と被修飾語などの順序が逆になる）

(3) 切符を買っておいた。→買ったよ、切符。

(4) 先週のプリント→プリント、先週の

③ 語彙

やはり→やっぱり 少し→ちょっと 非常に→すごく

どちら→どっち こちら→こっち なぜ→なんで など

④ 省略

(5) 昨日映画 ϕ 見てから、デパート ϕ 行ったら、先生に会った。

◆学習段階が進むと、学習者は、デアル体（ダ体）で書かれた文章を読む機会が増し、また、デアル体（ダ体）で書くことを求められるようになります。学習者に話しことばが定着している場合には話しことば特有の語法や語彙が書きことばに紛れ込むことがあります。

(6) (作文で) 雨が降ってたけど、予定通りスポーツ大会は行われた。

また、それとは逆に、書きことばにしか使わないような語彙や表現を使って会話をするとといった誤りも見られます。

話しことばと書きことばの問題は、文法だけの問題ではなく、最終的には語彙を含めた「話し方指導」「書き方指導」の問題として扱うべきものです。

◆日本語教育でダ体・デアル体を導入した後は目的に合わせて文体を使い分けることを指導する必要があります。例えば、作文やレポートではデアル体（ダ体）を基調とし語彙・表現も書きことばを用いなければなりません、スピーチ原稿や聞き手の存在を意識した手紙文などではデス・マス体を基調とした文体を用いなければなりません。

この他、上級段階でゼミや学会・会議などにおける発表の指導をする際にも文体の使い分けが問題になります。配布資料はダ体・デアル体で簡潔に書き、それをデス・マス体で丁寧に説明するなど、文体に配慮した指導が必要となります。

もう少し

◆「話しことば」「書きことば」の意味で「口語体」「文語体」という用語が用いられることがあります。避けたほうがよいでしょう。文語体とはもともと昭和初期まで公用文や商業文などの書きことばにおいて使われていた古文に近い文体を指すことばであったからです。そのような区別がなくなった現在では口語体・文語体という呼び方は現実的ではありません。

◆デス・マス体を用いる丁寧な話しことばに「です」の代わりとして「でございます」が用いられることがあります。

(7) 粗茶でございますが、よろしければどうぞ。

これらを非日本語母語話者が用いると丁寧すぎるという印象を持たれることがあるので、改めて指導することは通常しません。また、日本語母語話者にも「おります」の代わりに「でございます」を使うような誤用も見られます。

(8) ×書類は昨日から用意いたしてございます。

◆名詞修飾節の中では普通形を用いるのが普通ですが、聞き手に対して特に敬意を表す必要がある場合にデス・マス体が用いられることがあります。

(9) 昨日先生がいらっしゃいました場所にまたお連れします。

ただし、不特定の相手に対する案内などで用いると、奇異に感じられます。

(10) ×降ります方は、足下にご注意ください。(電車内の放送)

(10)* {○降りる方／○お降りになる方}は、足下にご注意ください。

3. 男女差

(1) ごはんの用意ができたわよ。(女)

(2) ごはんの用意ができたぞ。(男)

これだけは

◆話しことばには男女差があり、これも文体差に含まれます。特に問題となるのは話しことばで多用される終助詞（→§17）です。

・聞き手に同意を求める

(3) (男女) 大きい家だね。 (女) 大きい家{ね／だわね}。

(4) (男女) おいしいね。 (女) おいしいわね。

・聞き手の注意を引く

(5) (男女) 午後は雨だよ。 (女) 午後は雨{よ／だわよ}。

(6) (男女) 寒いよ。 (女) 寒いわよ。

(7) (男女) 外は寒いぞ。 (女) 外は寒いわよ。

・感慨の表出

(8) (男女) 心配だな。 (女) 心配だわ。

(9) (男女) 寂しいな。 (女) 寂しいわ。

・疑問の表出

(10) (男女) 来るかな。 (女) 来るかしら。

◆日本語教育では初級段階でも会話教材などに終助詞が出現します。女性専用の形式を男性が用いると特に不自然なので、学習者に注意を喚起する必要があります。

もう一步進んでみると

◆同一の文章中でのデス・マス体とダ体・デアル体の混用は、初級段階では誤りとして教えますが、実際には様々な要因から行われているものです。日本語教育でも上級レベルでは問題となりますので、中上級編で扱います。

○参考文献

三尾 砂 (1942)『話言葉の文法 (言葉遣篇)』くろしお出版から復刊 (1995)
 メーナード・K・泉子 (1991)「文体の意味ーダ体とデス・マス体の混用について」『言語』20-2 大修館書店

§34. 語順・省略

文は補語や修飾語や述語が集まって作られます。この各要素の配列を**語順**と言います。英語などに比べ、日本語の語順は自由ですが、その中でも基本的な傾向はあります。また、日本語では文中の要素が頻繁に省略されますが、そこにも規則性があります。ここではこれらについて考えます。

1. 語順

ここでは動詞文における**基本語順**について考えます。日本語の改まった文体では文は述語で終わります（話しことばでは要素が述語の後になることがあります、これについては2で扱います）。他の条件がないときに、基本語順と異なる語順を使うと落ち着きの悪い文になります。

<必須成分だけの場合>

- (1) 犬がほえている（こと）
- (2) 犬が山田さんをかんだ（こと）
- (3) 犬が山田さんにかみついた（こと）
- (4) 山田さんが田中さんとけんかした（こと）
- (5) 教室にコンピューターがある（こと）
- (6) 山田さんが子供たちに英語を教えた（こと）

これだけは

◆最初に、必須成分に関する語順について見ていきますが、ここでは必須成分の個数をいう観点から分類して考えていきます。なお、格関係を明らかにするために無題化（→§27）をした例で考えます。

①必須成分が一つの場合

この場合は、「ガ格ー動詞」が基本語順となります。

②必須成分が二つの場合

この場合、(5)のような存在や所有に関する文（→§4）では、「二格ーガ格ー動詞」が基本語順になります。(2)～(4)のようなそれ以外の動詞の場合は、「ガ格ー { ヲ格／ニ格／ト格… } ー動詞」が基本語順になります。(同じくニ格が必須成分である場合でも、(3)と(5)では基本語順が異なることに注意してください。)

③必須成分が三つの場合

この場合は、「ガ格ーニ格ーヲ格ー動詞」が基本語順になります。ニ格には「人間・生物」が、ヲ格には「もの」が来るのが普通です。

<その他の場合>

- (1) 昨日山田さんが来ました。
- (2) 公園で子供たちが遊んでいる。
- (3) 昔々あるところにおじいさんとおばあさんがいました。
- (4) 昨日公園で山田さんが犬を散歩させていた。
- (5) 東京から大阪まで飛行機で行きました。
- (5)' ?大阪まで東京から飛行機で行きました。
- (6) 私は[その本を]おもしろいと思った。
- (6)' ?私はおもしろいと[その本を]思った。
- (6)" ○[その本を]おもしろいと私は思った。

これだけは

◆(1)(2)のような「時間」や「場所」に関する成分はガ格より前に来るのが普通です。これはこれらがその文で述べられる内容に関する**状況設定**にかかわるためです。なお、(3)(4)のように「時間」と「場所」が同時に現れるときは、「時間－場所」の順番になるのが普通です。

◆一方、起点・着点を表す「から」と「まで」が同時に使われる場合は通常「カラ格－マデ格」の語順になります。これは、起点→着点という順序が人間の認識上の順序と合っているためです。

◆「言う／思う／考える」などの発言・思考を表す動詞の場合は、「～と」と動詞の間に「～は／が」以外の成分を置くことはできません。

2. 基本語順が変更されるとき

- (1) (本を手にとって) おもしろいね、この本(は)。
 - (2) この万年筆で夏目漱石は『坊っちゃん』を書いたんだ。
 - (3) 「これで温かいものを食べなさい」と彼は言って、お金をくれた。

これだけは

◆改まった話しことばや書きことばでは通常基本語順が守られますが、そうでない文体では語順の変更はよく起こります。ここではこのことを考えます。

◆語順の変更が起こるのは次のような場合です。

- ① 文中であまり重要でない要素を文末に置く
- ② 最も強調したい要素を文頭に置く
- ③ 長い要素を前に移す

① 文中であまり重要でない要素を文末に置く

これは(1)や(4)～(6)のようなものです（こうした文を**後置文**と呼びます）。後置されるのは通常は(1)のような格成分ですが、(4)のように名詞修飾成分も

後置可能です。これらの文で後置されるのは文脈上あまり重要ではない要素です。例えば、(1)では話し手が本を持っていることから文の主題が本であることはわかるため、「本」はあまり重要ではなく、「おもしろいね」だけで文として完結しています。後置された「この本は」は聞き手に対する念押しとして言われているのです。次の(4)の「きれいな目をした」は重要でないというわけではありませんが、「途中で女の子に会ったよ」だけで文が完結しているという点は(1)と共通しています。また、(5)Bの「大阪へ」も(5)Aに出ていてこの文脈では旧情報なので、後置できるのです。

- (4) 途中で女の子に会いましたよ、きれいな目をした。
 (4)' 途中で [[きれいな目をした] 女の子] に会いましたよ。
 (5) A：田中さんは洋子さんと大阪へ行ったんですか。
 B：ええ、(洋子さんと) 行ったんです、大阪へ。

このように、要素の後置はくだけた文体ではかなり自由にできますが、制限もあります。つまり、(6)のように焦点(→§29)などの重要な情報を担う要素は後置できないのです。こうした前提(→§29)を持つ疑問文には、後で見るように(6)B 2・B 3のような焦点を含む文で答える必要があります。

- (6) A：田中さんは洋子さんとどこへ行ったんですか。
 B 1：×田中さんは洋子さんと行ったんです、大阪へ。
 B 2：○(田中さんは洋子さんと) 大阪へ行ったんです。
 B 3：○大阪(へ)です。

② 最も強調したい要素を文頭に置く

②は①の反対の動機づけによるものです。つまり、上の(2)や次の(7)のような文は、一番言いたいことを文頭に持ってきた結果できたものなのです。なお、この②のタイプの文の文頭の要素は、「総記の「が」」(→§27)と同様に、「他でもない～がーだ」という解釈を受けます。

- (7) 私が話したいのは君じゃない。田中さんと私は話したいんだ。

③ 長い要素を前に移す

最後の③は、(3)のように長い要素を文頭に短い要素を文末(＝述語の近く)

に集めようとするもので、「言う、思う、考える」のような「～と」を取る動詞の場合によく行われます。また、書きことばでもよく行われます。なお、要素を前置した場合の文型には(8)bと(8)cという二つのタイプがあります。(8)bは「…」の部分だけを前置し、「～は」を述語の前に移したのですが、(8)cは「「…」と」全体を前置し、「「…」と」があった位置に「そう」を挿入したものです。この「そう」は「…」の内容を受けています。

- (8) a. 私は「この不景気は当分続くに違いない」と考えています。
- b. 「この不景気は当分続くに違いない」と私は考えています。
- c. 「この不景気は当分続くに違いない」私はそう考えています。

3. 省略

- (1) A : 山田さんは何を書いているんですか。
- B 1 : 山田さんは手紙を書いているんです。
- B 2 : 手紙を書いているんです。
- B 3 : 手紙です。

これだけは

- ◆ここでは文中の要素の**省略**について考えます。
- ◆まず、(1)～(3)のような疑問語疑問文及びそれに対する答えの文ですが、こうした文は前提(→§29)を持つ文の典型ですから、(1)B 3や(2)B 1のように焦点(→§29)だけを残した、「焦点+だ」の形の答えが最も自然であり、それ以外の前提の部分を加えた文((1)B 1、B 2など)はやや不自然です(「だ」は答えを「文」にするために必要となるものです)。なお、次の(2)の「本」も前提ですが、この場合は名詞句を作るために必要であるため、これを含んでいても応答として不自然ではありません。

(2) A : 『坊っちゃん』はどんな本ですか。

B 1 : おもしろい本です。 B 2 : ×おもしろいです。

一方、(3)の前提は「山田さんが何かをしている」であり、焦点は「何かをしている」に対応するものであるため、(3)B 2 は非文法的であり、(3)B 1 のように答えなければなりません。なお、このように、動詞が焦点に含まれる場合は（それだけで文となるため）「だ」は必要ではありません。

(3) A : 山田さんは何をしているんですか。

B 1 : 手紙を書いているんです。

B 2 : ×手紙です／×書いているんです。

◆なお、(4)のような疑問語疑問文以外の前提を持つ疑問文（→§29）に対しては「焦点＋述語」で答えるのが一般的です。これは、こうした文の焦点は必須成分ではなく、述語に含まれにくいためです。

(4) A : 山田さんはこのカメラをあの店で買ったのですか。

B 1 : はい、あの店で買いました。

いいえ、あの店では買いませんでした。

B 2 : ? はい、買いました。／? いいえ、買いませんでした。

B 3 : はい、そうです。／いいえ、そうではありません。

◆次に、(5)～(7)のような前提を持たない疑問文の場合ですが、この場合は、(5)～(7)のB1文のように、述語だけを残して答えるのが最も自然です。なお、(5)のような名詞文の場合は、(5)B 2 のように「そう」を使っても答えられますが、(6)(7)のような動詞文・形容詞文の場合はこうした答え方はできません（→§29）。ただし、(4)のようなタイプの疑問文に対しては名詞文の場合と同様の答え方ができます。これは「の(です)か」型疑問文が（「の」が準体助詞であるため）形の上では名詞文と同じになるためです（→§29）。

(5) A : 山田さんは学生ですか。

B 1 : はい、学生です。／いいえ、学生ではありません。

B 2 : はい、そうです。／いいえ、そうではありません。

(6) A：山田さんはこのカメラを買いましたか。

B 1： はい、買いました。／いいえ、買いませんでした。

B 2： ×はい、そうです。／×いいえ、そうではありません。

(7) A：洋子さんはきれいですか。

B 1： はい、きれいです。／いいえ、きれいではありません。

B 2： ×はい、そうです。／×いいえ、そうではありません。

もう一步進んでみると

◆日本語は英語などに比べ語順が自由だと言われますが、改まった文体では基本語順がかなり守られます。基本語順が持つ文法上の意味については、宮島達夫（1963）、野田尚史（1989）、佐伯哲夫（1998）等を参照してください。

◆一方、久野^{すすむ} 暉や高見健一は機能主義構文論という立場から、2で扱った後置文や3で扱った省略の問題を扱っています。これについては、久野暉（1978）、高見健一（1998）などを参照してください。

まとめ

基本語順

必須成分が一つの場合 ガ格－動詞

二つの場合 ガ格－{ヲ格／二格／ト格…}－動詞

三つの場合 ガ格－二格－ヲ格－動詞

その他 時間を表す成分－場所を表す成分－ガ格……－動詞

基本語順が変更される場合

① 文中であまり重要でない要素を文末に置く

② 最も強調したい要素を文頭に置く

③ 長い要素を前に移す

省略

疑問語疑問文に答える場合

焦点のみで答えるのが最も自然。ただし、焦点が名詞句の場合は「だ」を補う。

また、名詞修飾成分が焦点のときは「焦点＋名詞」となる。

それ以外の前提を持つ疑問文に答える場合

「焦点＋述語」で答えるのが最も自然。

○参考文献

- 久野 暲（1978）『談話の文法』大修館書店
- 国立国語研究所（1964）『現代雑誌九十種の用語用字Ⅲ』秀英出版
- 佐伯哲夫（1998）『要説日本語の語順』くろしお出版
- 高見健一（1998）「情報構造と伝達機能」中右実編『日英語比較選書 2 談話と情報構造』研究社出版
- 野田尚史（1989）「文構成」宮地裕編『講座日本語と日本語教育 1 日本語学要説』明治書院
- 宮島達夫（1963）「カカリの位置」宮島達夫（1994）『語彙論研究』むぎ書房に再録

このページは空白です。

このページは空白です。

第II部

§35. 品詞

品詞とは文の中での働きと活用のしかたで分類した語のグループです。日本語教育で使われている品詞は学校文法のものとは基本的には同じですが、日本語学習者が考えやすいように次の点で工夫されています。

学校文法の形容詞と形容動詞は、名詞を修飾したり名詞の状態を言い表すという働きは同じですから、日本語教育では同じ形容詞として扱い、活用によってイ形容詞とナ形容詞に分けます。また、日本語教育では文のすべての構成要素に品詞を対応させることをせず、典型的な品詞を説明の便宜のために使います。例えば「～なければならない」や「～ほうがいい」などは、学校文法ではいくつかの品詞に分けますが、日本語教育では全体で義務や勧めを表す表現として扱い、普通はその品詞を考えません。

日本語教育の品詞と言っても、すべてに統一された用語があるわけではなく、教科書や教える人によって違う部分もあるのが現状です。ここでは学校文法との対応を示しながら日本語教育で一般的に使われている品詞について簡単に説明します。《 》は対応する学校文法の品詞を示します。

動詞《動詞》

副詞《副詞》

名詞《名詞》

接続詞《接続詞》

イ形容詞《形容詞》

助詞《助詞》：格助詞、並列助詞、終助詞

ナ形容詞《形容動詞》

とりたて助詞

語としても限られている《感動詞》と《連体詞》という品詞名はあまり使われず、《助動詞》は普通、動詞の活用として扱われます。また、「だれ、どう、どの」などの疑問詞と、対応する「これ、そう、あの」などの指示詞は、品詞から離れてコソアドと呼ばれることもあります（→§1）。

1. 動詞

- (1) 田中さんは毎日 2,000 メートル泳ぎます。
 (2) 田中さんが通う学校の隣にはプールがあります。
 (3) 日本語の勉強が終わってから英語を勉強する。

これだけは

◆**動詞**とは辞書形 (→§36) がウ・ク・グ・ス・(ズ)・ツ・ヌ・ブ・ム・ルのウの段で終わり、「～ます」「～て／で」「～ない」などに続くときに形が変化する (活用する) ものを指します。

◆動詞はほとんどが主語の動作を表します。他に「ある、いる、できる」など主語の状態を表すものが少数あります。

◆動詞は活用のタイプによって三つに分けられます。

I 類動詞は学校文法の五段動詞に当たり、活用するときに変わらない部分である語幹 (→§36) が子音で終わっているのが特徴です。そのため子音語幹動詞や強変化動詞と呼ばれることもあります。

II 類動詞は学校文法の一段動詞のことで、語幹は母音の -i または -e で終わり、母音語幹動詞や弱変化動詞とも呼ばれます。一段動詞と呼ぶときも、活用に差がないことから、普通、上一段と下一段には分けません。

III 類動詞は活用が不規則な動詞で、学校文法のカ変動詞とサ変動詞を指します。(3) のような「勉強します」は「勉強」という名詞に「する」が付いて動詞になっており「動名詞」と呼ばれることもあります。

それぞれの活用については§36 および動詞・形容詞活用表を見てください。

◆動詞はテンス (→§5) ・アスペクト (→§6) ・意志のモダリティ (→§14) ・格助詞の取り方によっていくつかのタイプに分けられます。(→§38)

2. 名詞

- (1) 田中さんは東京のある日本語学校の先生です。
(2) 彼はそこへ毎日 自転車で通っています。

これだけは

◆**名詞**は、人やものや出来事を指し表す語で、活用をせず、格助詞を後ろに続けることができるという特徴を持っています。

◆(1)の「日本語学校」や「先生」などは典型的な名詞です。

(1)の「田中さん」や「東京」のように人名や地名などの名前を指す語は**固有名詞**と呼ばれます。

(2)の「彼」や「そこ」などのように人やものや場所の代わりに用いられる語は**代名詞**と呼ばれます (→§37)。

「今日、来週、毎日」などは、(2)のように副詞的に用いられることがありますが、これらは「今日が原稿の締め切りだ」や「毎日を楽しく過ごす」のように格助詞を伴うことができることから名詞として扱われ、**時名詞**と呼ばれます (→§37)。「1人」「2冊」「3匹」など、数詞 (→§41) に助数詞が付いた**数量詞**も同様な理由で名詞として扱います。

◆格助詞に続く点で名詞的特徴を持っているが実質的な意味がほとんどなく、普通、修飾語を伴って現れるものを**形式名詞**と呼びます (→§37)。

「はず、よう、つもり、こと、ついで、ため」などの形式名詞は、モダリティ表現や複文の接続部分で用いられったりします。

- (3) 森田さんは家にいるはずです。 cf. そんなはずがない。
(4) 寒くなったために風邪を引いた。 cf. ためになる本

もう少し

◆形式名詞の中でも、「よう」は「彼の言ったように」のように名詞修飾の場合と同じガ・ノ交替があります（→§20）し、「こと」も「ことと次第によっては」のように修飾語がなくても用いられる点で、実質的な名詞に近いと言えます。

3. 形容詞

- (1) 田中さんは大きい家に住んでいます。
- (2) 家の周りはとてもうるさいです。
- (3) 小林さんは小さいけれどきれいな家に住んでいます。
- (4) 私の家の近所はとても静かです。

これだけは

◆形容詞には名詞の前に来るときにイで終わる「大きい」などの**イ形容詞**とナで終わる「静か(な)」などの**ナ形容詞**とがあります。どちらも動詞と同じく、活用しますが、ナ形容詞は辞書形として特に決まった形を持ちません。

◆形容詞には、(1)や(3)に示したように名詞の前に置かれ名詞を形容する用法と、(2)や(4)のように文末などで主語の性質を述べる用法とがある他、次の(5)や(6)のように動詞を修飾する用法もあります。

- (5) 朝早く子供の声で起こされた。
- (6) 公園で子供が元気に遊んでる。

「早く」や「元気に」は、学校文法でも日本語教育でも副詞とはせず、「早い」「元気(だ)」という形容詞の活用形として扱います。英語ではquick(形容詞)–quickly(副詞)という対応がある場合とredのように対応がない場合がありますが、日本語では「～い」「～だ／な」の形があれば必ず「～く」「～に」の形がありますので、形容詞の活用形の一つとして扱うのです。

もう少し

◆ナ形容詞のことを学校文法で形容動詞と言いますが、これは動詞のラ行変格活用に似た「なり」と「たり」型活用があったことによるもので、特に動詞という性質を持っていたことによるものではありません。

4. 副詞

- (1) 黒い車がゆっくり(と) 近づいてきた。
(2) ビールをたくさん飲みすぎて、とても気分が悪い。
(3) どうか彼女の病気が治りますように。

これだけは

◆**副詞**は、動詞・形容詞・他の副詞を修飾して、動作・状態の様子や程度、話し手の気持ちを表す働きをする活用を持たない語です。

◆日本語では特定の形式によって副詞を見分けることは普通できませんが、「ゆっくり」や擬声語・擬態語の「ざあざあ」などは、「ゆっくりと」や「ざあざあと」のように「と」が後接した形を取ることがあります(→§40)。

◆副詞には、(1)のように動作や状態の様子を表す**様態副詞**、(2)の量や程度を表す**程度副詞**、(3)の話し手の気持ちを表す**誘導副詞**などがあります。

◆動詞や形容詞を修飾する場合でも、「昨日」などの時名詞や「1人」などの数量詞は名詞として扱われますし、「早く」や「元気に」などは「早い」と「元気だ」という形容詞の活用形ですので注意が必要です。

5. 接続詞

- (1) 鉛筆または黒のボールペンでお書き下さい。
- (2) イタリアで3年仕事をし、そして日本へ帰ってきた。
- (3) 昨日はとても寒かった。だが、今日はとても暖かい。

これだけは

◆**接続詞**は、(1)のように名詞(句) どうしをつないだり、(2)のように節どうしをつないだり、(3)のように文として一度句点で区切ってから新たな文をつないだりするときに用いる活用のない語です。

「昨日はとても寒かったが、今日はとても暖かい」の「が」など、動詞や形容詞などに直接続く形式は、複文における接続形式として扱われます。

◆意味的には様々なものがあります (→§21～§25)。

6. 助詞

- (1) ゆう子さんが公園で子供と遊んでいる。
- (2) A：今日は暖かいですね。
B：そうですか？ 寒いですよ。
- (3) ラーメンぐらいあるかと思ったら、それすらなかった。

これだけは

◆**助詞**は、単独では用いられず、名詞や動詞などの他の語に後接する活用のない語です。

◆助詞には次のような種類があります。

格助詞：「が、を、に、と、で、へ、から、まで、より」のように名詞と述語との関係を表す助詞を格助詞と呼びます (→§2)。「によると、にとって、

に対して」などもその働きから格助詞の一種と考えます。

「の」の名詞と名詞の関係を表す用法は、格助詞とする立場と連体助詞として特別に扱う立場があります。他に「の」には名詞の代用としての準体助詞としての用法もあります(→§3)。

並列助詞：名詞と名詞の間に置かれる「と、や、か」などは並列助詞と呼ばれます(→§3)。

終助詞：「ね、よ、よね、か、わ、ぞ、さ」など主に文末に置かれ、聞き手や出来事に対する話し手の態度を表す助詞を終助詞と呼びます(→§17)。

とりたて助詞：学校文法で係助詞や副助詞と呼ばれる「は、も、だけ、しか、ばかり」など、格助詞と複合するかもしれないもしくは置き換わることによって話し手の気持ちを表現する助詞をとりたて助詞と呼びます(→§26)。

◆日本語教育では学校文法でいう接続助詞の「て」や「たり」などを動詞の活用形として切り離して考えないのが普通です。「映画館に行ったけれど閉まっていた」の「けれど」などは接続形式とすることがあります。

7. その他の品詞

- | |
|--|
| <ul style="list-style-type: none">(1) 田中に殴<u>られ</u>たので、小林に田中を殴<u>って</u>もら<u>った</u>。(2) 山下さんは大学の先生<u>です</u>が、大学院の学生<u>でも</u>あります。(3) にんじん3本とじゃがいも三<u>つ</u>ください。(4) <u>わが</u>国には<u>いろん</u>な国からの留学生が大勢います。(5) <u>あ</u>あ、もうこんな仕事は嫌だ。 |
|--|

これだけは

◆(1)(2)は学校文法で助動詞とか補助動詞などと呼ばれる形式です。日本語教育では普通、助動詞という言い方はせず、動詞の活用形として受身形・使役形・可能形・意向形などと言います。また、「ようだ」や「だろう」なども特に品詞を考えずモダリティ表現の一部として扱われるのが普通です。

学校文法でいう断定の助動詞の「だ・です・である」は、指定辞などと呼

ばれる他、英語のbe動詞との対応からコピュラや繫辞けいじなどと呼ばれることもあります。普通、日本語教育では品詞を問いません。

◆(3)の「本」や「つ」は、**助数詞**という品詞を立てる立場もありますが、「3本」「三つ」という**数量詞**の一部と考える立場もあります。

◆(4)の「いろんな」や「わが」は、常に名詞を修飾する働きを持つ語で、学校文法では**連体詞**と呼ばれます。

「大きな、小さな」も連体詞ですが、イ形容詞との比較から活用のところで扱います(→§36)。

「この、その、あの、どの」および「こんな、そんな、あんな、どんな」も連体詞ですが、文の中での働きよりも形の面での類似性から「これ」などや「こう」などといっしょに**コソアド**と呼びます(→§1)。

◆(5)の「ああ」や「おや」「あら」などは**感動詞**と呼ばれます。「はい」「いいえ」などは、特に**応答詞**と呼ばれることもあります。

もう一步進んでみると

◆**学校文法**は、橋本進吉が書いた『新文典別記』(1935)という、旧制中学校の国文法教科書の教授用参考書が基になっています。いわゆる国文法でも学者によって品詞のとらえ方は少しずつ違ってきますし、最近の日本語学の考え方はまた大きく違ってきます。野田尚史(1991)では日本語学(日本語教育)の立場からの品詞のとらえ方がわかりやすく説明されています。

◆品詞というものはあくまでも便宜的なくくりでしかない面を持っています。例えば「早く」を副詞としないでイ形容詞とするのは文中での機能よりも体系的なまとまりを重視しただけのことで、動詞を修飾するという点では副詞と同じ機能を持っています。

また、形容詞のところでも述べましたが、日本語に限らず多くの言語において品詞は連続した部分を持っています。例えば「好く」という動詞と「好き(だ)」というナ形容詞はほぼ同じ意味ですし、「ある」や「できる」などは状態を表す点で形容詞的な動詞です。このような品詞の連続性については寺村秀夫(1982)第1章第5節の「品詞間の連続性」が参考になります。

◆ある品詞から異なる品詞になることを**転成**と言います。日本語では動詞のマス形語幹は名詞として使われることがあります。しかし「読む」に対する

「読み」は名詞として辞書にも載っていますが、「読み込み」は載っていない辞書もあり、どこまでが名詞か明確に線を引くのは難しいです。

◆品詞ごとにまとまった記述があるものとして明治書院の『品詞別日本文法講座』があります。このシリーズでは巻末にその品詞の一覧表もあり便利です。

○参考文献

寺村秀夫（1982）『日本語のシンタクスと意味Ⅰ』くろしお出版

野田尚史（1991）『はじめての人の日本語文法』くろしお出版

§36. 活用

36.

活用

動詞・イ形容詞・ナ形容詞およびモダリティ表現の多くは文の中での働きや他の形式との組み合わせによって形を変えて現れます。このような形の変化を**活用**と呼びます。

学校文法では未然・連用・終止・連体・假定・命令という活用形の名称を用いますが、日本語教育でも便宜上、活用形に名前を付けています。大きく違う点は以下の3点です。

- ① 学校文法は基本的に古典文法の活用との対応を重視します。そのため「書いて」の「書い」と「書きます」の「書き」が同じ連用形とされる一方、ナ形容詞を除いて現代語では区別のない終止形と連体形が区別されません。日本語教育では一つの形式に一つの名称を与えますので、テ形とマス形を区別し、終止形と連体形はナ形容詞を除いて区別せず辞書形とします。
- ② 学校文法の活用形の名称について、日本語教育では、未然形・假定形などの名称は、普通、用いません。終止形と連体形は①で述べたように区別がないので用いません。命令形と連用形は単独で文中で用いられることがあるので使われることもあります。
- ③ 日本語教育では助動詞という考え方をせず動詞の活用形として扱います。このため活用の種類は学校文法より多くなります。(→§35, 動詞・形容詞活用表)

ここでは日本語教育で用いられる活用形の名称を学校文法の名称と比較しながら説明していきます。ただし、日本語教育で用いられている活用形は必ずしも統一された名称があるわけではないので、ここでは一般的に使われている名称を示しておきます。

1. 語幹と活用

これだけは

◆動詞や形容詞が文中での働きや次に来る形式によって形を変えることを**活用**と呼びます。

◆動詞や形容詞は活用によって形が変わらない部分（**語幹**）と変わる部分（**活用語尾**）に分けることができます。Ⅰ類（五段）動詞は「出す」を例にすると das-anai、das-imasu、das-u、das-eba と活用しますから、語幹は das- です。これに対してⅡ類（一段）動詞の「出る」は、de-nai、de-masu、de-ru、de-reba のように活用しますから、語幹は de- です。

◆受身形や様態の「そう」などに接続する形を示すため、特にⅠ類動詞の場合に学校文法の未然形（「出す」の dasa-）や連用形（dasi-）に相当する部分をそれぞれ、**否定形語幹**および**マス形語幹**と呼ぶこともあります。

もう少し

◆活用で変わらない部分を語幹と言いますが、Ⅰ類動詞のほとんどはテ形やタ形などの活用形で語幹末子音が変化します。これを**音便**と言います。

① イ音便

カ行とガ行のⅠ類動詞は、語幹末子音が脱落します。

辞書形	古典文法のテ形	テ形
書く (kak-u)	書いて (kak-ite)	書いて (ka□ite)
泳ぐ (oyog-u)	泳ぎて (oyog-ite)	泳いで (oyo□ide)

② 促音便

タ行・ラ行・ワ行のⅠ類動詞は語幹末子音が促音（「っ」）になります（「*」は理論的な架空の形を表します）。

辞書形	古典文法のテ形	テ形
打つ (ut-u)	打ちて (ut-ite)	打って (ut□te)
散る (tir-u)	散りて (tir-ite)→*tir□te	散って (titte)
洗う (ara-u)	洗ひて (arah-ite)→*arah□te	洗って (aratte)

③ ^{はつおん}撥音便

ナ行・マ行・バ行のⅠ類動詞は語幹末子音が撥音（「ん」）になると同時にテやタが有声音のデやダになります。

辞書形	古典文法のテ形	テ形
死ぬ (sin-u)	死にて (sin-ite)→*sin□te	死んで (sinde)
住む (sum-u)	住みて (sum-ite)→*sum□te	住んで (sunde)
呼ぶ (yob-u)	呼びて (yob-ite)→*yob□te	呼んで (yonde)

このような音便まで考慮に入れると、厳密な意味で変わらない部分は「書く」の場合、ka-だけになってしまうのですが、音便形は語幹を考えるときには考慮に入れず、別の（音韻的な）変化と考えてkak-を語幹と考えます。
 ◆Ⅱ類動詞の語幹のとらえ方も学校文法と日本語教育では大きく異なります。日本語教育については上に示したとおりですが、学校文法では、例えば「着る」には語幹がなく未然形活用が「き」というように、変わらない部分も活用語尾として扱っているので注意が必要です。

2. 活用形の名称

これだけは

◆日本語教育で使う**活用形**の名称を、動詞を例に、学校文法のもの（《 》で示す）と対比して示すと次のようになります。

- 否定形 《未然形＋助動詞ナイ》 例）書かない
- 意向形 《未然形＋助動詞ウ/ヨウ》 例）書こう
- 受身形 《未然形＋助動詞レル/ラレル》 例）書かれる
- 使役形 《未然形＋助動詞セル/サセル》 例）書かせる
- マス形 《連用形＋助動詞マス》 例）書きます
- テ形 《連用形＋接続助詞テ》 例）書いて
- タ形 《連用形＋助動詞タ》 例）書いた
- タリ形・タラ形 《連用形＋助動詞タリおよびその活用形》例）書いたり

- 辞書形** 《終止形・連体形（動詞の場合）》 例）書く
- バ形** 《假定形＋接続助詞バ》 例）書けば
- 可能形** 《五段動詞：可能動詞》 例）書ける
《一段動詞：未然形＋助動詞ラレル》 例）食べられる
- 命令形** 《命令形》 例）書け

このように、日本語教育ではテンス（→§5）やヴォイス（→§30）の表現のほとんどを活用形として扱います。（＜接続＞のタ形はより限定された意味で用います。→本書の使い方3．記号）

3. 丁寧形と普通形（plain form）

これだけは

◆日本語教育では**丁寧形**（デス・マス形）に対して、デス・マスが付かない形を**普通形**または**plain form**と呼びます。

動詞	肯定		否定	
	丁寧形	普通形	丁寧形	普通形
非過去	書きます	書く	書きません	書かない
過去	書きました	書いた	書きませんでした	書かなかった

イ形容詞	肯定		否定	
	丁寧形	普通形	丁寧形	普通形
非過去	青いです	青い	青くないです	青くない
過去	青かったです	青かった	青くなかったです	青くなかった

否定丁寧形については、日本語の教科書の多くが「青くないです」「青くなかったです」を採用していますが、実際には「青くありません」「青くありませんでした」もよく用いられます。

ナ形容詞	肯定		否定	
	丁寧形	普通形	丁寧形	普通形
非過去	元気です	元気だ	元気ではありません	元気ではない
過去	元気でした	元気だった	元気では ありませんでした	元気では なかった

名詞＋指定辞（「だ」）はナ形容詞と同じタイプの変化をします。

◆丁寧形の過去形は、動詞・ナ形容詞が「丁寧＋過去」の順であるのに対し、イ形容詞は「過去＋丁寧」の順です。

動詞：書きました

ナ形容詞：元気でした

語幹＋丁寧＋過去

語幹＋丁寧＋過去

イ形容詞：青かったです。

cf. ×青いでした

語幹＋過去＋丁寧

語幹＋丁寧＋過去

もう少し

◆「青いです」や「青かったです」の形は、成立が比較的新しいため用いにくいという印象を持つ人も多いようですが、正式に認められた形です。

◆丁寧形の過去について、「青いでした」の形は、やや古い日本語の教科書では教えられており、日本語母語話者の中にも使う人がいますが、現代共通語ではやはり不自然です。

4. 不規則な活用をする形容詞

これだけは

◆イ形容詞の「あたたかい」と「やわらかい」は、語幹が共通のナ形容詞型活用を一部併用しています。

この部屋は～	～部屋	～なる	～迎える	～ばコートを脱ごう
あたたかい	あたたかい	あたたかく	あたたかく	あたたかければ
あたたかだ	あたたかな	?あたたかに	?あたたかに	?あたたかならば

◆イ形容詞の「大きい」と「小さい」は名詞に続く場合だけナ形容詞型の「大きな」と「小さな」も使われます。

この部屋は～	～部屋	～なる	～ば住もう	(過去形)
大きい	大きい	大きく	大きければ	大きかった
×大きだ	大きな	×大きに	×大きであれば	×大きだった

「大きい」は「建物」など具体的なものに、「大きな」は「夢」など抽象的に使われることが多いとされますが、「大きな建物」「大きい夢」と言うことができないわけではなく、その差は明確ではありません。

◆イ形容詞の「よい」は「よい」のときだけ「いい」とも言います。

この本は～	～部屋	～なる	～ば住もう	(過去形)
よい	よい	よく	よければ	よかった
いい	いい	×いく	×いければ	×いかった

◆「同じ」は不規則な形容詞です。

彼と学校が～	～学校	給料が～なる	彼と～学生だ
×同じい	×同じい	?同じく	同じく
同じだ	×同じな	同じに	×同じに
	同じ		

◆「遠い・近い」が名詞を修飾するときは「遠い・近い」を使う場合と「遠くの・近くの」を使う場合もあります。

現在地を基準にした距離を示す場合には「遠くの・近くの」を使います。

- (1) {○近くの／×近い} コンビニまで買い物に行ってきた。
- (2) {○遠くの／×遠い} 方を見つめると目が休まります。

「～から遠い／近い」「～に近い」「～が遠い／近い」など、他の名詞句と助詞を伴って名詞修飾節になっているときは、「遠い・近い」を使うほうが自然です。

- (3) そんなに駅から{×遠くの／○遠い}家では通勤が大変だ。
- (4) 結婚式が{×近くの／○近い}人は時にゆううつになる。

また、時間的な遠近を表すときも「遠い・近い」を使います。

(5) そんな{×遠くの／○遠い}昔のことは忘れた。

◆「多い・少ない」も基本的に同様の区別があります。

(6) {○多くの／×多い}人が就職説明会場にやってきた。

(7) あの人は{○少しの／×少ない}ことですぐ怒る。

(8) 給料が{×多くの／○多い}人がうらやましい。

(9) もうすぐ子供が{×少しの／○少ない}時代になる。

(8)と(9)は直前に「～が」があるため「多い・少ない」を使います。

もう一步進んでみると

◆「青いです」という言い方は比較的新しく（1952年）認められた言い方で違和感を感じる人も多いようです。この経緯については水谷修監修（1990）を参照して下さい。

◆「面白かったです」か「面白いでした」かについては辻村敏樹（1964）に日本語教育での教え方の変遷と言語実態との比較から興味深い記述が見られます。

また、形容詞の否定丁寧形の「面白くなかったです」と「面白くありませんでした」については、文化庁文化庁国語課編（1997）に各語形の許容度が示されていますが、両形ともかなり高率で使用されています。

◆「大きな」と「小さな」という連体詞がなぜ生じたかについては小松英雄（1999）が参考になります。

○参考文献

小松英雄（1999）『日本語はなぜ変化するか』笠間書院

辻村敏樹（1964）「面白かったです・面白いでした」『口語文法講座 3－ゆれている文法』明治書院

文化庁文化庁国語課編（1997）『世論調査報告書 平成9年1月調査 国語に関する世論調査』大蔵省印刷局

水谷修監修（1990）『日本語なんでも相談』アルク

§37. 名詞(文)

名詞はものの概念を表す品詞です。名詞は「だ」を伴って述語になり、名詞修飾の場合は「の」を伴います。

名詞には文法的特徴に基づくいくつかの下位分類があります。

なお、日本語では英語（などの西欧語）ほど代名詞が使われませんが、その用法には注意すべき点があるため、ここで併せて扱います。

1. 名詞の文法的性質

- (1) 田中さんは学生 { です／だ／である }。

(2) a. 外国の雑誌 (cf. foreign magazine)
b. 日本の首都 (cf. capital of Japan)
c. 日本の自動車 (cf. Japanese car)

これだけは

◆名詞は単独では述語になれず、(1)のように「だ／です／である」を伴う必要があります。なお、くだけた話しことばではこれらが省かれることもありますが、改まった話しことばや書きことばではこれらが常に必要です。

◆名詞が他の名詞を修飾するときは(2)a～(2)cのように「の」を介します。これは名詞を他の品詞（特にナ形容詞の語幹）と区別する最大の根拠です。

もう少し

◆(2)a～(2)cからもわかるように、日本語で「名詞＋の」で表されるものが他の言語でも「名詞＋「の」に当たる語」で表されるとは限りません（ただし語順の違いは無視します）。例えば、「外国の雑誌」の「外国の」は「名詞＋の」ですが、対応する“foreign”は形容詞です。一方、「日本の首都」の「日本の」は英語でも“of Japan”「の」に当たる語＋名詞」で表されますが、同じ「日本の」であっても「日本の自動車」の「日本の」は英語では“Japanese”（形容詞）であり、対応関係は一定ではありません。

◆日本語では名詞修飾で「の」が必要なのは名詞だけです。しかし、言語によってはそれ以外の品詞でも「の」に当たる語」が必要な場合があります。例えば、(3)に対応する中国語では「の」に当たる「的」が必要であり、このため、(3)の（ ）に示すような誤用が生じることがあります。

(3) 私が買った本（×私が買ったの本 cf. 我買的書）

2. 名詞とナ形容詞

- | | |
|---------------------|-----------|
| (1) a. ○病気の学生 | b. ×病気な学生 |
| c. その学生は病気だ。(名詞) | |
| (2) a. ×元気の学生 | b. ○元気な学生 |
| c. その学生は元気だ。(ナ形容詞) | |
| (3) a. ○別の話 | b. ○別な話 |
| c. その話は別だ。(名詞、ナ形容詞) | |

これだけは

◆1でも少し見たように、名詞とナ形容詞(の語幹)はよく似ています。実際、(1)(2)のcのような述語の場合にはどちらも「～だ(です、である)」で終わります。両者の違いは、名詞を修飾する場合に「～の」の形を取るか

「～な」の形を取るかという点にあり、(1)のように「の」を取るものは名詞、(2)のように「な」を取るのはナ形容詞です。ただし、中には(3)のように「の」も「な」も取るものもあります。

3. 名詞の下位分類

名詞は文法的な性質からいくつかの種類に分けられます。

<形式名詞>

- (1) これは{×もの／○昨日デパートで買ったもの}です。
- (2) 彼の小説には人の心を温かくするところがある。

これだけは

◆最初の区別は**形式名詞**と**実質名詞**です。形式名詞は実質的な意味を持たず、次の(3)や(4)のような文型の下線部に入ることができません。一方、形式名詞以外の名詞は実質名詞と呼ばれ、下線部に入ることができます。

- (3) {これ／それ／あれ}は_____です。
- (4) {ここ／そこ／あそこ}は_____です。

これらが「接辞」ではなく「名詞」であるのは、(2)のように（通常の名詞と同じく）節によって限定されるためです。なお、形式名詞は単独では(3)の下線部には入ることができませんが、(1)のように節などで限定すればこの部分に入ることができます。

もう少し

◆次のように「後ろ、前日」なども単独では使われませんが、これらは「何かの」「後ろ、前日」を表すため、「相対性を持つ名詞」と呼ばれます。

- (5) 私は{？後ろ／○彼が歩いている後ろ}を歩いた。
- (6) 私たちは{？前日／○彼らが結婚した前日}に結婚した。

◆「のだ、わけだ、はずだ、ものだ」「ところで、ところが」など、日本語には「形式名詞＋助(動)詞」という形から発達した表現があります。これらについては初級編でも一部扱いますが、主には中上級編で扱います。

＜有情名詞と無情名詞＞

- (1) 部屋の中に{男の子／犬……}が{×ある／○いる}。
- (2) 部屋に{花／植木……}が{○ある／×いる}と、部屋が明るくなる。
- (3) 部屋の中に{テレビ／机……}が{○ある／×いる}。

これだけは

◆次の区別は「有情」と「無情」です。**有情名詞**は意志を持つものであり、人間を含む動物が該当します。**無情名詞**は意志を持たないものであり、植物及び無生物が該当します。両者の区別が最も関与するのは「いる」と「ある」の使い分けです。つまり、存在文のガ格が有情名詞なら「いる」が、無情名詞なら「ある」が使われるのです(→§6)。

＜時名詞＞

- (1) {○昨日／×昨日に}パーティーがありました。
- (2) {×3時／○3時に}パーティーがありました。
- (3) (卒業式の){○翌日／○翌日に}パーティーがありました。
- (4) {×昨日の3時／○昨日の3時に}パーティーがありました。

これだけは

◆次は「時」に関するものです。時にかかわる名詞(**時名詞**)は次の3種に分けられます。

- ① 「に」が付かないもの
- ② 「に」が必ず付くもの
- ③ 「に」が付いても付かなくてもいいもの

◆①に属するのは「昨日、今日、明日、今、さっき、今週、来週、先週、今月、来月、先月、今年、来年、去年」などです。これらの特徴はそれが指す時間が「今」との関連で規定されることです。例えば、失踪した人の部屋に「明日5時〇〇と会う」というメモがあった場合、その人がいつ〇〇と会ったのかはそのメモが書かれた日が特定できない限りわかりません。

◆一方、②に属するのは「3時、～日、～月、～曜日、～年」などです。これらの名詞が指す時間は時計やカレンダーなどで特定できます。こうした「に」は「までに、まえに」などの「に」と同じく時を限定するものです。

◆最後に、③に属するのは、「翌日、前日、春(休み)、夏(休み)、秋、冬(休み)」などです。これらの特徴は、それが指す時間が「今」以外のある特定の時との相対的な関係で決まるか、一定の幅を持ったものであるかということです。例えば「翌日」「前日」などは必ず「何かの」「翌日／前日」です。また、「春(休み)」などは一定の幅を持っています。

◆なお、「昨日の3時」のようにこれらが複合的に使われた場合には、後の名詞の性質に応じて「に」の有無が決まります。

<場所名詞>

- (1) 3時に{ 駅／大学… } { 〇に／×のところに } 来てください。
- (2) 3時に{ ドア／机… } { ×に／〇のところに } 来てください。
- (3) 3時に{ 私／田中さん… } { ×に／〇のところに } 来てください。

これだけは

◆次の区別は場所名詞にかかわるものです。日本語の名詞は「場所性」を持つものとそれを持たないものに分かれます。

◆「行く、来る」のような移動に関する動詞は、「____ { に／へ } 行く」「____ から来る」などの「____」の部分に場所を表す名詞を補語として取ります。(1)からわかるように、「駅、大学」などは「____」の部分にそのまま挿入できます(「東京」のような場所を表す固有名詞も同様です)。一方、(2)からわかるように、「ドア、机」などはそのままの形では「____」の部分に挿入できず、挿入するには「のところに」を付ける必要があります。このよう

に、「____」（場所を表す補語）の位置に挿入するときに「のところ」を付ける必要がある名詞を「場所性を持たない名詞」、「駅」のように「のところ」を付ける必要がない名詞を「場所性を持つ名詞」（**場所名詞**）と言います。

◆場所性を持つのは場所を表す固有名詞・建物（「学校」など）・部屋（「教室」など）・建物に属する施設（「出口」など）などです。一方、そのように認識されない「もの」や「生物」（「人」を含む）は場所性を持ちません。

もう少し

◆どのような名詞が場所性を持つかは言語によって差があります。例えば、(2)や(3)(の一部)のような名詞の場合、日本語では「のところ」が必要ですが、英語ではそうではないことがあります。

(2)' Please come to the door.

(3)' Please come to me.

4. 代名詞

- | |
|---|
| <p>(1) a. <u>私</u>は田中です。どうぞよろしく。
b. 田中です。どうぞよろしく。</p> <p>(2) a. <u>あなた</u>は田中さんですか。
b. 田中さんですか。</p> <p>(3) a. 山田：<u>あなた</u>は明日映画に行くんですか。
b. 山田：<u>田中さん</u>は明日映画に行くんですか。</p> |
|---|

これだけは

◆通常の名詞は何かのものを直接指しますが、**代名詞**は、あるものを直接指すのではなく、それを受けて間接的に指すものです。例えば、

(4) 田中くんは私の親友だ。彼は今大学で英語を教えている。

という文の「彼」はそれだけでは何を指しているのか不明ですが、先行文中の「田中くん」を指すことで間接的に「田中くん」を指しています（これを「文脈指示」と言います。詳しくは中上級編を参照してください）。この意味で「彼」は代名詞です。一方、先行文中の「田中くん」は直接「田中くん」という概念を指していますから名詞（固有名詞）です。

◆次のように、日本語には「代名詞」（と呼ばれるもの）がたくさんありますが、英語や中国語などに比べるとこれらが使われないことが多くあります。なお、代名詞的に使われる指示詞（「これ／それ／あれ」など）については§1を参照してください。

- 一人称：^{わたし}私（たち）、^{わたくし}私、おれ（たち）、僕（たち）、^{わたくし}私ども…
二人称：君（たち）、あなた（たち、方）、お前（たち、ら）…
三人称：彼（ら）、彼女（たち）、自分（たち）…

例えば、(1)aより代名詞（「私」）を省略した(1)bのほうがよく使われます。(2)のような疑問文における二人称代名詞も同様です。特に、「あなた」という語は失礼な感じを与えやすいので、疑問文では(3)aのように二人称代名詞（「あなた」）の代わりに、(3)bのように相手の名前を使うのが普通です。

5. 名詞文（指定文と措定文）

- | |
|---|
| (1) a. 議長は山田さんです。（指定文）
b. =山田さんが議長です。
(2) a. 山田さんは議長です。（措定文）
b. ×議長が山田さんです。
(3) 山田さんは忙しい。 |
|---|

これだけは

◆「名詞＋だ」を述語とする文を名詞文と言い、指定文と措定文という二つの種類があります。

◆**指定文**は「AはBだ」という文が「A=B」という関係にあることを示します。例えば、(1)aは「議長はだれか」というと、「山田さんだ」という関係を示します。こうした指定文は「BがAだ」と言い換えられます（この場合、「AはBだ」は**顕題文**、「BがAだ」は**陰題文**と呼ばれます→§27）。

◆一方、「AはBだ」で、AがBという属性を持つことを示す場合、それを**措定文**と言います。例えば(2)aは「山田さん」の属性（仕事）が「議長」であることを示します。措定文はAの属性を述べる文で、(3)のような形容詞文に近い意味を表します。措定文は「BがAだ」に置き換えられません。

もう一步進んでみると

◆**名詞**についての研究は寺村秀夫（1968）から始まりました。寺村は3で取り上げたような性質から名詞を分類する必要を論じました。名詞とナ形容詞の関係については寺村秀夫（1982）を参照してください。なお、名詞が持つ性質のうち、「**相対性**」については中上級編で取り上げます。

◆「**形式名詞**」という語は松下大三郎（1930）が初めて立てた名詞の下位分類ですが、佐久間鼎（1951）はこれを「**吸着語**」と呼び、詳しく考察しています。

◆**名詞文**における指定文と措定文の区別の必要性を指摘したのは三上章です（三上章（1953））。三上は代名詞についても重要な指摘をしています（三上章（1955））。

○参考文献

- 佐久間鼎 （1951）『現代日本語の表現と語法』くろしお出版から復刊（1983）
 寺村秀夫 （1968）「日本語名詞の下位分類」寺村秀夫（1993）『寺村秀夫論文集 I 日本語文法編』くろしお出版に再録
 ——— （1982）『日本語のシンタクスと意味 I』くろしお出版
 松下大三郎（1930）『改選標準日本口語法』勉誠社から復刊（1978）
 三上 章 （1953）『現代語法序説—シンタクスの試み—』くろしお出版から復刊（1972）
 ——— （1955）『現代語法新説』くろしお出版から復刊（1972）

§38. 動詞

動詞は格助詞を伴った名詞句（補語と言います）と共に用いられ文の中核である出来事を表します。

動詞が伴う補語には、必ず必要とするものと状況を説明するために補助的に添えられるものとがあります。例えば「昨日公園で太郎が次郎を殴った。」という文は、「殴る」という動作を行う人（＝動作主）である「太郎ーが」と動作を受ける人（＝対象）である「次郎ーを」がなければ出来事として成立しませんが、「昨日」や「公園で」は省略しても成り立ちます。

このような必ず必要とされる補語は**項**や**必須成分**などと呼ばれますが、この項の数や格は動詞によって決まっています。

また、動詞は第Ⅰ部で見てきた様々な文法的な範疇と呼応する特性を持っています。ここでは、話し手から見た動作の方向性、動作の時間的なとらえ方である状態性、話し手が動作を意志的に行うことができるかどうか（意志性）に関してまとめておきます。

1. 動詞の必要とする名詞句（＝項）と他動性

- (1) 明日は雨が降るでしょう。
- (2) ライオンがシマウマを食べている。
- (3) 車が塀にぶつかった。
- (4) 田中さんが花子さんと結婚するそうです。
- (5) 健康な人(に)は病気の人の気持ちがわからない。
- (6) 田中さんが小林さんに手紙を送った。

これだけは

◆動詞はいくつの項を必要とするかで以下の類に分けられます。

(1)の「(雨が) 降る」のようにガ格名詞句だけを必要とする動詞は**一項動詞**と呼ばれます。

(2)～(5)のようにガ格名詞句の他にもう一つ名詞句を必要とする動詞もあります。これらの動詞は必要とする項の数から**二項動詞**と呼ばれ、(2)の「食べる」のようにヲ格名詞句を取る動詞、(3)の「ぶつかる」のように二格名詞句を取る動詞、(4)の「結婚する」のようにト格名詞句を取る動詞があります。(5)の「わかる」のように主体を二格で表し対象をガ格で表す動詞もあります。

(6)のように主語の他に対象としてのヲ格目的語と受け手(「借りる」や「もらう」の場合は出どころ)としての二格目的語を同時に必要とする動詞もあります。このような動詞は**三項動詞**と呼ばれます。(→§2)

◆二項動詞では対象への働きかけの強さ(=**他動性**)が目的語の格表示と大きく関係しています。

「殺す、壊す、殴る」など対象に直接接触して変化を与える動詞は最も他動性が高い動詞で目的語は必ずヲ格で表示されます。

「似る、賛成する」のように対象との関係を表したり「ほれる、恋する」のように対象に対する感情を表す動詞は、対象への働きかけという点で弱く、例外もありますが、基本的に目的語は二格で表されます。

「わかる、できる」など対象に働きかけず主語の状態を表す動詞は、最も他動性が低いもので、目的語はガ格で表されることもあります。

ただし、感情を表す動詞でも「愛する、嫌う」などはヲ格名詞句を必要とするなど、他動性だけで格表示が決まっているわけではありません。

直接受身文は他動性が高い動詞からは作りやすいですが、低い動詞からは作りにくく、特に目的語がガ格で表される場合は受身文になりません。

(7) ×太田さんは子供によく似られている。

(8) ×地方の交通事情は東京の人にはわかられない。

◆「勉強する、料理する」などのサ変動詞は「勉強をする、料理をする」など、ヲ格名詞に「する」を付けた形言うこともできます。ただし、(9)のよ

うに一つの動詞がヲ格名詞を二つ取ることはできませんので、対象がある場合には(10)か(11)のように言わなければなりません。

- (9) a. ×昨日は2時間日本語を勉強をした。
b. ×田中さんは魚を料理することが得意だ。
- (10) a. 昨日は2時間日本語勉強した。
b. 田中さんは魚を料理することが得意だ。
- (11) a. 昨日は2時間日本語の勉強をした。
b. 田中さんは魚の料理（をすること）が得意だ。

もう少し

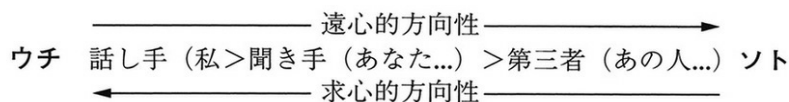
◆自動詞・他動詞と項の数との関係は、おおよそ一動詞が自動詞で二項以上が他動詞に相当しますが、厳密には一致しない場合もあります。また、対象としてヲ格以外を取る動詞は他動詞に含まないとする立場もあります。§10では二格目的語を取る「当たる」を「当てる」との対応から自動詞として分類しています。詳しくは§10を参照して下さい。

2. 動詞の方向性

- (1) 久しく会っていない友達が手紙をよこした。
- (2) 田中さんが電話をかけてきた。
- (3) 道に迷って困っていたとき、通りがかった人が私に話しかけてくれた。

これだけは

◆日本語には話し手を中心にした次のような**方向性**に対して敏感な動詞が存在します。



◆「あげる、くれる、もらう、よこす」は、動詞自体が方向性を持つ動詞で、「あげる」は遠心的方向性を、その他は求心的方向性を持ちます。

(4) ×昨日私は久しぶりに友達の田中さんに手紙をよこした。

「よこす」は「私」への求心的方向性を持ちますので(4)のように「私」からの遠心的方向性を表す場合には使えません。方向性の制限のない「書く」であれば自然な文になります。

(5) 昨日私は久しぶりに友だちの田中さんに手紙を書いた。

また、「～から聞く」も「もらう」と同様、求心的方向性を持ちます。

(6) a. 私は田中さんからそのニュースを聞いた。

b. ×田中さんは私からそのニュースを聞いた。

「あげる・くれる・もらう」については§11を参照して下さい。

◆対象を移動させるという意味を持つ動詞は、従属節の中で用いられる場合や伝聞を表す形式を伴う場合を除いて、原則として遠心的方向性を表します。

(7) ×母が私にみかんを送った。

(8) ×知らない人が私に話しかけた。

(9) ×田中さんが私に電話をかけた。

このような動詞は「～てくる」(→§12)を使うことによって求心的方向性を表すことができます。また、恩恵的な場面では「～てくれる」を使っても自然な表現になります。これらの場合、「私に」はしばしば省略されます。

(10) 母が私にみかんを{送ってきた／送ってくれた}。

(11) 通りがかった人が{話しかけてきた／話しかけてくれた}。

(12) 田中さんが{電話をかけてきた／電話をかけてくれた}。

38.

動詞

3. 動詞の状態性

- (1) テーブルの上にパンがある。
(2) あの子は隣のおじさんにとてもよく似ている。

これだけは

◆動詞は、アスペクト（→§6）に関する特徴として、状態的なもの（**状態動詞**）と非状態的なもの（変化動詞、動作動詞、出来事を表す動詞）に分けられます。

◆「いる、ある、できる、要る」などの状態動詞は、継続を表すテイルを付けることができません（×「いている」など）。

英語では、love, live, have, know など、それ自体が状態的な動詞が日本語より多くあります。これらに対応する日本語の動詞「愛する」などは、話の時点での状態を表す場合、テイル形にしなければなりません。

- (3) 田中さんは林さんを{×愛する／○愛している}。

◆「似る、(山が) そびえる、(赤いほお／長い髪／鋭い目つき…を) する、優れる、(栄養に) 富む」などは、単独では文末に使われることがなく、いつもテイルとともに用いられます。

- (4) 井上さんは長い髪を{×する／○している}。

「愛する」などと異なるのは過去形でもテイルをいつも伴う点です。

- (5) 田中さんは林さんを{○愛した／○愛していた}。

- (6) 井上さんは長い髪を{×した／○していた}。

◆「異なる・違う」と「異なっている・違っている」は、文体的な違いはあっても本質的な意味の違いはありません。

4. 動詞の意志性

- (1) 恋人に振られ悲嘆に暮れていたとき、あの人に出会った。
- (2) ? 今度はもっといい男と出会おう。
- (3) 学生が注意しているか確かめるためにわざと間違った字を書いた。
- (4) 他のことを考えていて間違った字を書いた。

これだけは

◆動詞は意志的な意味を表すことができる動詞と表すことができない動詞に分けられます。(1)(2)の「出会う」のように無意志的な行為を表すことはできるが意志的な行為を表すことができない動詞を**無意志動詞**、(3)(4)の「書く」のように意志的な動作も無意志的な動作も表すことができる動詞を**意志動詞**と言います。

◆無意志動詞は、人が主語にならない「ある」や「(雨が) 降る」などの他、人間の生理現象や心理現象を表す「むかつく、飽きる、いらだつ、悔やむ、困る、照れる、ためらう、迷う、気がめいる」などがあり、意向形として「×むかつこう」などの形として言えないものです。この他、「授かる、もうかる」などの受身的な意味を持つものや「出会う、巡り会う」など「偶然」という意味を内在するものもここに含まれます。

無意志動詞は意志的にすることを表さない動詞ですから、意向形(→§14)にできないと同時に命令形(→§15)にもできないのが普通です。例えば「×もう飽きろ」とは言えません。ただし、「あまりいらだつな」のように否定命令(禁止)にはできるものや、第三者に向かって希求または呪うような「もっと困れ」などの言い方ができるものもあります。

◆意志動詞は、意志的にも無意志的にも使える動詞で、「泳ぐ、書く、話す」など動作動詞の大半がこのタイプに入ります。

意志動詞は無意志的な動作を表す場合もあります。例えば「転ぶ」は「転ぼう」と思っていなくても「つまずいて転んだ」と言うことができます。

38.

動詞

「わかる、思う」などは「わかろう、思おう」と言うことはできる点で意志動詞に分類されますが、これらの動詞の場合には「わかろうと努力する」という意味になり「泳ごう」などとは性質がやや異なります。

◆このような意志動詞か無意志動詞かの区別は次の場合に重要です。

アスペクト（→§6）に関しては「～ているところだ」や「～ておく」に続くことができるのは意志動詞に限られます。例えば「×雨が降っているところだ」や「×料理ができておきました」が言えないのは、「降る」や「できる」が無意志動詞だからです。

授受の補助動詞（→§11）でも「～てあげる」は意志動詞と共に使いますので「×困ってあげます」などは普通言いません。

話し手の意志を表す表現（→§14）の「～ことにする、～つもりだ」も当然のことながら意志動詞しか使われません。

もう一步進んでみると

◆動詞の個々の性質に関しては宮島達夫（1972）や小泉保他編（1989）が参考になります。宮島（1972）では動詞の意味的特徴に対する記述が網羅的かつ詳細に行われており、実例も豊富で日本語教育にも有用です。また小泉他編（1989）はすべての動詞について記述がされているわけではありませんが、ある動詞がどのような文型を取るかという情報から、受身・使役・可能・アスペクト・意志・命令・禁止などの形があるかないかという情報まで記述されています。

○参考文献

小泉 保他編（1989）『日本語基本動詞用法辞典』大修館書店

宮島達夫（1972）『動詞の意味・用法の記述的研究』秀英出版

§39. 形容詞

「青い空」のように名詞(句)を修飾したり「空は青い」のように主語に置かれた名詞(句)の状態を言い表し、活用を持つ語を**形容詞**と言います。

日本語には**イ形容詞**と**ナ形容詞**という2種類の形容詞があります。イ形容詞は数が限られていますが、ナ形容詞は「ラッキーな」「ハードな」などのように外来語からも作られるなど生産的な面を持った形容詞です。

他の言語の形容詞と呼ばれる語の中には、英語のfatのように日本語では「太った」という動詞のタ形で表されるものや、trueやpinkのように「本当の」「ピンクの」など「名詞+の」のタイプもありますが、ここではイ形容詞とナ形容詞に限って見ておくことにします。

名称を含めた品詞分類と活用形については§35および§36で述べていますので、ここでは形容詞の基本的な働き・分類・形・名詞(句)との関係の四つの点について見ておきます。

39.

形容詞

1. 形容詞の基本的な働き

- (1) この本は安い。
- (2) これは安い本だけど内容が盛りだくさんだ。
- (3) 近所にあった、野菜が安かった店がつぶれてしまった。

これだけは

◆形容詞は(1)のように主語の「本」についてその性質を述べたり、(2)のよう

に「本」の性質を修飾的に表したりします。また(3)のように「野菜が安かった」という名詞修飾節の述語としても用いられます。

◆(2)のように形容詞を名詞の前に置いて名詞の性質を修飾的に表す用法では、過去であっても普通はタ形にできません。

(4) 昨日は一日中{○激しい／×激しかった}雨が降っていた。

これは、形容詞がもともと名詞の本質的な状態を表す働きを持ち、一時的な状態を表しているわけではないことによるものです。タ形を使うと相対的に以前の一時的な状態を表します。

(5) お祈りをすると、あんなに激しかった雨がピタリとやんだ。

(5)のように時間的な推移が含意される場合には「激しい」とすると奇異に感じられます。ただし、(3)のように名詞修飾節の述語として用いられる場合は、主節が過去であれば「安かった」と過去にすることも「安い」とすることも可能です。(→§5, §20)

2. 属性形容詞と感情形容詞

- (1) 彼の料理はいつもおいしい。

(2) ああ、ふるさとが懐かしい。

これだけは

◆形容詞には(1)のように主語（ここでは「彼の料理」）が持つ性質を表現する**属性形容詞**と、(2)のように主語（ここでは省略されている「私」）の感情を表現する**感情形容詞**とがあります。

◆(2)のような感情形容詞には他に次のようなものがあります。

怖い、恐ろしい、悲しい、うれしい、つらい、苦しい、痛い、眠い、嫌だ、好きだ、心配だ、苦手だ…

◆感情形容詞は感情を抱く対象をガ格で表します。ただし「苦しい、眠い」は感情を抱く対象を取りません。「悲しい、うれしい、つらい」についてはやや個人差もありますが、基本的に対象をガ格で表せます。

- (3) 私は彼のそのような態度が悲しい。

感情を抱く人物は話し手（疑問文の場合は聞き手）で主題化されて「は」で表されるか省略されるのが普通です。現在時制の場合、第三者が主語になることはありません。ただし、「好きだ」は例外的に第三者が主語になることもあります。

- (4) ×田中くんは悲しい。
(5) 林さんは山田さんが好きだ。

◆第三者が感情形容詞の主語になるのは次の場合です。

- ① 「～がる」を付けた動詞を用いる場合（「好きだ、眠い」を除く）

- (6) 田中くんはいつもちょっとしたことですぐ怖がる。

このような動詞には「懐かしがる、悲しがる、痛がる、嫌がる」などがあります（「好きだ、眠い」に対応するものではありません）が、やや批判的な意味が加わるので注意が必要です。また、これらの動詞は感情を抱く対象としてヲ格を取り、現在の状態についてはテイル形を使います。

- (7) あの子は家に帰るの{○を／×が} 嫌がっている。

- ② 伝聞や様態の表現や「～のだ」文

- (8) 田中くんは悲しそうだ。
(9) よし子さんは蛇が怖いらしい。
(10) 林さんは頭が痛いんだ。

- ③ タ形などで描写された過去の事実

- (11) 彼の無神経な態度にみゆきはとても悲しかった。

小説では③のような用法が多用されます。

これら①～③の性質は「ほしい」「～たい」(願望)と共通した性質です。
(→§14)

もう少し

◆英語などではこのような感情形容詞に対する制限がまったくないわけではありませんが、基本的に第三者を主語にして‘She is sad.’と言うことができます。

◆日本語では食べる前に味もわからないのに「このラーメンはおいしい」ということはできません。経験済か否かによって属性を言い表す形式に差が出ることに注意しておく必要があります。(→§13)

◆「～がる」は「新しがる、重宝がる」のように感情形容詞以外の形容詞にも付きます。

◆「怖い」などは「私はユーレイが怖い」とも「ユーレイは怖い」とも言えます。寺村秀夫(1982)は「一般的にだれにとっても」という意味で物事に対する品定めの用いられる形容詞を「感情的性状規定の形容詞」と呼び、「憎らしい、喜ばしい、望ましい」などを挙げています。

3. 形容詞の語順と前項の形式

- | |
|--|
| <p>(1) ドアの前に{小さい／小さくて} <u>かわいい</u>女の子が立っていた。</p> <p>(2) 彼は<u>いろいろな</u> <u>古い</u>コインを持っている。</p> <p>(3) 久しぶりに<u>暖かくて</u> <u>心地よい</u>部屋で一晩過ごした。</p> |
|--|

これだけは

◆英語の形容詞は、名詞を修飾する用法において、a nice large white old Italian wooden tableのように、おおよそ主観的な判断から規模・色彩・新旧・所属・材料という意味の順で語順が決まっていると言われます。日本語ではこのような語順に対する制限はややゆるやかです。それでもおおまかに

言って次のような順に並ぶ傾向があります。

種類・数量	主観的評価	属性（大小・色彩・新旧など）
様々な	よい・いい	大きい・小さい／大きな・小さな
いろいろな	悪い	白い・赤い・黒い…
おびただしい	すばらしい	新しい・古い
(多くの)	嫌な	⋮
⋮	⋮	⋮

◆属性を表す形容詞どうしの語順は比較的自由で、「大きくて黒い犬」も「黒くて大きい犬」も、どちらを強調するかというニュアンスの差はありますが、どちらも言えます。

「人が多くて暑苦しい部屋」のように「人が多いから暑苦しい」という意味の関係にある複数の形容詞は原因となるほうが前に来ます。

◆異なる種類に属する形容詞が連続する場合、すべての形容詞は名詞に続く形である「～い／～な」形式を取ります。

- (4) $\left\{ \begin{array}{l} \bigcirc \text{様々な} \\ \times \text{様々なで} \end{array} \right\} \left\{ \begin{array}{l} \bigcirc \text{すばらしい} \\ \times \text{すばらしくて} \end{array} \right\} \text{新しい車}$
- (5) いろいろ {×で／○な} 古いコインを持っている。
- (6) {×おびただしく(て)／○おびただしい} 黒いこうもり

このような異なる種類の形容詞は、意味的に並列ではないので、名詞に続く「～い／～な」の形が選択されるものと考えられます。

一方、前の形容詞が原因・理由として後の形容詞にかかっていく場合や、正反対のことを言う場合には、「～くて／～く／～で」が自然です。

- (7) {○暖かくて／？暖かい} 心地よい部屋
- (8) 韓国にとって {○近くて／×近い} 遠い国である日本

◆同じ属性を表す形容詞が二つ以上連なって名詞を修飾する場合には、一番名詞に近い側の形容詞以外は、「～くて／～く／～で」と「～い／～な」の両形を基本的には取ることができますが、「～くて／～く／～で」のほうがより自然に感じられるという人が多いようです。

- (9) {○白く(て)／○白い}やわらかい布地の感触
(10) {○安全で／○安全な}速い列車の開発に全力をあげる。

4. 形容詞が必要とする名詞句とその格

- (1) 田中さんは物理学に詳しい。
(2) 山田さんは林さんと親しい。

これだけは

◆感情を抱く対象をガ格に取る感情形容詞以外にも二格名詞句やト格名詞句を取る形容詞があります。

◆二格名詞句を取る形容詞としては適・不適を表す「ふさわしい、適切な、不適當な、ぴったりな、不向きな」や態度を表す「親切な、丁寧な、厳しい、冷たい、熱心な、積極的な、消極的な」などがあります。この他にも能力的状態を表す「詳しい、強い、弱い、明るい」なども二格を取ります。

- (3) 彼こそ総理大臣にふさわしい人物だ。
(4) 困っている人には親切にしましょう。
(5) 僕は犬に弱いんだ。

◆ト格を取る形容詞には相互的な態度や関係を表す「親しい、仲がよい、無関係な」などがあります。

- (6) 私はその事件とは無関係だ。

位置関係を表す形容詞や比較の基準を表す形容詞の中には、「平行な、垂直な」や「同じ、等しい、そっくりな」など、二格とト格のどちらでもよいものもあります。

- (7) 国道{と／に}平行な道は抜け道としてよく利用される。
(8) 田中さんのお子さんはお父さん{と／に}そっくりだ。

もう少し

◆形容詞は、状態的な描写を表すのが普通ですから、ヲ格は取りません。

◆ガ格は部分を表す場合に用いることがあります。

(9) あの子はお父さんと目がそっくりだ。

(10) (私は) 背中がかゆい。

もう一歩進んでみると

◆日本語の形容詞は、イ形容詞とナ形容詞の二つだけを対象として考えるだけでなく、「太った、年とった、こまごまとした」など動詞のタ形や「本当の、病気の、ピンクの」など「名詞+の」も併せて考えておく必要があります。

「元気、自由、正直、安全、健康、便利、正確」などは、名詞を修飾する場合、「元気な子、自由な国」のように「～の」ではなく「～な」となることからナ形容詞に分類されますが、一方で「元気が一番、自由を守る」と格助詞を伴うこともできる点で名詞的な性質を持っています。

◆形容詞に関して最も詳しい記述がされているのは西尾寅弥（1972）です。ここには感情形容詞の特性が一覧表になっていますので参照して下さい。また寺村秀夫（1982）の第2章でも感情形容詞を中心にその性質を記述しています。

◆形容詞が二つ以上並置された場合の前項形容詞に関しては山田敏弘（1995）が詳しく論じています。

○参考文献

寺村秀夫（1982）『日本語のシンタクスと意味Ⅰ』くろしお出版

西尾寅弥（1972）『形容詞の意味・用法の記述的研究』秀英出版

山田敏弘（1995）「赤クテ大キイ本と赤ク大キイ本と赤イ大キイ本」宮島達夫・仁

田義雄編『日本語類義表現の文法（下）』くろしお出版

§40. 副詞

副詞は動詞や形容詞を修飾することを本務とする品詞ですが、形式的にも意味的にも様々なものが含まれます。

1. 副詞の種類

<誘導副詞>

- (1) もし雨が降ったら、ハイキングには行かない。
- (2) パーティーは全然おもしろくなかった。

<程度副詞>

- (3) パーティーはとてもおもしろかった。
- (4) 今日は少し寒い。

<様態副詞>

- (5) 私は駅までゆっくり歩いた。
- (6) 魚は川をすいすい泳いでいた。

これだけは

◆副詞の分類にはいろいろなものがありますが、大きく、誘導副詞・程度副詞・様態副詞の三つに分けるのが最も一般的です。

◆**誘導副詞**は陳述副詞・文副詞などとも呼ばれるもので、後に続く表現を聞き手に予測させる機能を持っています。例えば、(1)の「もし」は後に仮定表現が来ることを、(2)の「全然」は後に否定表現が来ることをそれぞれ聞き手

にあらかじめ知らせる機能を持っています。

◆**程度副詞**は程度性を持つ語に付いてその程度を修飾する機能を持つ語で、基本的にはほとんどの形容詞を修飾することができます。(4)の「寒い」を例にとると、下の図からわかるように、「少し」「かなり」などの程度副詞は「寒い」「寒くない」などの寒さにかかわる程度性のスケールの中で、寒さの程度を限定する機能を持っています。



◆**様態副詞**は情態副詞・状態副詞などとも呼ばれるもので、動作のあり様を限定・修飾する機能を持っています。例えば、(5)の「ゆっくり」は「私」の「歩き方」を限定しています。

2. 誘導副詞（陳述副詞）

40.

副詞

- (1) たぶん、彼は来ないだろう。
- (2) もしかすると、ハイキングは中止されるかもしれません。
- (3) このパンは硬くて、まるで石をかんでいるようだ。
- (4) この本の内容は決してやさしくありませんが、おもしろいです。
- (5) どうか、私の話を聞いてください。
- (6) もし彼が来たら、私は出かけたと伝えてください。

これだけは

◆上で見たように、誘導副詞は後に続く内容をあらかじめ知らせる機能を持っています。このとき、「たぶん～だろう」「もしかすると～かもしれない」「まるで～ようだ」「決して～ない」「どうか～てください」「もし～たら」のように、これらの副詞は通常、特定の文末（従属節の場合は節末）形式と結び付きます。こうした現象を**呼応**と言います。

◆特定の文末形式と呼応する誘導副詞には次のようなものがあります。

- ・否定と呼応：決して、全然、たいして、ちっとも、ろくに、めったに…
 彼は決して納豆を食べない。
 この本は全然おもしろくない。
 このごろ忙しくて、ろくに本も読めない。
- ・願望と呼応：どうぞ、どうか、ぜひ…
 {どうぞ／どうか／ぜひ}この本を読んでください。
 {×どうぞ／○どうか／○ぜひ}この本を読んでほしい。
- ・疑問と呼応：なぜ、どうして…
どうしてパーティーに来なかったんですか。
- ・その他のモダリティと呼応：
 きっと、たぶん（断定、非断定、確信）…
 曇ってきたから、きっと明日は{雨だ／雨だろう／雨に
 ちがいない}。
 もしかすると、ひょっとすると（可能性）…
ひょっとすると、彼は家にいないかもしれない。
 どうやら（状況からの判断）、まるで（比喩）…
 部屋の電気が消えている。どうやら彼は出かけたようだ。
 今朝は静かだ。まるで町にだれも人がいないようだ。
- ・仮定と呼応：もし、仮に…
仮に私が優勝したら、どんなものをもらえるのですか。

もう少し

◆このように、誘導副詞は特定の文末（節末）形式と呼応するのが基本的な用法ですが、中にはこれらの文末形式を伴わなくても使えるものがあります。例えば、次の(7)の「きっと」や(8)の「たぶん」などは、その他の誘導副詞と同じく、「だろう」「と思う」などのモダリティ表現と共に使うこともありますが、それだけではなく、(7)'や(8)'のように、これらの表現がない場合にも使えます。この場合、モダリティ表現の有無で意味は変わりません。

- (7) きっと彼は来ない{だろう／と思う／はずだ／に違いない}。
- (8) たぶん彼は来ない{だろう／と思う}。
- (7)' きっと彼は来ない。

(8) たぶん彼は来ない。

ただし、誘導副詞は文末（節末）と呼応するのが基本ですから、通常は、次の(9)bのように、呼応する形式を取り除くと文法的ではなくなります。

(9) a. ○もしかすると、彼は来ないかもしれない。

b. ? もしかすると、彼は来ない。

3. 程度副詞

(1) 昨日は大変暑かった。

(2) 今日はちょっと疲れました。

(3) 田中さんの少し右に座っているのは吉田さんです。

(4) 彼女はなかなか美人だ。

40.

副詞

これだけは

◆上述のように、程度副詞は**程度性**（スケール）を持つ語を修飾して、その程度を限定します。形容詞は普通程度性を持っているため、程度副詞による修飾が可能です。動詞でも(2)の「疲れる」のように修飾が可能な場合がありますが、動詞を修飾するのは通常、後述する量・頻度の用法の場合です。

◆程度副詞は程度性を持つ語を修飾するものですから、修飾される語が形容詞や動詞でなくともかまいません。例えば、(3)の「右」のように相対性を持つ名詞は程度副詞によって修飾することが可能で、「すぐ右」「少し右」のように言うことができます。相対性を持つ名詞とは、「上、下、右、左、正面、前、後ろ」などのように、常に何かを基準にして、その「上、下…」という形で指すもの（指示対象）が決まるという性質を持つ名詞のことです。

◆一方、(4)の「美人」も名詞ですが、これは「美しい人」という意味の中に「美しい」という程度性を含む要素があるため、程度副詞はその部分を修飾できるのです（同様の例に「変人、大物、難題」などがあります）。

もう少し

◆程度副詞が量や頻度を修飾する場合があります。例えば、次の(5)aと(5)bを比較すると、前者の「かなり」は問題の難しさの程度を表していますが、後者の「かなり」は事故で亡くなった乗客の数(=量)を表しています。

- (5) a. この問題はかなり難しい。
b. その事故で乗客がかなり亡くなったらしい。

一方、次の(6)aと(6)bを比較すると、前者の「よく」は吉田くんの試験の出来具合の程度を表しているのに対し、後者の「よく」は吉田くんが海外旅行に行く頻度を表しています。

- (6) a. 吉田くんの試験はよくできています。
b. 吉田くんはよく海外旅行に行きます。

◆程度副詞が動詞を修飾するのは普通、この量・頻度を表す用法です。

- (7) 昨日はすしをたくさん食べた。
(8) 田中さんはしょっちゅう外食をするそうだ。

4. 様態副詞

- (1) 田中さんはプールをゆっくり泳いでいた。
(2) だれかがドアをとんとんとたたいた。
(3) 道が凍っていたので、そろそろと歩いた。
(4) さっき雨が降った。

これだけは

◆上述のように、様態副詞は動作のあり様を限定する機能を持っています。
(1)で言えば、「ゆっくり」は「泳ぎ方」を限定しています。

◆様態副詞の中には、(2)の「とんとん」、(3)の「そろそろ」のように同じ語を繰り返すもの（**畳語**）が数多くあります。なお、「とんとん」のように何かの音をまねたものを**擬声語**、「そろそろ」のようにある動作をイメージ的に表したものを**擬態語**と言います（擬声語・擬態語の多くは畳語ですが、「ボタンと」「ねちゃっと」のように畳語でないものもあります）。

◆様態副詞の中には、(1)～(3)のように、動詞などの実質的意味を修飾するものがある他、(4)の「さっき」のようにテンスを修飾するものもあります。例えば、(4)が文法的であるのに対し(4)'はそうではありません。これは、「さっき」がテンスを修飾している（テンスと関連している）ためです。

(4)' × さっき、雨が降る。

5. 副詞とその周辺

40.

副詞

- (1) 佐藤さんは友達からテレビを安く買ったそうだ。
- (2) 田中さんはコンピューターの使い方を丁寧に説明してくれた。
- (3) 昨日、近くで交通事故があった。
- (4) 吉田さんは駅前を汗を流しながら歩いていた。

これだけは

◆副詞には形式的にも意味的にもいろいろなものがありますが、(1)の「安く」や(2)の「丁寧に」はそれぞれ「安い」（イ形容詞）、「丁寧な」（ナ形容詞）の活用形と考え、副詞に入れないのが普通です（→§35）。

◆(3)の「昨日」のような時間を表す表現は次のように格助詞やとりたて助詞を伴って文の成分になれることから名詞として扱われることが多いです。

(5) 昨日は私の誕生日だった。

◆(4)の「汗を流しながら」は(4)'の「汗だけで」とほぼ同義ですが、「流す」が「汗」という目的語を取っているため、通常従属節として扱われます。

(4)' 吉田さんは駅前を汗だくで歩いていた。

もう一步進んでみると

◆副詞の中には「に」で終わるものと「と」で終わるものが多いですが、両者の間には意味的に違いがあることがあります。

- (1) a. 田中さんはその紙をびりびりと破った。
b. その紙はびりびりに破れていた。

例えば、(1)aの「びりびりと」は紙の破り方を表しますが、(1)bの「びりびりに」は破れた紙の状態、つまり破るという行為の結果生じた状態を表します。仁田義雄(1983)は(1)bのようにある行為の結果生じる状態を表す副詞を「結果の副詞」と呼んで、様態副詞から区別しています。

◆現在の副詞論の基礎を作ったのは山田孝雄^{よしお}です(山田孝雄(1936)など)。山田は呼応を重視し、この語類を**陳述副詞**と呼びました。陳述というのは山田を始祖とする伝統的国語学において文を成立させる最大の要因と考えられていた概念です(現在のモダリティという概念と類似していますが、必ずしも両者は同じではありません)。陳述は形式上は文末に現れるのが普通であり、これらの副詞は陳述を修飾するため、陳述副詞と呼ばれました。一方、**誘導副詞**は渡辺実(1971)の用語で、呼応という形式よりも先触れという機能を重視した考え方です。この誘導副詞という概念は接続詞とも極めて近いものです。例えば、次の「確かに」「実は」などが誘導副詞の例ですが、(2)の「確かに」は相手の意見を一応認めつつそれに対する反論を述べるということを、(3)の「実は」は相手に打ち明け話をするということをそれぞれ先触れしています。こうした機能は接続詞が持つものでもあります。

- (2) 確かに、君の言うことは正しいが、彼女の話も聞いてやれよ。
(3) 実は、私の祖母は中国人なんです。

なお、**文副詞**は英語学でよく使われる用語で、中右実(1980)など日英語の対照研究においてよく使われています。

◆副詞の分類は山田孝雄が行った「陳述副詞、程度副詞、情態副詞」という分類が基本となっています（山田孝雄（1936）など）。ただし、上でも見たように、特に陳述副詞に関しては様々な説が出されています。中でも、渡辺実（1971）、中右実（1980）、工藤浩（1982）などが重要です。

◆様態副詞に関しても形容詞との区別の問題などいろいろな議論がありますが、中でも仁田義雄（1983）などが重要です。

◆副詞に関して簡潔にまとめたものに国立国語研究所（1991）があります。

○参考文献

工藤 浩（1982）「叙法副詞の意味と機能」『国立国語研究所報告71 研究報告集 3』秀英出版

国立国語研究所（1991）『日本語教育指導参考書19 副詞の意味と用法』秀英出版

中右 実（1980）「文副詞の比較」『日英語比較講座2 文法』大修館書店

仁田義雄（1983）「動詞に係る副詞的修飾成分の諸相」『日本語学』2-10

山田孝雄（1936）『日本文法学概論』宝文館

渡辺 実（1971）『国語構文論』塙書房

§41. 数量詞

ここでは、数字だけで表される基本的な数としての**数詞**、数詞に「匹、本、枚…」などの**助数詞**の付いたもの（**数量詞**）、時間の表現、概数の表現を扱います。

1. 数量詞

これだけは

◆ 1～10の数を数えるときに使う言い方には二通りありますが、11以上は同じです。日本語学習者が間違えやすいものは表中に「×」で示します。

1	一つ (ひとつ)	一 (いち)	6	六つ (むっつ)	六 (ろく)
2	二つ (ふたつ)	二 (に)	7	七つ (ななつ)	七 (しち・なな)
3	三つ (みっつ)	三 (さん)	8	八つ (やっつ)	八 (はち)
4	四つ (よっつ)	四 (し・よん)	9	九つ (ここのつ)	九 (きゅう・く)
5	五つ (いつつ)	五 (ご)	10	十 (とお)	十 (じゅう)

11	十一 (じゅういち)	16	十六 (じゅうろく)
12	十二 (じゅうに)	17	十七 (じゅうしち・じゅうなな)
13	十三 (じゅうさん)	18	十八 (じゅうはち)
14	十四 (じゅうし・じゅうよん)	19	十九 (じゅうきゅう・じゅうく)
15	十五 (じゅうご)	20	二十 (にじゅう)

0	ゼロ・れい	200	二百 (にひゃく)	2,000	二千 (にせん)
30	三十 (さんじゅう)	300	三百 (○さんびゃく) (×さんひゃく)	3,000	三千 (○さんぜん) (×さんせん)
40	四十 (よんじゅう・ しじゅう)	400	四百 (○よんひゃく) (×しひゃく)	4,000	四千 (○よんせん) (×しせん)
50	五十 (ごじゅう)	500	五百 (ごひゃく)	5,000	五千 (ごせん)
60	六十 (ろくじゅう)	600	六百 (○ろっぴゃく) (×ろくひゃく)	6,000	六千 (ろくせん)
70	七十 (ななじゅう・ しちじゅう)	700	七百 (○ななひゃく) (×しちひゃく)	7,000	七千 (○ななせん) (×しちせん)
80	八十 (はちじゅう)	800	八百 (○はっぴゃく) (×はちひゃく)	8,000	八千 (○はっせん) (×はちせん)
90	九十 (○きゅうじゅう) (×くじゅう)	900	九百 (○きゅうひゃく) (×くひゃく)	9,000	九千 (○きゅうせん) (×くせん)
100	百 (○ひゃく) (×いちひゃく)	1,000	千 (○せん) (×いちせん)	10,000	一万 (○いちまん) (×まん)

100,000	十万 (じゅうまん)	10,000,000	一千万 (いっせんまん)
1,000,000	百万 (○ひゃくまん) (×いちひゃくまん)	100,000,000	一億 (いちおく)

◆「1,000」は「いっせん」と言うこともありますが、普通は「せん」です。

もう少し

◆数量詞には以下のようなものがあります。

- | | |
|---------------|---|
| ① 数詞 | 1、2、3、 $\frac{1}{3}$ 、0.08… |
| ② 数詞＋助数詞（類別辞） | 1人、二つ、3個、4本、6匹、数台… |
| ③ 数詞＋助数詞（単位辞） | 2時間、3時、4年、5回、6円、2歳、
60センチ、100グラム、4℃、1ドル、
1995年12月23日1時5分、
2番、2階、5号、3倍… |

- ④ 疑問代名詞（＋助数詞） 何人、何時間…
- ⑤ 数詞＋名詞 一口、二箱、一皿…
- ⑥ 数詞＋助数詞＋接尾辞 2人ずつ、2人分、2足組…

◆以上の形式は、次のような意味を表します。

- ① 量的数値 4キロメートル、160センチ、100グラム、
1年間、3分、2週間…
- ② スケール上の点的数値 1995年12月23日1時5分、4℃、2歳、2階…
- ③ 序列を表す数値 3人目…
- ④ 程度・割合 1時間500円、1週間に1度

◆分数・小数・主な割合の表し方は以下の通りです。分数の読み方は、英語の分子から読む読み方（ $\frac{1}{3}$ =one third）と逆なので、注意が必要です。小数第一位以下の1拍で読む数字（例えば、2や5）は、2拍に長くして読むのが普通です。

- $\frac{1}{3}$ (さんぶんのいち)
- $\frac{2}{9}$ (きゅうぶんのに)
- 1.5 (いってんご)
- 6.25 (ろくてんにいごお)
- 1割5分 (= 0.15) (いちわりごぶ)

◆電話番号では、ハイフンを「の」と読み、1拍の数字も2拍で長めに読みます。たとえば、「03-1234-5678」は、「ゼロさん」の「いちにいさんよん」の「ごおろくななはち」と読み、できるだけわかりやすくします。

2. 助数詞

- (1) 家の前に子供が2人います。
- (2) 木の下に猫が2匹います。
- (3) 今朝ロールパンを三つ食べました。

これだけは

◆何かを数えるときに数字の後に付けるものを「助数詞」と呼びます。助数詞は数えるものの種類によって異なり、以下のようなものがあります。

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	?
いち まい	に まい	さん まい	よん まい	ご まい	ろく まい	なな まい	はち まい	きゅう まい	じゅう まい	なん まい (枚)
いち だい	に だい	さん だい	よん だい	ご だい	ろく だい	なな だい	はち だい	きゅう だい	じゅう だい	なん だい (台)
いっ ぽん	に ほん	さん ぽん	よん ほん	ご ほん	ろっ ぽん	なな ほん	はっ ぽん	きゅう ほん	じっ ぽん	なん ぽん (本)
いっ びき	に ひき	さん びき	よん ひき	ご ひき	ろっ びき	なな ひき	はっ びき	きゅう ひき	じっ びき	なん びき (匹)
いっ ぱい	に はい	さん ぱい	よん はい	ご はい	ろっ ぱい	なな はい	はっ ぱい	きゅう はい	じっ ぱい	なん ぱい (杯)
いっ さつ	に さつ	さん さつ	よん さつ	ご さつ	ろく さつ	なな さつ	はっ さつ	きゅう さつ	じっ さつ	なん さつ (冊)
いっ さい	に さい	さん さい	よん さい	ご さい	ろく さい	なな さい	はっ さい	きゅう さい	じっ さい	なん さい (歳)
いっ かい	に かい	さん がい	よん かい	ご かい	ろっ かい	なな かい	はっ かい	きゅう かい	じっ かい	なん がい (階)
		さん かい								なん かい (回)
ひとり	ふたり	さん にん	よ にん	ご にん	ろく にん	なな にん	はち にん	きゅう にん	じゅう にん	なん にん (人)

枚（まい）…薄いもの（例：紙、切符、シャツ…）
 台（だい）…大きくて動かせるもの（例：車、自転車、テレビ…）
 本（ほん）…長いもの（例：えんぴつ、傘…）
 匹（ひき）…動物（例：猫、犬、魚…）
 杯（はい）…容器に入った飲み物（例：コーヒー、水…）
 冊（さつ）…本
 歳（さい）…年齢
 階、回（かい）…建物の階、回数
 人（にん）…人数

◆「8階」「8回」は、どちらも「はっかい」と読みますが、「はちかい」と言うこともあります。

◆「10本」「10匹」などは、「じっぽん」「じっぴき」とするのが正式ですが、「じゅっぽん」「じゅっぴき」ということもできます。

◆助数詞「～本」「～匹」「～杯」「～冊」「～歳」「～階」が「1」「3」「6」「8」「10」「何^{なん}」に続くときは、発音しにくいので例外的な読み方になります（これらは前ページの表で網掛けしてあるものです）。

本（hon）、匹（hiki）、杯（hai）	1, 6, 8, 10 → -ppon, -ppiki, -ppai
	3, 何? → -bon, -biki, -bai
冊（satsu）、歳（sai）、階、回（kai）	1, 8, 10 → -ssatsu, -ssai, -kkai
階（kai）	3, 何? → -gai
階、回（kai）	6 → -kkai

もう少し

◆(4)(5)のようなガ格、および、ヲ格の名詞を限定するための数量詞は、その名詞の後ろに助詞を付けないで用いる場合もあります。

- (4) 我が家には2匹の犬がいます。
- (5) 昨日は3通の手紙を書いた。
- (4)' 我が家には犬が2匹います。
- (5)' 昨日は手紙を3通書いた。

カラ格・デ格・ニ格の名詞など他の場合はこのような表現はできません。

(6) 2人の友達から手紙をもらった。

(6)' × 友達から2人手紙をもらった。

また、「数量詞+「の」+名詞+「が／を」」の形と「名詞+「が／を」+数量詞」の形がいつも使えるわけではなく、使えても意味が異なる場合もあるので、注意が必要です。

まず、次のように数量詞が名詞の量ではなく種類や性質を表すものの場合、「名詞+「が／を」+数量詞」の形は使えません。

(7) a. 2リットルのやかんを買った。

b. × やかんを2リットル買った。

以下は意味の異なる場合です。

(8) a. その3本のバラをください。

b. そのバラを3本ください。

(9) a. ゆうべ200ページの小説を読んだ。

b. ゆうべ小説を200ページ読んだ。

(8)のaでは特定のバラを指しているのに対し、bでは不特定の3本になります。(9)のaでは200ページが小説全体の量であることになるのに対し、bでは一部の量（もっと長い小説のうちの200ページ）という意味になります。

3. 時間を表す表現

(1) その本は今貸し出し中なので、{ × 2 週後 / ○ 2 週間後 } にもう一度来てください。

(2) { × 3 年間に / ○ 3 年間 / ○ 3 年 } 日本語を勉強しました。

(3) 大阪から東京まで飛行機で 1 時間 ぐらい かかります。

これだけは

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	?
ねん (かん)	いち ねん	に ねん	さん ねん	よ ねん	ご ねん	ろく ねん	なな/ しち ねん	はち ねん	く/ きゅう ねん	じゅう ねん	なん ねん
かげつ (かん)	いっ かげつ	に かげつ	さん かげつ	よん かげつ	ご かげつ	ろっ かげつ	なな/ しち かげつ	はち/ はっ かげつ	きゅう かげつ	じっ かげつ	なん かげつ
しゅう かん	いっ しゅう かん	に しゅう かん	さん しゅう かん	よん しゅう かん	ご しゅう かん	ろく しゅう かん	なな/ しち かん	はっ しゅう かん	きゅう しゅう かん	じっ しゅう かん	なん しゅう かん
にち かん	いち にち かん	ふつか かん	みつか かん	よつか かん	いつか かん	むいか かん	なのか かん	ようか かん	ここのか かん	とおか かん	なん にち かん
じかん	いち じかん	に じかん	さん じかん	よ じかん	ご じかん	ろく じかん	しち じかん	はち じかん	く じかん	じゅう じかん	なん じかん
ふん (かん)	いっ ぶん	に ぶん	さん ぶん	よん ぶん	ご ぶん	ろっ ぶん	なな ぶん	はっ ぶん	きゅう ぶん	じっ ぶん	なん ぶん
びょう (かん)	いち びょう	に びょう	さん びょう	よん びょう	ご びょう	ろく びょう	なな びょう	はち びょう	きゅう びょう	じゅう びょう	なん びょう

◆「間（かん）」は、長さを表すときに付けることもありますが、付けなくてもかまいません。ただし、「週」のときには付けるのが普通です。

◆「10か月」「10週間」「10分」では、「じっかげつ」「じっしゅうかん」「じっぶん」が正式な読み方ですが、「じゅっかげつ」「じゅっしゅうかん」「じゅっぶん」と言うこともできます。

◆月の長さを表すときには、「ひとつき」「ふたつき」「みつき」も使いますが、4以上は普通は使いません。また、漢字で「一月、二月…」とすると、「いちがつ、にがつ…」と読まれる可能性があるので、法律の言い方を除いて「一月、二月…」のような書き方はしません。

4. 概数表現

- (1) 昨日は5時間ぐらゐ勉強しました。
- (2) 今日1時ごろ地震がありました。

これだけは

◆概数表現とは、おおまかな数値を表すために用いるものです。正確な数値が測定不可能、あるいは、不明である場合に使われるのが普通で、数量詞の後ろに、「ぐらい、ほど、ばかり」を付けたり、数量詞の前に「およそ、約」などを付けて表します。

(3) 30人{ ぐらい／ほど／ばかり }の学生が参加した。

(4) 彼は毎年{ およそ／約 }200枚の年賀状を書く。

「だいたい」も数量詞の前に用いますが、「ぐらい、ほど、ばかり」といっしょに用いるのが普通です。

(5) 今日のパーティーには、だいたい50人ぐらいの人が集まった。

「ぐらい」「ほど」「ばかり」は、聞き手に配慮してわざと正確な数値を言わない婉曲表現にも用いられます。

(6) 千円ほど貸していただけませんか。

◆「ぐらい、ほど、ばかり」には文体差があります。話しことばでは、「ぐらい」が好まれ、書きことばでは、「ほど」がよく用いられます。「ばかり」は、古い文体で好まれていた形式ですが、現代語でも用いることができます。ただし、古めかしい、改まったイメージが加わります。「くらい」は、「ぐらい」と同じ意味で用いられる交替形です。

◆おおまかな時刻は、「数+時間の助数詞」の後に「～ごろ」を付けて表します。だいたいの時刻を尋ねるときは「何時ごろ」「いつごろ」を使います。「ごろ」を含む定式化した言い方には「先ごろ」「近ごろ」などがあります。

◆だいたいの時間の長さを表すときには、「ぐらい」を使って時刻と区別します。このときには「に」は要りません。

もう少し

◆最近の若い人の中にはおおまかな時刻を表すときに「ごろ」の代わりに「ぐらい」を使う人もいます。ただし、「ぐらい」は時間の長さの概数を言う

のに適した形式ですので、時刻であることをはっきりさせるために「に」という助詞を必ず用いなければなりません。

(7) 1時{○ぐらいに／×ぐらい}地震があった。

◆概数表現「ぐらい、ほど、ばかり」は、ほとんど同義で用いられますが、厳密には、以下のような使い分けがなされています。

① 「ばかり」は、当該数値が小さいという表現効果を持つため、大きい数値の概数表現には適しません。

(8) その虫は体長が3センチ{ぐらい／ほど／ばかり}しかない。

(9) 彼はまだ小学生なのに身長が170センチ{○ぐらい／○ほど／？ばかり}もある。

② 敬意を表すべき相手に関する数値をその相手に向かって言い表す場合にも「ばかり」は不適です。

(10) 先生。先生は海外で論文を20本{○ぐらい／○ほど／？ばかり}発表なさっているそうですね。

③ 温度などスケール上の点的数値や、序列を表す数値には「ばかり」は付かず、「ほど」もやや不自然になります。

(11) アイスクリームは気温が27度{○ぐらい／？ほど／×ばかり}になると売れ始める。

(12) 小学校5年生{○ぐらい／？ほど／×ばかり}の女の子が立っていた。

(13) 海外旅行はこれで10回目{○ぐらい／？ほど／×ばかり}だ。

④ 割合を表す数値には「ばかり」は適しません。

(14) この病気は、千人に2人{○ぐらい／○ほど／？ばかり}の割合で起こる。

以上のことをまとめると次表のようになります。「ぐらい」がもっとも使用範囲の広い形式だと言えます。(例文は「～」の部分に「ぐらい」「ほど」「ばかり」のいずれかが入ります。)

	ぐらい	ほど	ばかり
① 数値が大きいことを表す場合 (例：身長が170センチ～ある。)	○	○	?
② 敬意を表すべき相手に関する数値 (例：論文を3本～お書きになりました。)	○	○	?
③ 点的数値 (例：小学校5年生～の女の子) 序数 (例：ここに来るのは10回目～だ。)	○	?	×
④ 割合を表す数値 (例：千人に2人～の割合)	○	○	?

◆「ぐらい、ほど」は、次のような、あるものの数量や大きさを他のもので例える比喩の表現にも用いられます

(15) 娘の家は我が家の台所ぐらいの一部屋しかない。

(16) この木は子供の頭ほどの大きな実をつける。

もう一歩進んでみると

◆数量詞にかかわる問題のうち文法研究で取り上げられてきたのは、2の「もう少し」で述べたような文中での数量詞の位置の問題です。三上章(1972復刊)など多くの研究がありますので、参照してください。

○参考文献

井上和子 (1978)『日英語対照 日本語の文法規則』大修館書店

奥津敬一郎 (1969)「数量的表現の文法」『日本語教育』14

三上 章 (1953)『現代語法序説－シンタクスの試み－』くろしお出版から復刊(1972)

§42. 接辞

接辞とは、単語または単語の中核を成す部分（語基）に付いて文法的な意味などを表す形式で、独立して用いられないものを指します。日本語には次のような種類の接辞があります。

接頭辞：お菓子、ご意見、無意志、不安定、未分化…

接尾辞：学生らしい、食べ方、湿っばい、工事中、広さ…

この他、尊敬語の「お～なる」、謙譲語の「お～する」など、接頭辞と接尾辞がセットになって用いられるものもあります。

ここでは、§32で扱っている敬語に関する接辞を除いて、初級で出てくる接尾辞に関して簡単に見ておきます。

1. ～らしい

- (1) 彼の格好はいかにも芸術家らしいね。
 - (2) 遅刻するなんて彼らしくないなあ。
 - (3) ここ何日か雨らしい雨が降っていない。

これだけは

<接続> N+らしい

◆接尾辞の「～らしい」は、名詞に付いてその名詞の表す典型的な性質が表れていることを表します。この「～らしい」は、§13で扱っている「彼によるとあの人は芸術家らしい」のような状況からの判断を表す表現とは意味的

に異なります。また、判断を表す「～らしい」は、名詞の他、形容詞や動詞にも付きますが、接尾辞の「～らしい」は名詞にしか付きません。

◆接尾辞の「～らしい」はイ形容詞型の活用をします。

- (4) もっと学生らしく勉強しなさい。
- (5) 黙って花を送ってくるなんていかにも彼らしかった。

2. ～っぽい

- (1) 彼は非常に怒りっぽい性格をしている。
- (2) 犯人は黒っぽい服に赤みがかかったジャンパーを着ていた。
- (3) このところ雨が降っていないから、なんだかほこりっぽい。

これだけは

<接続> V_{マス} / N / Na_{語幹} / A_{語幹} + っぽい

◆「～っぽい」は「は」で主題化された人やものなどがそのような性質を持つ傾向が強いことを表します。

◆「怒る、飽きる、忘れる、ひがむ」などの変化を表す動詞に付くときには、そのようなよくない状態に頻繁に陥りやすい性質であることを表します。

色彩形容詞や「安い、きざだ、俗だ」などの属性形容詞に「～っぽい」が付くときには、典型的な状態ではないがそのような性質を帯びていることを示します。例えば「黒っぽい」は、「黒い」よりは「黒さ」という点で典型的でなく「黒」に近似した色であることを表しています。

「ほこり、粉、水、不良」などの名詞に「～っぽい」が付くときには、その名詞の表しているものの状態に近い属性を持つことを表します。

◆「～らしい」と「～っぽい」との違いは、「～らしい」がそのものが持つ典型的な性質を持っていることを表すのに対して、「～っぽい」は元来そのような性質を持つべきでないものがそのような性質を帯びており、マイナスイメージを持つこともある点です。例えば「子供らしい」は、子供に対して使

えますが、「子供っぽい」は子供に対しては使いません。

また、「ほこり」や「粉」など典型的な状態が想定されない場合には「～らしい」は使いません。

もう少し

◆「～っぽい」には「どうやら明日は雨っぽい。」のように、状況からの判断を表す用法もあります。

3. ～中（ちゅう・じゅう）

- (1) 夏休み中にアルバイトをして稼いでおこう。
- (2) クラスの15人中8人までが風邪で欠席した。
- (3) 昨夜は一晩中寝ないで勉強した。
- (4) その核実験に対しては世界中から非難の声が上がった。

これだけは

◆(1)のような「～中（ちゅう）」は、「今月、休み、不在」など時間や期間を表す語、さらに「仕事、食事、滞在」など一定の時間持続する動作を表す名詞に付いて、その期間のうちであることを示します。

意味的には「～の間（あいだ）」と類似していますが、相互に言い換えることには制限があります。まず文末の「～中だ／です」や「～中だから」が後に来るときは「～の間」で置き換えることはできません。また語彙的にも「食事中、休み中」は「食事の間、休みの間」と言えますが、「工作中、滞在中」などは「～の間」は言いにくくなります。

◆(2)のように数や量を表す語に続く「～中（ちゅう）」は全体数（量）を表します。

- (5) 会議の参加者の100人中70人までが女性だった。

◆「～中（ちゅう）に」は「～中（ちゅう）」としても意味は同じです。

(6) {留守中／留守中に} だれか来なかった？

◆(3)と(4)は「～じゅう」と読み、時間や場所を表すことばに続いて「その間ずっと」や「その場所全体」という意味を表します。

4. ～方（かた）

(1) このCD プレーヤーの使い方を教えてください。

(2) 国が違うと買い物のしかたも変わってくる。

これだけは

<接続> V_{マス} + 方（かた）

◆「～方（かた）」は方法ややり方を表します。

◆「勉強する、買い物する」などのサ変動詞（→§38）は「勉強のしかた、買い物のしかた」のように「の」が間に入ります。

5. （形容詞の語幹）＋さ

(1) 雪山で遭難したが、皆で励まし合って寒さと戦った。

(2) 長さを測る。

これだけは

◆「～さ」は、イ形容詞やナ形容詞、または「～らしい、～っぽい」などイ形容詞型活用の語に後接して程度を表す名詞を作る接尾辞です。

(3) 彼女の優しさに感動した。

- (4) 子供の元気さに親はへとへとになる。
(5) 彼は子供っぽさを残している点が魅力だ。

◆「長さ、広さ、高さ、深さ」などは尺度を表す用法もあります。

- (6) 新しい体育館の建物の高さとコートの広さは日本一だ。

尺度を表す名詞は、普通、大きいほうの形容詞から作ります。

- (7) その山の{○高さ／×低さ}は標高250メートルです。

◆「～さ」は、かなり生産的で、ほとんどのイ形容詞に付き「スポーティーさ」のように外来語語幹のナ形容詞にも付きます（→コラム「生産性」）。

「～さ」が付かないものとしては、「国際的」など「～的」で終わったり「かわいらしげ、おとなしげ」など「～げ」で終わるナ形容詞の他、「心残り、おしゃべり、うそつき」など動詞のマス形語幹を語幹末に含むナ形容詞などがあります。

もう少し

◆「～さ」と似た接尾辞として「～み」がありますが、「～み」が付く形容詞は限られています。また、「～さ」が程度を表すのに対して、「～み」は感覚（「痛みが薄らぐ」など）や場所（「深みにはまる」など）など様々な意味を持つ点で文法的というよりも語彙的です。

6. ～まる・～める

- (1) 風は強まってきたが、雨は少し弱まってきた。
(2) 野生生物に対する{理解が深まる／理解を深める}。

これだけは

<接続> A **語幹** + まる／める

◆イ形容詞の語幹に「～まる・～める」を付けて、「～くなる・～くする」という意味の自動詞と他動詞（→§10）を作ります。「～まる」はⅠ類動詞、「～める」はⅡ類動詞です。

◆すべてのイ形容詞から「～まる・～める」型動詞が作れるわけではありません。以下、リストを示しておきます。

薄い	薄まる・薄める	固い	固まる・固める
高い	高まる・高める	強い	強まる・強める
早い	早まる・早める	深い	深まる・深める
丸い	丸まる・丸める	弱い	弱まる・弱める
清い	清まる・清める		

「細める」「赤める」は他動詞だけを持ちます。

◆「～くなる」「～くする」は形容詞の表す程度がより甚だしくなる（する）ことを表しますが、「～まる」「～める」は形容詞の表す状態への変化を表します。ただし厳密には区別されない場合もあります。

- (3) 薬剤を注入してコンクリートをより{×固めた／○固くした}。
- (4) もう少し背が{×高まりたい／○高くなりいたい}。
- (5) シャベルカーで穴をもう5メートル{×深めた／○深くした}。
- (6) 冷凍庫の氷が{○固まった／×固くなった}。
- (7) だんご虫は棒でつつくと{○丸まる／○丸くなる}。

「～まる」「～める」は抽象的な意味を持ちやすい傾向があります。

- (8) 彼が会社をやめるといううわさが会社中に{○広まった／×広くなった}。
- (9) 今回の講演で野生生物への関心が{○深まった／？深くなった}。

このページは空白です。

このページは空白です。

あとがき

「これだけ読めば教壇に立てる文法の本がほしい。」「でも、もう少し深く一つの文法現象を知りたい。」日本語を教える者であればだれもが持つこの二つの願いを同時にかなえてくれる本があったら…。そんな思いからこの本を作る話が持ち上がりました。

本書が目指した理念は次の2点です。

- ・初級で教える項目が網羅されており、1冊で、初級を教えるために必要な文法知識をすべて得られる本であること。
- ・文法現象の根底にある原理を日本語文法研究の専門家でない人にもわかりやすく提示してあること。

文法はわかりにくい、取っつきにくいという声をよく耳にします。また日本語教育の文法は小中学校で習った文法と違うので困るとも言われます。

私たち4人は日本語文法の研究を行いながら、日本語教師として教室で教えていますが、日本語文法の研究が進んでいく一方で、その研究成果が日本語を教えるときの問題解決に十分還元されていない現状をどうにかしたいと思っていました。そんな思いから、日本語学と日本語教育の橋渡しとなる1冊にしたいと検討を重ねこの本ができあがりました。

単に一つの項目についての知識を得るだけではなく、なぜそう言うのか、他の項目とどうつながっているのか考えることによって、「日本語ってこういう仕組みになってたんだ。」と1人でも多くの読者の方々が感じてくださることを心から願っております。

最後に監修の労をお取りくださった一橋大学留学生センターの松岡弘先生、原稿を辛抱強くチェックしわかりやすい文章へと導いてくださったスリーエーネットワークの佐野智子さん、草稿に対して様々な立場からご意見をお寄せくださった皆さんに感謝いたします。

2000年4月

著者一同

主要初級教科書との対応表

〈教科書〉

み 人：「みんなの日本語初級Ⅰ・Ⅱ」スリーエーネットワーク編著 スリーエーネットワーク
新 新：「新日本語の基礎Ⅰ・Ⅱ」(財)海外技術者研修協会(AOTS)編 スリーエーネットワーク
学友会：「進学する人のための日本語初級」国際学友会日本語学校編 国際学友会日本語学校
初 歩：「日本語初歩」国際交流基金日本語国際センター編 凡人社
新文化：「新文化初級日本語Ⅰ・Ⅱ」文化外国語専門学校編 凡人社
東外大：「初級日本語」東京外国語大学留学生日本語教育センター編著 凡人社

①教科書の欄の番号は該当する形式を扱っている課を表す。(※はその形式を扱っていないことを表す。)なお、「新文化」に関しては「本文」と「文型」で取り上げられているものの両方を掲載。

②「みん/新」の欄は該当する形式が提出されている課が異なる場合はスラッシュ (/) で区切り、同じ場合は中央に記載。

形式	§	例文	みん/新	学友会	初歩	新文化	東外大
～あいだ	22	夏休みのあいだ、国へ帰っていました。	*	*	34	19	26
～あいだに	22	赤ちゃんか寝ているあいだに、洗濯をしました。	*	*	*	19	26
あげる	11	宿題を手伝ってくれた友達にチョコをあげた。	7	7	29	16・24	8
あそこ	1	あそこに私の会社が見えます。	3	2・19	3	5	2
あちら	1	トイレはあちらです。	3	*	4	19	7
あっち	1	トイレはあっちです。	20	*	*	*	*
～あと	22	終電が出たあと、駅の電気は全て消されます。	*	*	*	16	*
～あとで	22	家に帰ったあとで、熱が出ました。	34	5	*	16	12
あの	1	あの方が私の指導教官です。	2	2	1	3	1
あれ	1	あれが私の大学です。	2	1・19	2	2	1
あんな	1	あんな洋服がほしいです。	26	*	28	23	20
いくつ (個数)	1	箱の中には石がいくつ入っているのですか。	11	4	5	24	6
いくつ (年齢)	1	田中さんはおいくつですか。	1	9	*	*	*

形式	§	例文	みん/新	学友会	初歩	新文化	東外大
いただく	11	先生にこの本をいただきました。	41	*	29	29	22
いつ	1	いつ国へ帰るのですか。	5	7	7	1	4
陰題文	37	「田中さんはどなたですか。」「私が田中です。」	*	*	4	*	*
受身 (直接)	30	次郎は太郎に殴られた。	37	21	31	32	24
受身 (間接)	30	次郎は妻に死なれた。	*	21	31	32	24
受身 (持ち主)	30	見知らぬ男に頭を殴られた。	37	21	31	32	24
～うちに	22	赤ちゃんが寝ているうちに、洗濯をしまおう。	*	*	*	36	*
内の関係の名詞修飾	20	昨日食べたりんごはおいしかったです。	22	11	10	13	13
お～ください	15	ここにお名前をお書きください。	49/*	*	*	16・21	28
同じ	36	ヤンさんと私は同じ国の出身です。	21	13	10	*	4
およそ	41	この山にはおよそ5万本の杉の木があるそうです。	*	*	*	*	*
～終わる・～終える	6	もうすぐ夕食を食べ終わります。	*	*	15	*	*
か (選択的)	3	ボールペンか万年筆で書いて下さい。	34/41	14	9	6	5
普通形+か	29	パーティーに行くか↑。	*	*	*	*	*
が (主語)	2	雨が降っています。	10	7	3	5	7
が (目的語)	2	私は犬が好きだ。	9	4	22	6	14
が (可能構文の目的語の格)	8	田中さんはイタリア語が話せる。	27	14	23	22	16
が (中立叙述)	27	りんごがあります。	10	3	3	5	6・7
が (総記)	27	「だれがコップを割ったんですか。」「私が割ったんです。」	12	7	4	*	7・19
が (従属節)	27	田中さんが来たら、出発します。	16	8	27	13	15
が (名詞修飾節)	27	田中さんが買った本は小説です。	22	11	20	21	13
～が (逆接)	25	勉強したが、不合格だった。	8	11	22	8	9
～が (前置き)	25	お尋ねしますが、駅はどちらですか。	14	15	14	9・17	10
～が (終助詞的)	25	都合が悪いんですが。	21/26	13	*	16	13
～階	41	5階までエレベーターで行きました。	3	2	28	5	6

形式	§	例文	みん/新	学友会	初歩	新文化	東外大
～回	41	外国に3回行ったことがあります。	11	18	8	22	18
(一の中で) ～が一番…… (比較)	18	私は宝石の中でダイヤモンドが一番好きです。	12	9	25	15	18
～か月 (間)	41	日本に来て、5か月経ちました。	11	9	7	8	5
～方 (かた)	42	この機械の使い方がわかりますか。	14	20	30	9	10
～かどうか	19	彼が来るかどうかはわかりません。	40	14	20	20	9
～か～ないか	19	彼が来るか来ないかはわかりません。	*	*	20	*	9
可能形	8	田中さんはイタリア語が話せる。	27	14	23	22	16
～かもしれない	13	田中さんはパーティーに来ないかもしれません。	32	15	28	16	21
から (起点 (時間))	2	彼は朝から晩まで勉強しています。	4	5	7	1	5
から (起点 (場所))	2	家から駅まで自転車です。	4	5	7	8	4
から (材料)	2	ワインはぶどうから作られます。	37	*	20	*	23
から (動作主)	2	電車の中で田中さんから話かけられた。	*	21	29	*	8
から (原因)	2	火の不始末から火事になった。	*	*	*	*	*
から (変化前状態)	2	信号が赤から青に変わった。	*	*	*	*	*
から (判断の根拠)	2	調査結果から考えると、事故の原因は彼の不注意だと思われる。	*	*	*	*	*
から (テモラウ文の動作主)	11	先生から本を貸していただいた。	7	*	29	*	*
から (受身文の動作主)	30	彼女はみんなから愛されている。	*	21	31	*	*
～から (理由)	23	日曜日だから、休みだろう。	9	10	27	13	10
～から (前提情報)	23	すぐ返すから、貸してください。	*	10	27	9	10
～から (終助詞的)	23	すぐ返すから。	*	15	*	*	*
～からだ	28	昨日は大学を休みました。熱があったからです。	*	13	27	13	19
～がる (形容詞+)	39	ヤンさんが帰ってしまったので、弟は寂しがっています。	*	*	30	23	25
聞こえる	8	鐘の音が聞こえます。	27	6	23	31	17
疑問語 (疑問詞) ～か	19	パーティーにどんな人が来るのかわかりません。	40	14	15	20	13
疑問語 (疑問詞) ～ても	25	何があっても、行きます。	25	*	*	35	*

形式	8	例文	みん/新	学友会	初歩	新文化	東外大
疑問詞+か	1	玄関にだれか来ています。	13	3・22	3	7	6
疑問詞+も~ない	1	部屋にはだれもいません。	5	3	3	7	6
くださる	11	先生が本をくださいました。	41	*	29	29	22
Aく／Naに(副詞的用法)	39	壁を赤く塗りました。	44/*	10	9	9	17
AくてBいN(形容詞の並置)	39	クリスマスに赤くて大きい本をもらいました。	16	4	6	7	7
くらい・ぐらい	41	毎日1時間くらいテレビを見ます。	11	5	6	7	5
くれる	11	友達がチョコをくれました。	24	8	29	25	8
~けれども(けれど・けど)(逆接)	25	勉強したけれども、不合格だった。	20/*	*	34	25	26
~けれども(けれど・けど)(前置き)	25	お尋ねしますけれども、駅はどちらですか。	20/*	*	*	25	*
~けれども(けれど・けど)(終助詞的)	25	都合が悪いんですけれども。	33/*	*	*	26	*
謙譲語	32	先生のお荷物をお持ちした。	50	*	33	30	22・28
後置文	34	手紙が来たんです、恋人から。	*	*	33	28	*
ここ	1	ここが私の大学です。	3	2	3	5	2
ゴザイマス体	33	粗茶でございます。	50	*	33	19	*
こちら	1	こちらが田中さんです。	1	*	4	19	*
こっち	1	こっちが友達の田中です。	20	*	*	*	*
~こと(名詞化)	19	田中さんが結婚したことを知っていますか。	18	14	22	16	14
~ことができる	8	イタリア語を話すことができます。	18	14	23	22	16
~ことにする(~こととする)	7	来週の飛行機で国へ帰ることにしました。	*	*	*	31	16
~ことになる(~こととなる)	7	来週国へ帰ることになりました。	*	*	*	31	*
この	1	この電子辞書は便利です。	2	2	1	3	1
これ	1	私の教科書はこれです。	2	1	2	2	1
~ごろ	41	午後7時ごろ東京で地震があったそうです。	13/16	5	9	6	3
こんな	1	こんな帽子がほしかったんです。	26	*	28	23	20
~さ(「深さ」)	39	今年は暑さが厳しかったです。	40/*	*	*	12	11

形式	8	例文	みんな/新	学友会	初歩	新文化	東外大
～歳	41	彼は19歳です。	1	9	7	15	4
さしあげる	11	先生にお土産をさしあげました。	*	*	29	29	22
～させていただく	30	先に帰らせていただきます。	*	*	30	35	*
～冊	41	辞書を1冊買いました。	38/*	4	5	22	6
～し(並立)	21	今年の夏休みは山にも行ったり、海にも行ったり。	28	17	22	13	18
使役	30	コーチは選手を走らせた。	48	22	30	34	27
使役受身	30	コーチにグラウンドを走らされた。	*	22	31	36	*
しかし	25	この店のカレーは少し高い。しかし、とてもおいしい。	19/40	2	8	18	5
～しか～ない	26	彼の本棚にはマンガしか並んでいなかった。	27	14	5	28	15
～時間	41	きのう3時間勉強しました。	11	5	9	8	5
自他の対応	10	窓が割れました。／田中さんが窓を割りました。	30	12	18	26	17
(既に)～していた	5	私が来たとき、彼は既に寝ていた。	*	20	*	35	*
指定文	37	委員長は吉田先生です。	3	*	24	*	1
～(し)に	23	野菜を買いにスーパーへ行った。	13	7	11	11	10
～中	42	昨日は一日中勉強しました。	37/*	15	10	17	7
～週間	41	1週間ハワイにいました。	11	9	7	8	5
省略	34	「だれがコップを割ったんですか。」「私です。」	5	5	3	6	*
～ず	21	太郎は合格せず、次郎が合格した。	*	*	*	*	*
～すぎだ	31	君は少し飲みすぎだよ。	*	18	*	*	*
～すぎる	31	今日は少し飲み過ぎました。	44	18	20	15	24
～ずに	21	今日はお風呂に入らずに寝ます。	*	*	23	*	20
Aくする	7	テレビのボリュームを大きくした。	44	19	14	31	15
Naにする	7	部屋をきれいにした。	44	19	9	31	15
Nにする	7	田中さんは息子さんを医者にした。	44	*	9	30	15
すると	24	部屋をノックした。すると、中から女の人の声が出た。	*	*	31	*	*

形式	§	例文	みん/新	学友会	初歩	新文化	東外大
普通形↑	29	パーティーに行く↑。	20	*	34	25	28
～そうだ (外観) (そうだ1)	13	このケーキはおいしいそうだ。	43	17	20	23	23
～そうだ (兆候) (そうだ1)	13	雨が降りそうだ。	43	17	20	23	23
～そうだ (伝聞) (そうだ2)	13	彼は来ないそうだ。	47	15	21	17	26
～そうもない	13	雨は降りそうありません。	*	17	*	23・35	*
そこ	1	そこで車を止めてください。	3	2・6	3	9	2
そして	22	田中さんはアメリカに行きました。そして、元気に働いています。	8	5	13	14	2
そちら	1	こちらはみな元気です。そちらはいかがですか。	3	*	4	16	*
そっち	1	こっちはみんな元気だ。そっちはどう。	20	*	*	*	*
外の関係の名詞修飾	20	りんごを食べた理由を教えてください。	22	17	10	*	13
その	1	その本はおもしろいですよ。	2	2・6	1	3	1
そのために	23	私は来年留学する予定です。そのために英語の勉強をしています。	*	*	*	18	*
それ	1	それをとってください。	2	1・6	2	2	1
それから	22	明日は6時に起きます。それから食事をして7時に出かけます。	6	5	13	7	5
それで	23	昨日は雪が降りました。それで道が滑りやすくなっています。	28	*	13	30	17
(それ)では・(それ)じゃ	24	「明日旅行に行くんです。」「それじゃ、会議は欠席ですね。」	3	7	6	31	21
(それ)なのに	25	彼は本当のことを知っているはずだ。それなのに、何も話さない。	*	*	*	*	25
それなら	24	「買物に行ってくるよ。」「それなら、しょうゆを買ってきて。」	35/*	20	*	*	21
それに	21	彼はお金持ちだ。それにとっても親切だ。	28	9	*	13	18
尊敬語	32	田中先生はたくさんのお本をお書きになっています。	49	*	33	12・30	28
そんな	1	そんな本は読まないほうがいいですよ。	26	*	28	23	20
～たい	14	あのコンピュータを買いきたい。	13	13	19	11	14
～台	41	タクシーを1台呼びました。	11	4	5	*	6
大体	41	今日の会議には大体500人くらいの人が参加しました。	9	*	23	15	12
対立型	1	「これは田中さんの本ですか。」「はい、それは私の本です。」	2	1	1	2	1

形式	§	例文	みん/新	学友会	初歩	新文化	東外大
だから	23	今日は忙しかった。だから、昼食を食べられなかった。	*	*	*	*	10
～たがる	14	弟はカレーを食べたがっている。	*	*	22	23	25
だけ	26	今年は英語だけ勉強するつもりです。	11	13	27	7	6
タ形 (過去)	5	昨日雨が降りました。	4	6	6	7	3
タ形 (完了)	5	今日は昼ごはんをもう食べました。	7	12	9	11	7
タ形 (主節時以前)	5	パリへ行ったとき、かばんを買いました。	23	15	15	28	15
タ形 (名詞修飾テイル相当)	20	私はやせた女の人が好きだ。	*	*	17	*	23
だけど	25	今日は忙しかった。だけど、夕食は自分で作って食べた。	*	*	*	*	*
～たことがある	5	私はアメリカに行ったことがあります。	19	13	25	22	19
～たことがない	5	私は大きな病気にかったことがありません。	19	13	25	22	19
～だす	6	家に帰る途中で、急に雨が降り出した。	*	*	*	*	*
ダ体	33	彼は商社マンだ。	20	*	34	12	*
～たところだ	6	今、家に帰ったところだ。	46	*	*	29	25
～たほうがいい	16	早く家に帰った方がいいよ。	32	19	24	21	18
～たまま	21	昨夜は背広を着たまま寝てしまった。	*	*	*	27	24
～ために (原因)	23	雨が降ったため、遅れた。	*	*	*	*	*
～ために (目的)	23	旅行するために、貯金する。	42	17	30	33	20
～ために (利益)	23	子供のために、貯金する。	42	13	29	33	20
～たら (仮定条件)	24	雨が降ったら、行きません。	25	19	32	*	16
～たら (確定条件・時間)	24	1時になったら、行きましょう。	25	19	32	31	21
～たら (事実的条件)	24	窓を開けたら、風が入ってきた。	*	20	32	32	*
～たり～たり	21	昨日はピアノを弾いたり、歌を歌ったりして、楽しみました。	19	14	32	14	12
だれ	1	だれがこの本を書いたのですか。	1	1・7	1	2	1
だらう (でしよう) (非断定)	13	売店はたぶん休みだらう。	32	11	10	17	9
だらう (でしよう) (確認)	13	君は田中くんだらう↑。	21	12	32	*	17

形式	§	例文	みんな/新	学友会	初歩	新文化	東外大
～だろうと思う	13	彼は来ないだろうと思います。	*	11	28	17	*
～つつある	6	池の水が涸れつつあります。	*	*	*	*	*
～続ける	6	ベルが鳴り続けています。	*	*	*	*	*
～っぽい	42	彼には少し子供っぽいところがあります。	*	*	*	*	*
～つもりだ	14	来年、イギリスに留学するつもりです。	31	15	19	20	20
～て (依頼)	15	お願い、窓を開けて。	20	*	*	25	*
～て (付帯状況)	21	横断歩道を渡るときは手を上げて渡りましょう。	34	15	13	*	20
～て (並立・対比)	21	この部屋は広くて、新しい。	16	4	6	7	7
～て (手段)	21	この人形は紙を使って作るのです。	34	*	9	10	20
～て (継起・時間)	21	今日は家に帰って寝ます。	16	8	13	9	11
～て (原因)	21	昨日は寝坊して遅刻しました。	39	20	13	27	24
で (場所)	2	図書館で勉強します。	6	6	6	6	3
で (手段・道具)	2	パソコンで書類を作っています。	5	8	9	7・12	5
で (材料)	2	紙で人形を作りました。	37/*	*	20	*	23
で (原因・理由)	2	大雪で電車が止まりました。	39	20	21	*	24
で (まとまり)	2	今日の夕食は一人で食べます。	5	13	6	11	8
で (内容)	2	進学のこととで田中さんに相談しました。	*	*	*	*	21
で (範囲)	2	1日で仕事を終えました。	32/27	14	10	*	16
～てあげる	11	友達に本を貸してあげました。	24	20	29	28	22
～てある (結果の残存)	6	窓が開けてある。	30	12	18	32	22
～てある (効果の継続)	6	試験のためにたくさん勉強してある。	30/*	*	*	36	*
デアル体	33	彼は商社マンである。	*	*	*	*	*
～ていい	16	今日は帰っていいですよ。	*	*	*	*	17
～ていく (空間)	12	飛行機が飛んでいった。	*	*	*	10	11
～ていく (時間)	12	この本はこれからも読まれていくだろう。	*	*	*	*	25

形式	8	例文	みん/新	学友会	初歩	新文化	東外大
～ていただく	11	先生に本を貸していただいた。	41	*	29	29	22
丁寧語	32	私は田中と申します。	50	*	33	22・30	28
～ていない (未完了)	5	今日は昼ごはんをまだ食べていません。	31	12	23	11	15
丁寧語	32	この絵はきれいです。	50	*	1	1	1
～ている (動作の継続)	6	田中さんがレストランで食事をしている。	14	8	16	10	*
～ている (結果の残存)	6	窓ガラスが割れている。	29	12	17	27	22
～ている (移動動詞)	6	田中さんはアメリカに行っている。	*	*	17	*	13
～ている (習慣)	6	私は毎朝6時に起きている。	28	8	16	*	15
～ているところだ	6	田中さんは部屋で仕事をしているところだ。	46	*	*	33	25
～ておく	6	試験のためにたくさん勉強しておきます。	30	16	32	27	22
～てから	22	歯をみがいてから寝ます。	16	8	13	11	11
できる	8	この部屋で勉強できますよ。	18	14	23	22	16
～てください	15	ここに名前を書いてください。	14	10	9	9	10
～てくださいる	11	先生が本を貸してくださいました。	41	*	29	29	22
～てくる (空間)	12	子供が走ってきます。	*	*	*	16	17
～てくる (時間)	12	子供が減ってきました。	*	*	*	18	25
～てくれ	15	鉛筆を貸してくれ。	*/33	*	*	*	*
～てくれる	11	友達が本を貸してくれました。	24	20	29	28	22
～てさしあげる	11	先生に本を貸してさしあげた。	*	*	*	*	22
～てしまう (完了)	5	彼はこの宿題を昨日までにやっしまいました。	29/*	11	20	35	24
～てしまう (後悔)	5	お皿を割ってしまいました。	29	11	31	19	24
デス・マス体	33	彼は商社マンです。	1	1	1	1	1
～ですか・～ますか	29	パーティーに行きますか。	1	1・3	1	1	1
～てはいけない	16	この部屋に入ってはいけません。	15/*	16	26	9	14
～てほしい	14	この手紙を読んでほしいんです。	*	*	*	*	*

形式	§	例文	みん/新	学友会	初歩	新文化	東外大
～てみる	6	彼女に電話をかけてみます。	40	15	20	19	14
～ても (仮定的)	25	雨が降っても、行きます。	25	18	32	26	21
でも	25	「明日から旅行に行きます。」「でも、明日会議がありますよ。」	12	11	32	7	12
～てもいい	16	このペンを使ってもいいですか。	15	16	26	9	14
～でもらう	11	友達に本を貸してもらった。	24	20	29	28	22
～てやる	11	子供におかしを買ってやった。	41	*	*	*	22
と (共同動作の相手)	2	田中と映画を見る。	5	6	11	11	8
と (動作の相手)	2	田中さんと結婚する。	14	15	12	11	8
と (異同の対象)	2	本物と似ている。	21	13	10	17	8
と (並列)	3	パスタとピザを食べる。	4/6	3	3	1	1
と (引用)	9	彼は「パーティーには行かない。」と言っています。	21	10	15	13	12
～と (一般条件・反復条件)	24	春になると、桜が咲きます。	23	18	26	12	19
～と (事実的条件)	24	窓を開けると、風が入ってきた。	*	*	31	*	*
～と (動作の継起・時間)	24	彼は入ってくると、いすに座った。	*	*	*	*	*
～といい	16	寒かったら、このマフラーをするといいよ。	*	*	*	28	*
という	20	おかげが出るといううわさを聞きました。	38/*	17	*	*	13
～と(いっしょに)	2	私は田中さんたちといっしょにハイキングに行った。	*	6	11	11	8
どう	1	彼の意見についてどう思いますか。	8	4	8	8	5
どうして	1	昨日はどうして休んだんですか。	9	13	27	13	10
～と思う (非断定)	13	彼は来ないだろうと思います。	21	7	25	13	12
～とき	22	暇なとき、また遊びに来てください。	23	15	31	28	8
～ときに	22	今度来るときに、このかきをお返しします。	38/*	*	15	*	*
～とき(に)は	22	寂しいときはいつでも来てください。	38/*	*	15	13	*
どこ	1	田中さんはどこに住んでいるんですか。	3	2	3	5	2
ところが	25	彼は来ないと思うでしょう。ところが、来るそうなんですよ。	*	*	31	*	*

形式	§	例文	みんな/新	学友会	初歩	新文化	東外大
～ところだ (辞書形)	6	これから出かけるところです。	46	*	*	35	25
～ところだった	6	もう少してコップを割るところだった。	*	*	*	*	*
どちら (方向)	1	駅はどちらですか。	3	*	4	30	7
どちら (選択)	1	犬と猫とではどちらが好きですか。	12	17	25	15	18
どっち (方向)	1	駅はどっちですか。	20	*	*	*	*
どっち (選択)	1	犬と猫とではどっちが好き？	20	*	*	*	*
どなた	1	田中さんはどなたですか。	1	1	1	*	1
どの	1	田中さんはどの方ですか。	16	3	1	13	1
どれ	1	田中さんの傘はどれですか。	8	3	2	3	1
どんな	1	田中さんはどんな料理が好きですか。	8	6	8	6	2
～な	15	そのいすに座るな。	33	*	*	*	*
～ないか (～ませんか) (勧誘)	15	いっしょに映画に行かないか。	6	13	26	17	19
～ないで	21	田中さんが来ないで、佐藤さんが来ました。	34	15	*	21	20
～ないでください	15	ここではタバコを吸わないでください。	17	10	14	16	10
～ないほうがいい	16	今日は出かないほうがいいよ。	32	19	*	21	18
～ながら	21	息子はテレビを見ながらごはんを食べます。	28	11	23	18	19
～なく	21	先日はゆっくりお話しする時間がなく、失礼しました。	*	*	*	*	*
～なくて	21	お金がなくてあの本が買えなかった。	39	20	*	34	24
～なくてもいい	16	この本は読まなくてもいいです。	17	16	*	21	15
～なければいけないetc.	16	今日の午後、銀行へ行かなければならない。	17	16	*	20	15
～なさい	15	ここに座りなさい。	*	15	30	*	14
～なさそうだ	13	彼はパーティーに来なさそうだ。	*	17	21	23	23
なぜ	1	田中さんはなぜ来ないのですか。	42/*	*	*	*	19
など (例示的並列)	3	パスタやピザなどを食べる。	10/*	3	3	5	5
何	1	田中さんは何を食べますか。	2	1・3	3	2	3

形式	§	例文	みんな/新	学友会	初歩	新文化	東外大
～なら (相手の発言・意向を受ける)	24	「もう帰ります。」「君が帰るのなら、僕も帰ります。」	35	19	32	31	21
～なら (仮定条件)	24	「もし君が帰るのなら、僕も帰ります」	35	19	32	*	*
Aくなる	7	お酒を飲むと、すぐに顔が赤くなります。	19	10	9	12	7
Naになる	7	洋子さんはきれいになりました。	19	10	9	12	7
Nになる	7	娘が大学生になりました。	19	10	9	12	7
に (存在場所)	2	図書館に新聞がある。	10	3	3	5	6
に (時間)	2	今日は5時に起きた。	4	5	7	6	3
に (対象)	2	電車の中で隣の人に話しかけた。	7	10	12	13	8
に (割合の分母)	2	3日に一度デパートに行く。	11/37	*	8	22	18
に (出どころ)	2	父にこの本をもらった。	7	*	29	24	8
に (受け手)	2	妹に本をあげた。	7	7	12	24	8
に (到着点)	2	来年イタリアに行く。	13	5	13	10	13
に (動作の目的)	2	ハンバーガーを食べに行った。	13	7	12	11	10
に (知覚の範囲)	2	海が遠くに見える。	35/*	*	*	*	*
に (受益者)	11	子供にお菓子を買ってやった。	24	20	29	28	8
に (テモラウ文の動作主)	11	先生に本を貸していただく。	24	20	29	28	22
に (受身文の動作主)	30	次郎は太郎に殴られた。	37	21	31	32	24
に (使役文の動作主)	30	選手に練習させた。	48	22	30	34	27
に (は) (可能構文の動作主の格)	8	私にはこの本は読めない。	*	*	*	30	*
～に (は) …がある / いる (存在)	4	机の上に本があります。	10	3	3	5	6
～にくい	31	この本は読みにくい。	44	*	*	13	*
～にちがいない	13	田中さんはまだ寝ているにちがいない。	*	*	*	*	*
～日間	41	20日間この学校の集中コースで勉強しました。	48/*	9	*	8	5
～には…がある (所有)	4	田中さんには才能があります。	*	*	*	*	*
～には…がいる (所有)	4	私には妹がいます。	*	*	*	*	*

形式	8	例文	みんな/新	学友会	初歩	新文化	東外大
によって (受身文の動作主)	30	電球はエジソンによって発明された。	37/*	*	*	*	*
～人	41	家族は4人です。	11	4	5	11	6
ね	17	「毎日暑いですね。」「そうですね。」	4	2	6	5	3
～年(間)	41	日本語を1年間勉強しました。	11	9	7	8	5
の (所有)	3	先生のかばんをお持ちしました。	2	1	2	2	1
の (内容説明)	3	私は歴史の本が好きです。	2/3	1	1	9	1
の (位置基準)	3	私の会社は銀行の隣にあります。	10	3	3	5	6
の (作成者)	3	私はゴッホの絵が好きです。	*	*	*	14	*
の (同格)	3	まもなく課長の大谷が参ります。	*	9	*	9	27
の (格助詞の後ろ (名詞句内))	3	大阪への旅行は楽しかったです。	*	*	*	13	*
の (体言相当)	3	この服は彼のだ。	2	1	6	2	3
の (名詞修飾節の主語)	20	雨の降る日は運転が難しい。	*	11	20	*	13
～の (名詞化)	19	星が光っているのが見えます。	38	15	22	11	23
～の↑	29	パーティーに行くの。↑	*	*	*	25	28
～のか	29	パーティーに行くのか。	*	*	*	*	*
～のだ (理由)	28	「どうして学校を休んだんですか。」「熱があったんです。」	26	13	24	16	18
～のだ (解釈)	28	道がぬれている。ゆうべ雨が降ったんだ。	*	*	*	*	*
～のだ (帰結・言いかけ)	28	彼は漢字を約2千字知っている。新聞を辞書なしで読めるのだ。	*	*	*	*	*
～のだ (発見)	28	この傘はこんなところにあったんだ。	*	*	31	*	*
～のために	11	子供のために歌を歌う。	42	*	29	*	20
～ので (理由)	23	忙しいので、帰ります。	39	17	27	14	17
～ので (前提情報)	23	すぐ返しますので、貸してください。	49/*	*	*	22	*
～ので (終助詞的)	23	すぐ返しますので。	*	*	*	35	*
～のですか	29	パーティーに行くのですか。	26	13	27	16	18
～のところ	37	授業が終わったら、私のところに来てください。	46/*	*	11	19	8

形式	§	例文	みんな/新	学友会	初歩	新文化	東外大
～のに (目的)	23	この道具はかにを食べるのに使います。	42	*	20	*	23
～のに (事実的)	25	雨が降っていたのに、行きました。	45	20	27	32	25
～のに (終助詞的)	25	今日は日曜日なのに。	*	*	33	*	*
～のは…だ (強調構文)	31	このパソコンを買ったのは秋葉原です。	38/*	16	*	34	19
～のほうが…より (比較)	18	この本の方があの本よりおもしろい。	12	17	25	15	18
は (主題)	27	私の家は狭い。	1	1	1	1	1
は (対比)	27	私はりんごは好きです。	27	5	22	8	9
～は (否定)	27	彼は学生ではありません。	1	1	1	2	1
～ば (一般条件・仮定条件)	24	雨が降れば、行きます。	35	19	32	22	21
～ば (反事実的条件)	24	もっとお金があれば、買えるのに。	*	*	32	*	*
～杯	41	水を3杯も飲みました。	40	4	6	*	6
～は…がある (所有)	4	田中さんは体重が90kgあります。	9	*	24	*	18
～は…にある/いる	4	その本はここにあります。	10	3	3	5	6
～は…より (比較)	18	この本はあの本よりおもしろい。	12	17	25	15	18
～は…をしている (所有)	4	彼女はきれいな目をしている。	*	18	*	*	*
ハ－ガ構文	31	象は鼻が長いです。	16	9	24	15	18
ハ－ガ構文 (主題化)	31	この小説は私の友達を書きました。	*	*	*	33	*
ばかり (とりたて助詞)	26	彼は酒ばかり飲んでいます。	*	*	28	34	25
ばかり	41	急いでいたので3分ばかり話ただけで失礼しました。	*	*	*	*	*
～始める	6	私たちは6時ごろに夕食を食べ始めた。	*	*	*	*	*
～はずだ	13	田中さんはまだ寝ているはずだ。	46/*	*	*	19	27
～は…にある/いる (存在)	4	教室に太郎がいます。/机の上に本があります。	10	3	3	5	6
～は…を持っている (所有)	4	田中さんは車を持っています。	15	12	17	*	13
美化語	32	お菓子を食べた。	3/1	*	33	5	3
～匹	41	犬を1匹飼っています。	*	4	5	*	6

形式	8	例文	みん/新	学友会	初歩	新文化	東外大
～秒 (間)	41	このボタンを押したのに、30秒間くらい動きませんでした。	*	5	9	*	5
～分 (間)	41	このラーメンはお湯を入れて3分待てば、すぐ食べられます。	11	5	9	1	*
へ (到着点)	2	京都へ5時に着く。	*	5	*	*	11
へ (方向)	2	これから大阪へ向かいます。	5	*	7	6	4
ほしい	14	もう少し時間がほしい。	13	13	22	23	14
ほど	41	食事のあと1時間はど本を読みました。	30/*	*	*	*	27
～本	41	ジュースを1本飲みました。	40	4	5	*	6
～枚	41	切手を1枚買いました。	11	4	5	17	6
～まえ	22	日本に来る前、私は大学で教えていました。	*	*	*	*	*
～まえに	22	明日ここに来る前に、この本を読んでおいてください。	18	5・8	13	16	11
まだ	5	田中さんはまだ帰っていません。	7	12	9	11	7
まで (着点 (時間))	2	母は朝から晩まで働いています。	4	5	7	1	5
～まで (時)	22	田中さんは5時までで会社にあります。	4	5	*	16	5
～までに	22	田中さんは5時まででここに来ると思います。	17	*	*	9	26
～まま	21	昨日はスーツを着たままま寝てしまった。	*	*	*	27	24
見える	8	ここから富士山が見える。	27	6	23	31	17
～みたいだ (状況からの判断)	13	彼はいいみたいだ。	*	*	*	32	*
～みたいだ (比喩)	13	この部屋はまるでホテルみたいだ。	*	*	*	31	*
命令形	15	ここに座れ。	33	*	30	*	*
も (並列)	26	田中さんも来ました。山田さんも来ました。	1	1	1	2	1
も (意外)	26	にんじんの嫌いな田中さんもこのにんじんケーキは食べます。	*	*	*	*	*
も (数量)	26	そのコンサートには客が1万人も来ました。	42/*	18	*	18	15
もう	5	もう昼食を食べた。	7	12	9	11	7
もう	11	友達にチョコレートもらった。	7	7	29	24	8
や (並列)	3	パスタやピザを食べる。	10	3	3	5	5

形式	§	例文	みんな/新	学友会	初歩	新文化	東外大
約	41	約5センチ髪を切りました。	*	*	*	8	21
～やすい (容易)	31	この本は読みやすいです。	44	*	25	13	*
～やすい (頻度)	31	地震の時は火事が起きやすいです。	44	*	*	*	*
～やむ	6	サイレンはすぐ鳴りやんだ。	*	*	*	*	*
やる	11	ことにお菓子をやりました。	41	18	12	14	22
融合型	1	あれが私の辞書です。	2	1	*	2	*
よ	17	ハンカチを落としましたよ。	5	3	26	5	10
～(よ)う (意志)	14	今すぐ出かけよう。	31	13	19	20	20
～(よ)う (～ましよう) (勧誘)	15	映画を見に行こう。	6	*	26	15	4
～(よ)うか (～ましようか) (勧誘)	15	映画を見に行こうか。	31	*	26	9	11
～ようだ (状況からの判断)	13	彼はいいようだ。	47	*	28	32	25
～ようだ (比喩)	13	この部屋はまるでホテルのようだ。	*	18	24	31	23
～ように思う	15	これから出かけようと思います。	31	15	19	20	20
～(よ)うとする	14	赤ちゃんは何でも口に入れようとする。	*	*	31	*	*
～ように (目的)	23	よく見えるように、大きく書く。	36	*	*	27	22
～ように言う (命令)	9	先生が先生のお部屋に来るようにおっしゃいました。	*	21	*	*	26
～ように言う (婉曲)	9	彼は週末は家族で旅行に行くように言っていました。	*	*	*	*	*
～ように思う	9	彼は本当のことを言っていないように思う。	*	*	*	*	*
～ようにする (働きかけ)	7	部屋を片づけて、パーティーができるようにしました。	*	*	*	*	*
～ようにする (習慣)	7	毎朝6時に起きるようにしています。	36/*	*	*	29	*
～ようにする (努力)	7	今度の会議にはできるだけ出席するようにします。	*	*	*	29	*
～ようになる	7	このごろ朝早く起きるようになった。	36	14	23	24	16
よね	17	先週いつしよに食事をしましたよね。	*	*	*	*	*
より (比較の対象)	2	大阪は名古屋より大きい。	12	17	25	15	18
～らしい (状況からの判断・伝聞)	13	彼は来ないらしい。	*	21	28	*	28

形式	8	例文	みん/新	学友会	初歩	新文化	東外大
～らしい (接尾辞)	42	この宝石は本物らしい。	*	*	*	*	*
ル形 (現在)	5	今日は天気がいいです。	1	5	1	5	2
ル形 (未来)	5	明日は雨が降ります。	4	5	7	7	3
ル形 (習慣)	5	私は毎日6時に起きます。	4	5	7	6	3
ル形 (主節時以後)	5	パリへ行くと、かばんを買いました。	23/*	15	15	28	15
を (目的語)	2	昨日、田中を殴った。	6	5	6	6	3
を (通過する場所)	2	昨日、きれいな橋を渡った。	13	9	26	*	17
を (経過する時間)	2	ハワイで夏休みを過ごすつもりです。	31/45	*	*	*	*
を (離れる対象)	2	大学の前でバスを降りました。	13	5	12	10	11
を (動作の方向)	2	下を向いてはいけません。	*	*	*	*	14
を (使役文の動作主)	30	練習のとき、選手を走らせています。	48	22	30	34	27

*なお、表を作成するにあたって以下の機関および先生方に御協力をいただきました。(敬称略・50音順)

国際学友会日本語学校 山田浩三
 国際交流基金日本語国際センター
 東京外国語大学留学生日本語教育センター 伊丹千恵
 文化外国語専門学校 国頭美紀、廣田周子、西村学

事項索引

凡例 ○○＜△・□＞：○○△、○○□という形式を含む

例 意外＜さ・感＞：「意外さ」「意外感」を含む

○○（△・□）：○○、○○△、○○□という形式を含む

例 使役（的・文）：「使役」「使役的」「使役文」を含む

あ

相手 18, 21

アスペクト 40, 51, **54**, 56, 66－70, 121,
185, 207, 209, 368, 370

与え手 106－108

改まったく会話・話しことば・文体＞
129, 315, 321, 330, 332, 336, 356, 393

暗示 241, 244, 245, 250

い

言い換え **273**

言い切り・る＞ 122, 123, 175, 212

イ音便 **350**

意外＜さ・感＞ 234, 236, 237, 245

意外の「も」 245, 246, 250

イ形容詞 340, **343**, 347, 349, 353, 354, **371**,
377, 383, 399－401

意向 149, 151, 152, 160

意向形 47, 90－92, 108, 136, 137, 142, 151,
279, 296, 346, 351, 369

意志（文） **136**, 137, 139, 142, 143, 151－
153

意志的 73, 75, 96, 112, 128, 214, 215, 216,
217, 300, 310, 312, 364, 369

意志的自動詞 **96**, 104

意志動詞 47, 61, 75, 136, **369**, 370

依存関係 220－222, 224, 225

一段動詞 85, 341, 352

一人称 91, 93, 362

I 類（動詞） 80, 279, 293, 294, 302, 315,
341, 350, 351, 401

一回的 57, 78, 201, 205, 224

一項動詞 **365**, 366

一致 252, 253, 255

一般論 156－158, 161

一方的 25

移動 22, 24, 25, 46, 56, 107, 114, 116－119,
121, 215, 360, 367

移動動詞 26, 60, 61

依頼（文） 91, 95, 112, 115, 141, 146, 148－
150, 152, 153, 166, 167, 175

因果関係 78, **202**, 203

陰題文 **263**, 266, 363

引用 **90**, 91, 92, 94, 95, 131, 141, 147, 149,
180, 326

引用節 90, 92

う

ヴォイス **292**, 302, 303

受け手 19, 21, 103, 106 – 108, 111, 112,
120, 317, 318, 365

受身(的) 19, 86 – 89, 104, 112, **292**, 295,
296, 299, 303, 369, 370

受身形 83, **293**, 296, 303, 346, 350, 351

受身文 63, 74, 88, 102, 103, 105, 114, 121,
294, 295 – 300, 302, 303, 365

有情名詞 34, 359

ウチ 107, **321**, 322

内の関係の名詞修飾 182, **183**, 184 – 186

埋め込み表現 **176**, 177, 179, 180

運用 89, 321, 323

え

影響 18, 97, 103, 295

婉曲<的・表現> 95, 197, 393

遠心的方向性 **116**, 367

お

応答(詞) 260, 290, 334, **347**

恩恵 111 – 113, 115, 323

音便(形) **350**, 351

か

係助詞 250, 346

外観 122, **128**, 133, 134

開始 54, 60 – 62, 70

解釈 **271**, 272

概数<的・表現> 13, 386, 392 – 394

解説 **254**, 261, 262

階層性 269

外来語 371, 400

会話 164, 209, 218

ガ格 17 – 19, 22, 34, 82, 83, 86, 185, 242,
252, 253, 260, 269, 331, 336, 373, 377,
390

係助詞 250, 346

書きことば 324, **326**, 327, 328, 332, 334,
356, 393

格(関係) **17**, 18, 26

格助詞 **16**, 17, 20, 22, 23, 26, **345**, 346

確信 122, **126**, 127, 165, 275, 276, 380

確定条件 **224**

確認 **165**

影 250

過去 **41**, 42 – 44, 46, 51, 57, 66, 68, 200

下降イントネーション 289

学校文法 85, 340, 341, 343, 344, 346, **347**,
349 – 351

活用 279, 293, 340 – 345, **349**, **350**, 371, 397

活用形 279, 325, 343, 344, 346, **351**, 352,
383

活用語尾 **350**, 351

過程 58, 60, 61, 69

仮定(的) 230, 231, 380

仮定条件 **222**, 224

仮定的な逆接 **231**
可能(表現) **80**, 81 – 83, 85 – 89
可能形 18, **80**, 81 – 87, 89, 352
可能構文 82
可能性 81, 86, 87, 122, **125**, 126, 133, 275,
276, 315, 380
可能動詞 85, 352
ガ・ノ交替 **184**, 343
カ変動詞 341
カラ格 17, 19, 24, 113, 114, 185, 269, 297,
332
含意 198, **241**, 245, 246, 249, 250, 257, 277,
286, 311
感覚 188, 400
関係詞 182
完結(的) 43, 48, 67, 68, 206, 207
漢語 316, 317, 320
感情 140, 141, 299, 365, 372, 373, 376
感情形容詞 **372**, 373, 374, 377
間接引用 **92**
間接受身 104, **295**, 296, 299
間接的 142, 148, 149, 152, 161, 252, 295,
323
間接話法 91
感動詞 **347**
願望(文) 115, 136, **139**, 140 – 143, 153 –
155, 175, 303, 374, 380
勧誘(文) 136, 146, **151**, 152 – 154, 166,
167, 175
完了 40, **43**, 44 – 48, 51
関連づけ 233, **270**, 271, 274 – 278, 309

関連づけの「のだ」 178, 270, 271, 273,
274, 276 – 278

き

聞き手 3, 15, 107, 117, 141, 152, 155, 271,
277, 346, 393
希求 369
帰結 217, 218, 225, 226, 228, 272
期限 204, 205, 207
基準時 **43**, 44 – 48, 55, 56, 65, 70, 120
擬人化 113
擬声語 **383**
規則的 109, 110
擬態語 **383**
起点 22, 208, 332
規範(的) 145
基本語順 34, **330**, 331, 332, 336
義務 **156**, 340
疑問(文) 149 – 151, 154, 155, 179, 180,
280, 281, 283 – 290
疑問語疑問文 **5**, 14, 179, 180, 260, 266, **281**,
284, 288, 290, 334 – 336
疑問<詞・語> **2**, 4, 5, 9, 12, 13, 14, 15,
340
逆接 194, **230**, 231, 236, 238, 299
客観的 175, 202, 219
旧情報 **35**, 36, 39, 263, 266, 267, 305, 333
求心の方向性 115, **116**, 367
吸着語 363
強制 146, 148, 301, 302

強調 247, 248, 250, 277, 278, 284, 285, 290,
307 - 309, 312, 333, 336
強調構文 177, 213, **307**, 308, 309
強変化動詞 341
許可 153, 156, **159**, 161, **300**, 302
禁止 146, **147**, 156, **161**, 162, 233, 369, 370

く

くだけたく文体・話しことば> 9, 11, 125,
129, 326, 333, 356

け

敬意 252, 253, 314, 315, 317, 318 - 320
継起(的・関係) **190**, 191, 192, 194, 197,
198, **202**, 203, 221, 298
契機 221, 228
経験・経歴 48, 49, 57
敬語 **314**, 321, 323
繫辞 347
形式名詞 188, 287, **342**, 343, **358**, 363
継続(的) 45, 46, 54 - 57, 59, 63 - 65, 68 -
70, 78, 85, 200, 202, 205, 207, 368
継続動詞 69
形態素 303
形容詞(文) 154, 259, 261, 265, 281, 343,
344, 354, 355, 357, **371**, 372, 375 - 379,
381, 397, 401
形容動詞 340, 344
結果の副詞 384

決心 139
原因 **191**, 192, 193, 298, 299, 375
現在 **41**, 42, 46, 56, 59, 67
謙譲(的) 109, 112, 302
謙譲語 314, **316**, 317 - 323, 396
現象文 **259**, 262, 266
顕題文 **263**, 363
限定(的) 186, **247**, 248
現場指示 **2**, 3

こ

語彙的 207, 400
項 **17**, 26, **364**, 365, 366
効果 64, 65, 70
後悔 47, 158, 247
後件 203, 208, 210 - 214, 217, 218, 220 -
228, 230 - 237, 298, 299
口語体 328
恒常的(属性) 42, 78, 220 - 222, 227, 265
後置文 **332**
肯定<形・文> 75, 155, 197, 243
公的 138
呼応 14, 247, 248, **379**, 380, 381, 384
語幹 341, **350**, 351, 353, 356, 357, 400, 401
語基 396
語順 34 - 36, 38, 39, 256, 327, **330**, 331,
332, 336, 357, 374, 375
個人的 124, 138, 324
コソアド **2**, 4, 15, 340, **347**
五段動詞 85, 341, 352

ことがらの原因 210, **211**, 212, 214
ことがらの前後関係 225
コピュラ 347
個別的 61
固有名詞 35, 92, 306, **342**, 360 – 362

さ

最低条件 223, 227
材料 20, 21, 31, 374
先触れ 384
作成者 30, 31
サ付き（入れ）ことば 294, 302
サ変動詞 81, 101, 279, 341, 365, 399
三項動詞 **365**
三人称 93, 362
Ⅲ類（動詞） 81, 279, 293, 294, 315, **341**

し

子音語幹動詞 341
使役（的・文） 19, 103, 105, **292**, 299, **300**,
301, 303, 370
使役受身（形） 292, **294**, 301
使役形 102 – 105, 292, **293**, 294, 300, 346,
351
時間 21, 40, 46, 50, 52, 54, 55, 58, 59, 202,
205, 208
時間的前後関係 41, 50 – 52, 68, 203
思考 91, 93 – 95, 127, 188, 332
指示詞 2, 3 – 5, 12, 15, 340, 362

指示対象 381
事実（的） 211, 218, 230, 233, 241, 272, 282,
373
事実に（な）条件 **221**, 222, 224
事実に（な）逆接 **232**, 234
辞書形 62, 70, 158, 202, 225, 250, 279, 341,
343, 349, 352
自他の対応 63, 64, 74, **96**, 102 – 105
実質名詞 **358**
質問文 161, 171
失礼 6, 142, 148, 280, 286, 323, 362
指定辞 346, 353
指定文 362, **363**
視点 **106**, 116, **121**, 303
視点制約 303
視点の原理 52
自動詞 63, 64, 74, 77 – 79, 85, 86, **96**, 97 –
105, 296, 300, 303, 366, 401
品定めの 374
自発（形・構文） **84**, 85, 124, 296, 303
弱変化動詞 341
習慣 42, 45, 56, 57, 61, 75, 76, 139, 151, 200,
220, 311
終結点 60, 62, 207
終止形 349, 352
修飾（語） 37, 171, 327, 340, 342 – 344, 347,
371, 372, 378, 379, 381 – 383
終助詞 90, 91, **164**, 168, 169, 175, 183, 329,
340, **346**
終助詞的（な）用法 **211**, 212, 233, 235, 236

従属節 42, 50－52, 190, 200, 204, 209, 210,
 220, 230, 239, 264, 286, 367, 379
 周辺の(状況) 20, 253
 終了 54, 60－62, 70
 受益者 111
 主観的 124, 127, 219, 374
 縮約形 326
 主語 33－39, 81, 89, 107, 108, 111－115,
 120, 121, 140－142, 191, 239, **252**,
 253－256, 264－267, 294－296, 298,
 299, 301－303, 312, 365, 369, 371－374
 主語廃止論 253, **267**, 312
 授受(表現) **106**, 107, 108, 110, 115, 303,
 322, 370
 主節 42, 50－52, 92, 154, 191, 200, 201,
239, 265, 372
 主体 16, 18, 20, 22, 116, 193, 195, 216, 217,
 221, 222, 315, 316, 318, 365
 主題 35, 36, 177, 179, 183, 191, 201, 239,
 252, 253, **254**, 255－257, 261－267, 269,
 305, 333
 主題化 171, 312, 373, 397
 手段 12, 20, 21, **191**, 192－194, 248
 述語 16
 瞬間動詞 69
 順序 22, 269
 準体助詞 **32**, 335, 346
 状況 20, 83, 125, 216, 234, **270**, 271
 状況可能 **87**
 状況からの判断 122, **129**, 130－132, 380,
 396, 398
 状況設定 36, **332**
 条件(表現・文) 144, 201, 203, 211, **220**,
 221－225, 227－230, 232, 238, 299
 畳語 **383**
 上昇イントネーション 123, 150, 151, 167
 状態(性) 16, 365, 368
 状態動詞 42, **56**, 60, 69, 70, 204, 206, 207,
 296, **368**
 状態の継続 45, 55, 56, 63, 69, 70
 焦点 65, 213, 260, 266, **283**, 284, 285, 307,
 308, 312, 333－336
 譲歩(文) 229, **238**
 情報源 131, 132
 情報量 168
 省略 330, **334**, 336
 助詞 **345**, 354
 助数詞 13, 342, **347**, **386**, 387－390, 393
 女性(的) 147, 151, 168, 289, 329
 所動詞 **104**, 303
 助動詞 325, 340, 346, 349, 351, 352
 所有(物・者) 30, 31, 34, 36, 38, 42, 111,
 253, 262, 295, 316, 331
 所有傾斜 38
 所有者敬語 38
 真偽疑問文 **5**, 14, **281**, 287, **290**
 新情報 **5**, **35**, 36, 39, 259, 260, 262, 263, 266,
 267
 身体部位 295, 296
 親密(感) 165, 166

す

数詞 342, **386**, 387, 388

数量詞 35, 36, 172, 246, **342**, 344, **347**, **386**,
387, 390, 391, 393, 395

スコープ (の「のだ」) 277, 289, 290

勧め 156, **157**, 162, 340

「する」型言語 79

せ

制限的 (用法) **186**, 187

生産性 **27**

生産的 **27**, 371, 400

生産物 31, 111, 297

静的述語 **42**

接辞 27, 358, **396**

接続< 詞・形式・助詞 > 208, 210, 217,
220, 228, 230, 236, 237, **345**, 346, 351,
352

絶対テンス **51**, 52

接頭辞 **396**

接尾辞 132, 388, **396**, 397, 399, 400

前件 203, 208, 211, 212, 217, 220 – 228,
230 – 237, 298

前件に焦点のある条件文 **223**, 227

先行詞 **253**

全体的 26, 207, 305

選択 10, 11, 15, 29, 77

選択疑問文 179

前提 **241**, 245, 246, 250, 259, 260, 266, **283**,
284, 286, 290, 307 – 309, 312, 333 – 336

前提情報 211, 212, 218

線的 67, 207

そ

総記 255, **260**, 263, 265 – 267, 333

想起の「た」 **47**

相互的 376

相対性 (を持つ名詞) 358, 363, 381

相対的 189, 360

相対テンス 50, **51**, 52

相補分布 **279**

促音便 **350**

属性 8, 9, 42, 86, 254, 255, 265, 304, 305,
310, 312, 363, 374, 375, 397

属性形容詞 **372**, 397

側面語 305

素材敬語 **314**, 318, 320

措定文 362, **363**

ソト 107, **321**, 322

外の関係の名詞修飾 182, **183**, 184, 187,
188

尊敬 (形) 86 – 89, 109, 110

尊敬語 13, 38, 150, 314, **315**, 316, 318, 320,
321, 323, 396

存在 34, 35, 56, 262, 331

ぞんざい 147, 149

存在主体 18

存在場所 18, 21, 22, 24

存在文 34, 38, 39, 359

た

対応する能動文 295

待遇(表現) 322

体系(的) 2, 143, 153, 347

第三者 107, 108, 117, 140, 141, 369, 373,
374

対者敬語 314, 318, 320

対象 18, 19 - 21, 23, 24, 26, 81, 114, 119,
121, 364 - 367, 373, 376

対照研究 384

対比(的) 183, 234, 237, 248, 257, 258, 261,
264, 267

代名詞 4, 35, 92, 252, 253, 342, 356, 361,
362, 363

第四種の動詞 69

対立型 3, 4, 15

タ形 40, 42, 43, 47, 50 - 52, 62, 67, 202,
225, 242, 351, 352, 371 - 373, 377

タ体 168, 270, 324, 325 - 327, 329

立場 292

他動詞 23, 63, 64, 70, 74, 96, 97 - 99,
101 - 105, 296, 297, 300, 301, 303, 366,
401

他動性 26, 364, 365

段階的 120

男女差 151, 168, 287, 320, 324, 328, 329

男性(的) 7, 147, 149, 168, 288, 289, 329

断定 122, 123, 175, 346, 380

単文 42, 154, 265

談話 35, 189, 270, 277, 303, 324

ち

知覚 18, 22, 91, 119, 178, 188

着点 18 - 23, 25, 332

忠告 156, 157

中止形 190, 191, 193

抽象的 32, 36, 58, 66, 114, 354, 401

中立受身 294

中立叙述 259, 265, 267

兆候 122, 128

直示性 4

直接<引用・話法> 91, 92

直接受身 96, 104, 294, 295 - 297, 365

直接的 148, 149

直前 62, 70, 137

直感的 127

陳述 384

陳述副詞 378, 379, 384, 385

つ

通過(域) 21, 23, 25, 142, 301

て

デアル体 123, 270, 324, 325, 326, 327, 329

定 35

定義 93

丁寧語 314, 316, **318**
 程度性（を持つ名詞） 171, 172, 258, 379,
 381
 程度副詞 170－172, 174, **344**, 378, **379**,
 381, 382, 385
 丁寧くさ・度＞ 74, 92, 147, 149, 150, 152,
 153, **323**
 丁寧形 92, 177, 283, **352**, 353, 355
 丁寧語 314, **319**, 320
 テイル形 40, 42, 45, 49, **54**, 55－59, 63, 69,
 70, 88, 185, 186, 368, 373
 デ格 17, 20, 24, 25, 117, 185, 269, 391
 出来事を表す動詞 42, 55, 56, 60, 61, 69, 70,
 206, 207, 368
 テ形 149, **190**, 197, 199, 231, 232, 235, 326,
 349－351
 デス・マス体 90, 91, 270, 288, 320, **324**,
 325－329
 出どころ 18, 19, 21, 83, 365
 転換 228
 典型的 253
 テンス **40**, 41, 42, 50－54, 66, 68, 70, 120,
 185
 転成 **347**
 点的 67, 207, 388, 394
 伝聞 122, **131**, 132, 134, 141, 367, 373

と

同意 **165**, 167, 329
 同一主語 203

同格 30, **31**
 統合的 **250**
 動作主 **18**, 63, 70, 79, 81, 102, 103, 105, 214,
 297, 299, 300, 364
 動作・出来事の継続 55, 69
 動作動詞 26, 42, 57, 58, 61, 368, 369
 動作の対象 18, 26, 81
 動作を表す名詞 215, 398
 動詞（文） 154, 258, 265, 282, 288, **341**, 350,
 353, **364**, 365, 367－369
 動詞化 140
 到達点・到着点 19, 21, 22, 24, 46
 動的述語 **42**, 59, 70
 動名詞 341
 ト格 17, 18, 23, 25, 111, 296, 331, 336, 365,
 376
 時の設定 **200**, 201, 209
 時名詞 13, **342**, 344, **359**
 特定（的） 5, 7, 14, 116, 186, 277, 283, 290,
 308, 360, 379, 391
 とりたて助詞 231, **240**, 241－244, 247,
 249, 250, 261, 262, 340, **346**, 383
 取り立てる 241－244, 261

な

ナ形容詞 340, **343**, 344, 347, 353, 358, 363,
 371, 377, 399
 納得 127, 218, 289
 「なる」型言語 79

に

二格 17－20, 22－26, 34, 107, 111－114,
185, 253, 262, 294－297, 300－302, 331,
365, 366, 376

二項動詞 365

Ⅱ類(動詞) 80, 293, 294, 315, 341, 350,
351, 401

任意 166

認識 91

の

能動詞 104, 303

能動文 74, 88, 294, 295, 296, 298－300, 302

能力 18, 80, 81, 83, 85, 87, 296, 376

能力可能 87

「のですか」型疑問文 277

は

ハーガ構文 304, 306, 312

バ形 279, 326, 352

場所 9, 10, 21, 23－25, 34－36, 39, 63, 117,
262, 336

場所性 360, 361

場所名詞 360, 361

はた迷惑の受身 104

働きかけ(る) 73, 75, 83, 146, 148, 151,
152, 154, 301, 323, 365

撥音便 351

発見 221, 228, 259, 265, 273, 274

発言 90－92, 94, 95, 132, 147, 218, 219,
225, 286, 332

発話時 40, 41, 44－46, 48, 50－52, 55, 65,
66, 68, 86, 116

話しことば 324, 326, 327－329

話し手 3, 4, 107, 108, 114－117, 121, 122,
175, 240, 241, 245, 249, 271, 275, 276,
322

話しはじめの文 259, 308

幅のある動作 193

幅のない動作 193

バリエーション 152, 280, 281, 287, 290

反事実的条件 223, 227

判断 135

判断(や意図)の根拠 211, 212, 214

反復的 220, 221

範列的 250

ひ

非意志的自動詞 96, 103－105

比較 21, 22, 170, 172－174

美化語 314, 319, 320, 321

被修飾名詞 185, 186－189, 260

非状態的 368

非制限的 187

非対格性の仮説 104

非対比的 257

非断定 123, 380

必須 19, 93, 164, 165

必須成分 17, 26, 34, 260, 277, 284, 285, 290,
330, 331, 335, 336, **364**
必要 **156**, 162
否定＜形・語・述語・文＞ 155, 246, 258,
265
否定疑問 150
否定形語幹 **350**
ひとまとまり 59, 67, 68
独り言 136, 320
批判的 141, 373
比喩 94, **130**
非用 106
評価 155, 161, 162, 175
表現機能 154, 175
品詞 **340**, 346－348
頻度 56, 381, 382

ふ

不可能 80, 83
不規則 110, 341, 353, 354
複合格助詞 **26**
副詞 123, 125, 126, 130, 242, **344, 378**
副次成分 **26**
副助詞 250, 346
複数 7, 8
複文 154, **239**
付帯状況 190, **191**, 192－195, 298
普通形 40, 90－92, 177, 179, 184, 282, 283,
288, 325, **352**
不定 14, **35**

不特定 299, 328, 391
不必要 **159**
部分的 26, 305
不満 158, 232, 236, 250
プロミネンス 246
文型 **17**
文構造 256
文語体 328
文体(差) 22, 157, 193, 234, 243, 250, 320,
324, 325, 327, 330, 332, 333, 393
文的度合い 191, **239**
文頭 36, 257, 261, 262, 333, 336
文副詞 378, **384**
文法性判断 **144**, 145
文法的 400
文法能力 **144**
文脈指示 **2**, 362

へ

平叙文 155
並立の「も」 244, 245
並列(的) **191**, 192, 193, 196, 198, 199, 264
並列助詞 **28**, 30, 33, 197, **346**
並列節 **239**
へ格 185
変化動詞 **55**, 56, 58, 60, 61, 69, **78**, 102, 120,
205－207, 368

ほ

母音語幹動詞 341
方言差 144, 227, 287
方向 9, 21, 22, 24, 31
方向性 18, 106, 114－116, 121, 366, 367
放任 300
補語 364
(日本語) 母語話者 144, 322
補助動詞 115, 346

ま

マイナス敬語 322
前置き 235, 237, 278
「～(ます)か」型疑問文 282
マス形 349
マス形語幹 347, 350, 400
まものの受身 104

み

未完結(的) 67, 206, 207
未然形 350
未来 41, 42, 56, 59, 67, 120

む

無意志的 61, 70, 75, 142, 217, 310－312, 369
無意志動詞 57, 62, 64, 296, 369, 370

無情名詞 34, 359

無生物主語 24

無題化 267, 305, 306, 312, 331

無題文 49, 256, 262, 263

ムード 277, 289

ムードの「のだ」 277, 289

め

名詞(句・文) 154, 252, 255, 257, 258, 260, 261, 282, 286, 342, 353, 356, 357, 358, 361－363

名詞化 33, 176, 177

名詞修飾(節) 177, 182, 183, 185, 186, 188, 189, 239, 260, 264, 269, 372

名詞+だ 42, 243, 261, 265, 288, 289, 312, 325, 362

命題 175, 250

命令(文) 146, 147, 148, 152－154, 166, 167, 175, 188, 323

命令形 90－92, 110, 147, 149, 153, 183, 279, 349, 369

迷惑 104, 295

迷惑受身 295

目上 112, 142, 321, 323

も

目的 63－65, 70, 214, 215, 216, 218, 219

目的語 19, 145, 304, 312, 365

モダリティ 135, 175, 289, 349, 384

モダリティ表現 90－92, **175**, 188, 274－
276, 309, 342, 346, 380
持ち主の受身 **295**

や

やりもらい 115

ゆ

融合型 3, 4, 15
有題文 **262**, 263
誘導副詞 **344**, **378**, 379－381, **384**
有標 303
ゆれ **144**

よ

様式 21, 117
様態副詞 **344**, **379**, 382, 383, 385
容認 159, 161, 162
予想 230, 232－234, 236, 237, 246

ら

ラ抜きことば **81**, 86, 89, 294

り

利益 148, 150, 152, **214**, 302
略題文 **263**

理由(文) 12, 21, **191**, 198, **210**, 211, 213,
214, 217－219, **271**, 272, 277, 282, 286,
309, 312

流動的 137

量 246, 249, 382, 388, 391, 398

る

ル形 **40**, 42, 50－52, 56, 88, 137, 139, 242

れ

連続<的・性> 20, 162, 203, 217, 228, 229,
246, 294, 347, 375

連体形 349

連体詞 **347**, 355

連文 217

連用形 349, 350

ろ

論理的 127, 133

論理文 238

わ

和語 316, 320

話題 171, 228, 235, 305

話題の人物 314, 318, 320, 322

を

ヲ格 17, 18, 20－26, 83, 96, 141, 242, 269,
294－296, 300, 301, 331, 336, 365, 366,
390

plain form **352**

WH疑問文 **5, 281**

Yes－No疑問文 **5, 281**, 290

形式索引

あ

あいだ

～あいだ 204, 205

～あいだに 204－206

あいつ 7

あげる 19, 106－110, 367

あそこ 9, 10

あちら 7, 9, 10

あっち 7, 9

あと

～あと 201

～あとで 201－204

あの 6－8

あれ 6, 7, 362

あれら 7

あんな 8, 9

い

いいえ 14, 281, 282, 284, 287, 290

いくつ 13

意向形（～（よ）う、～ましょう） 90－

92, 108, 136, 137, 142, 146, 151, 152, 279

～ましょうか 151

～（よ）うか 151

～（よ）うとする 137

いつ 13

う

～うちに 204－206

お

お～（接頭辞） 27, 316, 317, 320

～終える 60－62, 68, 70

お～ください 150

お～する 317

おそらく 123, 126

同じぐらい 172

お～になる 315

～終わる 60－62, 68, 70, 207

か

か

か（終助詞） 183, 287, 288

～かどうか 179

～か～ないか 179

疑問詞＋か 14

か（並立助詞） 28－30

が

が（格助詞） 14, 16, 26, 31, 97, 140－143,

145, 180, 242, 243, 253, 254, 259－267,

306, 307, 333, 354, 365

～が（接続形式） 234－236, 239, 264

～方 399

～がちだ 311, 312

～かどうか (→か)

～か～ないか (→か)

～かもしれない 87, 124, 125, 133, 175, 183,
184, 233, 235, 275, 380

から

から (格助詞) 16, 19, 22 - 24, 98, 100,
114, 308, 332, 354, 367

～から (接続形式) 198, 210 - 213,
217 - 219

～からだ 272

～のは～からだ 213, 309

～がる 140, 141, 373, 374

き

きっと 126, 380

く

くださる (→くれる)

ぐらい 13, 393, 394

くれる

くださる 110

くれる 106 - 108, 367

け

けれども

～けれども (接続形式) 234, 235

けれども (接続詞) 236, 237

こ

ご～ (接頭辞) 316, 317, 320

こいつ 7

ここ 9, 10

こちら 7, 9, 10

こっち 7, 9, 10

こと

こと 176 - 180, 188

～ことにする 75 - 78, 138, 139, 142,
178, 370

～ことになる 76, 77, 178

ことがある

(辞書形) ことがある 49

～たことがある 48, 49, 178

～ことがない 48, 49

～ことができる 80, 83

この 6 - 8

これ 6, 7

これら 7

ごろ 13, 393

こんな 8, 9

さ

～さ 27, 399, 400

さえ 223

させる (→する)

される (→する)

し

～し 198, 199

しかし 236

しか～ない 242

～(し)に 215, 216

～中 (→～中)

す

ず

～ず 192, 193

～ずに 192, 193

すぎる

～すぎだ 311

～すぎる 310, 311

する

する 73

させる 293

される 293

できる 81, 82, 296, 315

すると 228

せ

世話になる 74

世話をする 74

そ

そいつ 7

そうだ

そうだ① 128, 133, 134

そうだ② 131, 132, 134

～そうではない 128

～そうにもない 129

～なさそうだ 128

そこ 9, 10

そして 208, 209

そちら 7, 9, 10

そっち 7, 9, 10

その 6－8

そのため(に) 217, 218

それ 6, 7

それから 208, 209

(それ)で 217, 218

(それ)では 228

(それ)なのに 236, 237

(それ)なら 228, 229

それに 199

それら 7

そんな 8, 9

た

～たい 18, 140－145, 188, 303, 306, 374

だから 217－219

だけ 242, 243, 247－249

～たことがある (→ことがある)

～たことがない (→ことがない)

～だす 60, 70

たとえ 231

～たところだ (→ところだ)

～たばかりだ (→ばかり)

たぶん 123, 126, 379, 380

ために

～ために 214 - 217

～のために 111, 214

たら

～たら 144, 203, 224 - 227

～のだったら 225, 227

～たり (タリ形) 196, 197

だれ 7, 11, 171

～だろう 123, 126, 133, 175, 183, 184, 213,

233, 235, 275, 380

ち

～中^{ちゅう} 398, 399

中止形 191

つ

～つつある 58, 61

～続く 59

～続ける 59, 69, 207

～っぱい 397, 398

～つもりだ 137, 138, 370

て

～て (テ形) 149, 190 - 192, 195, 197,

199, 201, 202, 235, 326, 349 - 351

で

で (格助詞) 12, 16, 24, 25, 248, 308

～の中で 173

(の中)で一番 173

～てあげる 110, 111, 292, 326, 370

～てある 63 - 65, 69, 70, 102, 303

～ていい (→ても)

～ていく 116 - 120

～ていた (テイタ形) (→ている)

～ていただけませんか (→てもらう)

～ていない (→ている)

ている

～ている (テイル形) 54, 88, 102, 326

～ていた (テイタ形) 46, 55, 67, 68

～ていない 45

～ているところだ (→ところだ)

～ておく 64, 65, 70, 326, 370

～てから 201 - 204

できる (→する)

～てください (→てくれる)

～てくださいませんか (→てくれる)

～てくる 115 - 121, 366, 367

～てくれ (→てくれる)

～てくれない↑ (→てくれる)

～てくれますか (→てくれる)

～てくれませんか (→てくれる)

～てくれるな (→てくれる)

てくれる

～てください 92, 148, 149

～てくださいませんか 148 - 150, 153

～てくれ 91, 92, 149

- ～てくれない↑ 150
- ～てくれますか 149
- ～てくれませんか 149, 150
- ～てくれる(↑) 111, 113－115, 121, 150, 292, 366, 367
- ～てくれるな 150
- ～でございます 328
- ～てさしあげる 112
- ～てしまう 47, 48, 108, 311
- ～てはいけない 160－162
- ～てほしい 141, 188
- ～てみる 66, 70
- ても
 - 疑問語(疑問詞)～ても 231
 - ～ても 231, 232, 238
 - ～ていい 160－162
 - ～てもいい 159, 160－162
- てもらう
 - ～ていただけませんか 149, 150
 - ～てもらいたい 141
 - ～てもらう 112－115, 121, 292, 301
 - ～てもらえませんか 149
- ～てやる 111, 115
- ～てよこす 121

- と

- と
 - と(格助詞。相手、その他) 25, 26, 77, 308
 - と(格助詞。引用・定義) 90－93, 95, 180, 326, 332, 334, 384
 - と(並立助詞) 28－30
 - ～と(接続形式) 144, 203, 220－227
 - ～といい 158, 159, 162
 - ～という 132, 178, 179, 188, 189
 - どいつ 11
 - といっしょに 26, 308
 - どうして 12, 286, 380
 - どうも 130
 - どうやら 130, 380
 - と思う
 - ～と思う 90, 91, 93, 123－125, 136
 - ～と思っている 93
 - ～と思われる 124
 - と考える
 - ～と考えている 93
 - ～と考える 91, 93
 - とき
 - ～とき 200, 201, 239
 - ～ときに 200, 201
 - ～とき(に)は 200, 201
 - どこ 5, 9
 - ところが 236－238
 - ところだ
 - (辞書形)ところだ 62, 70
 - ～ているところだ 57, 58, 69, 370
 - ～たところだ 62, 69
 - どちら(の・様) 9－11, 171
 - どっち(の) 9－11
 - どなた 7, 11

どの 11

どれ 10, 11

どんな 9

な

～な 146, 147

～ないか 151

ないで

～ないで 150, 192, 193, 199

～ないでください 150

～ないでくださいませんか 150

～ながら 193, 194, 239

なく

～なく 193

～なくて 192, 199

～なくてもいい 159

～なければいけない 156, 157

～なければならぬ 156, 157

～なさい 146, 147

～なさそうだ (→そうだ)

なぜ 12

など 29

何 7, 390

～なら 225, 226, 229

なる 72-74, 78, 79

なんで 12

に

に (格助詞) 13, 16, 23-26, 31, 98, 201,
208, 209, 215, 359, 360, 365, 384, 393,
394

～に代わって 111

～にくい 18, 303, 310

～にちがいない 126, 127, 275

～によって 297

～によると 131

ね

ね 90, 164-169, 175

の

の

の (名詞と名詞をつなぐ助詞・その他)

30-32, 269, 356-358

の (名詞化・準体助詞) 32, 176-178,

180, 287, 307, 335

の (主語) 33, 184

～の代わりに 111

のだ (んだ)

のだ・の 12, 125, 126, 225, 233, 270-

278, 280-287, 289, 290, 325

～のだったら (→たら)

～のために (→ために)

～ので 212, 213, 218

～のところ 360, 361

～の中で (→で)

のに

～のに (目的) 215, 216

～のに (逆接) 232 - 234, 238

～のは～からだ (→から)

～の話では 131

～の方 (→ほう)

～のほうが (→ほう)

～のまま (→まま)

は

は 5, 35, 177, 183, 201, 242, 243, 248, 254 -
258, 260 - 269, 305, 326, 373

～ば (接続形式) 144, 222, 223, 227

はい 14, 281, 284, 287, 290

ばかり

～たばかりだ 62

ばかり (とりたて助詞) 243, 249, 250

ばかり (概数表現) 393 - 395

～始める 60, 61, 70

はずだ

～はずだ 108, 126, 127, 133, 175

～はずがない 126

ひ

ひょっとすると 125

へ

へ (格助詞) 23, 24

ほ

ほう

～の方 (方向) 22

～のほうが (比較) 171

～ほうがいい 157, 158, 162

～ほうがよかった 158

ほしい 139, 140, 374

ほど 393 - 395

ほど～ない 171, 173

ま

まえ

～まえ 201, 202

～まえに 201, 202, 206

～ましょう (→意向形)

～ましょうか (→意向形)

～ませんか 151, 152

まで

まで (格助詞) 22, 25, 308, 332

～まで (接続形式) 201, 204 - 208

～までに 201, 204 - 208

まま

～まま 195, 196

～のまま 196

～まる 401

まるで 130, 380

万一 231

み

みたいだ (→ようだ)

め

命令形 147, 153, 183

～める 401

も

も (とりたて助詞) 242 - 247

意外の「も」 245, 246, 250

疑問詞+も 14

並立の「も」 244 - 246, 250

もう 44, 46

もし 231, 378

もしかすると 125

もっと 172, 174

もらう 107 - 110, 367

や

や (並立助詞) 29, 30, 197

～やすい 18, 303, 310 - 312

～やむ 61, 70

やる 110

よ

よ (終助詞) 166 - 169, 175, 183

～ (よ)う (→意向形)

～ (よ)うか (→意向形)

～ようだ・～みたいだ 93 - 95, 129, 130,

132 - 134, 141, 275, 379, 380

～ (よ)うとする (→意向形)

ように

～ように (引用) 94, 95

～ように (目的) 216, 217, 219

～ようにする 75 - 77, 217

～ようになる 75, 77

～予定だ 138

よね 167 - 169

～より (も) 170, 171, 173

ら

らしい

～らしい (モダリティ表現) 108, 131,

132

～らしい (接尾辞) 396, 397

(ら)れる

～ (ら)れる 86 - 89, 315

～られてある 64

～られている 63

れ

～ (ら)れる (→ (ら)れる)

を

を 14, 16, 23 – 25, 31, 74, 97, 100, 140, 141,
145, 180, 262

ん

んだ (→のだ)

監修者紹介

松岡 弘（まつおか ひろし）

一橋大学名誉教授。

海外技術者研修協会、ウィーン大学、東京外国語大学、一橋大学、慶應義塾大学、ハレ大学で日本語教育に従事。

著者紹介（50音順）

庵 功雄（いおり いさお） 一橋大学国際教育センター教授

大阪大学大学院文学研究科現代日本語学講座博士後期課程修了

博士（文学・大阪大学）

主要著書：『新しい日本語学入門 ことばのしくみを考える 第2版』, 2012, スリーエーネットワーク

『やさしい日本語——多文化共生社会へ』（岩波新書）, 2016, 岩波書店

『一歩進んだ日本語文法の教え方1』, 2017, くろしお出版

高梨信乃（たかなし しの） 関西大学外国語学部教授

大阪大学大学院文学研究科現代日本語学講座博士後期課程中退

博士（言語文化学・大阪外国語大学）

主要著書：『新日本語文法選書4 モダリティ』共著, 2002, くろしお出版

『評価のモダリティ—現代日本語における記述的研究—』, 2010, くろしお出版

中西久実子（なかにし くみこ） 京都外国語大学外国語学部日本語学科教授

大阪大学大学院文学研究科日本語教育学講座博士後期課程単位満期取得退学

博士（学術・大阪府立大学）

主要著書：『日本語文法演習 話し手の気持ちを表す表現—モダリティ・終助詞—』共著, 2003, スリーエーネットワーク

『日本語文法演習 助詞—「は」と「が」、複合格助詞、とりたて助詞など—』共著, 2010, スリーエーネットワーク

『現代日本語のとりたて助詞と習得』, 2012, ひつじ書房

山田敏弘（やまだ としひろ） 岐阜大学教育学部教授

大阪大学大学院文学研究科現代日本語学講座博士後期課程単位取得退学

博士（文学・大阪大学）

主要著書：『日本語のベネファクティブ～「てやる」「てくれる」「てもらう」の文法』, 2004, 明治書院

『その一言が余計です。』（ちくま新書）, 2013, 筑摩書房

『日本語文法練習帳』, 2015, くろしお出版

しよきゅう おし ひと にほんご ぶんぽう
初級を教える人のための日本語文法ハンドブック

著 者 いおり いさお たかなし の なかにし く み こ やまだ としひろ
庵 功雄 高梨信乃 中西久美子 山田敏弘
発行者 藤寄政子
発 行 株式会社スリーエーネットワーク
〒102-0083 東京都千代田区麹町3丁目4番
トラスティ麹町ビル2F
電話 営業 03 (5275) 2722
編集 03 (5275) 2725
<http://www.3anet.co.jp/>

電子書籍発行 2018年11月15日

本電子書籍は、株式会社スリーエーネットワーク『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』
(2018年3月2日第21刷)に基づいて制作されました。本電子書籍の全部または一部を無断で
複写複製(コピー)することは著作権法上での例外を除き、禁じられています。

動詞・形容詞 活用表

- ・ローマ字表記は訓令式による。
- ・活用形が類似する箇所は、その間の罫線を破線にして示す。
- ・特に注意すべき語形は太字で示す。
- ・網掛け () のしてある「辞書形・否定形・タ形・過去否定形はplain formを表す。
- ・すべての活用形が単独で用いられるものではない。「なさろう」は単独で意志を表す場合には用いられないが、「先生が何をなさろうとも～」の形で用いられることがある。
- ・形容詞の否定形は一例だけを挙げる。他の語形については§36を参照のこと。

	語幹	辞書形	連体形 (現在肯定)
		V I -u V II -る	V I -u V II -る
I 類 (五段)	das-	出す	出す N
	kak-	書く	書く N
	ik-	行く	行く N
	oyog-	泳ぐ	泳ぐ N
	mot-	持つ	持つ N
	nor-	乗る	乗る N
	nasar-	なさる	なさる N
	ar-	ある	ある N
	kaw-	買う	買う N
	tob-	飛ぶ	飛ぶ N
	yom-	読む	読む N
	sin-	死ぬ	死ぬ N
II 類 (一段)	mi-	見る	見る N
	tabe-	食べる	食べる N
III 類 (不規則)	ku/ko/ki-	くる[来る]	くる N
	su/si-	する	する N
	ais-/aisu-	愛する	愛する N
イ形容詞	ao-	青い	青い N
ナ形容詞	genki-	元気だ	元気な N

マス形	中止形	テ形系列			
		テ形	タ形	タラ形	タリ形
ⅤⅠ-います ⅤⅡ-ます					
出します	出し	出して	出した	出したら	出したり
書きます	書き	書いて	書いた	書いたら	書いたり
行きます	行き	行って	行った	行ったら	行ったり
泳ぎます	泳ぎ	泳いで	泳いだ	泳いだら	泳いだり
持ちます	持ち	持って	持った	持ったら	持ったり
乗ります	乗り	乗って	乗った	乗ったら	乗ったり
なさいます	なさり	なさって	なさった	なさったら	なさったり
あります	あり	あって	あった	あったら	あったり
買います	買い	買って	買った	買ったら	買ったり
飛びます	飛び	飛んで	飛んだ	飛んだら	飛んだり
読みます	読み	読んで	読んだ	読んだら	読んだり
死にます	死に	死んで	死んだ	死んだら	死んだり
見ます	見	見て	見た	見たら	見たり
食べます	食べ	食べて	食べた	食べたら	食べたり
きます	き	きて	きた	きたら	きたり
します	し	して	した	したら	したり
愛します	愛し	愛して	愛した	愛したら	愛したり
青いです	青く	青くて	青かった	青かったら	青かったり
元気です	——	元気で	元気だった	元気だったら	元気だったり

否定形語幹系列				
否定形	過去否定形	受身形	使役形	使役受身形
ⅤⅠ-aない ⅤⅡ-ない	ⅤⅠ-aなかった ⅤⅡ-なかった	ⅤⅠ-aれる ⅤⅡ-られる	ⅤⅠ-aせる ⅤⅡ-させる	ⅤⅠ-aされる (ⅤⅠ-aせられる) ⅤⅡ-させられる
出さない	出さなかった	出される	出させる	出させられる
書かない	書かなかった	書かれる	書かせる	書かされる
行かない	行かなかった	行かれる	行かせる	行かされる
泳がない	泳がなかった	泳がれる	泳がせる	泳がされる
持たない	持たなかった	持たれる	持たせる	持たされる
乗らない	乗らなかった	乗られる	乗らせる	乗らされる
なさらない	なさらなかった	————	————	————
ない	なかった	————	————	————
買わない	買わなかった	買われる	買わせる	買わされる
飛ばない	飛ばなかった	飛ばれる	飛ばせる	飛ばされる
読まない	読まなかった	読まれる	読ませる	読まされる
死なない	死ななかった	死なれる	死なせる	死なされる
見ない	見なかった	見られる	見させる	見させられる
食べない	食べなかった	食べられる	食べさせる	食べさせられる
こない	こなかった	こられる	こさせる	こさせられる
しない	しなかった	される	させる	させられる
愛さない	愛さなかった	愛される	愛させる	愛させられる
青くない	青くなかった	————	————	————
元気ではない	元気ではなかった	————	————	————

命令形	バ形	可能形	意向形
V I -e V II -ろ/よ	V I -eば V II -れば	V I -eる V II -られる V II -れる	V I -ō V II -よう
出せ	出せば	出せる	出そう
書け	書けば	書ける	書こう
行け	行けば	行ける	行こう
泳げ	泳げば	泳げる	泳ごう
持て	持てば	持てる	持とう
乗れ	乗れば	乗れる	乗ろう
なさい	なされば	——	なさろう
あれ	あれば	——	あろう
買え	買えば	買える	買おう
飛べ	飛べば	飛べる	飛ばう
読め	読めば	読める	読もう
死ね	死ねば	死ねる	死のう
見ろ 見よ	見れば	見られる/ 見れる	見よう
食べろ 食べよ	食べれば	食べられる/ 食べれる	食べよう
こい	くれば	こられる/ これる	こよう
しろ/せよ	すれば	できる	しよう
愛せ	愛すれば/愛せば	愛せる	愛そう
——	青ければ	——	——
——	元気であれば	——	——